(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第256集

主要地方道高崎渋川線改築(改良)工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

小八木志志貝戸遺跡群1

小八木志志貝戸遺跡・正観寺西原遺跡

(高崎市)

菅谷石塚遺跡

(群馬郡群馬町)

Ⅰ　弥生時代編

Koyagi-shishikaido site, Syohkanji-nishihara site,
Sugaya-ishizuka site
Takasaki City and Gunma Town, Gunma

Vol.1 Yayoi Age

1999

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

小八木志志貝戸遺跡群１　　正誤表

頁	位置	誤	正
31	遺物図no.2	外面上位空白	外面上位赤色塗彩
44	上から９行目	口縁部は北西を	口縁部は南東を

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第256集

主要地方道高崎渋川線改築(改良)工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

小八木志志貝戸遺跡群1

小八木志志貝戸遺跡・正観寺西原遺跡

(高崎市)

菅谷石塚遺跡

(群馬郡群馬町)

Ⅰ　弥生時代編

Koyagi-shishikaido site, Syohkanji-nishihara site,
Sugaya-ishizuka site
Takasaki City and Gunma Town, Gunma

Vol.1 Yayoi Age

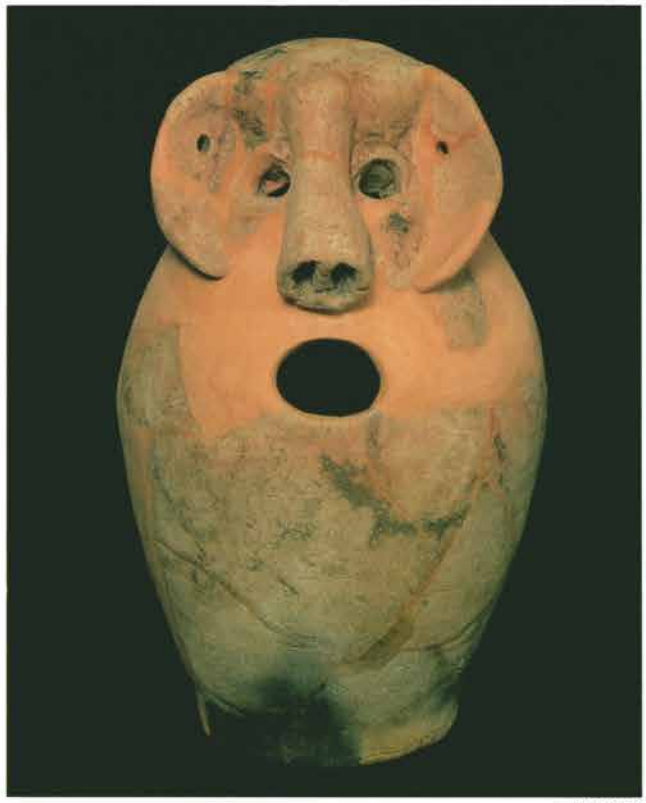
1 9 9 9

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

KS2-24号遺構　赤色顔料

KS1-14,15号遺構ガラス玉

菅谷石塚、正観寺西原、小八木志志貝戸遺跡　北より



KS1-07号遺構　人面付土器

KS1-34号遺構（土器棺）

土器棺墓土器

序

主要地方道高崎渋川線は近世の三国往還を踏襲しており、古くから往来が盛んな道路として知られております。現在では高崎市街地を南北に縦断してから国道17号線と交差して渋川市とを結ぶ地方幹線道として、近年交通量がさらに増加しています。

本道路改築（改良）工事は、現道の東側を迂回するバイパスとして整備しつつあり、渋滞緩和のための早期開通が嘱望されておりました。この工事に先だって当該する埋蔵文化財の記録保存として、昭和63年から群馬町教育委員会そして平成６年からは当事業団が発掘調査を実施してまいりました。

本遺跡群の北西方向には保渡田古墳群や三ツ寺Ⅰ遺跡など県内の有数の遺跡が分布しており、東方向には日高遺跡のような重要な弥生時代遺跡が近接しています。また周辺では関越自動車道新潟線・上越新幹線・長野新幹線建設工事また地元の土地改良工事に伴って、発掘調査が数多くなされてきました。それらの中間にあたる地域の調査として、本遺跡群は当地域の歴史を考える上で重要な資料を提供することと思います。

本遺跡群では縄文時代から近世にいたる、特にさまざまな信仰・埋葬の痕跡が密集して発見されております。中でも土器棺墓群や人面付土器が出土した濠など貴重な発見がありました弥生時代について、本書では報告いたします。弥生時代における先進地域であった当地域の歴史をさらに解明するために、今後に資する事実を数多く提供できるでしょう。

本報告書の刊行に至るまでには、群馬県道路建設課高崎土木事務所、県教育委員会、高崎市教育委員会また地元関係者の皆様に大変ご尽力を賜りました。銘記して心から感謝申し上げると共に、本報告書が広く基本的な歴史資料として活用されることを念願し、序といたします。

平成11年４月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　**菅野　清**

例　　言

1　本書は（主）高崎渋川線改築（改良）工事に伴なう事前調査報告書である。

2　所収遺跡の所在地は次の通りである。

菅谷石塚遺跡（すがやいしづか）　　群馬郡群馬町菅谷字石塚他

正観寺西原遺跡（しょうかんじにしはら）　　高崎市正観寺町字西原

小八木志志貝戸遺跡（こやぎ　ししかいど）　高崎市小八木町字志志貝戸他

3　事業主体　　群馬県土木部道路建設課高崎土木事務所

4　調査主体　　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

5　調査期間及び担当

（1）　発掘調査

平成８年度　菅谷石塚遺跡　平成８年12月１日～９年３月31日

調査担当　　松村和男（主任調査研究員）

池田政志（主任調査研究員）

横山千晶（調査研究員）

平成９年度　正観寺西原遺跡・小八木志志貝戸遺跡　平成９年４月１日～10年３月31日

調査担当　　坂井　隆（主幹兼専門員）

横山千晶（調査研究員）

入沢雪絵（嘱託員　現吉井町郷土資料館）

平成10年度　小八木志志貝戸遺跡　平成10年４月１日～12月15日

調査担当　　坂井　隆（主幹兼専門員）

長岡将之（調査研究員）

小林一弘（嘱託員）

（2）　整理調査

期間　　平成10年４月１日～平成11年３月31日

整理担当　　横山千晶

（3）　事務

常務理事　　菅野　清　赤山容造　　事務局長　　原田恒弘　赤山容造

管理部長　　蜂巣　実　渡辺　健　　調査研究部長　赤山容造　神保侑史

調査研究第一課長　平野進一

6　報告書作成

編　　集　横山千晶

本文執筆　横山千晶

遺物写真　佐藤元彦

遺物観察　横山千晶　入沢雪絵

保存処理　関　邦一

整理補助　長沼久美子　大友幸江　岩渕フミ子　阿部和子　六本木弘子　高柳哲子　中橋たみ子

7　本書の報告範囲は、3遺跡の弥生時代の遺構・遺物である。しかし、小八木志志貝戸遺跡については4区以南が本書刊行時にはまだ調査中であるため、そこで弥生時代遺構・遺物が発見された場合、継続する報告書での掲載となる。

なお、本遺跡群の報告書掲載内容は次の予定である。

小八木志志貝戸遺跡群1（本書）

小八木志志貝戸・正観寺西原・菅谷石塚3遺跡の弥生時代遺構・遺物

小八木志志貝戸遺跡群2

3遺跡の古墳時代以降の遺構・遺物（ただし小八木志志貝戸4・5区を除く）

小八木志志貝戸遺跡群3

小八木志志貝戸遺跡4・5区及び小八木井野川遺跡

8　分析・委託　　獣骨鑑定　　宮崎重雄（群馬県立大間々高校教諭）

石材同定　　飯島静男（群馬地質研究会）

炭化材・種子同定、プラントオパール分析　　株式会社　パレオ・ラボ

土壌分析　株式会社　パリノ・サーヴェイ

遺構測量　株式会社　測研　小出測量株式会社

航空写真　株式会社　測研

トレース　株式会社　測研

9　発掘調査及び本書作成に当たり、同僚諸氏のほか、以下の諸機関・諸氏からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる（敬称略、順不同）。

高崎市教育委員会　群馬町教育委員会

梅沢重昭（群馬大学）　飯島義男（群馬県立歴史博物館）　設楽博巳（国立歴史民俗博物館）

10　発掘調査作業員

相川秀雄　朝倉政代　足立信二　飯塚美恵子　石川眞也　石川輝子　石崎澄枝　石崎正美　石原幸江
植杉あや子　宇貫美代子　采女直美　生方智恵子　江原岳志　大谷正子　大山照子　岡田金五
小川照男　小木博　小木良江　笠井正雄　忰田忠男　片平小夜子　金井百合子　金子くみ子
狩野登茂子　加納文代　狩野　貢　狩野基次　加納康利　鹿子木舳子　川浦邦夫　川浦純子
久保田正司　久保田光枝　栗原　保　黒崎サヨ子　黒崎ミツノ　高野辺トリ子　小和瀬深夏
小和瀬幸子　近藤　上　斉藤初美　斉藤八重子　坂井育子　佐藤和子　芝田勝江　芝田ミツ
島田てつ　嶋村みどり　清水幸子　清水　茂　清水近江　清水次子　志村千恵子　宿谷友栄
城田　忍　須藤利雄　須藤はるの　関口弘子　関根きみ枝　関根照代　関根秀雄　関根文子
芹沢市子　曽我　功　曽我みつ子　反町利雄　高垣松子　高島　操　高橋康子　高見壽美子　田島顕二
滝沢喜代造　武井綾子　武石正美　竹内昭子　竹内千代子　竹鼻タキノ　田中美代子　田野満衛
塚越栄子　辻みつる　土屋玲子　堤　弘　堤静子　鉄本亜紀乃　戸塚清市　富澤美代子
富所祐美子　内藤　張　永井寛治　永井涼子　中里見友江　中島エイ子　中島源次郎　中嶋靖男
成瀬ケイ子　西潟　登　貫井フサ江　野口市子　橋本裕児　馬場信子　深沢日出次　深沢ヨシ子
福島菊郎　星野悦子　星野ミドリ　堀　純子　前川　章　増田香緒里　松井多喜　松田　浩
村磯光子　森田サチ子　森田裕子　矢口豊子　矢島キクエ　山本芳子　吉沢　繁　吉田文江
吉田ヤス子　綿貫梅子　渡部富江

凡　　例

1　本報告書に掲載した地図は国土地理院20万分の１地勢図、５万分の１地形図、高崎市及び群馬町都市計画図である。

2　遺構番号は遺構の種類を問わず各遺跡、各調査区ごとに通し番号とした。遺構の時代、性格については巻末に遺構一覧をつけた。略号は菅谷石塚遺跡＝ＳＩ、正観寺西原遺跡＝ＳＮ、小八木志志貝戸遺跡＝ＫＳとし、小八木志志貝戸遺跡１区１号遺構は「KS1-01」と表記した。

3　本書では浅間山の噴出物である浅間ＢテフラをAs-B、浅間As-C軽石をAs-C、榛名山の噴出物である榛名二ツ岳渋川テフラをHr-FAと表記する。土層断面図中のスクリーントーンは以下のテフラであることを示す。

As-C純層　　As-C混土　　Hr-FA

4　遺構図

縮尺は土器棺が20分の１、そのほかの遺構は60分の１を基本とし、例外を含め全てを図中に示した。土層断面図中の00ｍは断面図の水糸標高を示す。

図中のスクリーントーンは以下の範囲を示す。

焼土範囲　　炭化物範囲　　灰範囲

5　遺物図の縮尺は土器は４分の１、石器は３分の１を基本とし、例外を含め全てを図中に示した。

弥生土器の赤彩の範囲については赤で示した。

6　参考文献などの記載では、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団を群埋文と略称した。

目　　次

口絵
序
例言
凡例
目次
報告書抄録

Ⅰ　調査の経緯と方法
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　調査の方法 …… 1
4　基本土層 …… 2
5　地理的・歴史的環境 …… 5

Ⅱ　検出した遺構と遺物
1　概要 …… 9
2　小八木志志貝戸遺跡 ……13
（1）　竪穴住居
KS1-10号遺構 ……13
KS1-18号遺構 ……14
KS1-48号遺構 ……15
KS2-22号遺構 ……17
KS2-24号遺構 ……17
KS2-70号遺構 ……17
KS2-57号遺構 ……20
KS2-59号遺構 ……20
KS2-67号遺構 ……22
KS2-82号遺構 ……24
KS2-86号遺構 ……25
KS2-93号遺構 ……26
KS2-99号遺構 ……26
KS2-100号遺構 ……28
KS2-107号遺構 ……30
KS2-77号遺構 ……30
（2）　土器棺墓
KS0-11号遺構 ……31
KS0-12号遺構 ……32
KS0-20号遺構 ……33
KS0-28号遺構 ……34
KS1-03号遺構 ……36
KS1-05号遺構 ……37
KS1-24号遺構 ……38
KS1-27号遺構 ……39
KS1-28号遺構 ……39
KS1-33号遺構 ……41
KS1-34号遺構 ……41
KS1-35号遺構 ……42
KS1-36号遺構 ……44
KS1-37号遺構 ……45
KS1-38号遺構 ……45
KS1-40号遺構 ……46
KS1-41号遺構 ……47
KS1-42号遺構 ……47
KS1-52号遺構 ……48
KS1-54号遺構 ……49
KS2-94号遺構 ……50
KS2-102号遺構 ……50
KS2-103号遺構 ……51
（3）　濠 ……52
KS1-07号遺構 ……53
重複する遺構
KS1-16号遺構 ……60
KS1-17号遺構 ……60
KS1-20,21号遺構 ……60
KS1-22号遺構 ……60
KS1-07号遺構出土遺物 ……61
KS0-09号遺構出土遺物 ……68
（4）　土器集中地域
KS1-14,15号遺構 ……72
その他の土器集中遺構 ……84
KS0-13号遺構 ……85
KS1-19号遺構 ……85
KS1-24号遺構 ……86

KS1-39号遺構 ……86
KS1-43号遺構 ……86
KS1-45号遺構 ……87
KS1-49号遺構 ……87
（5） 土坑
KS1-04号遺構 ……88
KS1-25号遺構 ……88
KS1-23号遺構 ……88
KS1-26号遺構 ……88
KS1-06号遺構 ……89
KS1-30号遺構 ……89
KS1-55号遺構 ……89
KS2-89号遺構 ……89
（6） 遺構外遺物 ……90
3 正観寺西原遺跡
SN29号遺構 ……91
SN14号遺構 ……94
SN27号遺構 ……95
4 菅谷石塚遺跡
弥生土器散布 ……96

Ⅲ 自然科学調査
1 遺物集中地域の動物骨 *宮崎重雄*……98
2 土層分析 *古環境研究所*…100
3 植物珪酸体分析 *古環境研究所*…102
4 弥生時代溝における微遺体の検討
（トイレ遺構分析） *古環境研究所*…106
5 炭化米同定 *パレオ・ラボ*…110
6 樹種同定 *パレオ・ラボ*…111

Ⅳ まとめ
1 弥生土器について *大木紳一郎*……117
2 人面付土器について *平野進一*……121
3 土器棺墓群について *入澤雪絵*……124
4 土器散布について *横山千晶*……131
5 総括－小八木志志貝戸周辺の弥生時代
坂井 隆……135

Ⅴ 資料編
1 遺構一覧表 ……142
2 遺物観察表 ……143
土器・土製品 ……143
石器・石製品類 ……150
Summary ……152

写真図版

挿図目次

図 1　基本土層略図 …… 2
図 2　調査日程 …… 3
図 3　小グリッド設定図 …… 3
図 4　大グリッド設定図 …… 3
図 5　調査区域全体図 …… 4
図 6　調査区土層柱状図 …… 4
図 7　遺跡位置図 …… 5
図 8　周辺遺跡 …… 6
図 9　調査区全体図 …… 10
図 10　菅谷石塚遺跡 …… 10
図 11　正観寺西原遺跡 …… 11
図 12　小八木志志貝戸遺跡０区 …… 11
図 13　小八木志志貝戸遺跡１区 …… 12
図 14　小八木志志貝戸遺跡２区 …… 12
図 15　KS1-10号遺構・出土遺物 …… 13
図 16　KS1-18号遺構 …… 14
図 17　KS1-18号遺構　炉 …… 15
図 18　KS1-18号遺構出土遺物 …… 15
図 19　KS1-48号遺構　炉 …… 16
図 20　KS1-48号遺構・出土遺物 …… 16
図 21　KS2-22,24A,24B,70号遺構（１） …… 18
図 22　KS2-22,24A,24B,70号遺構（２） …… 19
図 23　KS2-22,24A,24B,70号遺構出土遺物 …… 19
図 24　KS2-57号遺構 …… 20
図 25　KS2-59号遺構・出土遺物 …… 21
図 26　KS2-67号遺構 …… 22
図 27　KS2-67号遺構・出土遺物 …… 23
図 28　KS2-82号遺構・出土遺物 …… 24
図 29　KS2-86号遺構 …… 25
図 30　KS2-86号遺構・出土遺物 …… 26
図 31　KS2-93号遺構 …… 26
図 32　KS2-99号遺構・出土遺物 …… 27
図 33　KS2-100号遺構出土遺物 …… 28
図 34　KS2-100号遺構 …… 29
図 35　KS2-107号遺構 …… 30
図 36　KS2-77号遺構・出土遺物 …… 30
図 37　KS0-11号遺構・出土遺物 …… 31
図 38　KS0-12号遺構掘り方 …… 32
図 39　KS0-12号遺構・出土遺物 …… 32
図 40　KS0-12号遺構 …… 33
図 41　KS0-20号遺構・出土遺物 …… 33
図 42　KS0-28号遺構 …… 34
図 43　KS0-28号遺構出土遺物 …… 35
図 44　KS1-03号遺構 …… 36
図 45　KS1-03号遺構出土遺物 …… 37
図 46　KS1-05号遺構・出土遺物 …… 37
図 47　KS1-24号遺構・出土遺物 …… 38
図 48　KS1-27号遺構・出土遺物 …… 39
図 49　KS1-28号遺構 …… 39
図 50　KS1-28号遺構出土遺物 …… 40
図 51　KS1-33号遺構・出土遺物 …… 41
図 52　KS1-34号遺構・出土遺物 …… 42
図 53　KS1-35号遺構・出土遺物 …… 43
図 54　KS1-36号遺構・出土遺物 …… 44
図 55　KS1-37号遺構・出土遺物 …… 45
図 56　KS1-38号遺構 …… 45
図 57　KS1-38号遺構出土遺物 …… 46
図 58　KS1-40号遺構・出土遺物 …… 46
図 59　KS1-41号遺構・出土遺物 …… 47
図 60　KS1-42号遺構 …… 47
図 61　KS1-42号遺構出土遺物 …… 48
図 62　KS1-52号遺構・出土遺物 …… 48
図 63　KS1-54号遺構・出土遺物 …… 49
図 64　KS2-94号遺構・出土遺物 …… 50
図 65　KS2-102号遺構・出土遺物 …… 51
図 66　KS2-103号遺構・出土遺物 …… 51
図 67　KS1-07号遺構全体図 …… 53
図 68　KS1-07号遺構上層 …… 54
図 69　KS1-07号遺構下層 …… 54
図 70　KS1-07号遺構土層断面・柱穴群エレベーション図 …… 55
図 71　KS1-07号遺構上層部分拡大図① …… 56
図 72　KS1-07号遺構上層部分拡大図② …… 57
図 73　KS1-07号遺構上層部分拡大図③ …… 57
図 74　KS1-07号遺構下層部分拡大図④ …… 58
図 75　KS0-09号遺構上層 …… 59
図 76　KS0-09号遺構下層 …… 59
図 77　KS0-09号遺構部分 …… 59
図 78　KS1-16号遺構 …… 60
図 79　KS1-17号遺構・出土遺物 …… 60
図 80　KS1-20,21号遺構 …… 60
図 81　KS1-22号遺構 …… 60
図 82　KS1-07号遺構出土遺物（１） …… 61
図 83　KS1-07号遺構出土遺物（２） …… 62
図 84　KS1-07号遺構出土遺物（３） …… 63
図 85　KS1-07号遺構出土遺物（４） …… 64
図 86　KS1-07号遺構出土遺物（５） …… 65
図 87　KS1-07号遺構出土遺物（６） …… 66
図 88　KS1-07号遺構出土遺物（７） …… 67
図 89　KS1-07号遺構出土遺物（８） …… 68
図 90　KS0-09号遺構出土遺物（１） …… 68
図 91　KS0-09号遺構出土遺物（２） …… 69
図 92　KS2-97,99～103号遺構 …… 72
図 93　KS1-14,15号遺構 …… 73
図 94　KS1-14,15号遺構土器集中A …… 74
図 95　KS1-14,15号遺構土器集中B,C …… 75
図 96　KS1-14,15号遺構土器集中D …… 76
図 97　KS1-14,15号遺構出土遺物（１） …… 77
図 98　KS1-14,15号遺構出土遺物（２） …… 78
図 99　KS1-14,15号遺構出土遺物（３） …… 79
図100　KS1-14,15号遺構出土遺物（４） …… 80
図101　KS1-14,15号遺構出土遺物（５） …… 81
図102　KS1-14,15号遺構出土遺物（６） …… 82
図103　KS1-14,15号遺構出土遺物（７） …… 83
図104　KS1-14,15号遺構出土遺物（８） …… 84
図105　KS0-13号遺構・出土遺物 …… 85
図106　KS1-19号遺構 …… 85
図107　KS1-24号遺構上層・出土遺物 …… 86
図108　KS1-39号遺構・出土遺物 …… 86
図109　KS1-43号遺構・出土遺物 …… 86
図110　KS1-45号遺構・出土遺物 …… 87
図111　KS1-49号遺構 …… 87

図112　KS1-49号遺構出土遺物 …… 87
図113　KS1-04号遺構 …… 88
図114　KS1-25号遺構 …… 88
図115　KS1-23号遺構 …… 88
図116　KS1-26号遺構出土遺物 …… 88
図117　KS1-06号遺構・出土遺物 …… 89
図118　KS1-30号遺構 …… 89
図119　KS1-55号遺構 …… 89
図120　KS2-89号遺構 …… 89
図121　遺構外出土遺物 …… 90
図122　SN29号遺構 …… 91
図123　SN29号遺構掘り方 …… 92
図124　SN29号遺構出土遺物 …… 93
図125　SN14号遺構・出土遺物 …… 94
図126　SN27号遺構・出土遺物 …… 95
図127　菅谷石塚遺跡遺物分布図(1) …… 95
図128　菅谷石塚遺跡遺物分布図(2) …… 96
図129　SI出土遺物 …… 96
図130　SI As-C混土層下面部分拡大図 …… 97
図131　KS1-07号遺構覆土の土層柱状図 …… 101
図132　KS1-13C25グリッドの土層柱状図 …… 101
図133　KS1-07号遺構覆土における植物珪酸体分析結果 …… 105
図134　KS1-13C25グリッドにおける植物珪酸体分析結果 …… 105
図135　弥生土器分類図 …… 120
図136　人面付土器関連図 …… 123
図137　土器棺墓分類図 …… 128
図138　土器棺墓の分布状況 …… 129
図139　遺物出土位置分布図 …… 132
図140　土器集中遺構土器棺墓分布図 …… 134
図141　小八木志志貝戸周辺の弥生遺跡 …… 139
付図1　小八木志志貝戸遺跡1-07,0-09号遺構全体図
付図2　小八木志志貝戸遺跡1-07号遺構上層遺物分布図
付図3　小八木志志貝戸遺跡1-07号遺構下層、14,15号遺構遺物分布図

表　目　次

表1　周辺の弥生遺跡一覧表 …… 7
表2　出土動物骨一覧表 …… 99
表3　小八木志志貝戸遺跡における植物珪酸体分析結果 …… 104
表4　小八木志志貝戸遺跡における寄生虫卵分析結果 …… 108
表5　小八木志志貝戸遺跡における花粉分析結果 …… 108
表6　小八木志志貝戸遺跡における種実同定結果 …… 108
表7　イネ炭化胚乳計測値一覧表 …… 110
表8　小八木志志貝戸遺跡出土木材の樹種同定結果 …… 113
表9　土器棺墓分類表 …… 127

分析図版目次

図版1　小八木志志貝戸遺跡の花粉・寄生虫卵・胞子遺体 …… 109
図版2　出土した炭化米 …… 110
図版3　小八木志志貝戸遺跡出土の材組織(1) …… 114
図版4　小八木志志貝戸遺跡出土の材組織(2) …… 115
図版5　小八木志志貝戸遺跡出土の材組織(3) …… 116

写真図版目次

ＰＬ１　遺跡全景
ＰＬ２　KS１区全景
ＰＬ３　KS１区全景
　　KS１区土器棺墓群
ＰＬ４　KS２区全景
ＰＬ５　KS２区全景
　　KS２区住居群
ＰＬ６　KS1-10号遺構・出土遺物
　　KS1-18号遺構・出土遺物
ＰＬ７　KS1-48号遺構・出土遺物
　　KS2-22,24,70号遺構
ＰＬ８　KS2-22号遺構出土遺物
　　KS2-24号遺構出土遺物
　　KS2-70号遺構出土遺物
　　KS2-57号遺構
　　KS2-59号遺構・出土遺物
ＰＬ９　KS2-67号遺構・出土遺物
ＰＬ10　KS2-82号遺構・出土遺物
　　KS2-86号遺構
ＰＬ11　KS2-86号遺構・出土遺物
　　KS2-99号遺構・出土遺物
ＰＬ12　KS2-100号遺構・出土遺物
　　KS2-100,102号遺構
　　KS2-107号遺構
ＰＬ13　KS2-77号遺構・出土遺物
　　KS0-12号遺構・出土遺物
ＰＬ14　KS0-11号遺構・出土遺物
　　KS0-20号遺構・出土遺物
ＰＬ15　KS0-28号遺構・出土遺物
ＰＬ16　KS1-03号遺構・出土遺物
　　KS1-05号遺構・出土遺物
ＰＬ17　KS1-24号遺構・出土遺物
　　KS1-27号遺構・出土遺物
ＰＬ18　KS1-28号遺構・出土遺物
ＰＬ19　KS1-33号遺構・出土遺物
ＰＬ20　KS1-34号遺構・出土遺物
ＰＬ21　KS1-35号遺構・出土遺物
ＰＬ22　KS1-36号遺構・出土遺物
ＰＬ23　KS1-37号遺構・出土遺物
　　KS1-38号遺構・出土遺物
ＰＬ24　KS1-38号遺構出土遺物組み合わせ
　　KS1-40,41号遺構
　　KS1-40号遺構出土遺物
ＰＬ25　KS1-41号遺構・出土遺物
　　KS1-42号遺構・出土遺物
ＰＬ26　KS1-52号遺構・出土遺物
ＰＬ27　KS1-54号遺構・出土遺物
ＰＬ28　KS2-94号遺構・出土遺物
　　KS2-102号遺構・出土遺物
　　KS2-103号遺構・出土遺物
ＰＬ29　KS1-07号遺構上層
ＰＬ30　KS1-07号遺構上層
ＰＬ31　KS1-07号遺構下層
ＰＬ32　KS1-07号遺構下層
ＰＬ33　KS1-07号遺構下層
　　KS1-16号遺構
　　KS1-17号遺構・出土遺物
　　KS1-20号,21号遺構
　　KS1-22号遺構
ＰＬ34　KS0-09号遺構
ＰＬ35　KS1-07号遺構出土遺物（１）
ＰＬ36　KS1-07号遺構出土遺物（２）
ＰＬ37　KS1-07号遺構出土遺物（３）
ＰＬ38　KS1-07号遺構出土遺物（４）
ＰＬ39　KS1-07号遺構出土遺物（５）
ＰＬ40　KS1-07号遺構出土遺物（６）
ＰＬ41　KS1-07号遺構出土遺物（７）
ＰＬ42　KS1-07号遺構出土遺物（８）
ＰＬ43　KS1-07号遺構出土遺物（９）
ＰＬ44　KS0-09号遺構出土遺物
ＰＬ45　KS2-97号遺構
　　KS1-14,15号遺構
ＰＬ46　KS1-14,15号遺構
ＰＬ47　KS1-14,15号遺構出土遺物（１）
ＰＬ48　KS1-14,15号遺構出土遺物（２）
ＰＬ49　KS1-14,15号遺構出土遺物（３）
ＰＬ50　KS1-14,15号遺構出土遺物（４）
ＰＬ51　KS1-14,15号遺構出土遺物（５）
ＰＬ52　KS1-14,15号遺構出土遺物（６）
ＰＬ53　KS1-14,15号遺構出土遺物（７）
ＰＬ54　KS0-13号遺構・出土遺物
　　KS1-19号遺構
ＰＬ55　KS1-24号遺構・出土遺物
　　KS1-39号遺構・出土遺物
　　KS1-43号遺構・出土遺物
ＰＬ56　KS1-45号遺構出土遺物
　　KS1-49号遺構・出土遺物
ＰＬ57　KS1-04号遺構
　　KS1-06号遺構・出土遺物
　　KS1-23号遺構
ＰＬ58　KS1-25号遺構
　　KS1-26号遺構・出土遺物
　　KS1-29号遺構
　　KS1-30号遺構
ＰＬ59　KS1-50号遺構
　　KS1-55号遺構
　　KS2-89号遺構
ＰＬ60　KS１区遺構外出土遺物
ＰＬ61　正観寺西原遺跡
　　SN29号遺構
ＰＬ62　SN29号遺構・出土遺物
ＰＬ63　SN29号遺構出土遺物
　　SN14号遺構
ＰＬ64　SN14号遺構出土遺物
　　SN27号遺構・出土遺物
ＰＬ65　菅谷石塚遺跡　３面弥生土器散布域
　　SI１・２号集石　SI調査区出土遺物

報告書抄録

フリガナ	こやぎししかいどいせきぐんいち
書名	小八木志志貝戸遺跡群Ⅰ
副書名	主要地方道高崎渋川線改築（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第2集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第256集
編著者名	横山千晶　大木紳一郎　平野進一　入沢雪絵　坂井　隆
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村下箱田784-2
発行年月日	1999年8月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
小八木志志貝戸 (こやぎししかいど)	高崎市 小八木町	102024		362145	1390049	19970626～ 19980631	10,320	道路建設
正観寺西原 (しょうかんじにしはら)	高崎市 正観寺町	102024		362157	1390049	19970401～ 19970709 19980317～ 19980331	5,760	道路建設
菅谷石塚 (すがやいしづか)	群馬郡 群馬町 菅谷(すがや)	103241		362202	1390049	19971201～ 19980331	3,360	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小八木志志貝戸	埋葬	弥生時代後期	土器棺墓　23 土器集中遺構	土器棺 人面付土器 動物焼骨	集中する土器棺墓群に葬送用の人面付土器が伴い、それらを壊して長大な濠と集落が形成される
	居住	同上	濠　1 竪穴住居　14		
正観寺西原	居住	弥生時代後期	竪穴住居　1		
菅谷石塚	包蔵地	弥生時代後期			

Ⅰ　調査の経緯と方法

1　調査に至る経緯

主要地方道渋川高崎線は県中央部を南北に縦貫し、県内の交通の要衝である高崎市と北毛の中心的都市渋川市を結ぶ都市間連絡道路であり、通勤・通学等地域住民が日常生活に利用する生活基盤路線である。これが年々増加する交通量に対応しきれなくなったことにより、交通隘路を迂回するバイパスとして整備することになった。

渋川高崎線バイパスの予定路線は国道17号線（高前バイパス）の高崎市小八木町を基点とし、現有の高崎渋川線と平行して群馬町菅谷、棟高、冷水、金古、前橋市青梨子などを経て渋川に至る。バイパス建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査は昭和63年から群馬町教育委員会によって行われてきた。

平成８年、県土木部建設課より予定路線の高崎市小八木町・正観寺町・群馬町菅谷地区について工事着工したいとの協議があり、同年、県教育委員会文化財保護課が当該地区の試掘調査を行った。

試掘調査の結果、群馬町菅谷から高崎市正観寺にかけての低地で平安時代水田跡、小八木町の微高地部で弥生時代の遺構が確認された。この結果を受けて県土木部との協議の結果、当該地は発掘調査による記録保存処置を講じることとなり、当事業団が発掘調査を実施することになった。

2　調査の経過

調査は平成８年12月、菅谷石塚遺跡（群馬町）の調査から始まった。調査前の現況は水田である。土地改良以前の水路の攪乱が大きかったが、４面の遺構面を確認した。平成９年４月から６月に未買収地をのぞく正観寺西原遺跡（高崎市）、正観寺西原遺跡を調査した。隣接地は水田で注水を防ぐため、調査中は隣接地を借地した。

調査事務所を菅谷石塚遺跡に移し、６月下旬から小八木志志貝戸遺跡１区に着手する。排水用の水路を掘った時点から弥生土器が大量に出土し、土器棺墓と濠を含む弥生時代の遺構群となった。８月中旬、弥生時代の濠の中から人面付土器の最初の破片が発見される。

土器棺墓を残して１区の遺物の取り上げが終わった10月に、同２区の調査を開始する。中世の土坑墓、弥生から古墳時代にかけての竪穴住居跡、縄文時代の列石と柄鏡形敷石住居、大型の須恵器を出土した円形の周溝などを調査した。工事着工の都合により12月末で同０区へ移る。

０区では１区から続く弥生時代の濠が調査区の北東側へ延びることを確認したほか、須恵器の瓶類と馬歯を伴う溜井状の遺構などを調査した。

３月14・15日の両日、現地説明会を開催し、約900人の見学者が訪れた。

３月下旬、正観寺西原遺跡の残っていた未買収地の調査に入る。

平成10年４月、１区の土器棺墓の取り上げ、２区の住居群、縄文時代の円形柱穴列、１・２区の新規拡幅部と３区（オトウカ山古墳南側）の調査を行い、予定の調査を終了した。

整理作業については平成10年４月から開始し、現在も継続中である。

3　調査の方法

（１）表土掘削には、調査の効率化を図るため、掘削機械を使用した。

（２）調査に当たり、予定路線である前橋安中線から国道17号線バイパスまでをカバーするグリッドを設定した。

国土座標のＸ＝39,300、Ｙ＝－73,400を基点とする。北方向には基点から100ｍごとの大グリッドを設定し、アラビア数字で１から番号をつける。大グリッドの中を５ｍの小グリッドに分割し、ＡからＴのアルファベットをつける。西方向は広がりが少な

いため、大グリッドを設定せずに５ｍごとの小グリッドにアラビア数字で１から通し番号をつける。グリッドの表示は、大グリッドー北方向の小グリッドー西方向の小グリッドの順で表記し、基点で「1-A-0」となる。(文中ではハイフンを省略している。) 調査区内には、この５ｍごとの小グリッドのポイントを杭で示した。遺構平面図上では基本的に最寄りのグリッド杭を記載して位置を示しているが、グリッド杭が近くにない場合にはグリッドライン上の任意の点で示す。

(例) 13A24 (＋２ｍ)

13A24から西に２ｍの点を示す

13A (＋２ｍ) 24

13A24から北に２ｍの点を示す

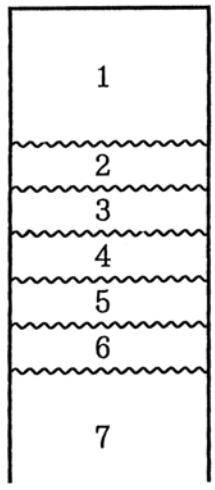
(３) 遺構番号は遺構の種類を問わず各遺跡、各調査区ごとに通し番号とした。遺構の時代、性格については巻末に遺構一覧をつけた。略号は菅谷石塚遺跡＝ＳＩ、正観寺西原遺跡＝ＳＮ、小八木志志貝戸遺跡＝ＫＳとし、小八木志志貝戸遺跡１区１号遺構は「KS1-01」と表記した。

(４) 遺構の測量については、平板測量を行い、1/10・1/20・1/40縮尺図を作成した。菅谷石塚遺跡と正観寺西原遺跡の遺構全体図は航空測量を行った。

(５) 写真撮影には35㎜版と６×７インチ版のモノクロとリバーサルフィルムを使用した。調査区全景については高所作業車とバルーンによる空中撮影を行った。

４　基本土層

遺跡周辺は土地改良による攪乱を受けており、堆積土の残存の様相は一様ではなかった。表土を除去したところ、菅谷石塚から小八木志志貝戸０区までの低地部分ではAs-Bの堆積が認められた。同１区から２区にかけての微高地上では最初の確認面はAs-C混土層であり、部分的にHr-FAが確認されるところがある。このことから、低地部では最大４面の調査を行い、微高地上では必要に合わせて１～２面調査を行った。



1　表土・現代耕作土層
2　As-B一次堆積層
3　黒色粘質土層…平安水田面
4　As-C混土…弥生土器集中地域
5　黒色粘質土…弥生住居、土器棺、濠
6　ローム粒を含む黒色土…縄文遺構
7　地山　ローム層または陣馬火砕流堆積物

図１　基本土層略図

年月＼調査区	菅谷石塚	正観寺西原	小八木志貝戸0区	小八木志貝戸1区	小八木志貝戸2区
平成8年12月	▨				
平成9年1月	▨				
2	▨				
3	▨				
4		▨			
5		▨			
6		▨			
7				▨	
8				▨	
9				▨	
10					▨
11					▨
12			▨		▨
平成10年1月			▨		▨
2			▨		▨
3		▨	▨		▨
4				▨	▨
5					▨
6					▨

図2　調査日程

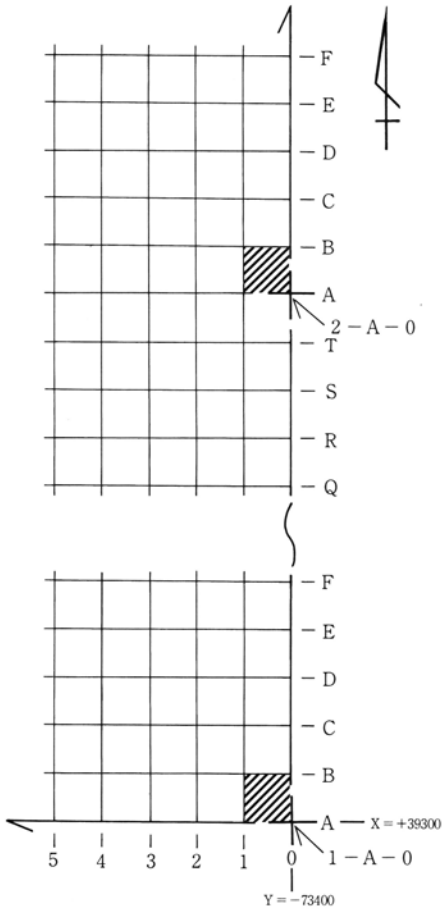


図3　小グリッド設定図

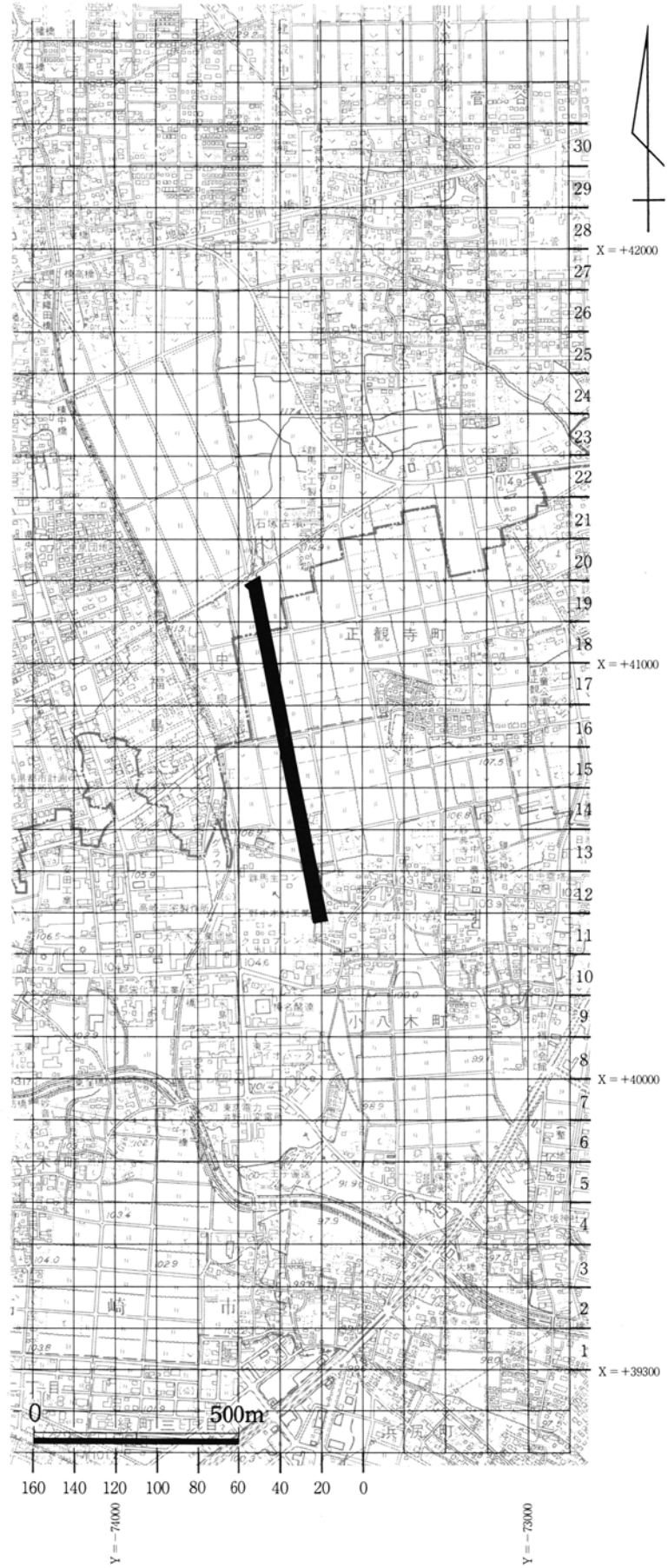


図4　大グリッド設定図

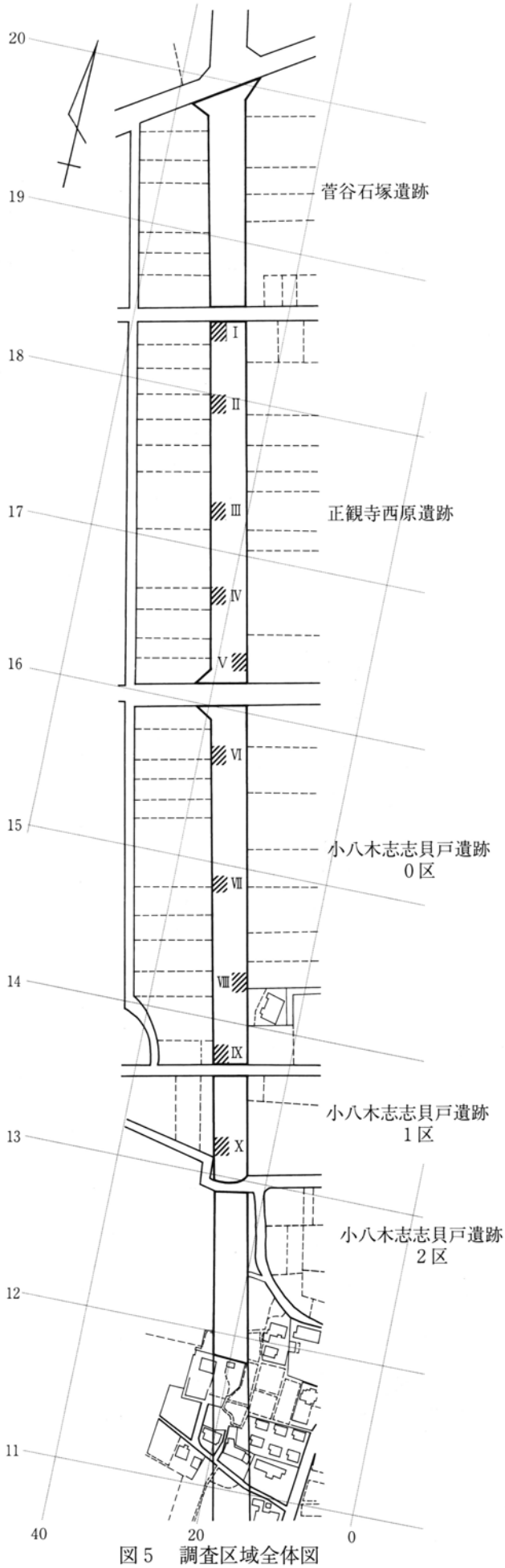


図5　調査区域全体図

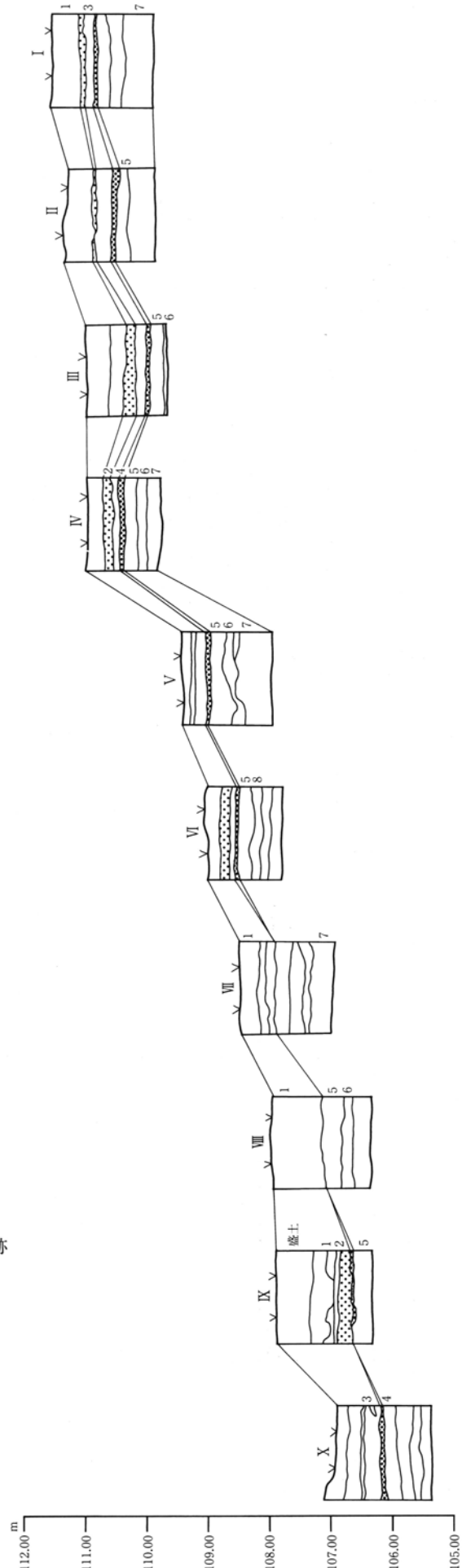


図6　調査区土層柱状図

5．地理的・歴史的環境

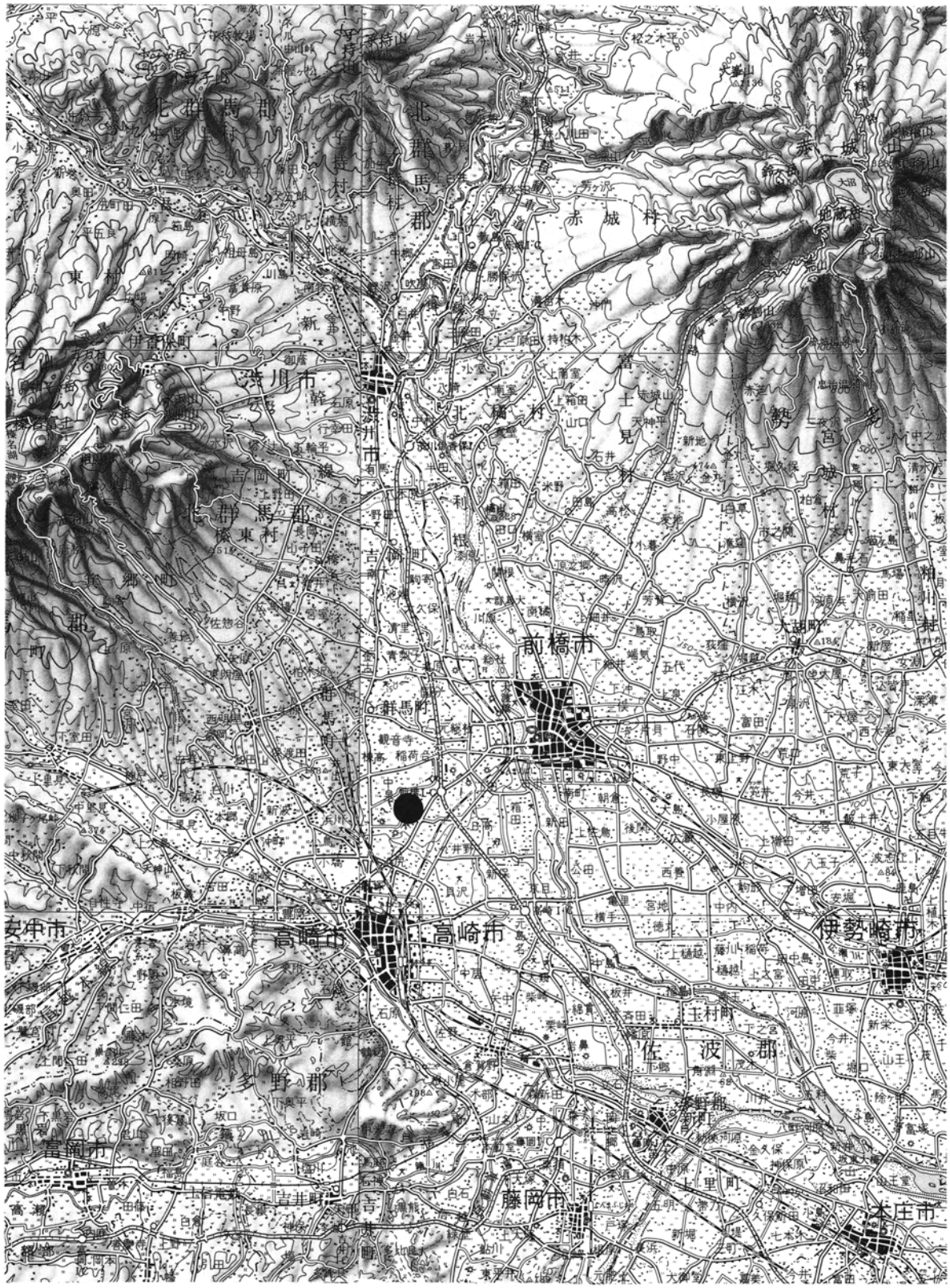


図７　遺跡位置図（国土地理院地形図 20万分の１「長野」「宇都宮」使用）

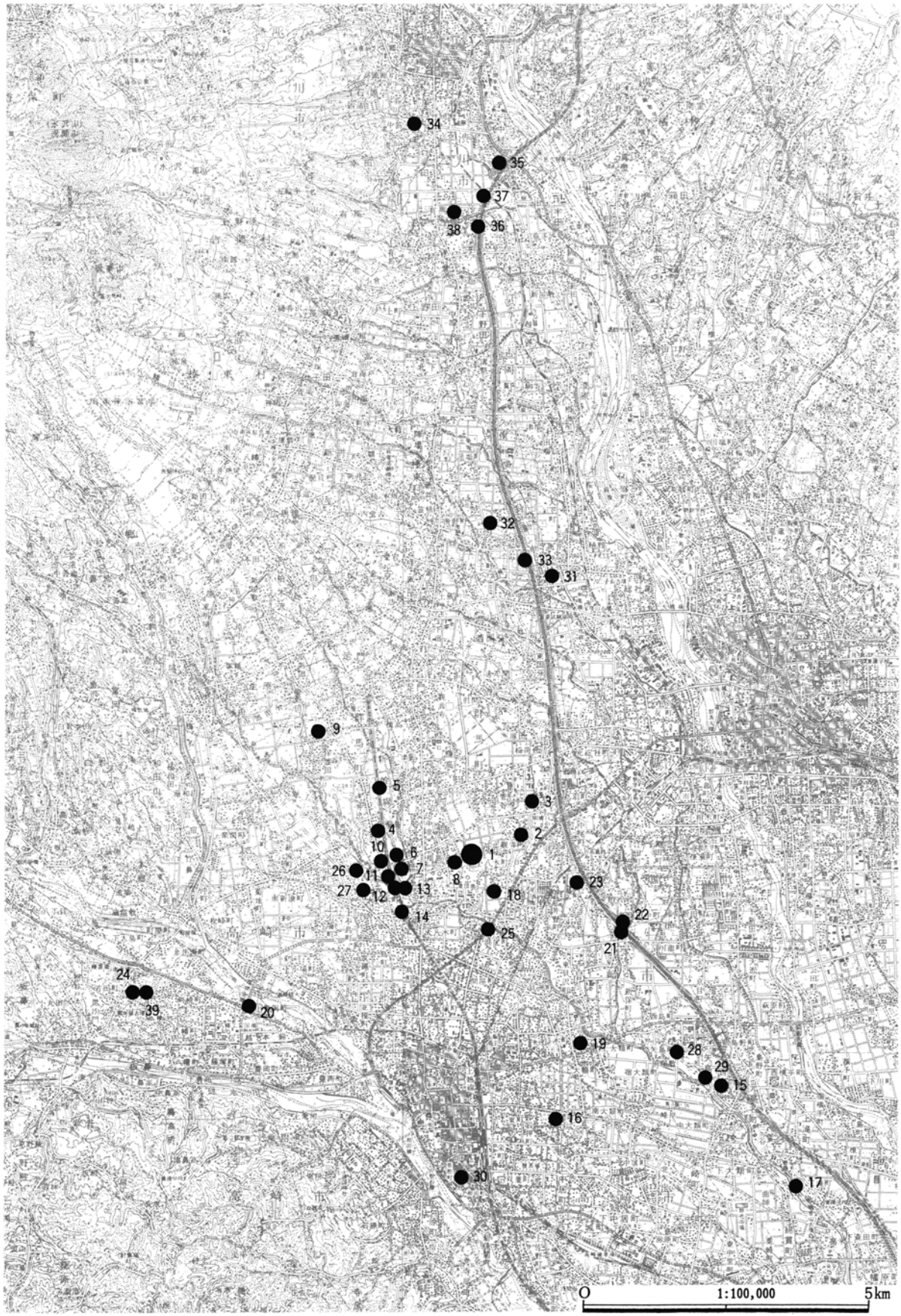


図８　周辺遺跡（国土地理院地形図　５万分の１「榛名山」「前橋」「富岡」「高崎」使用）

表１　周辺の弥生遺跡一覧表

	遺　跡　名	所　在　地	調査された遺構	文　献　名
1	本遺跡群	高崎市小八木町他	後期の土器棺墓群・濠・竪穴集落	本書
2	正観寺遺跡群	高崎市正観寺町	後期の竪穴集落・環濠	『正観寺遺跡群Ⅰ～Ⅳ』高崎市教委1979
3	菅谷遺跡	群馬町菅谷	遺物包蔵地	
4	井出村東遺跡	群馬町井出	後期の竪穴集落	『井出村東遺跡』同遺跡調査会1983
5	三ツ寺Ⅱ遺跡	群馬町三ツ寺	後期の竪穴集落	『三ツ寺Ⅱ遺跡』群埋文
6	西浦北遺跡	群馬町福島	後期の竪穴集落・周溝墓・大型溝	『西浦北遺跡』群馬町教委1989
7	西浦南遺跡	同上	後期の竪穴集落・周溝墓	『西浦南遺跡』群馬町教委1988
8	諸口遺跡	同上	後期～古墳初頭の竪穴集落群	『諸口遺跡Ⅲ』群馬町教委1985他
9	保渡田荒神前遺跡	群馬町保渡田	古墳初頭竪穴集落	『保渡田荒神前・皿掛遺跡』群馬町教委1988
10	熊野堂遺跡	高崎市大八木町	後期の竪穴集落	『熊野堂遺跡(1)』群埋文1984
11	熊野堂遺跡(２地区)	同上	中期・後期の竪穴集落	『熊野堂遺跡(2)』群埋文1991
12	熊野堂遺跡(３地区)	同上	中期・後期の竪穴集落	『熊野堂遺跡(3)・雨壺遺跡』群埋文1984
13	雨壺遺跡	同上	中期・後期の竪穴集落	同上
14	融通寺遺跡	同上	後期の竪穴集落	『融通寺遺跡』群埋文1991
15	元島名遺跡	高崎市元島名町	後期の竪穴集落・周溝墓	『元島名遺跡』高崎市教委1979
16	高関堰村遺跡	高崎市高関町	中期の環濠	『高関堰村遺跡』高崎市教委1996
17	万相寺遺跡	高崎市宿大類町	後期の竪穴集落	『万相寺遺跡』高崎市教委1985
18	小八木遺跡	高崎市小八木町	As-C下水田・畠	『小八木遺跡』高崎市教委1979
19	上大類北住宅遺跡	高崎市上大類町	後期・古墳初頭の竪穴集落・墓	『上大類住宅遺跡』高崎市教委1983
20	引間遺跡	高崎市上豊岡町	竪穴集落・周溝墓	『引間遺跡』高崎市教委1979
21	新保遺跡	高崎市新保町	中期・後期の竪穴集落・周溝墓・大溝	『新保遺跡』群埋文1986/88
22	新保田中村前遺跡	高崎市新保田中町	後期の竪穴集落・周溝墓・溝・旧流路	『新保田中村前遺跡』群埋文1990/94
23	日高遺跡	高崎市日高町	後期の竪穴集落・周溝墓・As-C下水田	『日高遺跡』群埋文1978他
24	八幡中原遺跡	高崎市八幡町	遺物出土	『八幡中原遺跡』高崎市教委1982
25	浜尻遺跡	高崎市浜尻町	中期の竪穴集落・溝	『浜尻遺跡』高崎市教委1982
26	御布呂遺跡	高崎市浜川町	As-C下水田	『御布呂遺跡』高崎市教委1980他
27	芦田貝戸遺跡	同上	同上	『矢島・御布呂遺跡』高崎市教委1980他
28	矢島町薬師遺跡	高崎市矢島町	後期の竪穴集落	『矢島町薬師遺跡』高崎市調査会1994
29	鈴ノ宮遺跡	同上	後期の竪穴集落・周溝墓・土器棺墓	『鈴ノ宮遺跡』高崎市教委1978
30	竜見町遺跡	高崎市竜見町	中期の土器	『考古学』10-10東京考古学会1939
31	柿木遺跡	前橋市高井町	包蔵地	『柿木遺跡』前橋市教委1984
32	清里・庚申塚遺跡	前橋市上青梨子町	中期の環濠集落	『清里・庚申塚遺跡』群埋文1981
33	下東西遺跡	前橋市青梨子町	後期の竪穴集落他	『下東西遺跡』群埋文1987
34	空沢遺跡	渋川市行幸田	後期の周溝墓	『空沢遺跡』群埋文1978
35	中村遺跡	渋川市中村	中期の環濠集落・墓・後期の竪穴集落・周溝墓他	『中村遺跡』渋川市教委1988
36	有馬遺跡	渋川市八木原	後期の集落・周溝墓・土器棺墓人面付土器出土	『有馬遺跡』群埋文1990
37	有馬条里遺跡	渋川市八木原	後期の竪穴集落・墓域人面付土器片出土	『有馬条里遺跡』群埋文1989,91
38	後田東遺跡	渋川市有馬	後期の竪穴集落	『市内遺跡Ⅱ』渋川市教委1989
39	剣崎長瀞西遺跡	高崎市剣崎町	後期の高地性集落	高崎市教委調査中

5　地理的・歴史的環境

（1）　地理的環境

本遺跡は榛名山に端を発し南東の山麓に広がる相馬ヶ原扇状地の扇端部に位置する。扇状地内には小河川が発達しており、浸食谷と自然堤防状微高地からなる帯状の微地形が南東方向に発達している。遺跡周辺は扇状部から沖積地への変換点に当たり、複雑な様相を呈している。遺跡の西には天王川が南流し、遺跡の南で井野川に合流している。渋川高崎線バイパスの予定路線は天王川にほぼ平行し、調査区の中には小八木の微高地と正観寺から菅谷にかけての低地という地形の変化がある。

遺跡周辺基盤層は陣馬岩砕なだれ堆積物である。陣馬岩砕なだれは約１万年前の榛名山の噴火により発生した。現在は後に起きた泥流により流れ残った部分が小さな丘となって遺跡周辺に散在している。土地改良事業に伴う小八木遺跡調査の際には古墳と泥流丘の識別を目的に詳細な調査とマッピングを行っている。正観寺西原遺跡の調査区内にある泥流丘はこの中で確認されている。遺跡周辺の土地利用はこの泥流丘と微地形に沿って行われていた。昭和50年代にこの地域一帯では土地改良が行われ、現況は水田になっている。

（2）　歴史的環境

榛名山東南麓の弥生時代遺跡は中期には少なく、後期になり急速に増加する。

相馬ヶ原扇状地の端部以南に広がる沖積地には、日高・新保・新保田中村前遺跡などの弥生時代中期後半から後期を経て古墳時代まで継続する集落がある。新保遺跡では居住域と墓域が確認されており、初期農耕集落の景観が良好に捉えられた。墓は周溝墓と土器棺墓を検出しており、周溝墓の主体部に土器棺を利用しているものがある。また、埋没河川から大量の木器およびその未製品が出土し、木製品供給の拠点的な役割を果たしていたことが想定される。日高遺跡では後期前半から後期後半まで安定して継続した集落と、開斥谷に形成された低湿地を利用して営まれたAs-C下水田が検出された。

井野川流域の自然堤防上には熊野堂・雨壺・井出村東・西浦南遺跡などがある。これらの遺跡は後期中葉から古墳時代に継続する集落遺跡である。西浦南遺跡では、住居・１カ所にブリッジを残す形の方形周溝墓などを検出している。集落は調査区中央の低地を挟んで南北微高地上に立地している。南半では住居の上に周溝墓が重複している。地形上の制約で居住域を廃してまたは侵して墓域としたものと見られる。報告書では、本遺跡近隣の居住条件の良好な台地上には樽式期中葉の集団が占拠しており、集団の関係下において定まった領域内での墓域拡大を行う場合、居住域への浸食を行わざるをえなかったのではないかと推論、樽式期中葉の本地域集団関係を考える材料に発展していく可能性を示唆している。

本遺跡周辺の弥生時代遺跡としては、天王川右岸に諸口遺跡があり、後期の住居が確認された。また、天王川右岸の自然堤防上にも密に土器の散布があり、住居跡の広がりが予想されている。本遺跡の東の台地上には正観寺遺跡群があり、後期の集落が確認されている。本遺跡のある台地の南には小八木遺跡でAs-C混土で埋まる溝と、その溝による給排水で営まれた水田が検出されており、弥生時代後期のものと考えられる。

榛名山東麓には有馬・有馬条里・中村・後田東遺跡など、弥生時代後期の遺跡が分布している。有馬・有馬条里遺跡では住居群と墓群が確認されている。集落は後期前葉に始まり、集落形成時の中心は有馬条里遺跡にあったと考えられる。後期後葉に入り、集落は急速に拡大する。遺跡内には２つの住居支群が認められ、この間に墓支群が形成されている。墓には周溝墓・礫床墓・土器棺墓などがあり、墓支群を形成しているが、土器棺の多くは土器棺のみで墓群を作る。土器棺からは４歳以下の幼児の骨が出ており、幼児のための埋葬形態である可能性を示した。また鉄剣・勾玉・銅釧・ガラス玉などの副葬品も出土しているほか、礫床墓からは人面付土器が出土している。

Ⅱ　検出した遺構と遺物

1　概要

弥生時代の遺構は、竪穴住居・土器棺墓・土坑・濠および土器集中地域・祭祀遺構などを調査した。

小八木志志貝戸遺跡では竪穴住居が１区と２区に合わせて13軒ある。多くの住居で樽式土器が出土している。床面に密着した状態の遺物が出土した住居は少ないが、平面形状や覆土の状態から弥生時代住居と考えられる。１区では調査区の東寄りに３軒が散在し、２区では調査区の北寄りに10軒がある。住居相互の切り合いは少なく、２区で３軒が重複するのみである。確認面はAs-C混土層下面であり、埋没土はともにAs-Cを含まない黒褐色粘質土である。古墳時代以後の遺構や現代の工場操業時に極めて激しい攪乱を受けているため、完全な形で調査できた住居はなく、床面や柱穴のみの確認にとどまる住居も多い。炉を確認することができた住居も４軒のみである。９軒は長方形の平面形を呈するものと考えられるが、他は平面形状の把握ができない。

土器棺墓は０区から２区にかけて検出された。１区に集中し、２区でも北寄りにまとまっている。０区では散在的な分布を示している。本遺跡出土の土器棺墓には、土器を棺本体とし、別個体を蓋にした合わせ口の土器棺と、蓋を持たない単棺とがある。１区の土器棺墓が０区のものよりやや古い様相を示す。２区の土器棺墓は上面を削平されて失ったものが多い。本来は、壺や甕などの土器に遺体ないしは骨を納め、それを土坑内に埋設するものを壺棺ないし土器棺と称するべきであろうが、本遺跡では棺の内部からの骨や副葬品の出土はない。また、明確に土坑中に埋設されたと考えられるものも１基にとどまる。住居と重複するものがあり、住居より新しい時期のものであることが示される。

濠はKS０区から１区にかけて確認された。北東から南西方向に向かって蛇行しながら下っている。下位の埋没土はAs-Cを含まない黒色粘質土で、中位に一次堆積に近いAs-Cが堆積する。濠底部及びAs-C下の黒色粘質土中から樽式土器が出土している。１区北寄りの屈曲部に溝を挟んで柱穴があり、橋様の施設があったものと想定される。また、濠の東側にはわずかながら盛り上がりが見られ、掘削排土を盛り上げた土塁状の構造が付随したものと考えられる。遺構間の切り合いがないため直接的に他遺構との重複関係を捉えることができないが、後述する土器集中地域との間に帯状の空白部があり、これが土塁状施設の範囲と重なるものと考えられるため、土器集中地域より古い段階での掘削と見ることができる。

弥生時代の遺構の確認面であるAs-C混土層を除去したところ、１区と２区の北側で土器が大量に散布した状況で出土した。土器集中地域としたもので、これは１区のほぼ全体と２区の北側に広がるが、１区の南よりに特に濃密な土器の集中域が見られる。樽式土器を主体とするが、これに混じて焼けたイノシシ、シカの骨片が散布している。他に石器類や、青白色のガラス玉等も出土した。

濠の覆土上位からも土器が多量に出土している。As-Cの上位にあたる層位から出土するもので、樽式土器の破片が主体となっているが、土師器や赤井戸式土器が少なからず含まれる。古墳時代前期にかかるものであるが、前述の溝及び土器集中地域との関連から、本章で取り上げる。

正観寺西原遺跡では表土が薄いため、鍵層は検出できず、ローム層上面で遺構を確認した。

調査区北端に竪穴住居１軒がある。土地改良事業時の削平により上面を失っており、全容の把握は困難であった。出土土器の様相からみると、小八木志志貝戸遺跡の住居よりもやや新しい時期のものである。また、中央近くの泥流丘南側裾部で５個体の土器がまとめて置かれた祭祀遺構を調査した。

菅谷石塚遺跡では、遺構は確認できなかったものの、調査区南端部で樽式土器の集中的な散布を確認した。正観寺西原遺跡の住居の北に隣接する地点で、土器の示す時期もごく近いものと思われる。

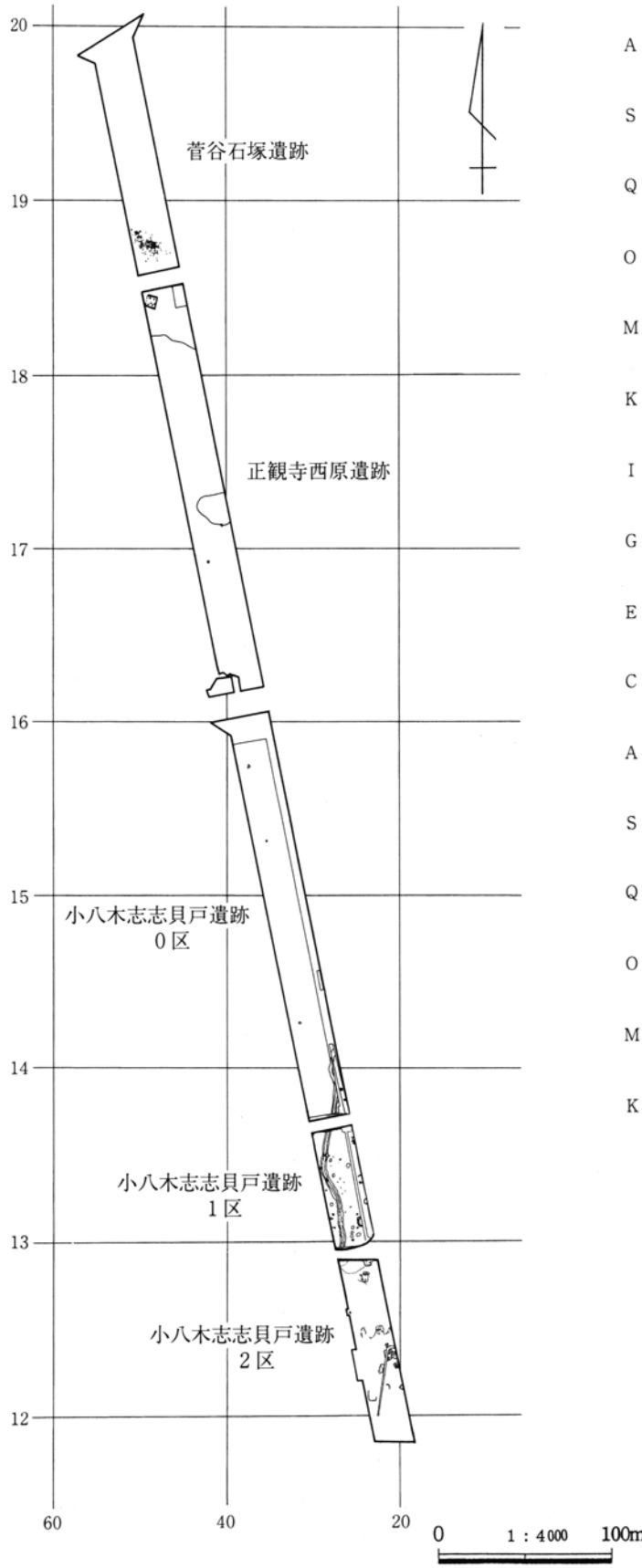


図9　調査区全体図

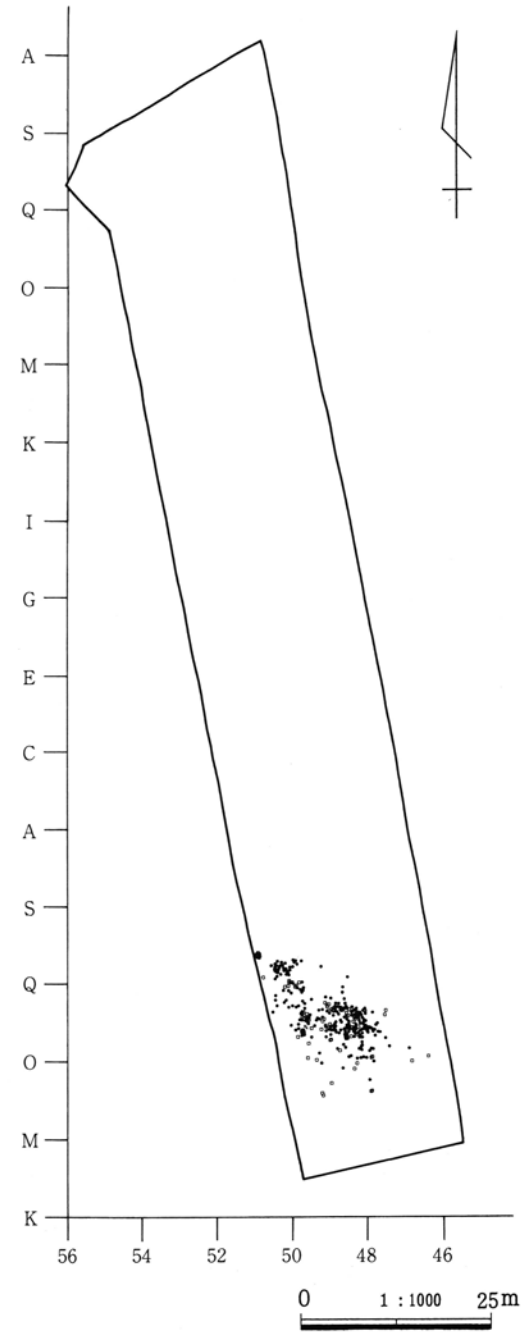


図10　菅谷石塚遺跡

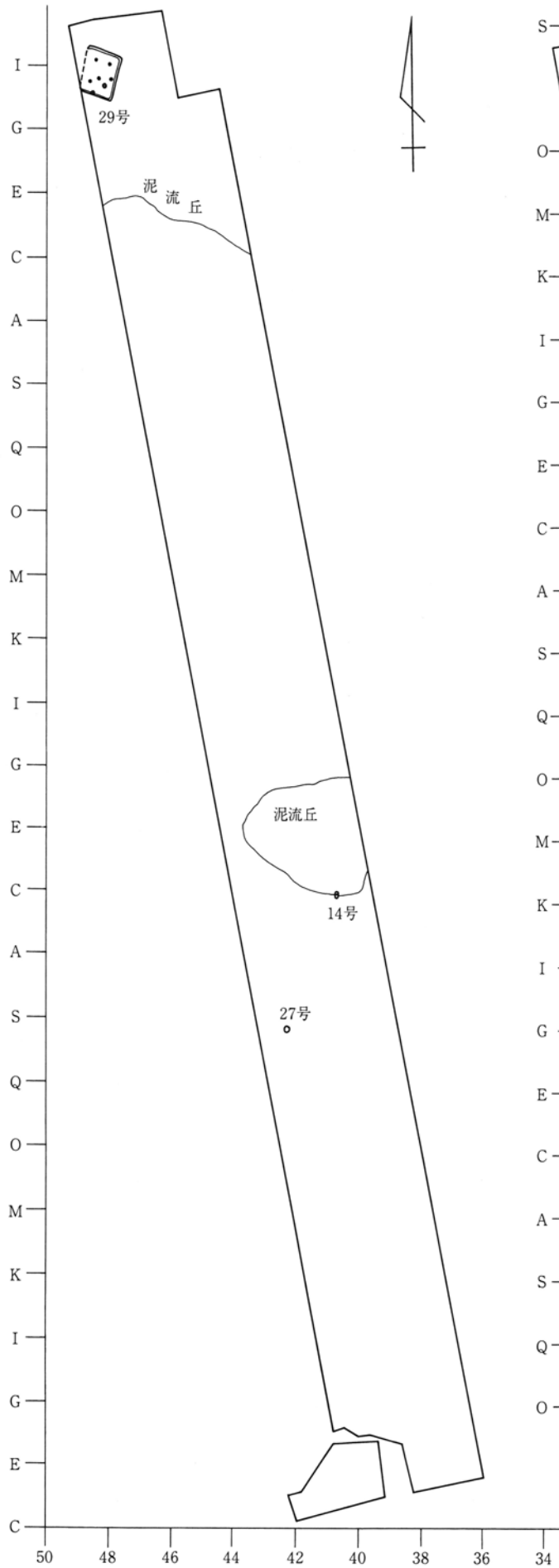


図11　正観寺西原遺跡

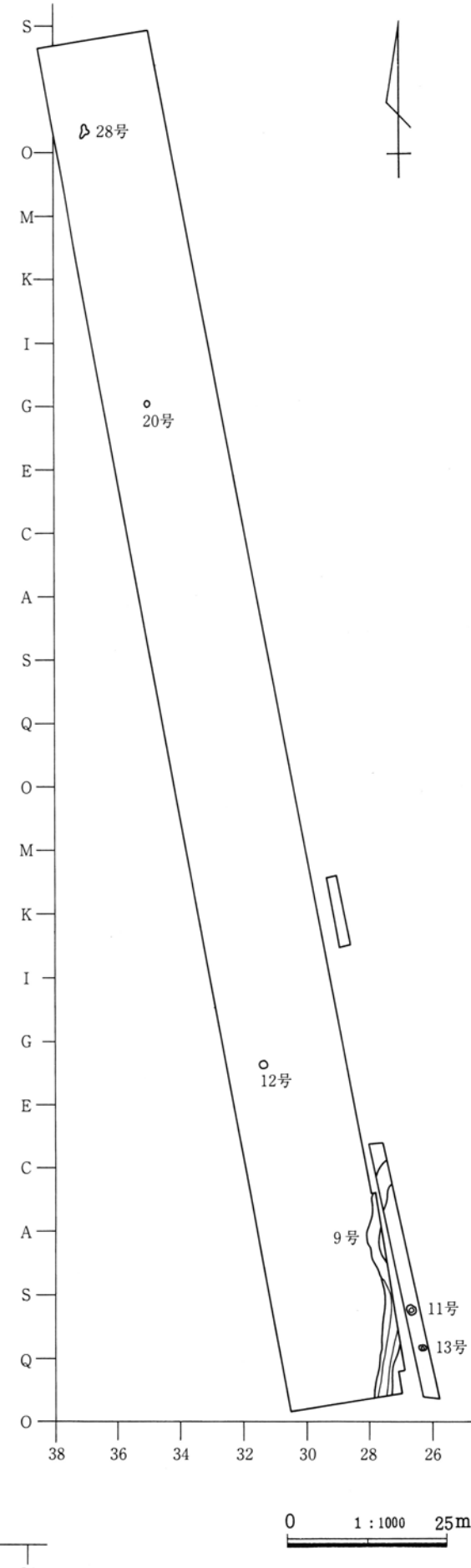


図12　小八木志志貝戸遺跡０区

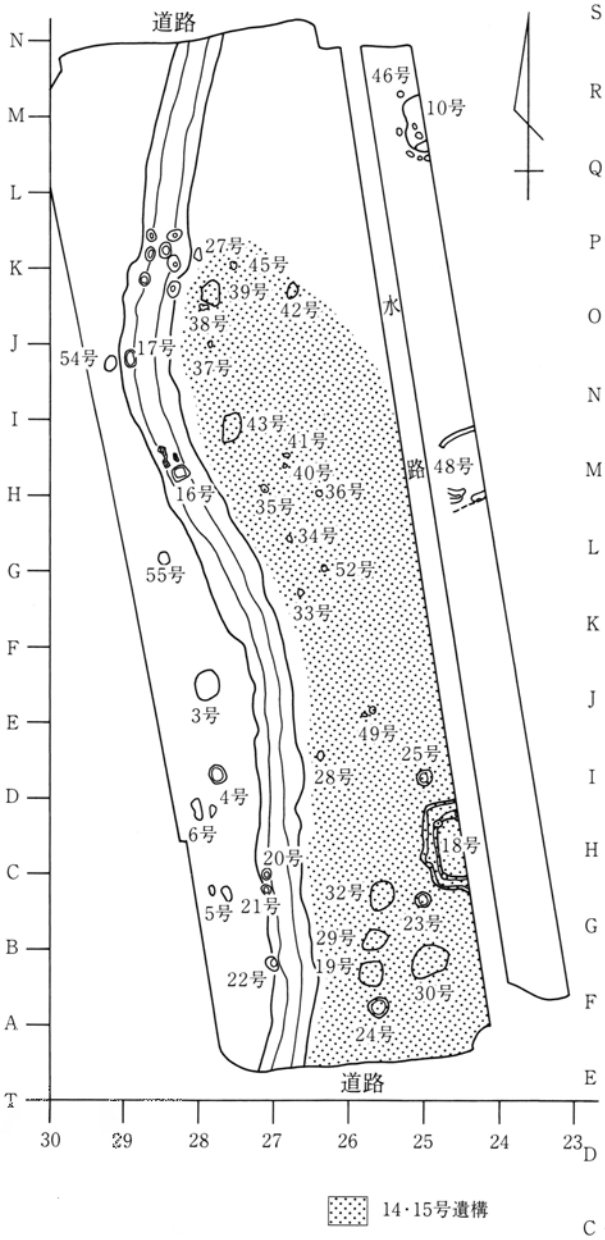


図13　小八木志志貝戸遺跡１区

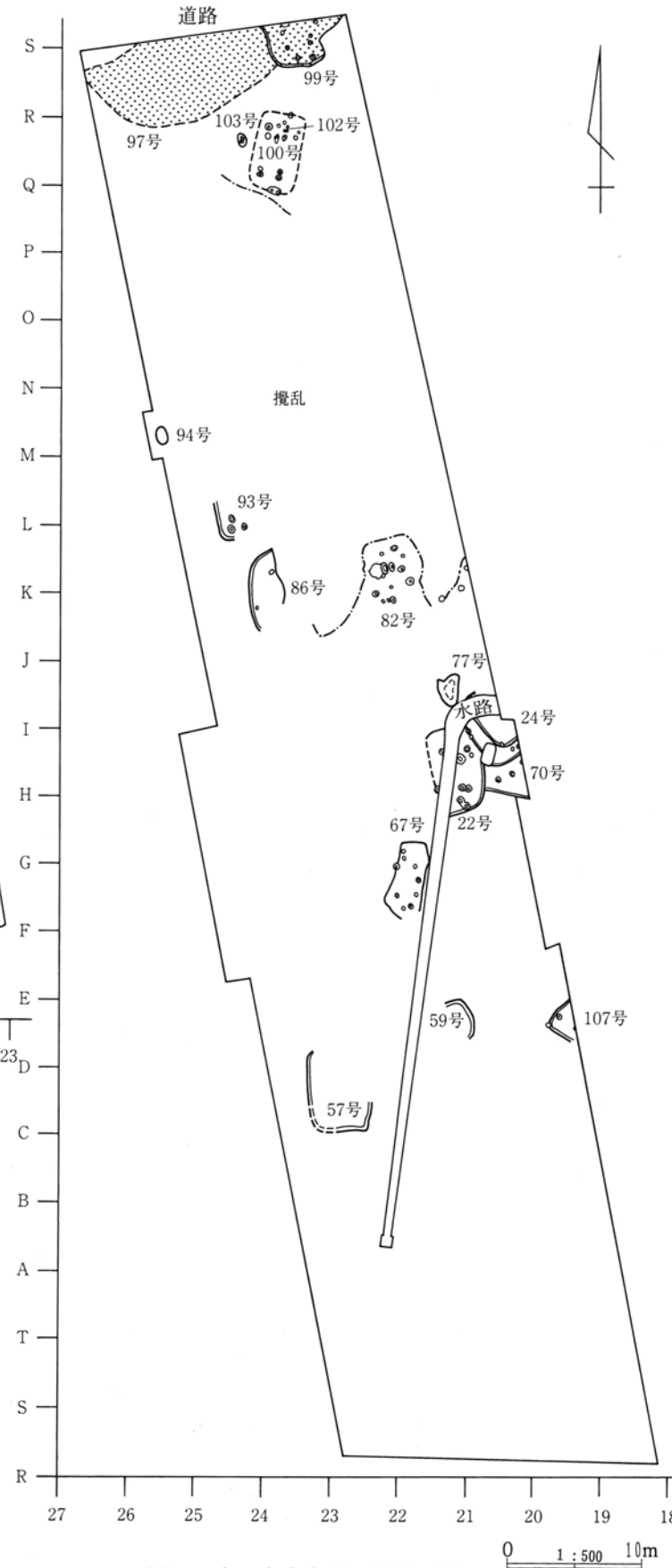


図14　小八木志志貝戸遺跡２区

2　小八木志志貝戸遺跡

（1）　竪穴住居

KS1-10号遺構

調査区北端近くの水路に分断されたごく細長い部分にあるため、遺構の確認範囲が狭く、全体像はつかめない。土層断面で掘り込みが確認された。弥生土器の集中する14・15号遺構の北部に当たり、本住居の覆土から出土した土器片が14・15号遺構出土片と接合している。

位置　13L25グリッド

規模　縦(3.5) m、横(2.3) m

形状　不明

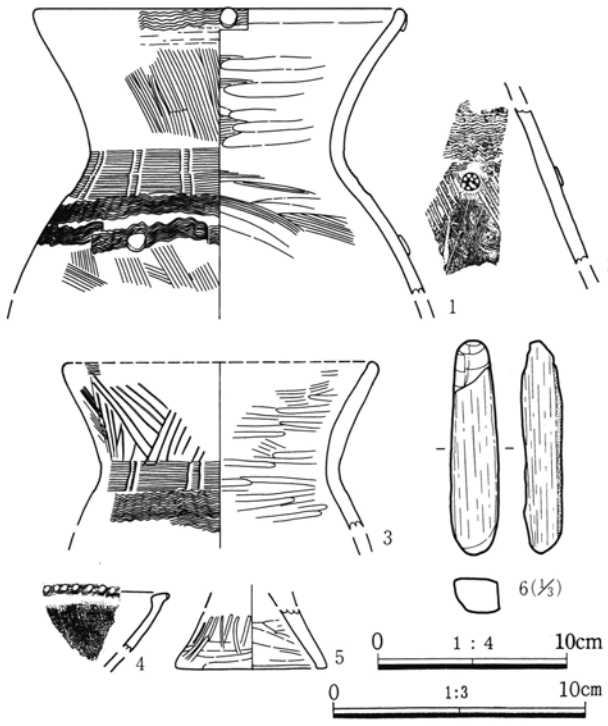
埋土　黒褐色土。As-Cは含まない。

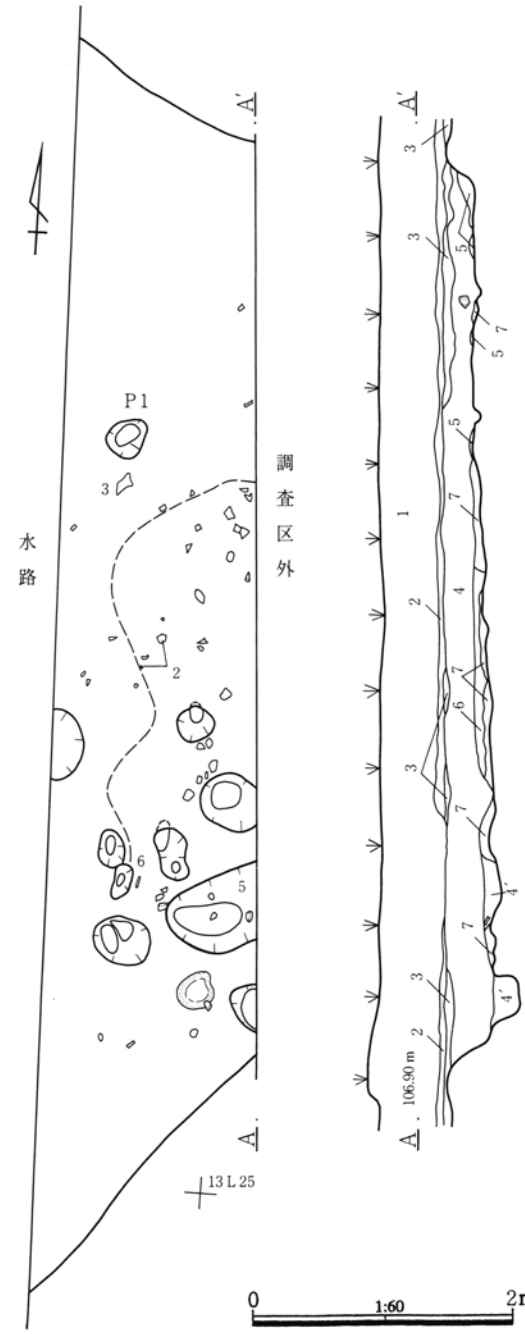
床面　自然堆積土が硬化し床面となっている（7層）。

柱穴　掘り込みのしっかりした１本を柱穴として確認した。北東方向にやや傾いた掘り方を持つ。

炉　調査区内では確認できなかった。

出土遺物　樽式土器破片多数が覆土から出土。柱穴内から破断面を整えた甕の口縁～頸部１個体。





1 表土 灰褐色土(10YR5/2)
2 灰黄褐色土(10YR4/2) As-C軽石を25％含む
3 黒褐色土(10YR3/2) As-C軽石を10％含む
4 黒褐色土(10YR3/2) 軽石を含まない 均質な砂質土
4′ 黒褐色粘質土(10YR2/2) 4層中に微少のローム粒混じる
5 4層の土に黄褐色地山土がブロック状に混ざる
住居床に貼る土と同様のものが三角堆積
6 黒褐色粘質土(10YR3/1) 粒子細 しまり良 上面硬い 黒褐色土中に微少のローム粒含む 自然な堆積土を利用した床面形成土
7 にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3) 粒子細 しまり良 4層に接する場合、上面硬い自然のローム斬移土で床面形成土

図15　KS1-10号遺構・出土遺物

KS1-18号遺構

調査区の南東に位置する。As-Cが混じる黒色粘質土の落ち込みとして確認された。東半が水路に切られ、全形の約1/2を確認した。炉の存在によって住居であるものと判断した。上位に位置する土器集中地域から、土器・炭化物・骨片が流れ込んでおり、土器集中地域形成以前に構築されたものと推測される。床面は明確には捉えられない。

位置　13C24グリッド

規模　南北6.20m、東西（2.80）m

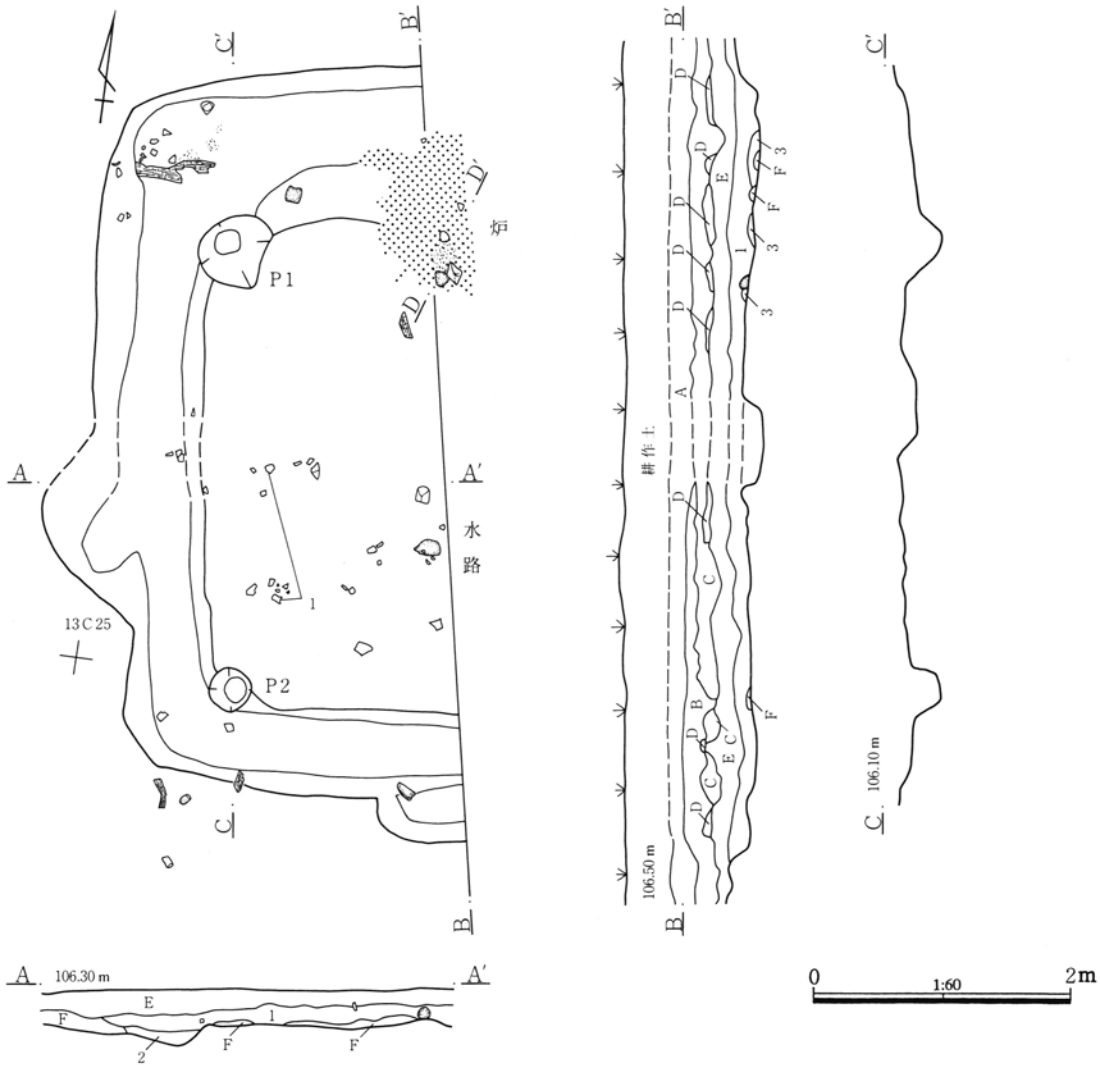
形状　隅丸方形か

重複　土器集中地域の下位に当たる

主軸方位　不明

埋土　粒子のやや粗い黒色粘質土。As-C軽石を含む。

床面　締まりが弱い。土層断面でも明確な硬化面は



A－A′　B－B′
A灰黄褐色砂質土(10YR4/2)　粒子やや粗　しまり弱　微少のAs-B軽石混じる
B黒褐色砂質土(10YR2/3)　粒子やや粗　しまりやや弱　As-B(径1-2mm)やや多く含む
C黒褐色粘質土(10YR2/3)　粒子細かくしまりやや弱　鉄分とHr-FA粒混じる
D褐色シルト質土(10YR4/6)　粒子細　しまり弱　Hr-FA粒主体
E黒褐色粘質土(10YR2/2)　粒子細　しまり良　As-C軽石(径1-3mm)混じる
F黒褐色粘質土(10YR2/3)　粒子細　粘性強く硬い　微少の鉄分全体に含む　地山
1黒色粘質土(10YR2/1)　粒子やや粗　しまりやや弱　全体にAs-C軽石(径3-8mm)混じる　遺物包含層　炭化物も含む
2黒色粘質土(10YR2/1)　1層よりしまり弱く　鉄分を多く含む
3黒色粘質土(10YR2/1)　1層中に炭化粒多く含む

図16　KS1-18号遺構

確認できない。炉周囲の灰層の広がりから床面を確認した。

柱穴　北西、南西に２本の主柱穴。

出土遺物　住居の床面密着と特定できる遺物は確認できなかった。

炉　北寄り壁際に地床炉がある。皿状の掘り方で、中央に焼土が残る。南側に石を２個設置する。西側の１点は凹み石の転用である。

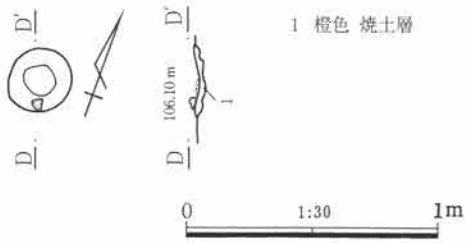


図17　KS1-18号遺構　炉

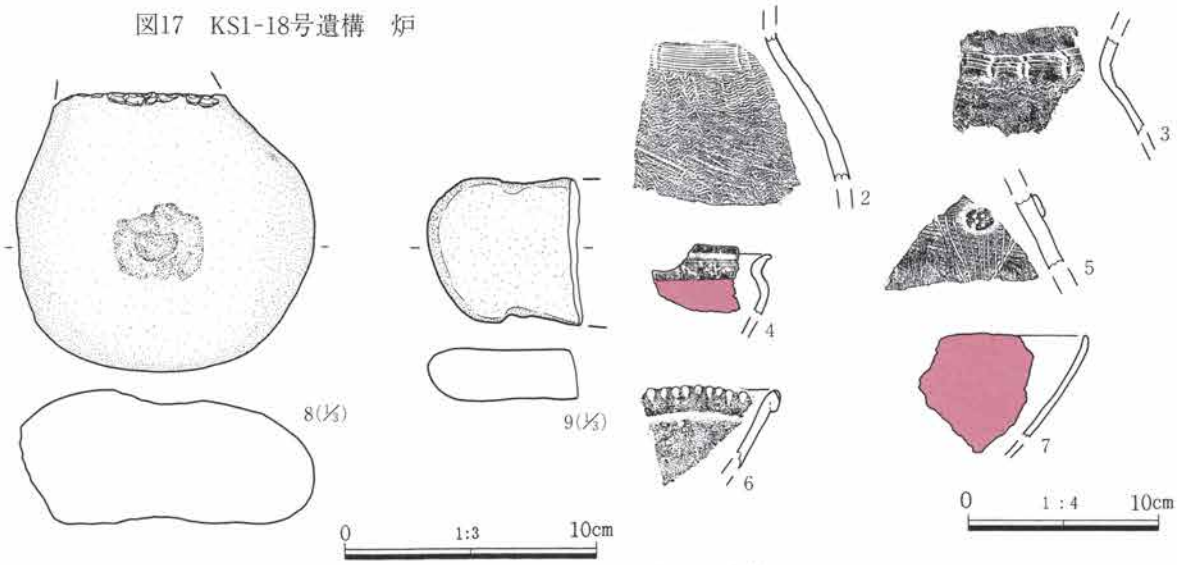


図18　KS1-18号遺構出土遺物

KS1-48号遺構

調査区中央部の水路東にある。遺構はAs-C混土層下で確認されたが、確認面には土器集中地域の土器片が確認されている。西を水路、東は調査区外となる細い範囲にあるため全体の形状は確認できない。南辺壁は確認できないが、北辺の壁は比較的明瞭に確認でき、床面及び周溝と思われる溝の残存状況から見て、北部に炉を持つ長方形の住居であるものと推定される。

位置　13H24グリッド

規模　南北5.20m、東西（2.1）m

形状　長方形か

重複　土器集中地域の下位に当たる

主軸方位　不明

埋土　炭化物を含む黒色粘質土。As-Cは含まない。

床面　ローム層上面を床とする。貼り床はない。

柱穴　主柱穴は確認できない。北辺中央に北側に傾斜した掘り方を持つピットがあり、入口施設の梯子穴と考えられる。

炉　楕円形の地床炉。中央に被熱した角礫が設置される。灰が北辺方向へ扇形に広がる。

出土遺物　覆土中から弥生土器片が多数と軽石製の砥石が出土しているが、土器集中地域からの混入した遺物と本遺構の遺物とを分離することは困難である。床面密着と確認できる遺物はなかった。

その他　北辺壁直下に周溝状の溝が認められた。南壁想定部分にも東半に溝状の落ち込みがある。炉周辺、南寄りなどに複数のピットがあるが、用途は不明である。

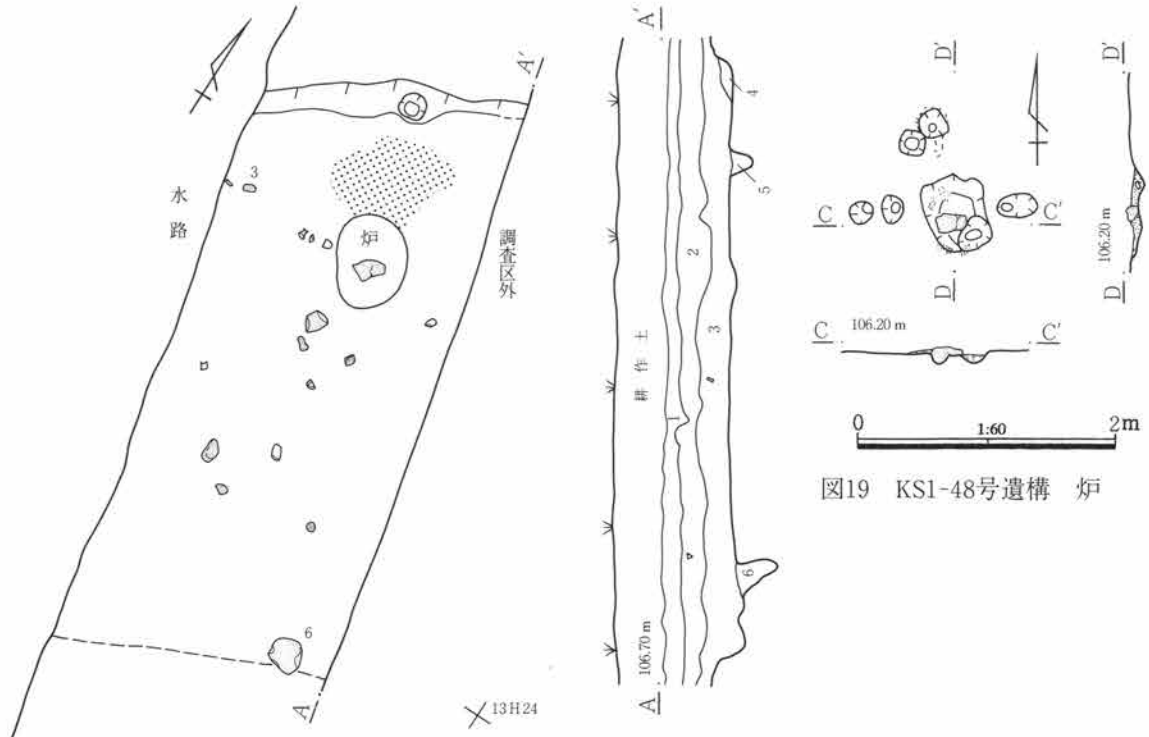


図19　KS1-48号遺構　炉

1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 粒子粗 しまり弱 As-B軽石(径1-3㎜)多く含む
2 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子粗 しまり弱 As-C軽石(径3-5㎜)多混土
3 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり良 粘性強 炭化粒(径3-5㎜)混じる 埋土
4 暗褐色粘質土(10YR3/3) 粒子細 しまり良 粘性強 ローム粒(径1-3㎜)少し混じる 埋土
5 黒色粘質土(10YR2/1) 粒子細 しまり弱 混入物なし 埋土
6 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり弱 ローム粒(径3-5㎜)混在 梯子穴

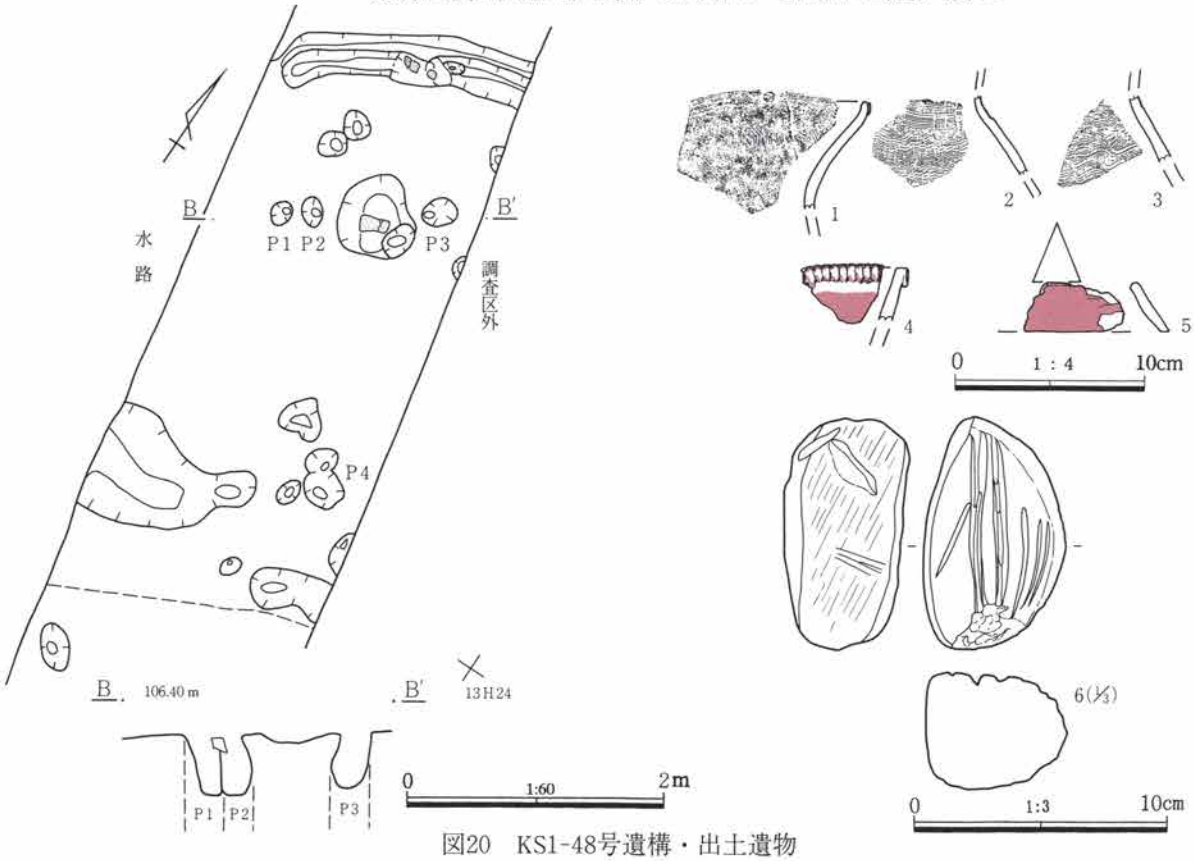


図20　KS1-48号遺構・出土遺物

KS2-22,24,70号遺構

KS２区の中央西寄りに位置し、３棟の竪穴住居が重複している。古い順から70･22･24号遺構とした。

KS2-22号遺構

黒褐色粘質土の掘り込みにより住居平面を確認した。隅丸長方形の竪穴住居である。残存壁高は６㎝ほどとごく浅く、特に西壁は不明瞭だった。床面はローム層中にあるが貼り床はなく、硬化面も確認できなかった。北壁中央から南西隅部にかけて現代の水路に切られ、北東隅を24号遺構に切られるが、主柱穴３本を検出し、住居の全体構造がほぼ把握できた。床面で樽式と考えられる土器の底部破片１点が出土している。

位置　12H21グリッド

規模　長軸6.14ｍ、短軸（3.78）ｍ

形状　隅丸長方形

重複　70号遺構を切り、24号遺構に切られる。68号遺構（中世土坑墓）に切られる。

主軸方位　N-12°-W

埋土　黒褐色粘質土、締まり良い。As-Cは含まない。

床面　ローム層中にあり、貼り床はない。

柱穴　主柱穴３本（ピット１～３）がある。４本柱と思われるが、他の１本は水路下に当たるだろう。ピット１-２間とピット３の西に接してほぼ同規模のピットがある。

炉　調査区内では確認できなかった。

その他　南辺に入口施設と思われるピットがある。

出土遺物　覆土中からは樽式土器破片が出土し、床面で樽式土器の壺または甕の底部破片が１点出土している。

KS2-24（Ａ・Ｂ）号遺構

本遺構は24号遺構Ｂを拡張して24Ａ号遺構が形成されたものと考えられる。遺構周辺の確認面はローム上面である。遺構はローム層を掘り込み黒褐色で埋没する。黒褐色粘質土にローム土が混じる硬化面として24号遺構Ａの床面を最初に確認し、この掘り方調査時に24号遺構Ａの床より一段落ち込み、締まりの弱い24号遺構Ｂの床面を検出した。床面出土遺物はないが、覆土中にAs-Cを含まないこと、覆土出土遺物が弥生土器片を主体とすることから遺構の時期は弥生時代と判断した。

位置　12H20グリッド

形状　隅丸方形または長方形

重複　22号遺構・70号遺構を切る。68号遺構（中世土坑墓）に切られる。

埋土　黒褐色粘質土、締まり良い。As-Cは含まない。

床面　24Ａ号遺構の床面は黒褐色粘質土にローム土が混じる硬化面として捉えられる。この下に、ローム粒を比較的多く含む暗褐色土の24Ｂ号遺構の床が検出された。

柱穴　主柱穴と特定できるものは確認できなかった。24Ａ号遺構の南辺にピットが２基並び、入口柱穴と推定できる。

炉　調査区内では確認できなかった。

その他　24Ｂ号遺構の西壁南部から南壁にかけて一部周溝が確認された。

出土遺物　覆土中より弥生土器を主体とする破片が多数出土。また、赤色顔料塊１点が出土している。

KS2-70号遺構

22・24号遺構と重複し、調査区外へ続くため形状が明確にわからない。ローム層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。掘り込みは浅く、大きく攪乱を受けており、床面も明瞭ではない。住居であるとの確証は得られていないが、確認時に南壁が直線的にのびることや、規模の点から住居の可能性があるものと考えられる。22・24号遺構に前出する遺構である。

位置　12H20グリッド

規模　南北（3.3）ｍ、東西（3.5）ｍ

形状　不明。南壁の一部のみを検出した。

重複　22・24号遺構に切られる。

主軸方位　不明

埋土　黒褐色粘質土、締まり良い。As-Cは含まない。

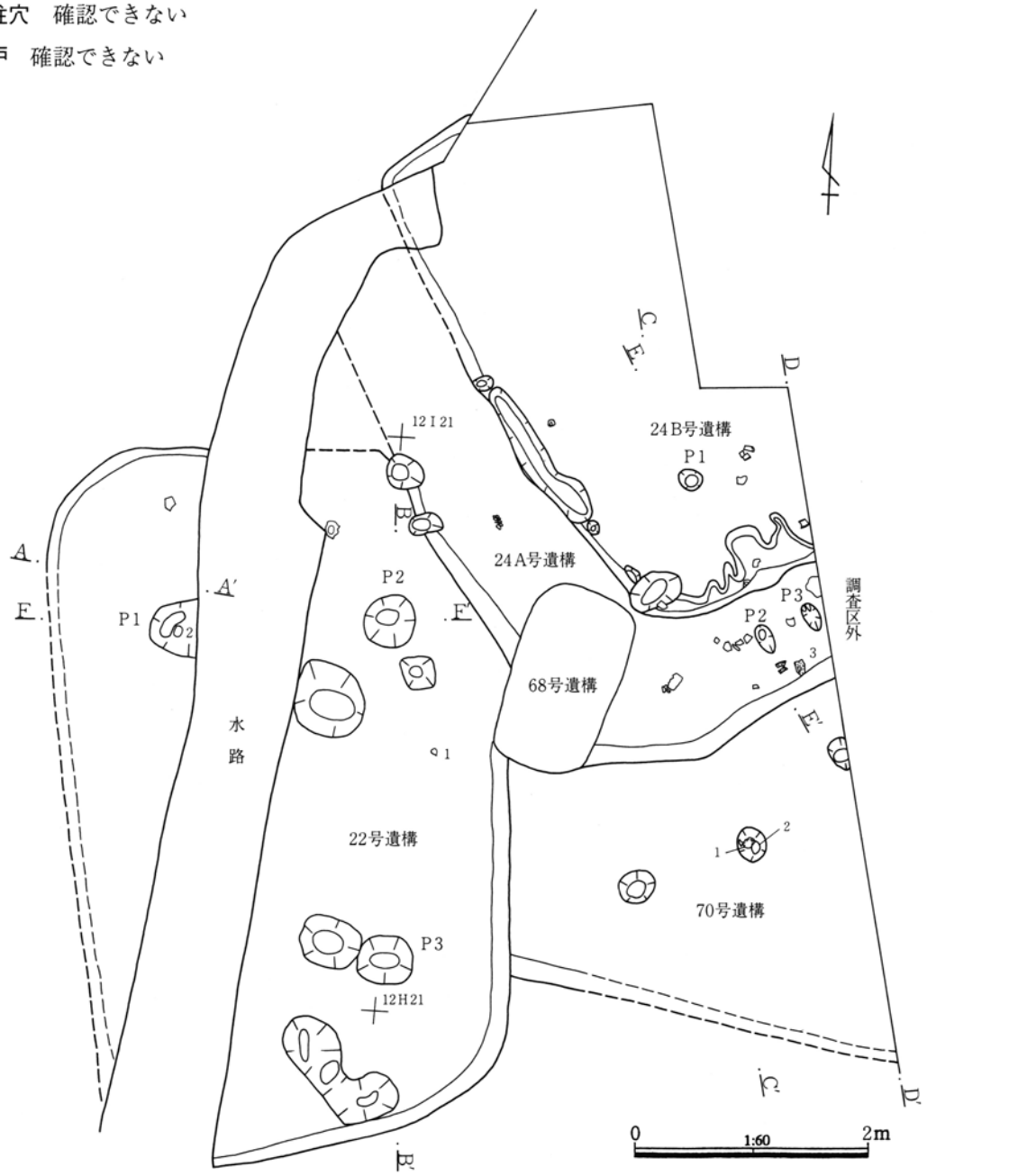
床面　攪乱により確認できない

柱穴　確認できない

炉　確認できない

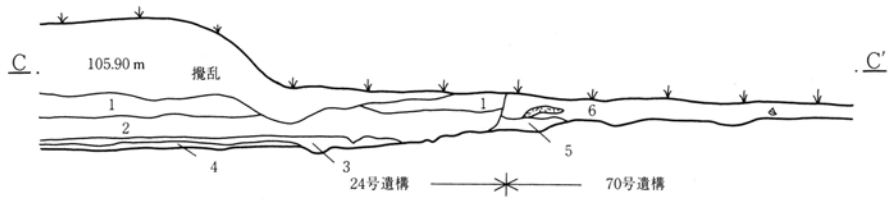
その他　ピットが3基あるが、この遺構に伴うものかどうか判断できない。

出土遺物　床面近くで土器2点が出土している。

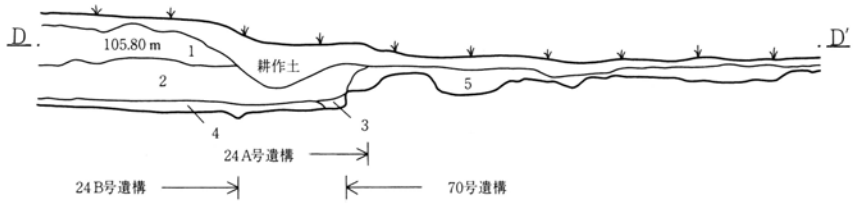


1 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり良 僅かに微少のローム粒混じる
2 黒色粘質土(10YR2/1) 粒子細 しまり良 含有物なし

図21　KS2-22,24A，24B，70号遺構（1）



C－C′
1 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり良 まばらにローム粒(径1-2cm)混じる
2 黒褐色粘質土(10YR2/3) 粒子細 しまり良 ローム塊(径1-3cm)含む 24号遺構
3 黒褐色粘質土(10YR3/1) 粒子細 しまり硬い ローム塊(径1-3cm)混土 上面拡張後の床 24号遺構
4 黒褐色粘質土(10YR3/2) 粒子細 しまり弱 ローム粒(径2-3mm)多く混じる 24号遺構
5 暗褐色粘質土(10YR3/4) 粒子細 しまり良 全体に黄褐色ローム粒含む 地山
6 黒褐色粘質土(10YR2/2) 1層に似るがより暗色で炭化粒含みローム粒混じる 70号遺構



D－D′
1 黒褐色粘質土(10YR2/3) 粒子細 しまり良 As-C軽石(径1-5mm)含む 24号遺構
2 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり良 ローム粒(径5-10mm)含む 24号遺構
3 黒褐色粘質土(10YR3/2) 粒子細 しまり弱 全体にローム粒(径2-3mm)の混土 24号遺構
4 ロームを主体とする貼り床(厚さ約4cm)南側では下位にローム粒(径3-5mm)を含む黒褐色粘質土 24号遺構
5 暗褐色粘質土(10YR3/3) 粒子細 しまり良 微少のローム粒混じる 70号遺構

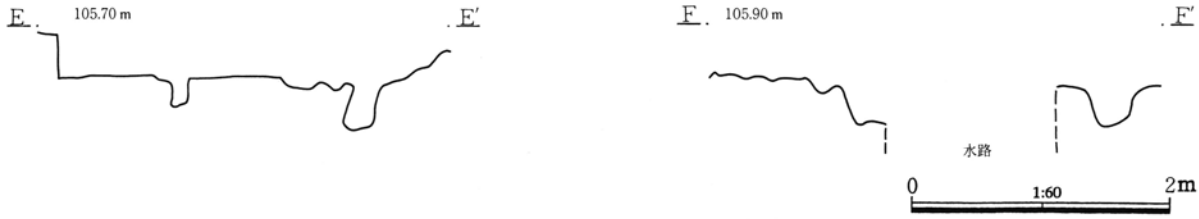


図22　KS2-22,24A，24B，70号遺構（2）

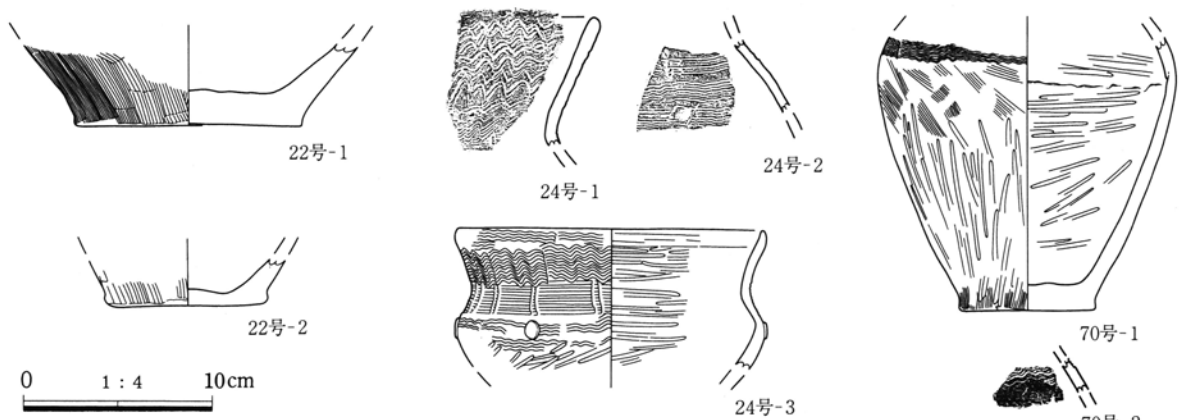


図23　KS2-22,24A，24B，70号遺構出土遺物

KS2-57号遺構

2区南西寄りに位置し、60・66号遺構（古墳時代の溝）・53号遺構（中世の土坑墓）に切られる。攪乱が激しく、西壁及び南東隅部の立ち上がりを確認したにとどまる。埋土の状況はほとんど確認できなかった。南東隅の埋土中から樽式土器の破片が数点出土している。形状と重複関係から弥生時代の住居と考えられる。

位置　12C22グリッド

規模　長軸（5.6）m、短軸（4.6）m

形状　楕円に近い隅丸長方形

重複　53・60・66号に切られる

主軸方位　N-0°

埋土　攪乱により不明瞭

床面　攪乱により確認できない

柱穴　確認できない

炉　確認できない

その他　南壁中央部にピットがあり、入口施設のものと考えられる。

出土遺物　南東隅の覆土中より樽式土器の破片が数点出土している。

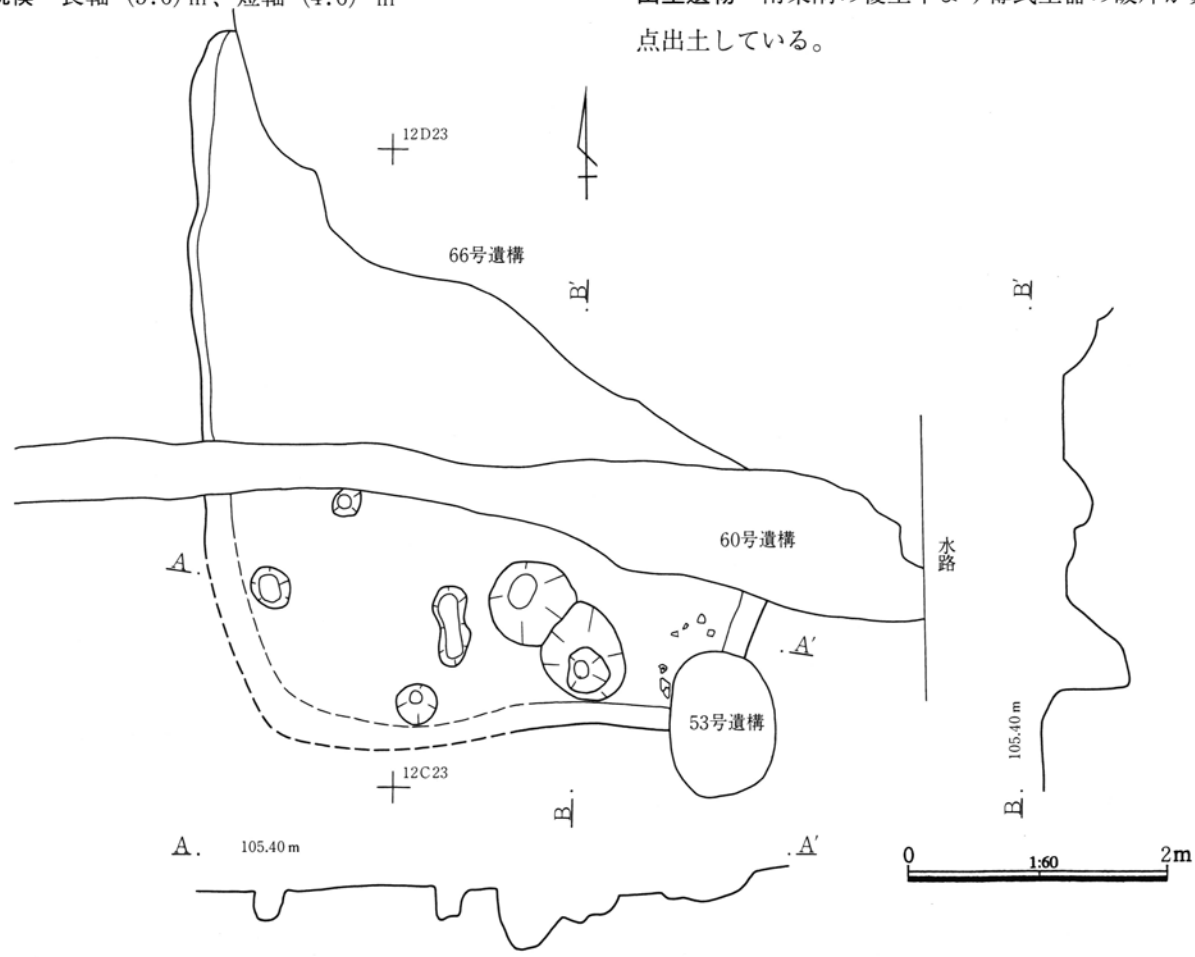


図24　KS2-57号遺構

KS2-59号遺構

2区のほぼ中央、水路の東側に位置する。西を66号遺構（古墳時代の溝）・63号遺構（古墳時代の住居）に切られている。遺構は63号遺構に切られなかった東側でよく残存しているが、63号遺構の床下に北壁が残る東壁付近の床面で樽式土器の破片が多数見つかっていることから弥生時代の住居とした。

位置　12D21グリッド

規模　長軸（3.8）m、短軸3.6m

形状　楕円に近い隅丸長方形

重複　66号・63号遺構より古く、74号遺構より新しい。

主軸方位　N-56°-E

埋土　不明

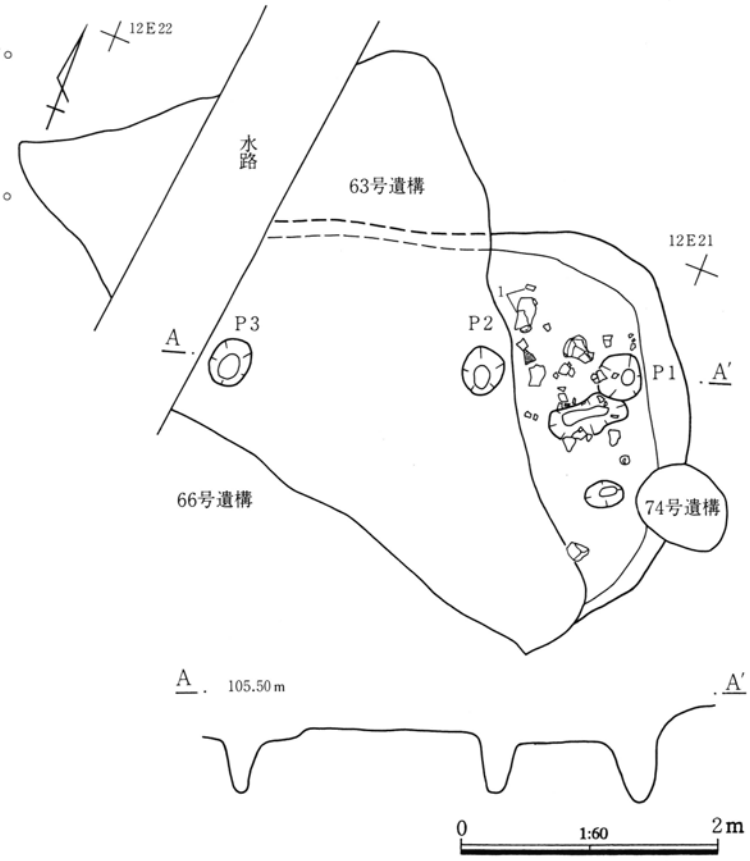
床面　ローム層中にある。貼り床はない。

柱穴　確認できない

炉　確認できない

その他　東壁際でピット１基を確認した。また西部でも63号遺構床面下のピット１基を確認しており、本遺構に伴うものである可能性がある。

出土遺物　東壁付近の床面で樽式土器破片多数を出土する。



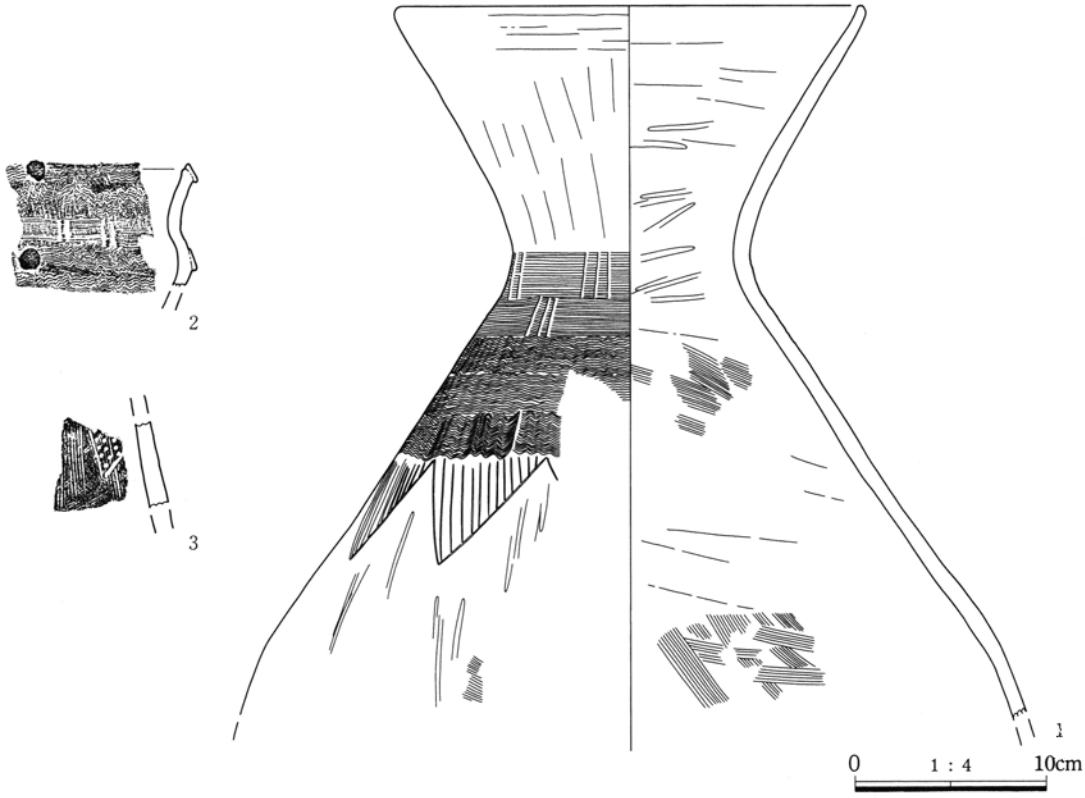


図25　KS2-59号遺構・出土遺物

KS2-67号遺構

調査区中央に走る水路の西側に位置する。ローム層への黒色粘質土の掘り込みとして確認された。北を68号遺構、南を13号遺構（ともに古墳時代住居）に切られる。東壁は一部が水路下に入るものの残存状態は良好だった。ローム層中での壁の立ち上がりから黒色土中の東北壁を推定した。西壁は攪乱により確認できないが、全形は隅丸長方形と想定できる。住居の中央部に長方形に４本の主柱穴を確認した。北辺の２本の間には地床炉がある。住居の南寄りには入口柱穴と考えられる２本の柱穴が東西に並ぶ。出土遺物は床面から樽式土器破片が、炉の中から樽式の甕・台付甕・高坏等の破片が出土している。また、埋土中から磨製石鏃１点が出土している。

位置　12F21グリッド

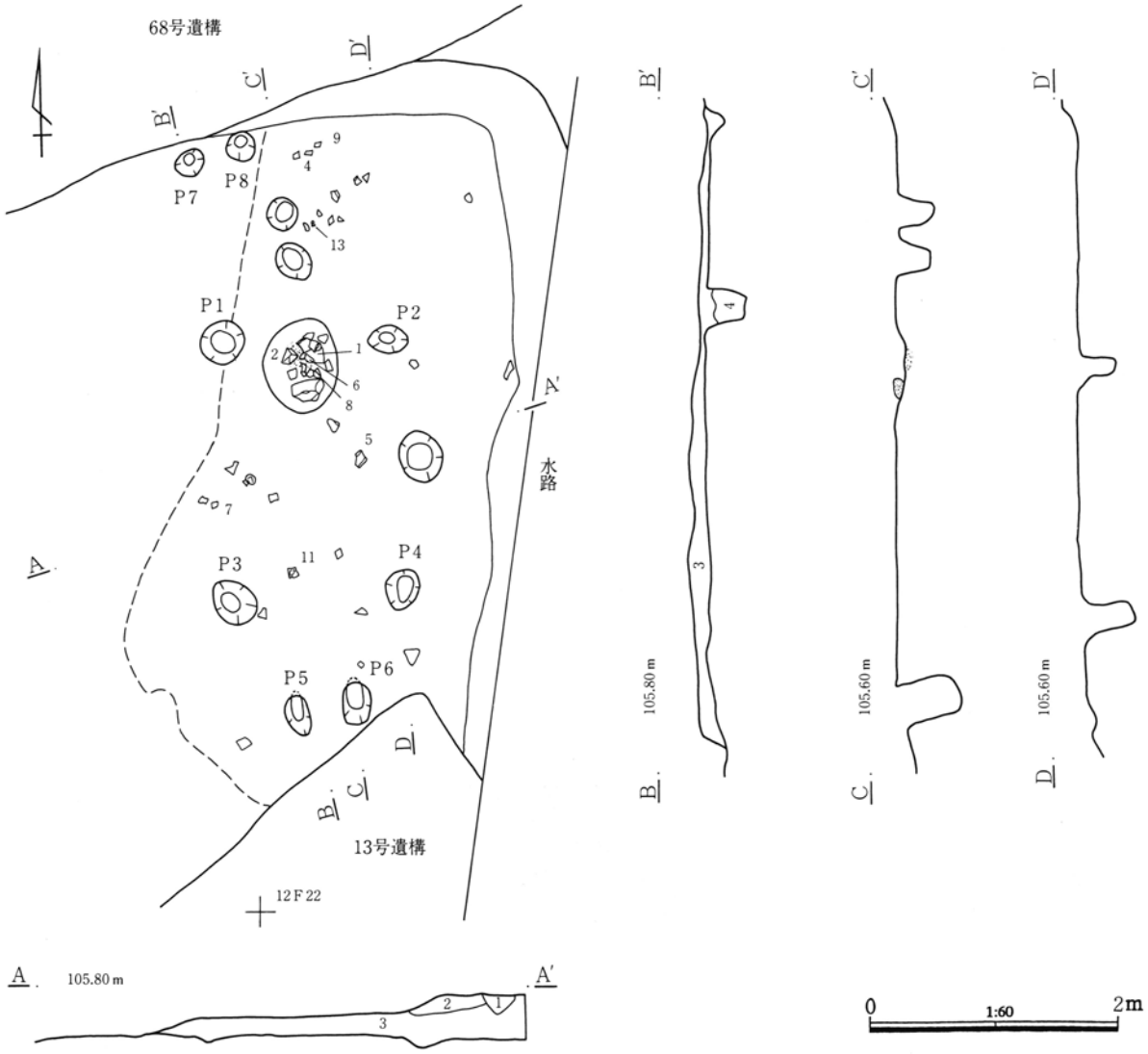
形状　隅丸長方形

重複　13号・68号遺構に切られる。

主軸方位　N-6°-W

埋土　黒色粘質土　As-Cを含まない。

床面　貼り床はない。炉の確認面と遺物の密着する



1 黒褐色砂質土(10YR2/3) 粒子粗 しまり弱 As-B(径2-3㎜)混じる
2 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり良 As-C(径3-5㎜)混じる
3 黒色粘質土(10YR2/1) 粒子細 しまり良 ローム塊(径2-3㎝)少し含む
4 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり良 ローム粒(径5-10㎜)混じる

図26　KS2-67号遺構

面を床と認定する。

柱穴　主柱穴４本を確認

炉　北側柱穴間に地床炉　楕円形の窪みの南側に石を据える。窪みの中には焼土が堆積し、甕と台付甕の破片が出土している。

その他　住居南辺に斜めに掘り込む入口柱穴を持つ。炉の北側に南北方向に並んで２基、北壁際に東西に並んで２基のピットが確認されている。

出土遺物　床面に密着して樽式土器破片が多数出土している。炉からは甕・台付甕・高坏坏部破片などが出土している。

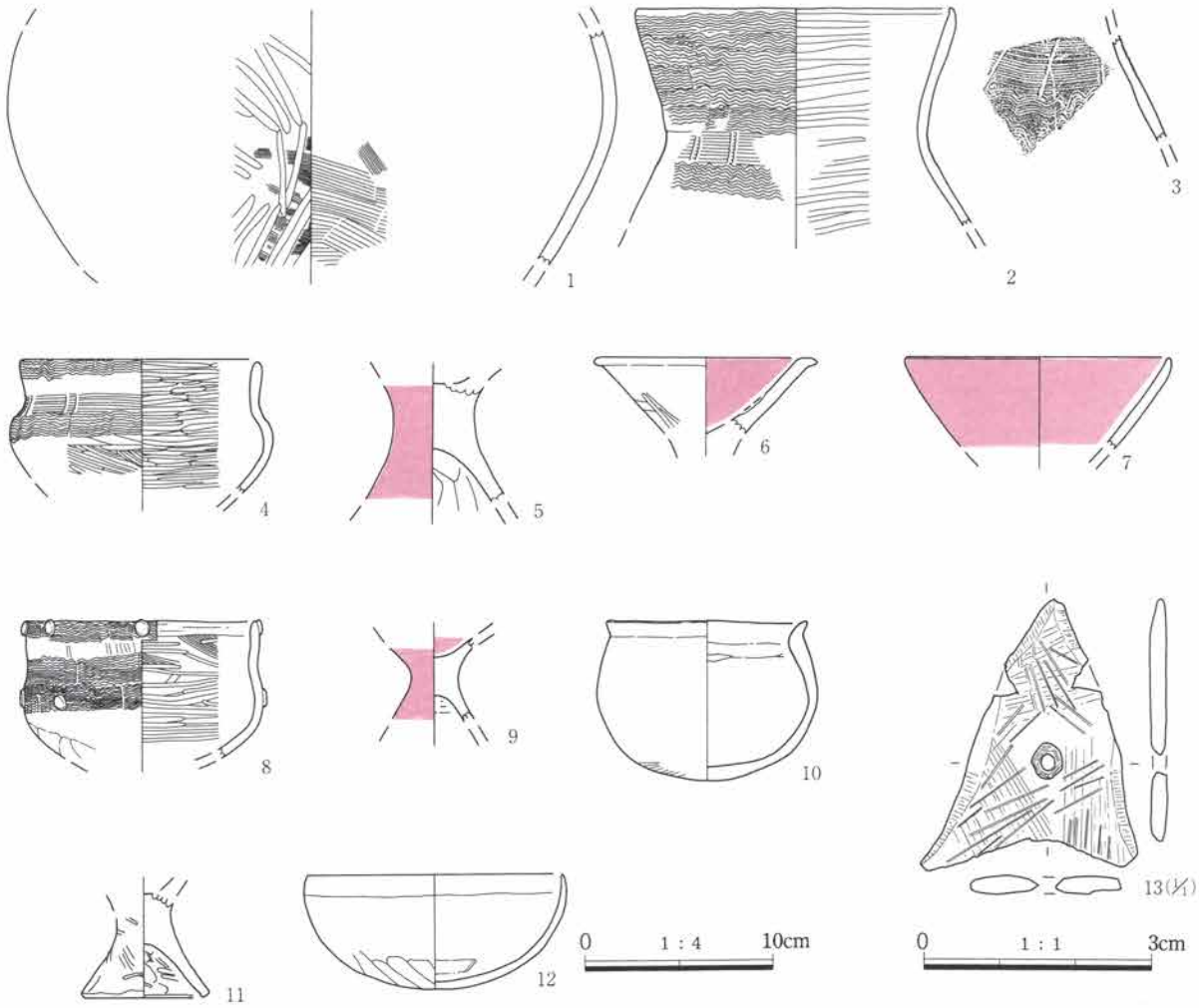


図27　KS2-67号遺構・出土遺物

KS2-82号遺構

2区の中央やや北寄り、66号遺構（古墳時代遺構）の北に位置する。攪乱により埋土はほとんど失われている。ピット10基が集中しており、うち1基から磨製石斧、1基から樽式の高坏坏部を出土した。

位置　12K22グリッド

形状　不明

重複　なし

主軸方位　不明

埋土　攪乱により失われている。ローム土への掘り込みでピットを確認。

床面　攪乱により確認できない

柱穴　確認できない

炉　確認できない

出土遺物　ピットから磨製石斧1点、樽式の高坏坏部1点を出土。

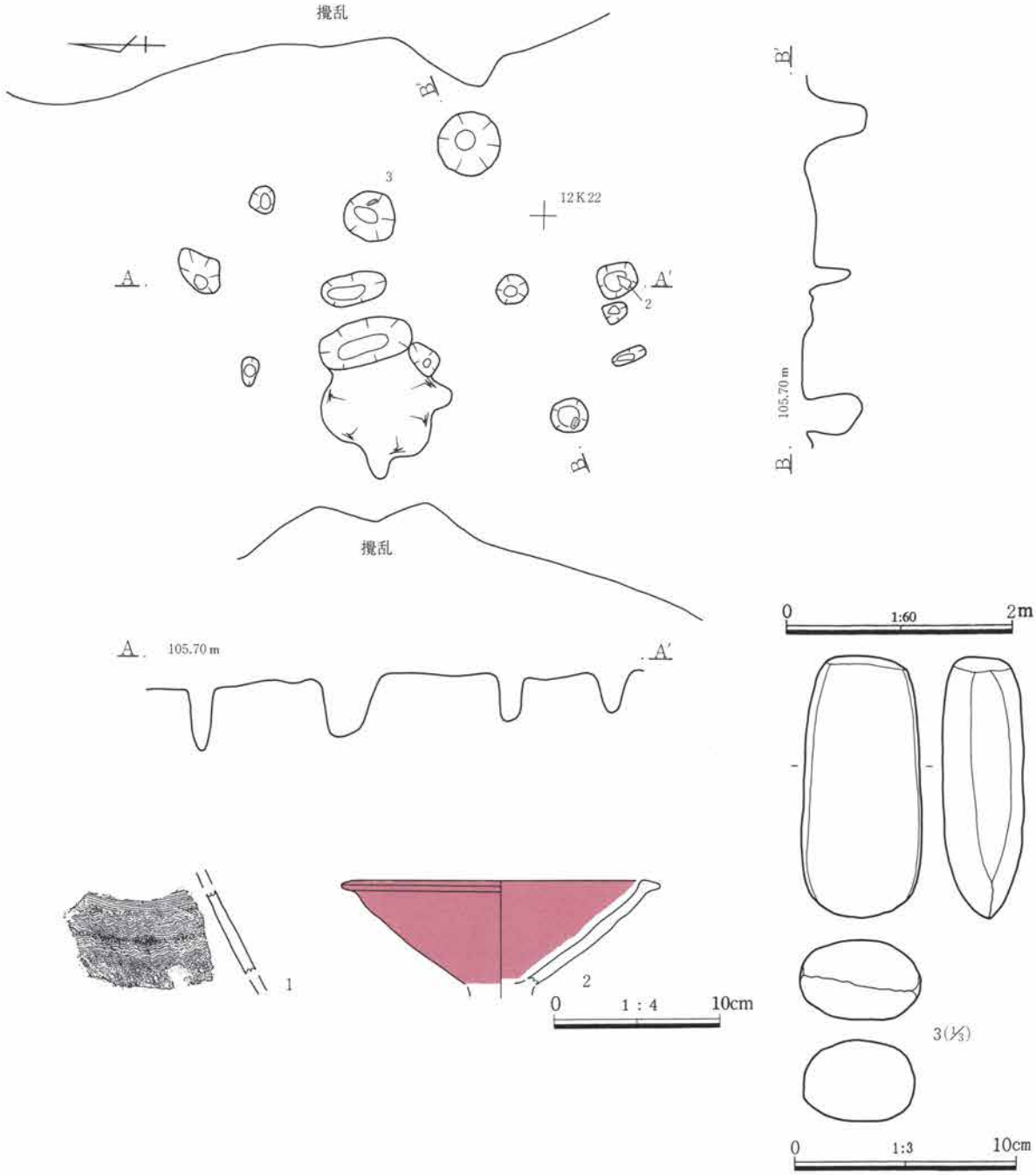


図28　KS2-82号遺構・出土遺物

KS2-86号遺構

２区のやや北寄りに位置する。攪乱表土を除去した際に確認された。南東隅は80号遺構（古墳時代住居）に切られ、北東は攪乱により失われている。

遺構はローム層を掘り込む。遺構の埋没土は粒子の細かい黒色粘質土である。平面形は楕円に近い隅丸長方形である。確認面からの深さは約20cmと浅いが、壁際に周溝が掘られており、住居の範囲は明瞭に確認できる。周溝は80号遺構の壁際でも一部確認されている。主柱穴は１本のみ確認した。また床面で樽式の有孔鉢１点を出土している。

位置　12J23グリッド

形状　楕円形に近い隅丸長方形

重複　80号（古墳時代住居）に切られる。

主軸方位　N-10°-W

埋土　黒色粘質土　As-Cを含まない。

床面　ローム層中で確認した。貼り床を持たないが、硬く締まる。

柱穴　北西の１基が主柱穴と考えられる。他に南辺寄りにピットが４基確認されている。

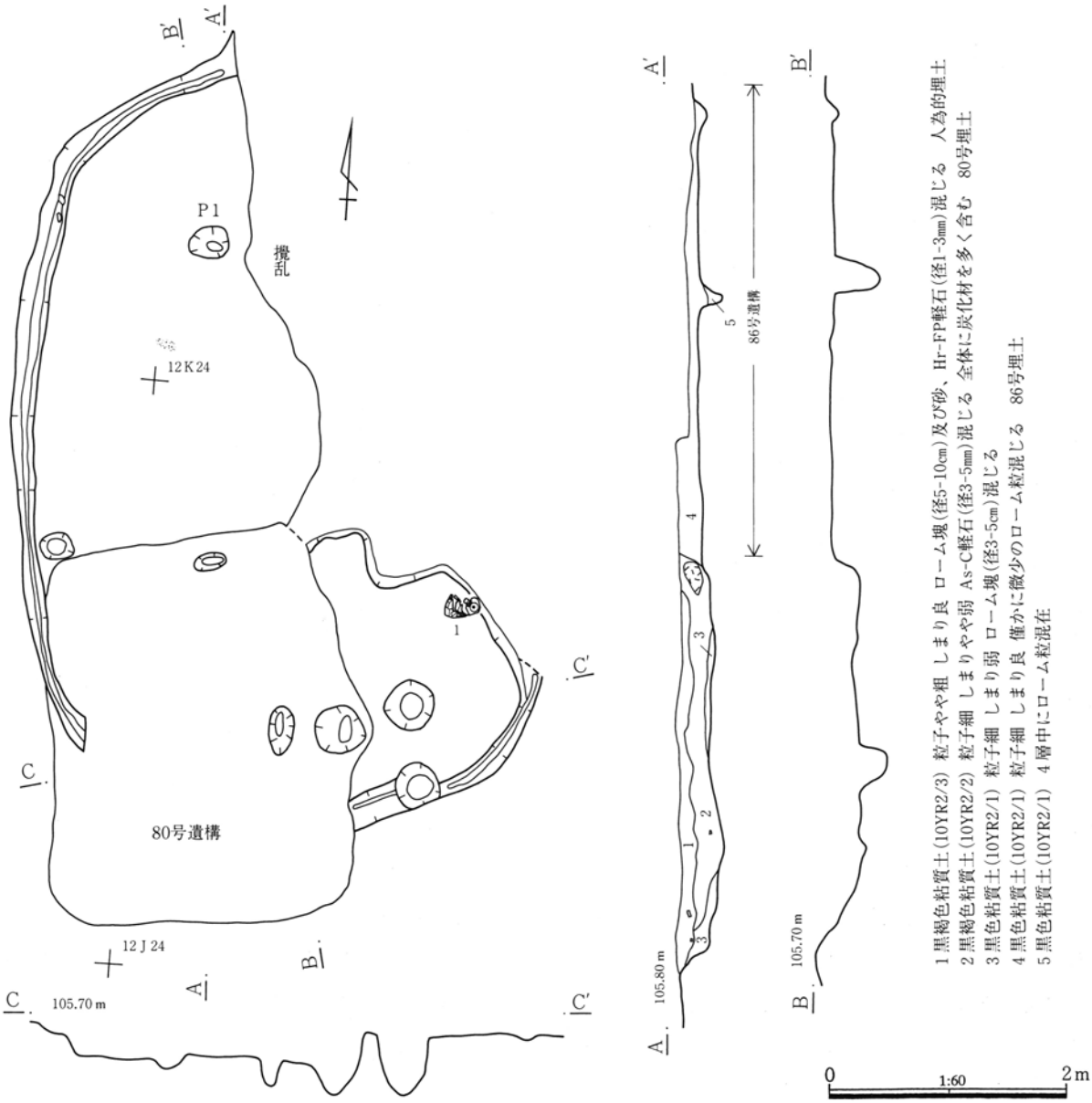


図29　KS2-86号遺構

炉　北西に焼土があるが、炉は確認できない。

出土遺物　床面で完形に近い有孔鉢が出土した。出土遺物はこの１点のみである。

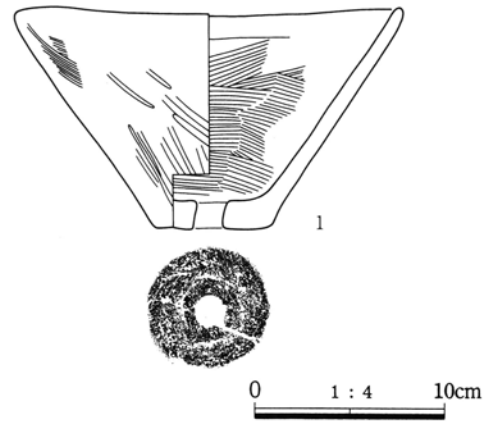


図30　KS2-86号遺構・出土遺物

KS2-93号遺構

２区中央やや北寄り、86号遺構の北に位置する。埋土のほとんどが攪乱により失われており、形状は確認できない。南西隅にわずかにローム層を掘り込む周溝状の痕跡が残る。住居と推定される範囲内にピット４基があるが、積極的に住居とみなす証拠に乏しい。

位置　12K24グリッド

形状　隅丸方形または長方形か

主軸方位　不明

埋土　攪乱により不明

床面　確認できない

柱穴　ピット４基があるが主柱穴と特定できるものはない。

炉　確認できない

出土遺物　なし

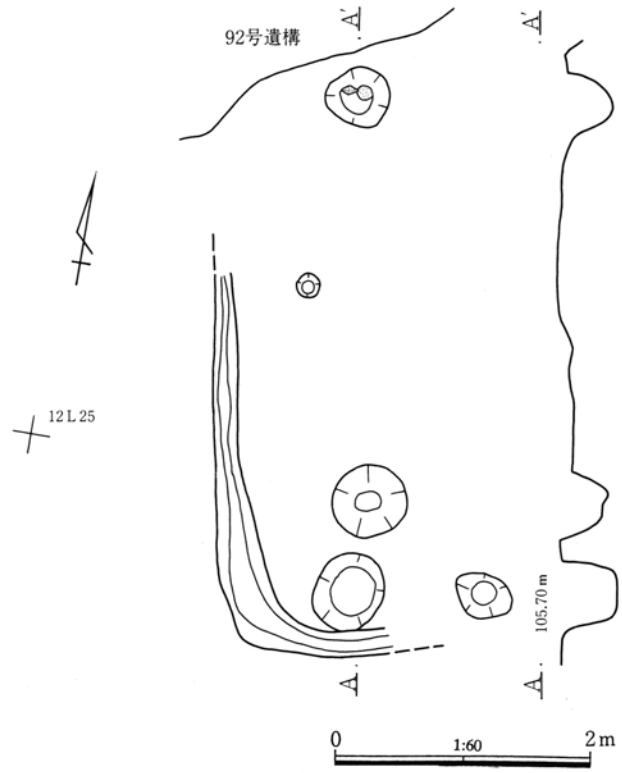


図31　KS2-93号遺構

KS2-99号遺構

２区北端に位置する。KS1-14・15号遺構の遺物の集中する範囲を精査したところ、ローム層を掘り込む住居を確認した。北辺は既存道路下へと広がり、東壁は攪乱を受けて失われているが、全体の形状は隅丸方形または長方形と推定できる。壁の残存は不良であり、確認面からの遺構の深さは約10cmである。主柱穴は南西と南東の２本を確認した。南壁に方形の土坑があり、底面から緑泥片岩製の磨石と樽式の土器片を出土した。覆土中には弥生土器片が多く出土しているが土器集中地域から流入した土器との分離は難しい。床面遺物密着の遺物は破片であり、量は少ない。炉は北の調査区壁際に1/2ほどが確認された。円形、皿状の地床炉である。炉の下面には土器破片が密着して出土しているが、壺または甕の胴部破片で全体の様相は不明である。

位置　12S23グリッド

形状　隅丸方形または長方形

重複　2-97号遺構（土器集中）

主軸方位　N-25°-W

埋土　黒色粘質土　As-Cを含まない。

床面　ローム層中の硬化面で床を確認した。

柱穴　主柱穴２本を確認。

炉　地床炉の1/2を確認　北半は調査区外

その他　ピットを４基確認しているが住居との関係は不明である。

出土遺物　97号遺構（土器集中）からの混入多数。床面密着遺物は破片のみ。南壁の土坑から緑泥片岩製の磨石１点と樽式土器の無文の甕の口縁部破片と赤彩高坏破片を出土。

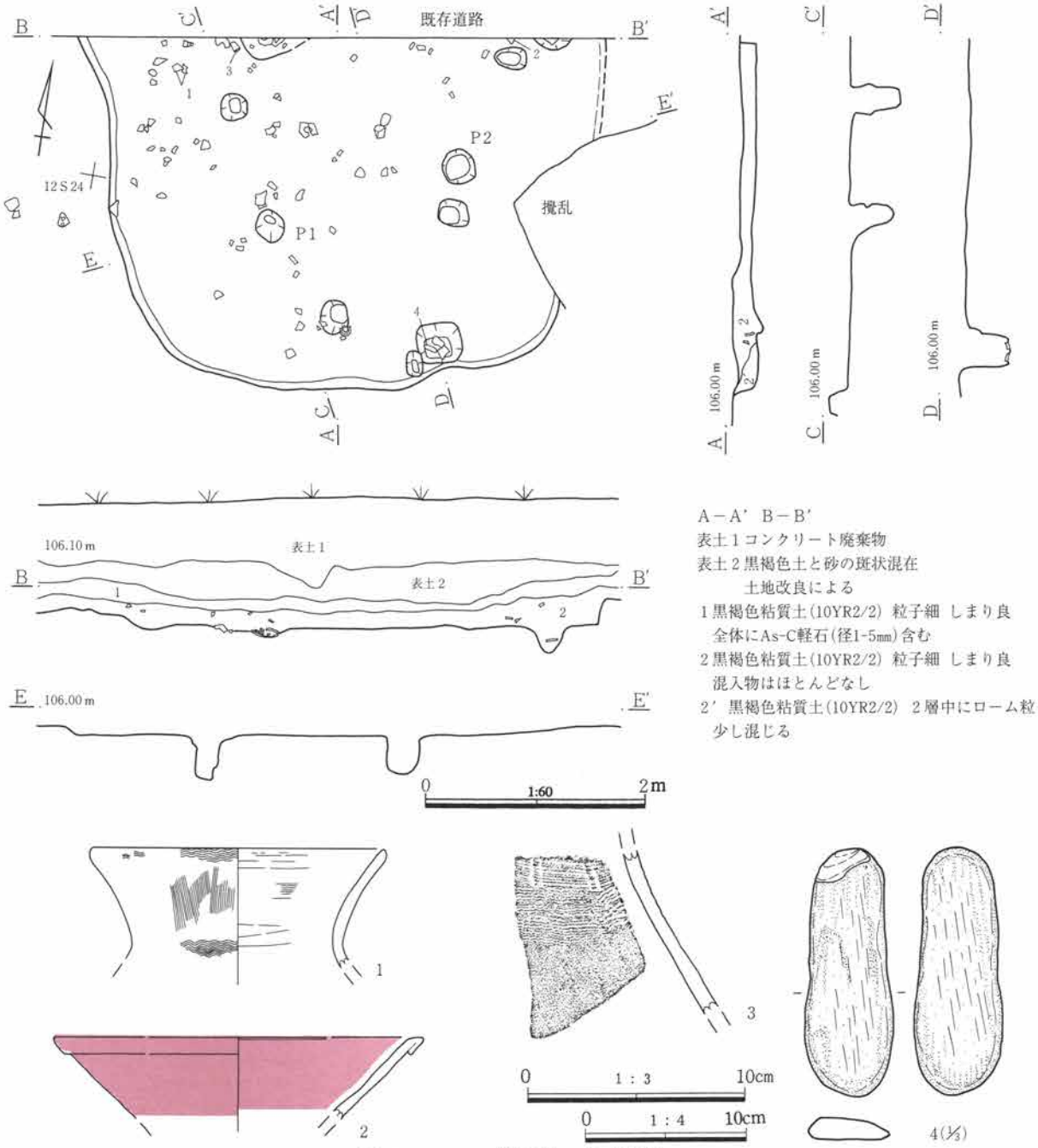


図32　KS2-99号遺構・出土遺物

KS2-100号遺構

2区の北側に位置する。攪乱が激しく、床面近くまで削平されており、黒褐色土のわずかな窪みとして確認された。窪みの中に主柱穴が4本確認されており、北辺の2本の間には炉がある。これらの炉と柱穴の検出状態から北北東に主軸を持つ長方形の住居であると考えられる。壁は検出できなかった。遺構に伴うと考えられる遺物は多い。床面密着相当遺物が複数あるが、本遺構より古い北側のピット中から完形の小型台付甕が出土している。

住居の範囲内に102号遺構が重複する。これは床面相当位で上半が壊されており、100号遺構は102号遺構形成以後の住居であるといえる。

位置　12Q24グリッド

形状　長方形

重複　102号遺構（土器棺）が後出。

主軸方位　N-9°-W

埋土　黒褐色粘質土　As-Cを含まない。

床面　黒色土と黄褐色土の混土。締まりの良い土であるが、ほとんど面的には検出できなかった。

柱穴　主柱穴4本を確認。南側2本のそれぞれ北側にやや小さい規模のピットがあるが、より古い遺構と考えられる。

炉　北側の柱穴間に地床炉。焼土と土器片が散在していた。

その他　北側の柱穴の北にピットが6基確認されている。

出土遺物　樽式土器を出土している。床面に密着して甕1点、炉から甕破片、古い北側のピット内から完形の小型台付甕。南よりの土坑の中から軽石製の砥石。埋土中から甕、ミニチュアの有孔鉢など。

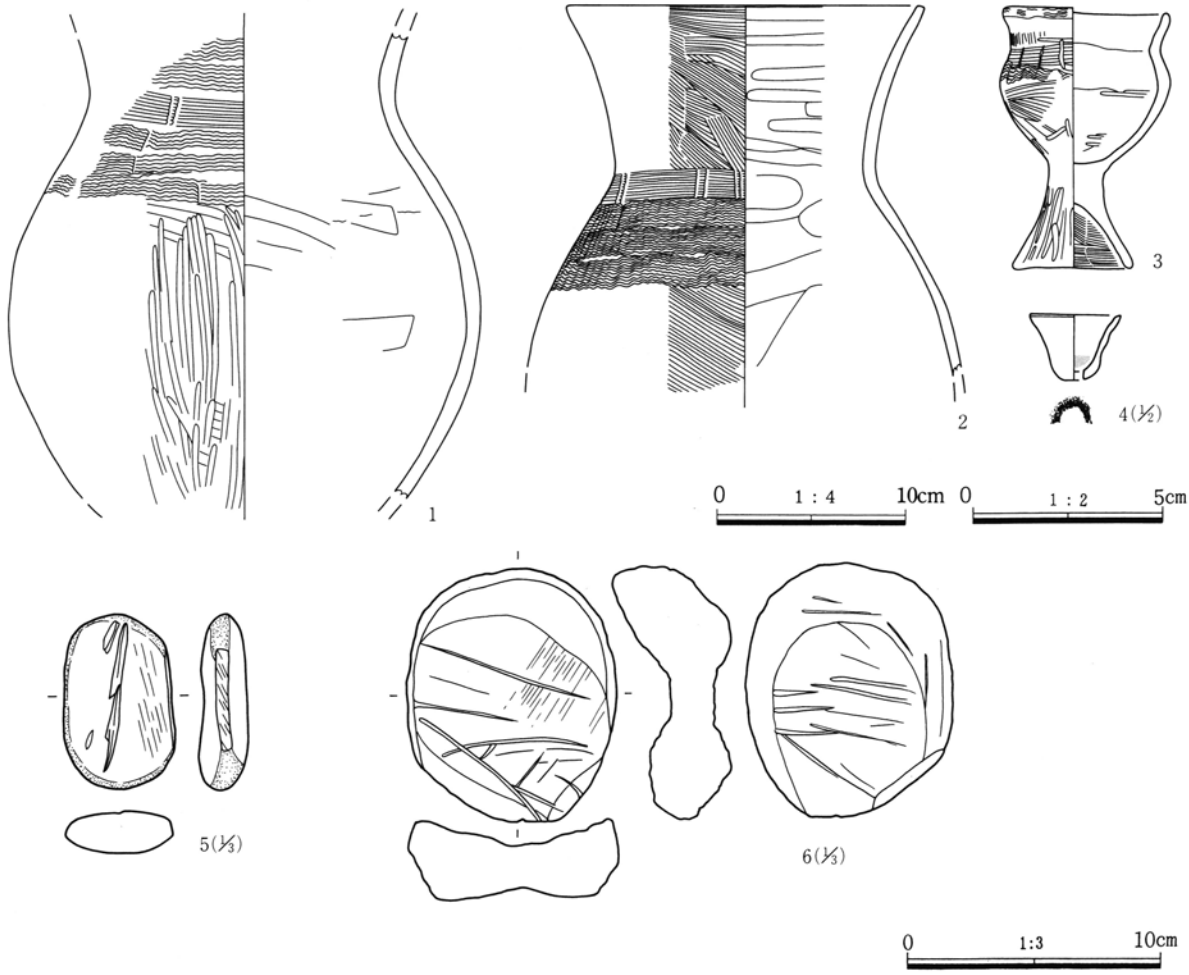


図33　KS2-100号遺構出土遺物

1黒褐色土(10YR2/3) 粘質土 As-C(径5㎜)以下のもの7％含む 粘性やや強 しまり強
2黒褐色土(10YR2/2) 粘質土 As-C(径3㎜)以下のもの1％未満含む 粘性やや強 しまり有り (径5㎜)以下の炭化粒1％未満含む
3黒褐色土(10YR2/2) 粘質土 粘性強 しまり有り (径3㎜)以下の炭化粒1％未満含む
4黒褐色土(10YR2/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混合層 (径3㎜)の明黄褐色(10YR6/8) 土粒10％含む 粘質土 粘性やや強 しまり有り 床面と思われる
5黒色土(10YR2/1) 粘質土 (径40㎜)以下の黄褐色土(10YR5/6) ロームブロック1％含む (径2㎜)以下の白色軽石微量含む 粘性やや強 しまり有り
6黒色土(10YR2/1) 粘質土 As-C(径2㎜)以下のもの1％未満 (径2㎜)以下の炭化粒微量含む 粘性やや強 しまり有り
7黒褐色土(10YR2/2) 粘質土 シルト気味 As-C(径3㎜)以下のもの1％ (径3㎜以下)の炭化粒微量に含む 粘性有り しまりやや強
8黒褐色土(10YR2/3) 粘質土 As-C(径1㎜)以下のもの1％未満 (径2㎜)以下の炭化粒1％含む 粘性やや強 しまり有り
9黒褐色土(10YR2/3) 粘質土 シルト気味 As-C(径1㎜)以下のもの1％未満 (径2㎜)以下のもの炭化粒微量含む 粘性有り しまり有り
10黒褐色土(10YR2/3) 粘質土 As-C(径2㎜)以下のもの1％未満 (径3㎜)以下の炭化粒1％含む 褐色(10YR4/4)のローム、シミ状に3％含む 粘性強 しまり有り
11黒褐色土(10YR2/3) 粘質土 As-C(径2㎜)以下のもの微量 (径2㎜)以下の炭化粒1％含む 褐色(10YR4/4)のローム、シミ状に15％混じる 粘性強 しまり有り

図34　KS2-100号遺構

KS2-107号遺構

2区中央の東調査区壁際に位置する。北を21号遺構（古墳時代）、南を66号遺構（古墳時代）に切られる。斜辺を調査区壁とする三角形が確認されている。ローム層を掘り込み、黒褐色粘質土で埋没する。床に相当する硬化面は確認されていない。埋土から弥生時代の遺構と想定されるが、住居と断定はできない。

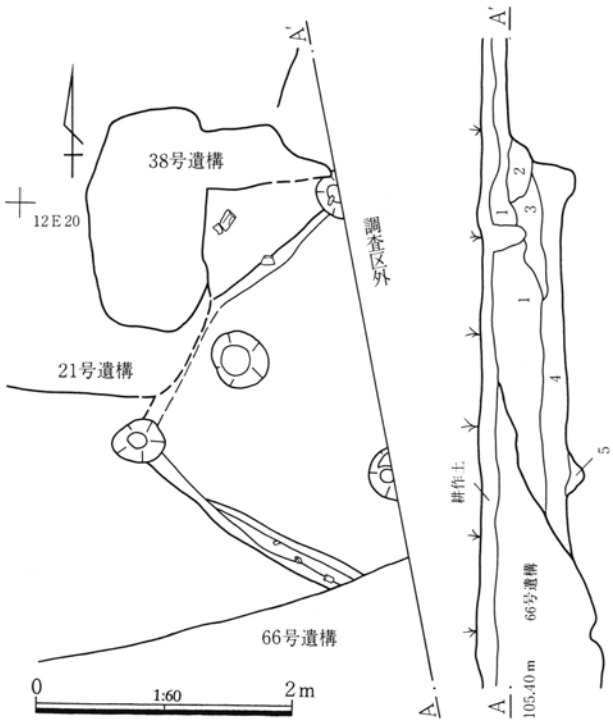


図35　KS2-107号遺構

位置　12D19グリッド

形状　隅丸方形または長方形

残存　平面の約1/4

重複　21号・37号遺構に切られる。

主軸方位　不明

埋土　黒褐色粘質土　As-Cを含まない

床面　床相当の硬化面は確認できない

柱穴　確認できない

炉　確認できない

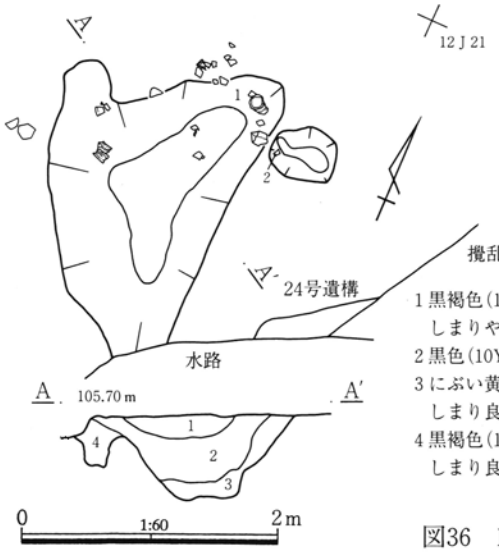
その他　遺構の範囲にピットが2基確認されている。

出土遺物　床面相当のレベルから樽式の高坏脚部破片が1点出土。

1 黒褐色粘質土(10YR2/3)　粒子やや粗　しまりやや弱
　As-C軽石(径3-5㎜)混じる　21号埋土
2 暗赤褐色粘質土(5YR3/4)　粒子やや粗　しまり良
　焼土が主体　21号埋土
3 黒色粘質土(10YR2/1)　粒子やや粗　しまりやや弱　含有物
　ほとんどなし　107号埋土
4 黒褐色粘質土(10YR3/2)　粒子細　しまり弱　ローム粒(径1-3㎝)
　全体に多く混在　下面に床硬化面はない　107号埋土
5 にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)　粒子細　しまりやや弱
　粘性やや強　微少のローム粒混じる　107号埋土

KS2-77号遺構　（風倒木）

KS2区のほぼ中央部、東の調査区壁際に位置する。ローム土を掘り込む黒色粘質土の西側を弧とする半円形の土坑として確認された。埋土の上層からは樽式の壺・甕・ミニチュア土器が出土している。倒木跡であると推定する。



1 黒褐色(10YR2/3)　粘質土　粒子細
　しまりやや弱　遺物を含む
2 黒色(10YR2/1)　粘質土　粒子細　しまり良
3 にぶい黄褐色(10YR4/3)　粘質土　粒子細
　しまり良　微少のローム粒
4 黒褐色(10YR3/2)　粘質土　粒子細
　しまり良　ローム粒塊(径5-30㎜)混じる

位置　12I21グリッド

形状　半円形

重複　なし

埋土　暗褐色粘質土　As-Cを含まない。

出土遺物　甕・台付甕などが散布。

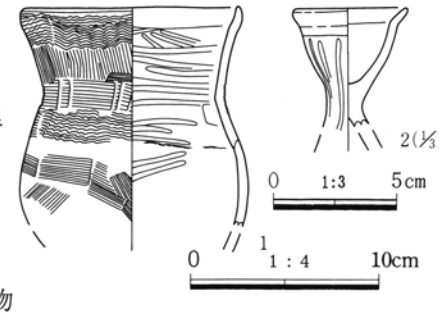


図36　KS2-77号遺構・出土遺物

（2）　土器棺墓

本遺跡では0区で4基、1区で19基、2区で3基、計23基の土器棺墓を確認した。棺には、合わせ口土器棺と単棺のものとがある。合わせ口とは、棺身となる土器の口に別個体の土器を被せ蓋としたもののことを言う。また、棺身の頸部下を支えるように土器片が設置されているものがあり、枕と呼ぶ。単棺とは1個体の土器を単独で埋設した土坑である。調査時においては、土器が設置してあると判断できること、散布ではなく単独で土器が出土していることなどを基準に土器棺墓であるかを判断した。

KS0-11号遺構

13R26グリッド　0区の南東、調査区を南北に走る水路の東に位置する。遺構の周囲は覆土が薄く、As-C混土層は確認できなかった。本遺構は現代の耕作土層の下のAs-Cを含まない暗褐色土中で確認された。

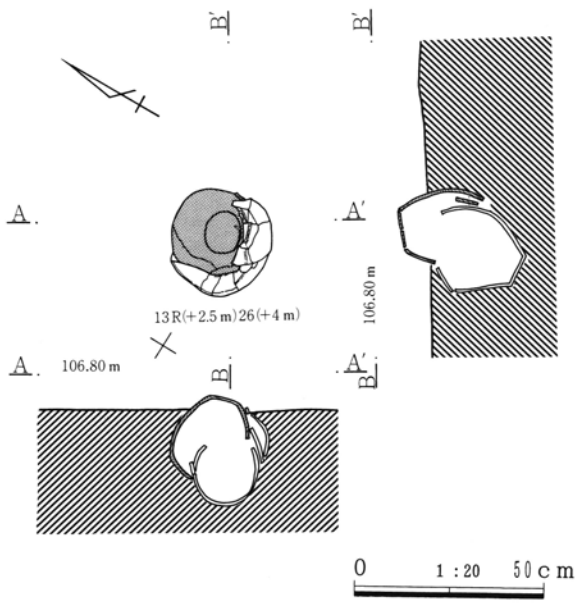
棺を埋設した土坑の状況は確認できなかった。

棺は頸部以上を欠いた小型の土器2個体を組み合わせたもので、立位で設置されている。蓋のある土器棺の立位での出土は本遺跡内では唯一である。破損は少なく埋設状態をよく保存している。

棺身に利用されている土器は無文の壺である。残存高は24.9㎝。頸部以上を欠いている。胴部最大径のやや上までを赤色塗彩している。

棺蓋は樽式の甕の頸部以下を本体の上に被せたものである。残存高は21.9㎝。破片の一部は南側に口縁部方向を上にして設置されている。この破片は蓋と同一個体だが、蓋とは別に破片を横に添えられたものである。

棺内には本体の中位まで土が堆積していたが、蓋の内側は空洞になっていた。棺内からは骨や副葬品は確認されなかった。



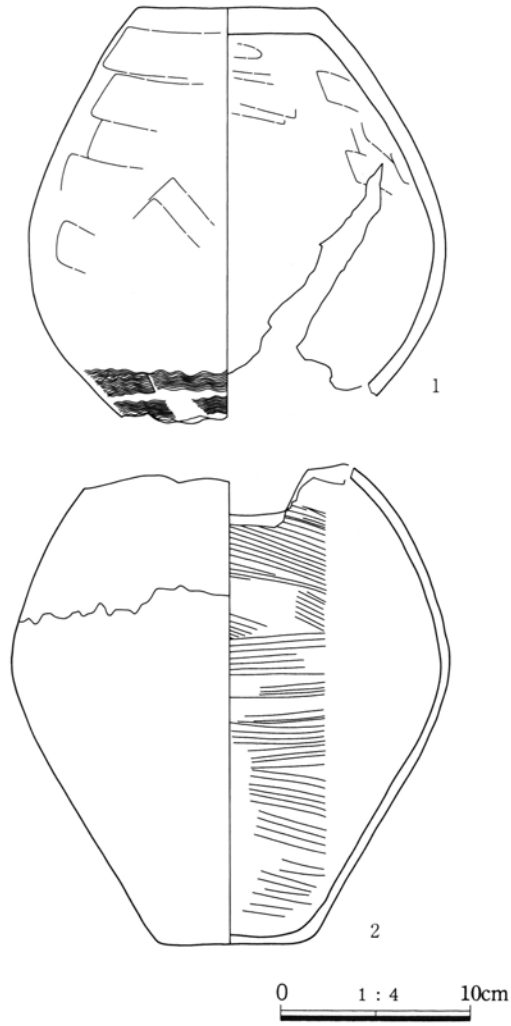


図37　KS0-11号遺構・出土遺物

KS0-12号遺構

14F31グリッド　0区の南よりに位置する。不整楕円形の土坑内から大型の壺1個体が出土した遺構である。土坑の南側を06号遺構（古代？溝）と07号遺構（近世溝）に切られている。

遺構はAs-Cを少量含む黒褐色粘質土の下で確認された。土坑の埋没土は粒子の細かい黒褐色粘質土で、壁の立ち上がりは弱い。長辺約1.3mの土坑の底部に壺1個体が出土した。壺は細片化しており、棺の埋設状態は確認できなかった。口縁部破片が西寄りに、底部破片が東から出土している。

使用されている土器は樽式の壺であり、口縁に1段折返しと肩部に波状文と貼付文を持つ。口縁部は焼成時のものと思われるゆがみが強い。胴部は内外面とも摩滅が激しい。

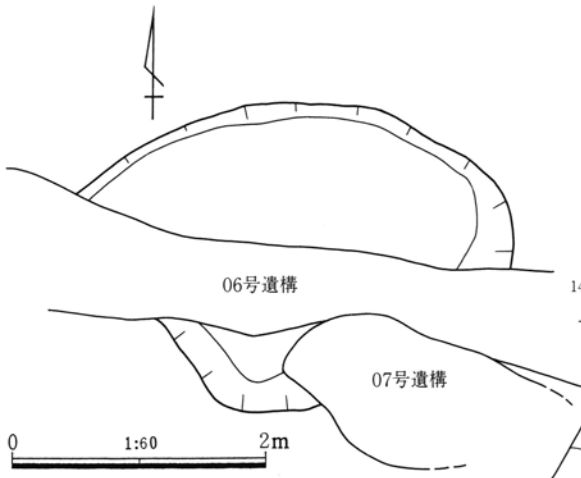


図38　KS0-12号遺構掘り方

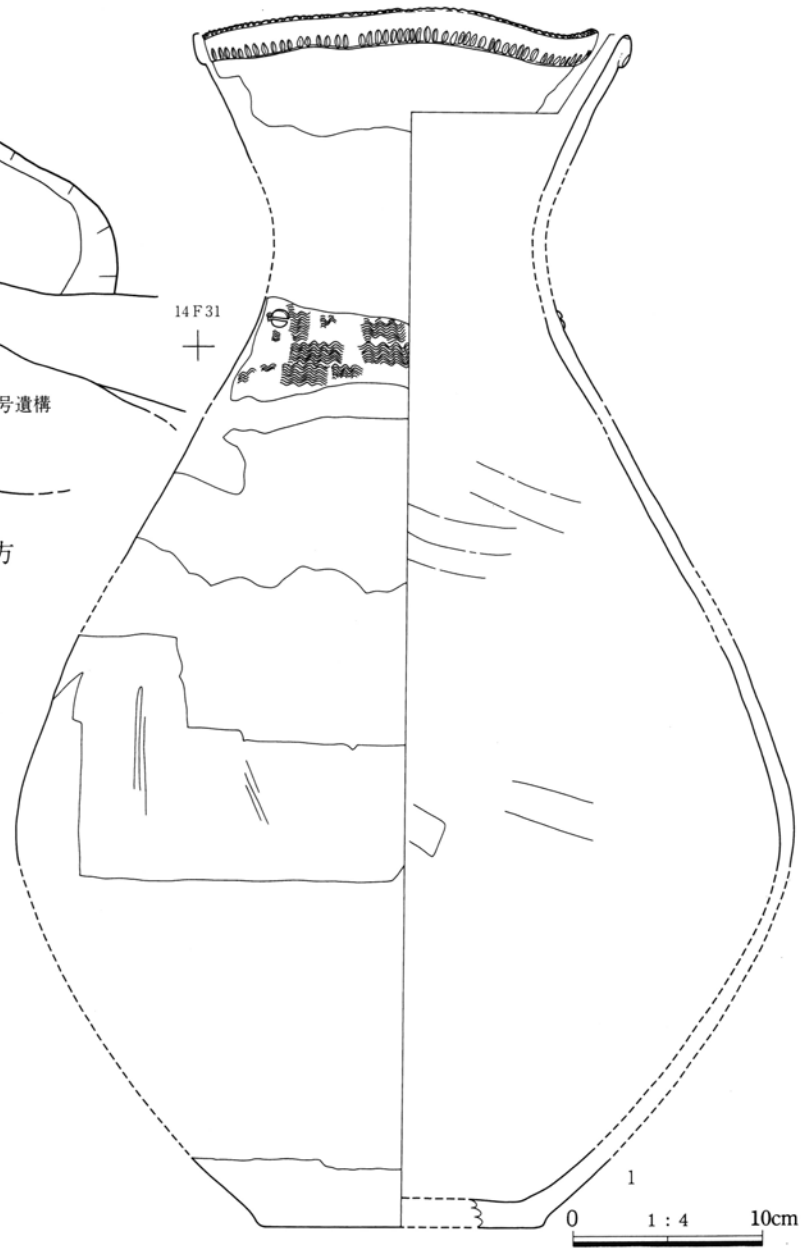


図39　KS0-12号遺構・出土遺物

1 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり良 As-C軽石(径3-4mm)少し混じる 鉄分粒子やや多い
2 黒褐色粘質土(10YR2/3) 粒子細 しまりやや弱 含有物少ない
3 褐色土(7.5YR4/4) 粘質土褐色ローム粒子混じる　地山か

14F31

図40　KS0-12号遺構

KS0-20号遺構

15G35グリッド　0区のほぼ中央に位置する。本遺構の周囲は現代の耕作による攪乱が進み、As-C混土下の暗褐色土層が最初の確認面である。この面で壺の口縁部が確認された。壺は暗褐色土の中に埋設されているが、埋没状況は確認できなかった。

棺身は壺1個体を立位に埋設するものである。口縁部破片は破損しているが復元してほぼ完形となった。使用されている土器は樽式の壺で、口縁部に折り返しを持つ。小型の壺である。

壺の内部は周囲と同様の暗褐色土が堆積しており、内部からは骨や副葬品は確認されなかった。

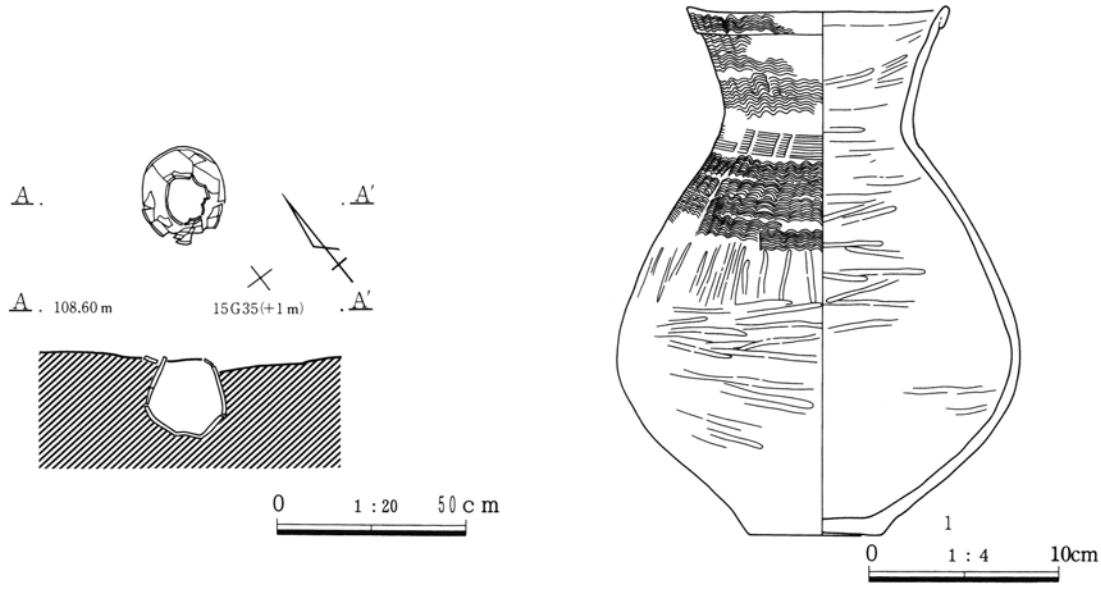


図41　KS0-20号遺構・出土遺物

KS0-28号遺構

15O37グリッド　0区の北端に位置する。大型の壺と有孔鉢の組み合わせによる土器棺である。As-C混土中で確認された。一部を25号遺構（近世埋め桶）に切られている。

出土状態は土器はつぶれて平面的に広がって出土している。破片は直径約2ｍの範囲に散っている。設置の状況は不明である。棺本体の底部破片は正位で出土しているが土器が大型のため立位の設置とは考えにくい。口縁部は北東方向を向く。底部破片から北東に約2.4ｍ離れたところに有孔鉢が出土しており、周囲に他の同時期の遺構がないことと本体の口縁部と有孔鉢のサイズに整合性があることから棺蓋と考えた。棺を埋設した土坑は確認できなかった。

棺本体は大型の壺の頸部以下である。使用されている土器は樽式の壺で残存高71.0㎝、胴部最大径57.2㎝を計る。有孔鉢は口縁部に2段の折り返しを持つ小型品である。他に4段の折り返しを持つ口縁部破片が2点出土している。

棺内及び遺構周辺からは副葬品は出土していない。

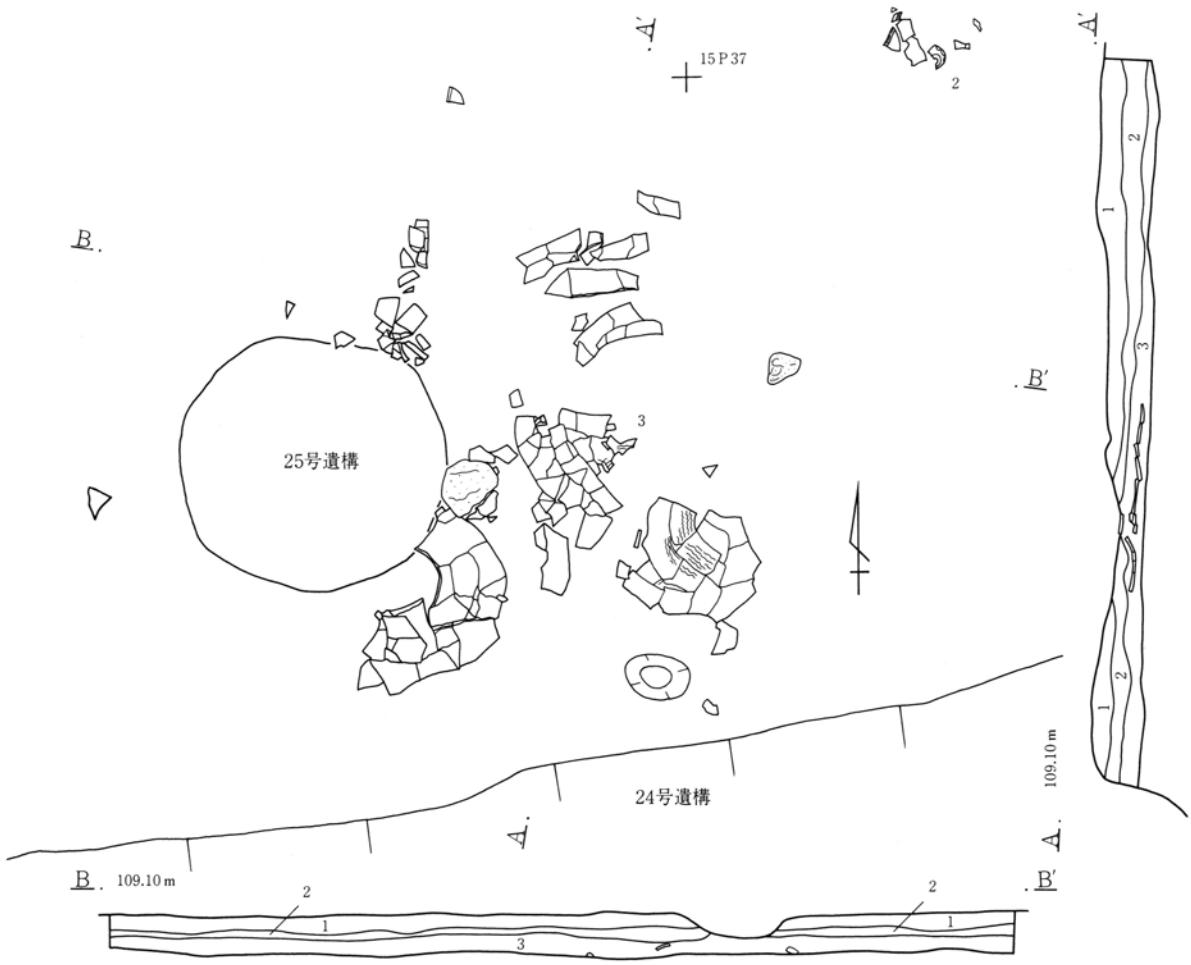


図42　KS0-28号遺構

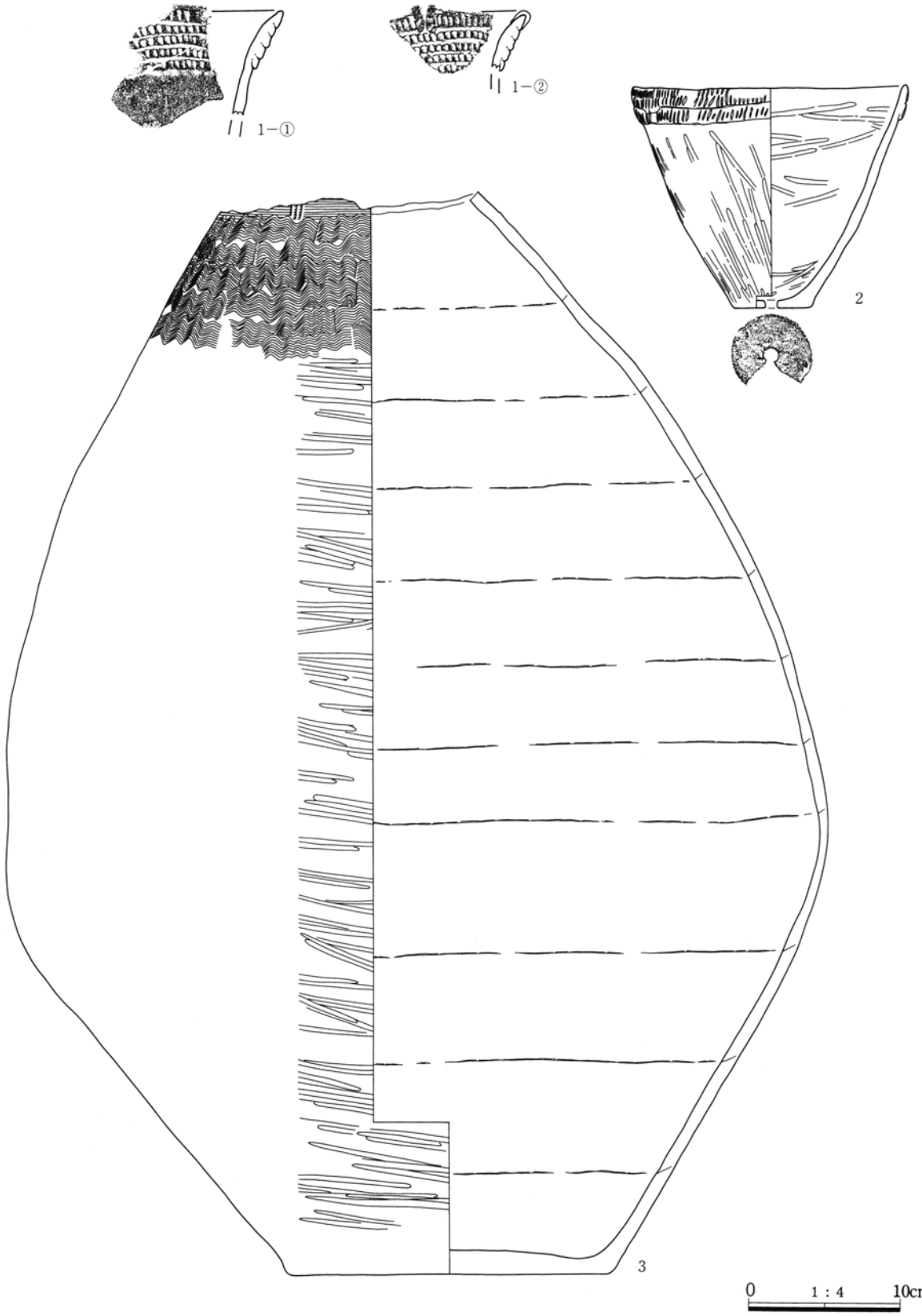


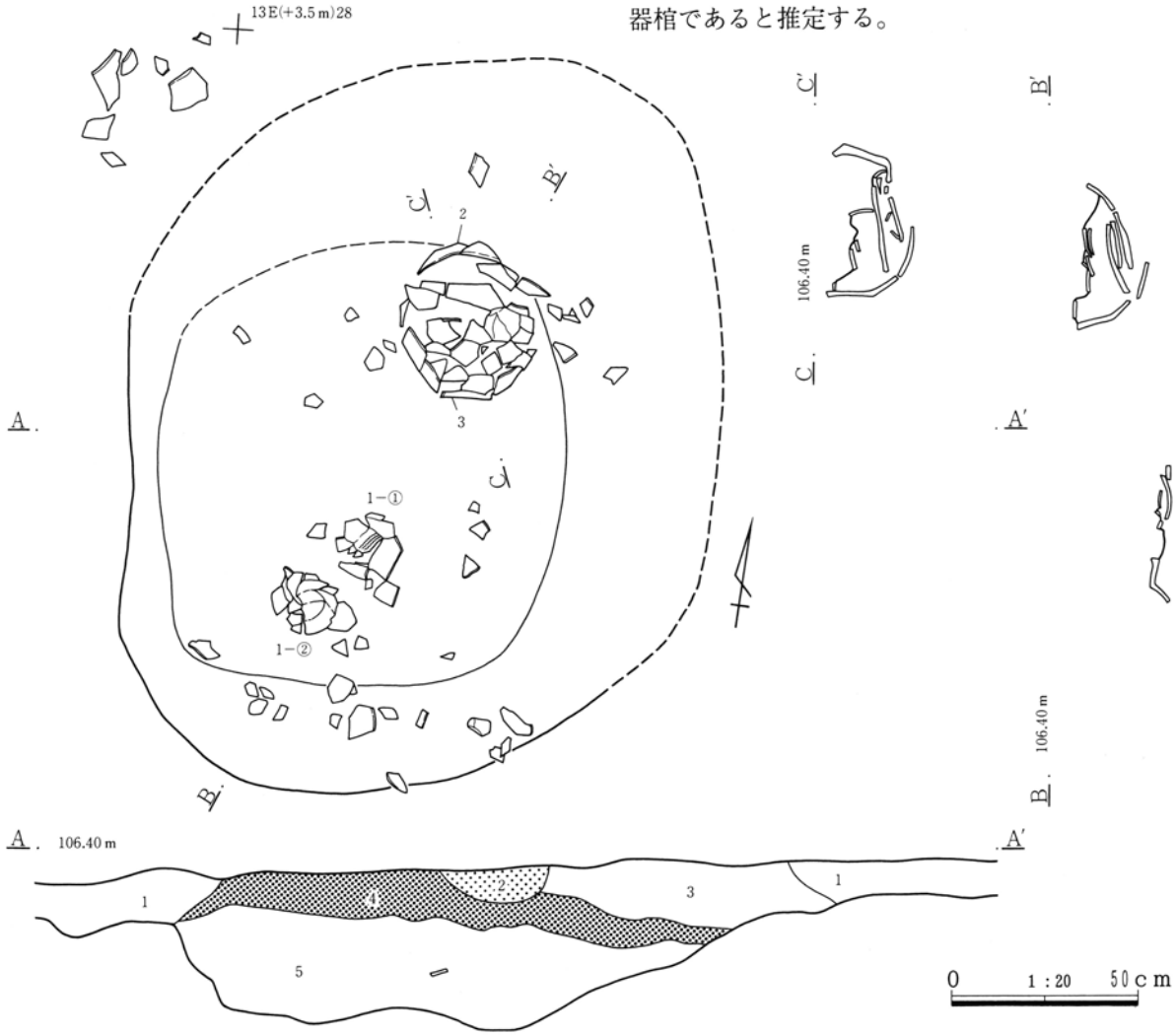
図43　KS0-28号遺構出土遺物

KS1-03号遺構

13E27グリッド　1区北西の調査区壁際に位置する。この遺構には2基の土器棺が重複している。

棺1はAs-C混土中で確認された。棺を埋設する土坑は平面では確認できなかったが、土層断面の観察によるとAs-C混土を多く含む土層を掘り込み、埋没土にもAs-C軽石を多く含んでいる。棺本体は大型の壺の胴部以上を欠いた2個体を合わせたものが横位に設置されている。棺の軸方向は南北を指す。上部は破損し、破片は棺内の下位まで落ち込んでいる。用いられた土器は底径約13cmで、ともに本遺跡出土の土器の中では大型に属する壺である。

棺2はAs-C混土を除去した面で確認された。棺を埋設する土坑は隅丸方形の掘り方を持つ。土坑は南西辺が確認されたが、北東辺は明確な立ち上がりを確認できなかった。土坑の埋没土はAs-Cを含まない黒褐色粘質土である。棺の本体の底部は内面を下にした状態で出土し、口縁部破片は分かれていた。出土した土器は破損が激しく、口縁～頸部と胴～底部を接合できないが、甕1個体を単独で埋設した土器棺であると推定する。



1 黒褐色粘質土(10YR2/3) 粒子やや粗 しまり良 As-C(径3-5mm)をまばらに含む
2 暗褐色粘質土(10YR3/3) 粒子やや粗 しまりやや弱 As-C(径3-5mm)やや多く含む 上位土器の混土(C混土)
3 暗褐色粘質土(10YR3/3) 粒子やや粗 しまり良 As-C(径3-5mm)をまばらに含む
4 黒褐色粘質土(10YR2/3) 粒子やや粗 しまりやや弱 As-C(径3-10mm)を大量に含む
5 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり良 炭化物(径10-20mm)をまばらに含む 下位土器の混土(Cなし)

図44　KS1-03号遺構

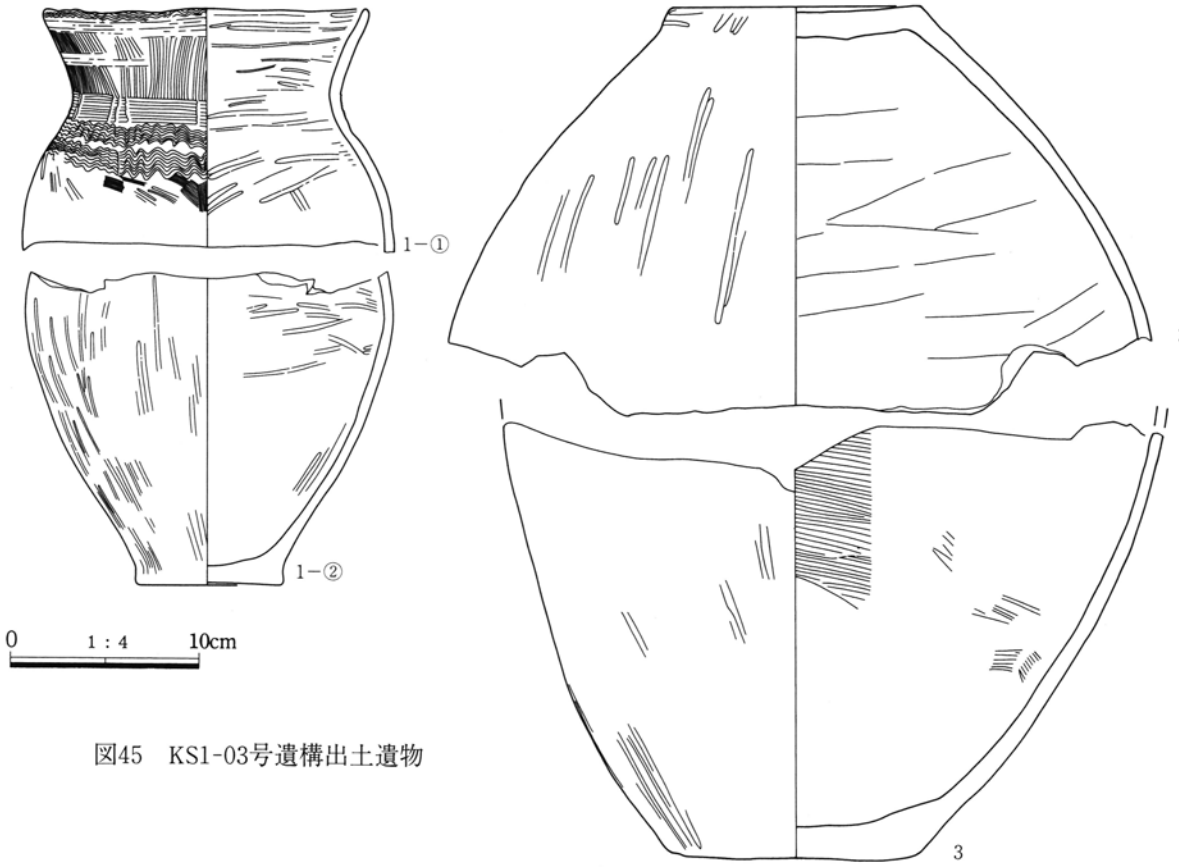
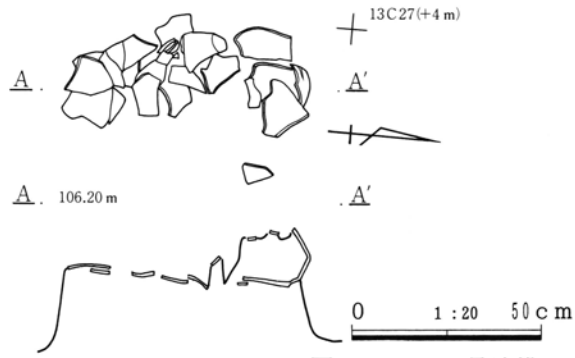


図45　KS1-03号遺構出土遺物

KS1-05号遺構

13C27グリッド　1区の南西、調査区壁際に位置する。As-C混土除去中に確認された。土器はつぶれて破片になっており、埋納時の状態は保存されていなかった。遺物の復元により壺1個体が横位に設置されていたものと推定される。口縁部は南を向く。

棺本体は樽式の壺である。頸部のくびれ、胴部の張りともに弱い、細身の作りである。器高は39.8cm、胴部最大径は22.5cmを計る。器面は風化が進んでいる。



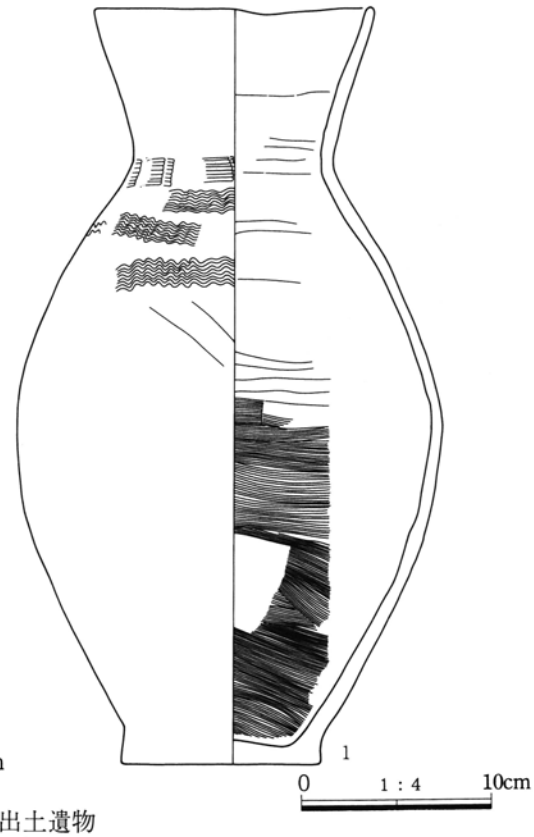


図46　KS1-05号遺構・出土遺物

KS1-24号遺構

13A25グリッド　1区南端に位置する。As-C混土を除去したところ、遺物が皿状に落ち込む部分があった。この遺構は24号遺構上層として土器集中遺構の中で報告する（p.84）。その下を調査したところ、円形の土坑が確認され、14・15号遺構の確認面からの深さ約40cmのところに壺1個体が埋設されていた。壺は底部を欠き、底部破片は土坑内からは発見されなかった。埋設状況は口縁部をやや上向きにする斜位で、口縁部は北方向を向く。

使用されている土器は壺である。器形は口縁から胴部にかけて緩やかなS字のカーブを描き、頸部のくびれは弱い。内外面にハケ整形を施しているが櫛描文はない。残存高は38cm、胴部最大径は28.5cmを計る。土器を埋設する掘り方が深いこと、底部を欠き、それを補う破片がないこと、無文の壺を使用していることなど、本遺跡内で確認されている単体の土器を使用する土器棺墓とは共通しない要素が多い。遺構の状況から14・15号遺構形成以前、使用されている土器の所見から土器棺墓群の中でも早い時期に作られたものであると考えられる。

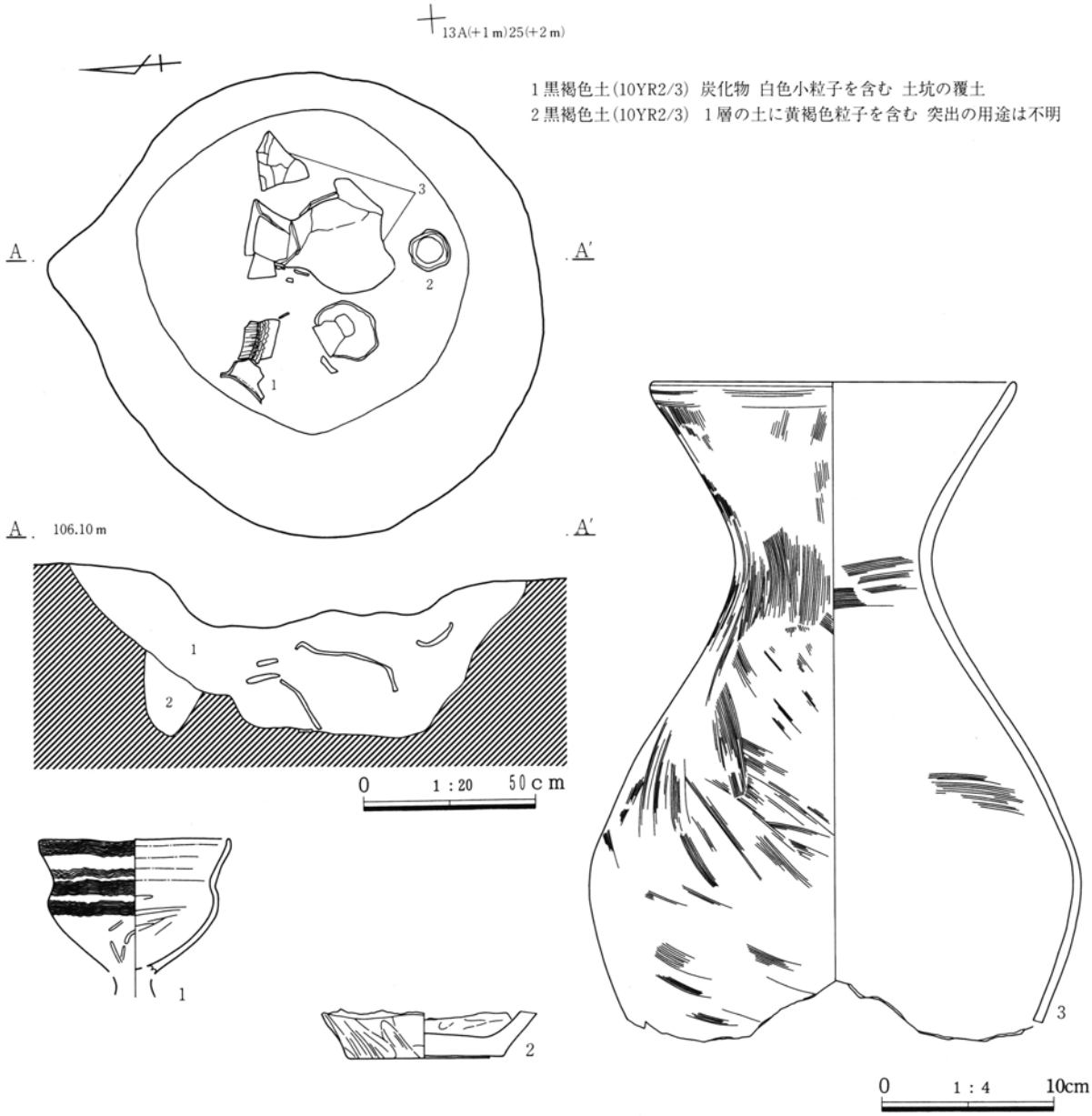


図47　KS1-24号遺構・出土遺物

KS1-27号遺構

13K28グリッド　1区の北西、07号遺構の東に位置する。棺の周辺には14・15号遺構の土器片は分布していなかった。南と東に土器破片がまとまって出土した39・45号遺構が隣接する。As-C軽石混土層を除去したところで棺の上部が確認された。棺を埋設した土坑は確認できなかった。土層断面で黒褐色粘質土で埋没する土坑の掘り方を確認した。西側には07号遺構の柱穴群があり、土坑の一部は07号遺構と切りあっている。棺の本体は口縁部を北東に向けて斜位で出土した。甕1個体を棺とし、口縁部に甕の破片を合わせて蓋としている。上部は破損し、破片は棺内の中位に落ち込んでいる。この破片より上位にはAs-Cを含む暗褐色土が堆積している。使用されている土器は本体、蓋ともに樽式の甕である。本体の器高は34㎝、胴部最大径は21.9㎝である。蓋には文様のある部分を含まない。

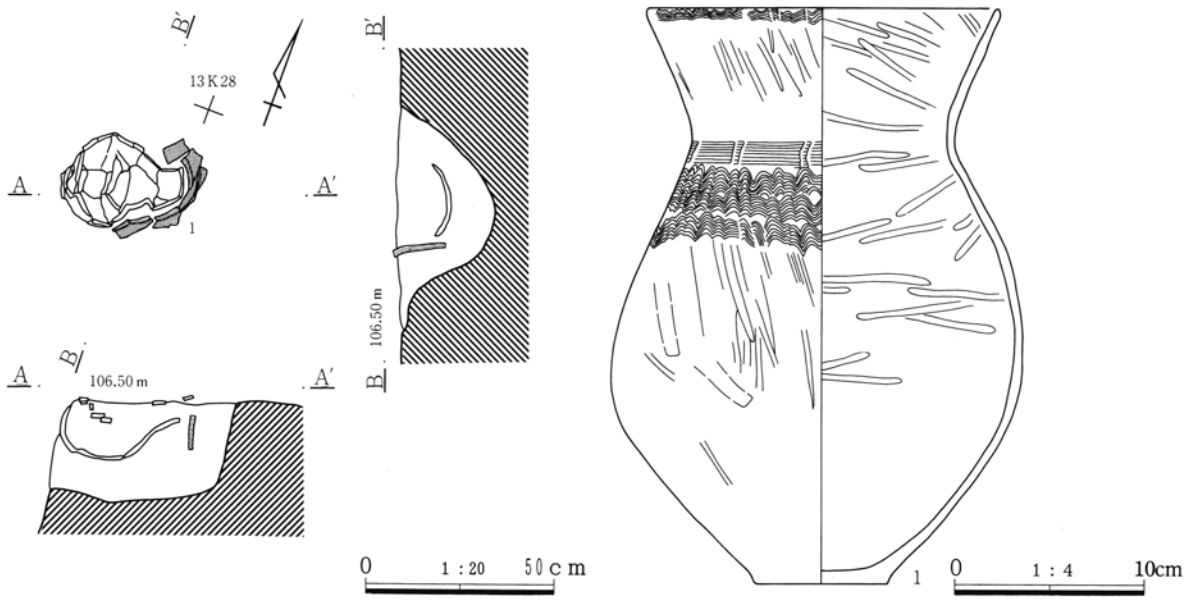


図48　KS1-27号遺構・出土遺物

KS1-28号遺構

13D26グリッド　1区やや北西寄りに位置する。単独で所在し、重複する遺構はない。棺は07号遺構と14・15号遺構の間の土器分布の空白帯に位置し、周囲に破片は出土していない。As-C混土を除去した面で棺の上部が確認された。棺の北側にはAs-C混土が認められたが、南側にはほとんど認められなかった。平面では棺を埋設した土坑の形状は確認できなかったが、土層断面で棺の設置時に大きさに合わせて掘ったと思われる掘り方が確認される。土坑の埋土はAs-C軽石を含まない黒褐色土である。

棺は頸部以上を欠いた壺を本体とし、別個体の壺の胴部以下を蓋としている。蓋に使用した土器の口縁～胴部破片を使用し、枕が設置されている。

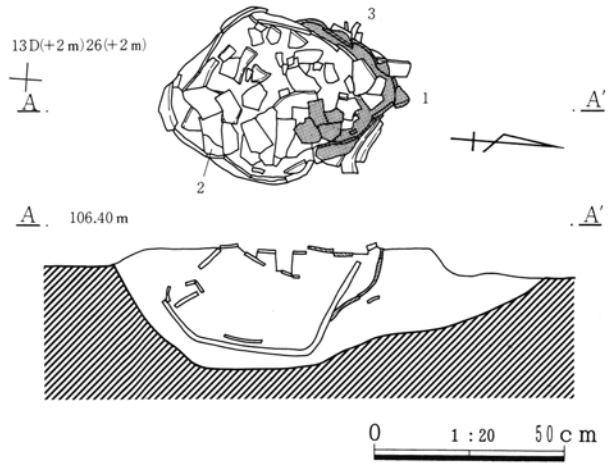


図49　KS1-28号遺構

棺本体は胴張りの大型壺１個体の頸部以上を欠き棺としたものである。口縁部は真北を向く。上部は破損しているが、破片は棺を埋める埋土の中位に確認され、底には落ち込んでいない。本体の残存高は59.6㎝、最大径は45.8㎝、頸部の復元径は11.9㎝である。

蓋は別個体の壺の胴部以下を棺本体の上に重ねて設置している。枕は壺の口縁～胴部破片を湾曲を外側にして棺本体の頸部を支えるように配置している。この蓋と枕は同一個体を利用している。一部で接合し完形に近くなるが、土器棺としての出土状態を重視して実測図を掲載した。

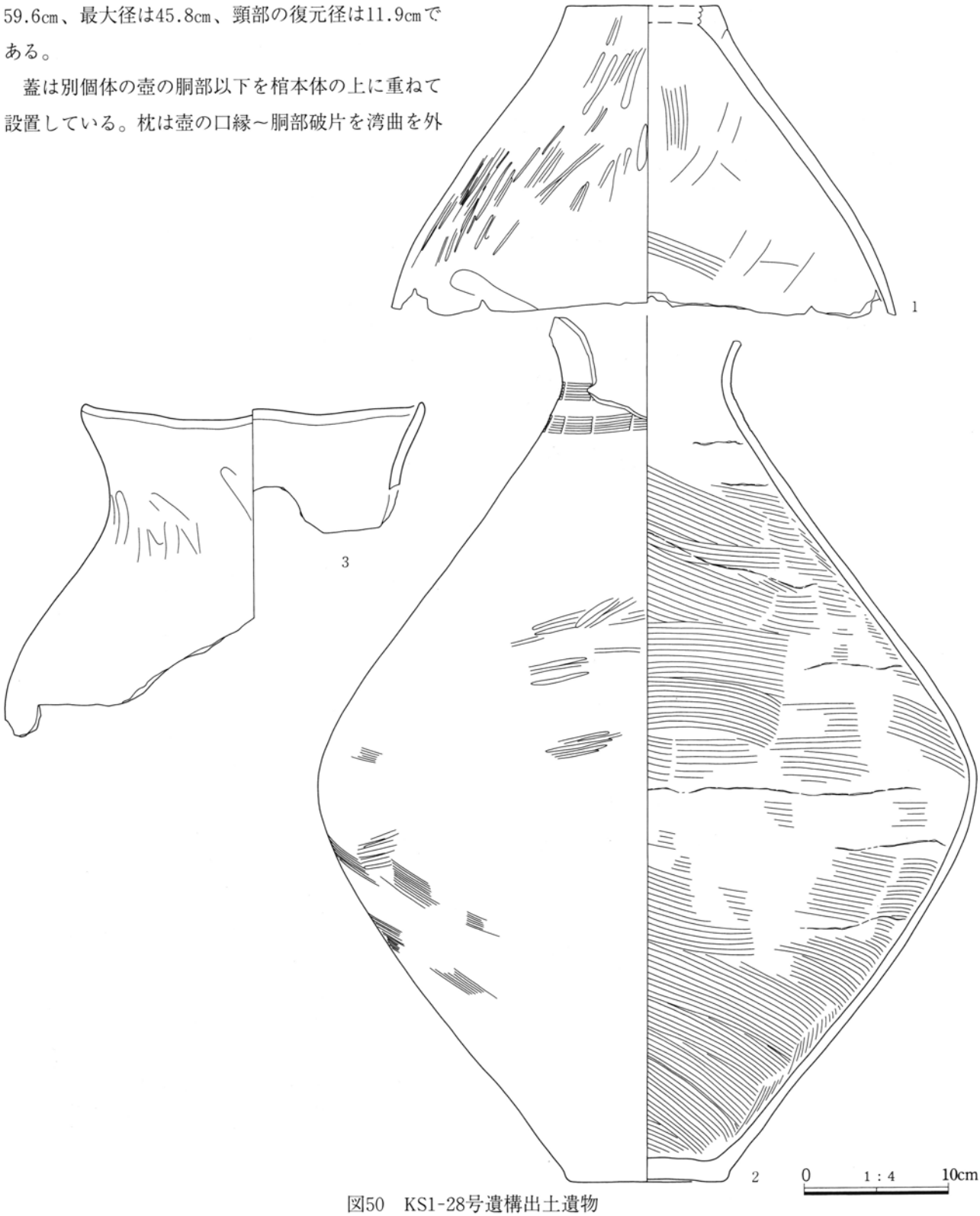


図50　KS1-28号遺構出土遺物

KS1-33号遺構

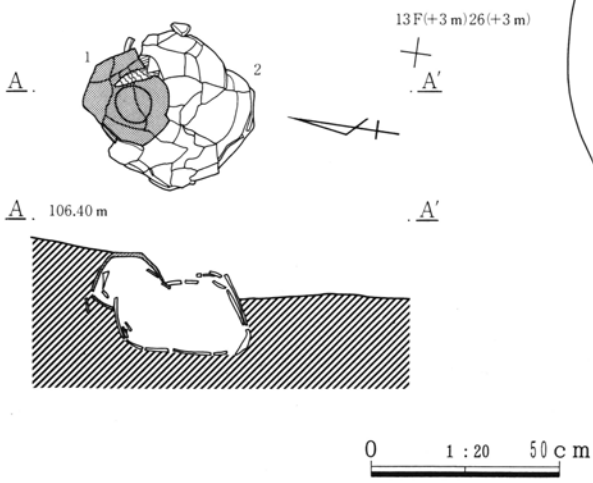
13F26グリッド　1区のほぼ中央に位置する。北に34号遺構、東に52号遺構が隣接し、蓋のある土器棺が密集する区域を形成している。重複する遺構はない。

As-C混土を除去した面で確認された。棺を埋設する土坑の埋没状況は確認できなかった。

棺は壺1個体の頸部以下を棺とし、別個体の胴部以下を蓋としたものである。

棺本体は頸部以上を欠いた壺を斜位に設置している。口縁部方向はほぼ真北を向く。上部の破片がわずかに棺内に落ち込むが、棺本体の破損は少ない。使用されているのは肩部に波状文と鋸歯文を持つ樽式土器であり、残存高43.3㎝、最大径37㎝である。肩部にクモの巣状の亀裂が入り、土器は胴部を中心にゆがみが大きい。圧力または打撃が加えられた可能性が考えられる。蓋として棺本体の上に設置された土器は甕の胴部下半である。本体上部の落ち込みに伴い南に傾いている。

棺内の埋土は周辺の覆土と判別できない黒色粘質土で、棺内の土からは骨、副葬品等は確認されなかった。



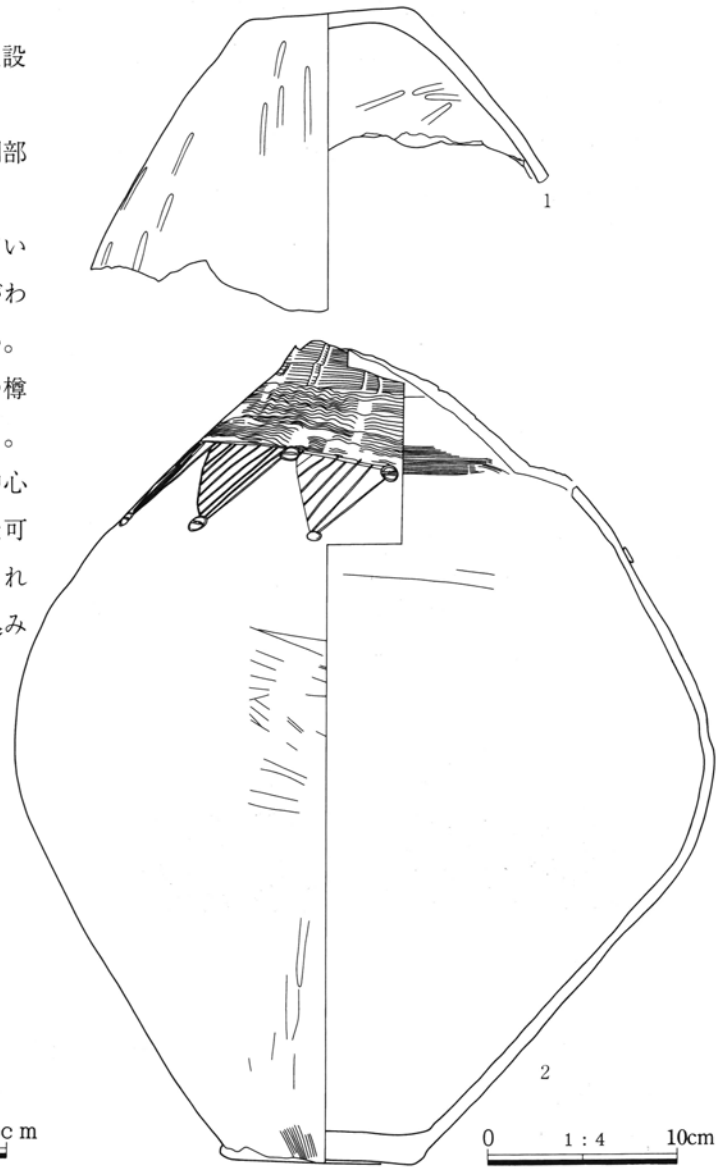


図51　KS1-33号遺構・出土遺物

KS1-34号遺構

13G26グリッド　33号遺構の北に位置する。蓋を持つ土器棺が集まった区域の中央に位置する。

33号遺構と同様に、周辺には14・15号遺構とした樽式土器の散布が薄く分布する。14・15号遺構の範囲を確認しながらAs-C混土を除去したところ、棺本体の胴部までが埋まった土器棺を確認した。出土状態から埋納時の設置状態は良好に保存されていると考えられる。

棺は壺1個体の頸部以下を棺とし、別個体の胴部以下を蓋としたものである。

棺本体は胴下半の最大径以下を水平にして斜位に設置している。口縁部方向はほぼ真北を指している。棺本体は頸部に等間隔止め簾状文を持つ樽式の

壺であり、頸部以上を欠いている。これを上部がわずかに落ち込むが、破損は少ない。壺の残存高は36.5㎝、胴部最大径は32.9㎝、残存する頸部の最小径は約12㎝である。蓋として棺本体の口部の壺に被せて設置された土器は樽式の壺の肩部以下である。残存高は22㎝、胴部最大径は23.7㎝と棺本体よりやや小ぶりのものを用いている。

棺内の埋土は周辺の覆土と判別できない黒色粘質土で、棺内の土からは骨、副葬品等は確認されなかった。

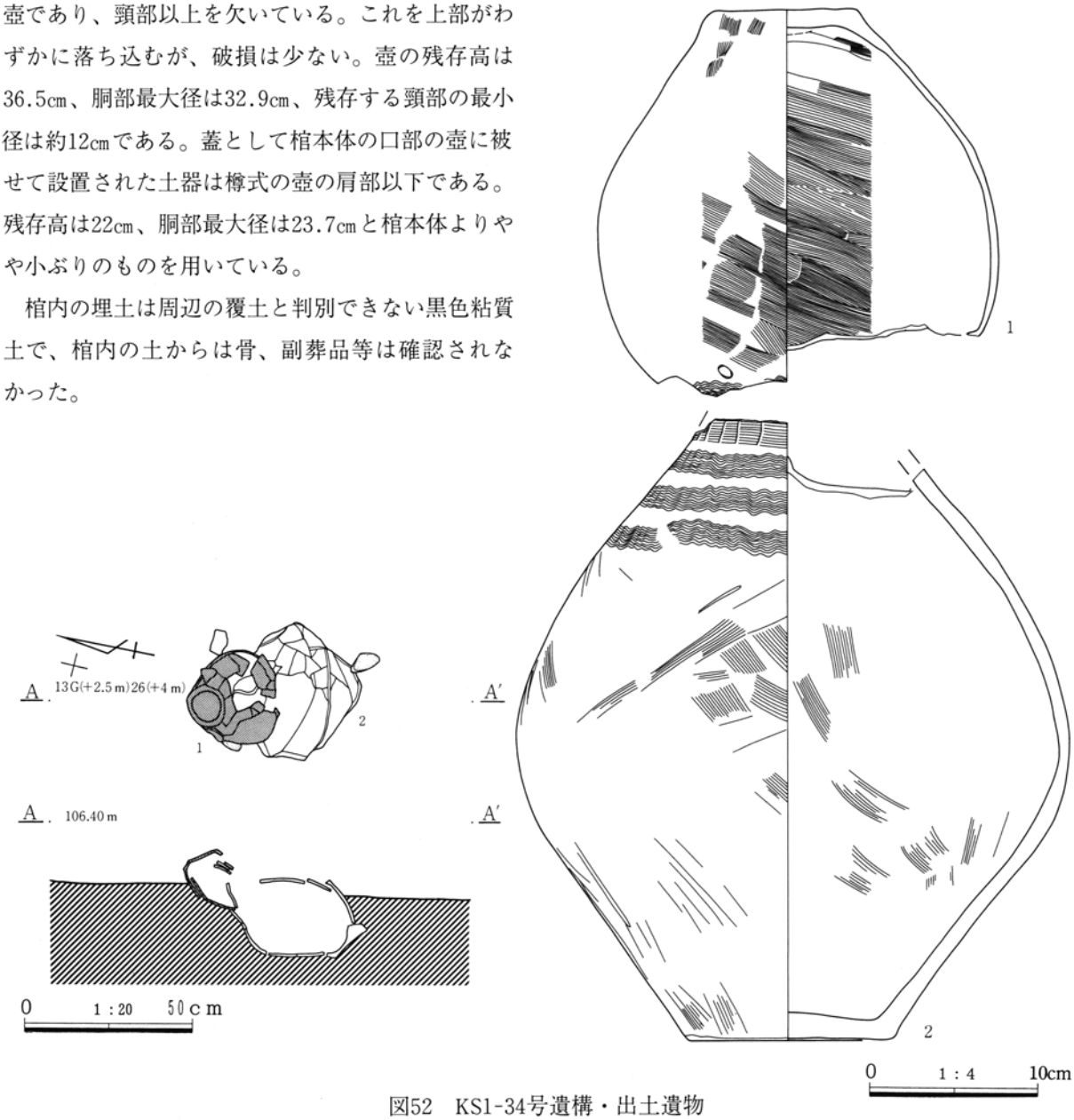


図52　KS1-34号遺構・出土遺物

KS1-35号遺構

13H27グリッド　1区のほぼ中央に位置する。40号遺構の西南、蓋を持つ土器棺が集まった区域の北にある。As-C混土除去中に確認された。重複する遺構はないが、周辺には14・15号遺構の土器が薄く分布する。棺を埋設する土坑は隅丸方形に近い不整形で、上層にAs-Cを含む砂質土、下層にやや粘りのある黒褐色土が堆積している。下層は炭化物粒子を少量含み、一部に焼土が認められた。棺の確認された高さは隣接する36・40号遺構よりも約10㎝高い位置である。

棺本体は頸部以上を打ち欠いた壺1個体を口縁方向を下にして斜位に設置している。口縁の向きはほぼ真北に当たる。壺の胴部は破損していたが、その破片が壺内に落ち込んでいることから埋納時、中は空だった可能性がある。使用されているのは頸部にT字文、肩部に櫛描波状文を持つ樽式土器式の壺である。残存高は50.45㎝、頸部の最小径は12㎝である。棺本体の胴部の下には肩部に櫛描波状文と刺突で充填する鋸歯文を持つ甕の破片が敷かれている。この甕の破片は棺本体の東側にも出土している。

棺内からは骨や副葬品は出土していない。

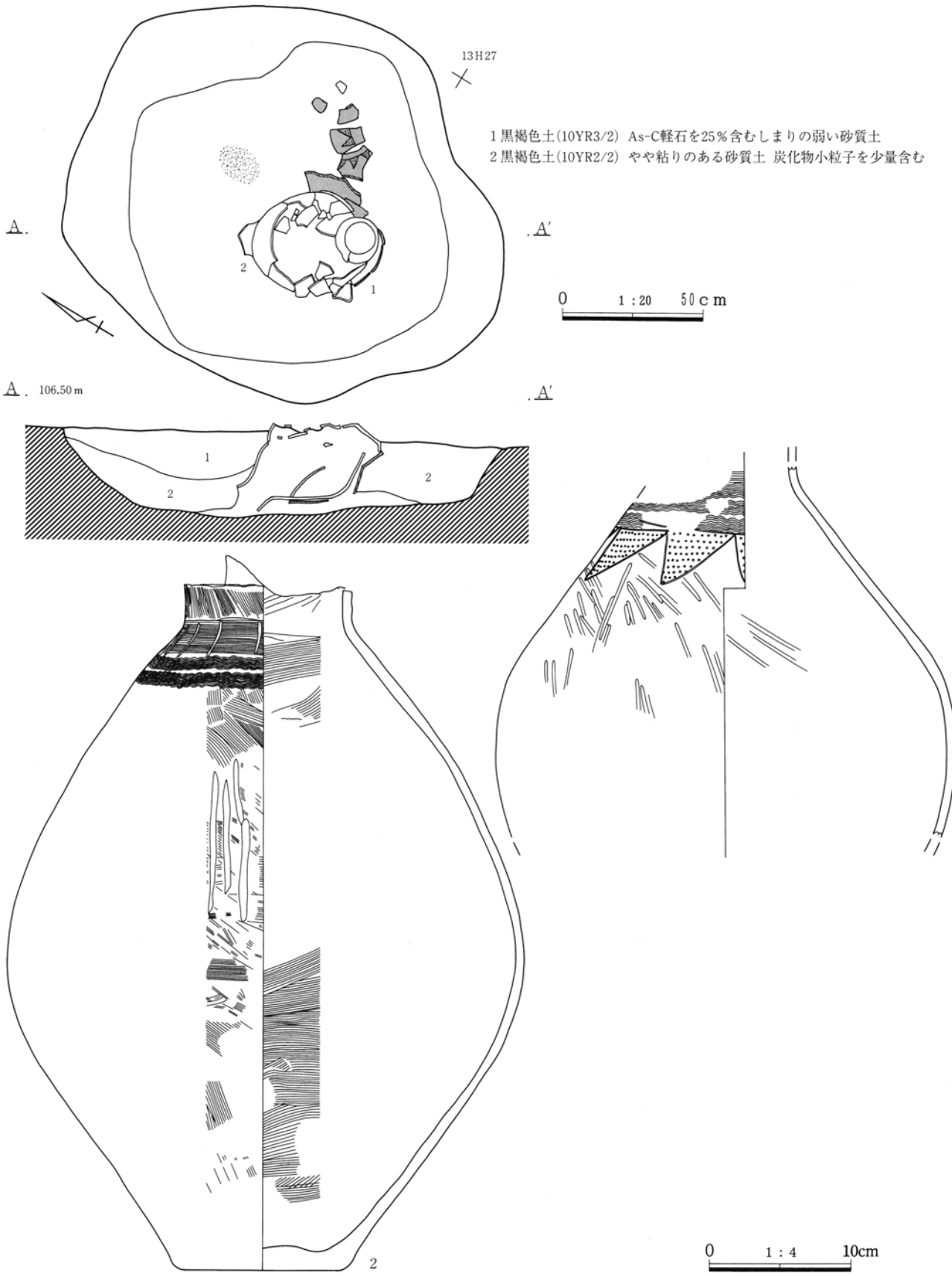
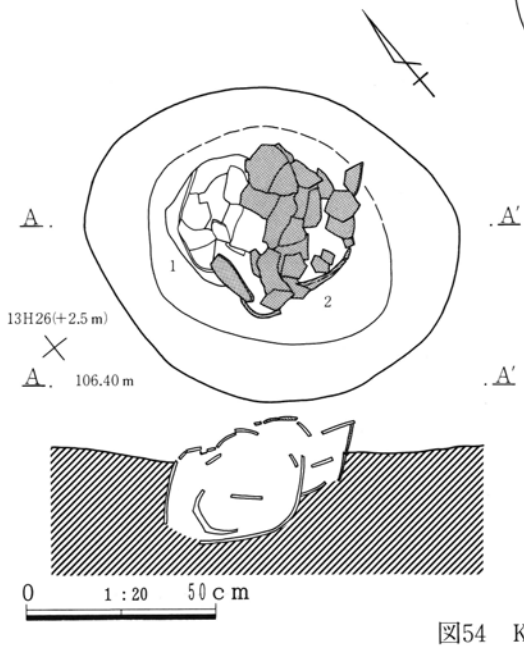


図53　KS1-35号遺構・出土遺物

KS1-36号遺構

13G26グリッド　1区のほぼ中央、蓋を持つ土器棺が密集した地域の東に位置する。As-C混土を除去した面で確認された。重複する遺構はない。棺を埋設する土坑の埋没状況は確認できなかった。棺本体は、蓋、棺本体、底となる壺3個体を組み合わせた棺を、胴下半を水平にした斜位に設置する。口縁部は北西を向く。上部は破損して破片になっており、数片が棺の中位にまで落ち込んでいる。棺本体は肩部に波状文を持つ樽式の壺で、肩部から胴部最下部までを用いている。底部は成型時の接合面から剝離している。残存高は37.7㎝、胴部最大径は34.7㎝である。蓋は、樽式の壺の胴部から底部直上までを使用したものである。口部の割れ口は平らに調整している。底部の破損は故意の打ち欠きと考えられる。残存高は36.8㎝、胴部最大径は38.5㎝と、3個体の中では最大である。底は、小型の壺の底部で、2の壺の内部から出土した。棺本体の底部の破損を別個体の土器で補ったものと考えられる。



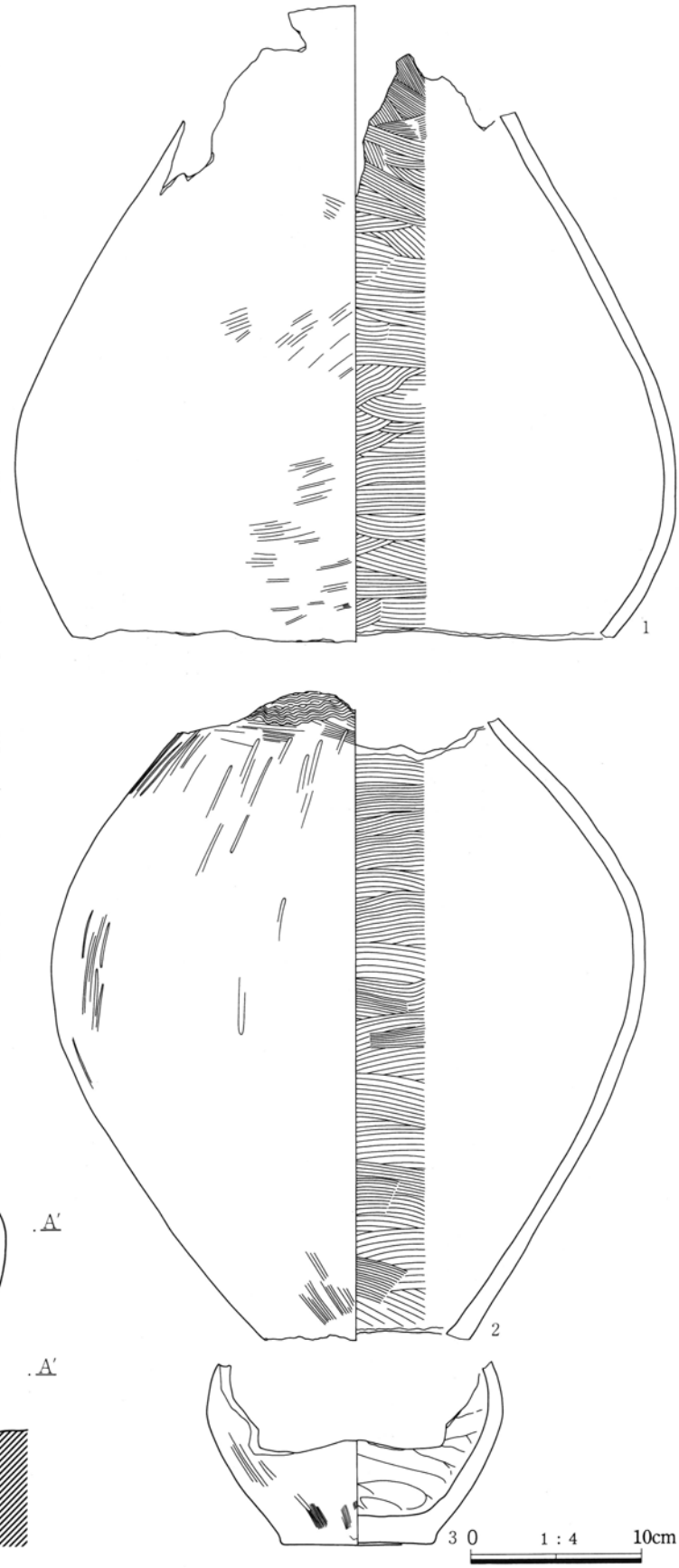
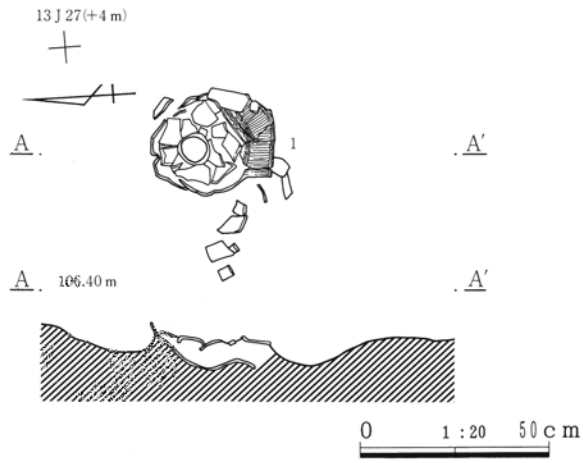


図54　KS1-36号遺構・出土遺物

KS1-37号遺構

13I27グリッド　1区の北西に位置する。As-C混土を除去した面で確認された。重複する遺構はない。北には樽式土器の破片がまとまって出土した39号遺構と蓋を持つ土器棺である38号遺構が隣接する。棺の周辺には14・15号遺構の土器片が薄く分布している。棺を埋設した掘り方は確認できなかった。

棺本体は小型の甕完形1個体を横位ないしは口縁をやや下向きに設置する。口縁部は真南を向く。



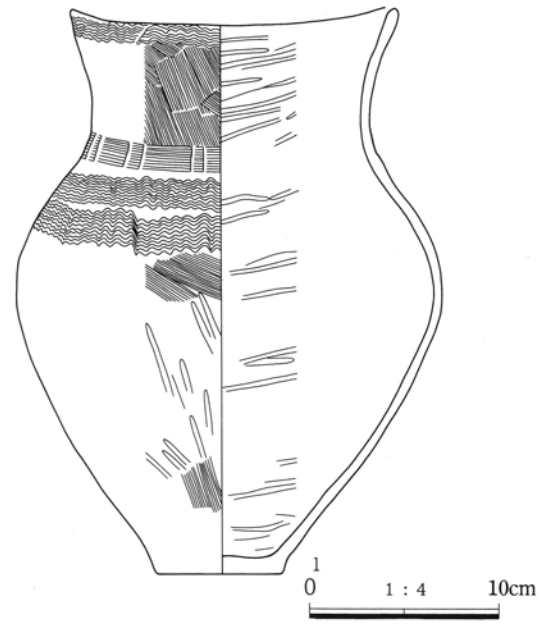


図55　KS1-37号遺構・出土遺物

蓋にしたと思われる破片は周囲から出土していない。甕の上部はつぶれて中位まで落ち込み、底部は胴部破片の上から内面を下にして出土している。使用されている土器は器高29.8cmの樽式の甕である。

棺内の埋土は周辺の覆土と同様の暗褐色土であり、棺内から骨や副葬品は発見されなかった。

KS1-38号遺構

13J27グリッド　1区北西に位置する。北には樽式の土器破片がまとまって出土した39号遺構が隣接し、周辺には14・15号遺構の土器破片が散る。棺はAs-C混土を除去した面で確認された。平面、断面ともに棺を埋設する土坑の状況は確認できなかった。周辺からは炭化物粒が少量出土している。

棺は口縁部を欠いた壺を本体とし、甕の肩部以上を蓋として組み合わせたものである。

棺本体は横位に設置している。口縁は東を向く。胴の上部は攪乱を受け失われている。使用されている土器は樽式の壺である。打ち欠かれているのは口縁部のみであり、本遺跡内の土器棺では頸部が最も長く残されていた。残存高は49.2cm、胴部最大径は35.9cmを計る。表面の摩滅が激しく、胴部は輪積み痕から剝離していた。

蓋は棺本体の頸部以上を覆うように設置されている。使用されているのは波状文を持つ樽式の甕の肩部以下である。残存高は22.9cm、胴部最大径は22.8cmを計る。

棺の内部を埋める土は周辺と同様の暗褐色土であり、副葬品や骨も出土していない。

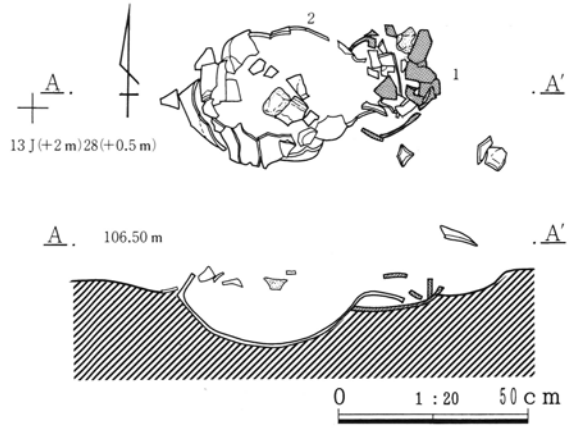


図56　KS1-38号遺構

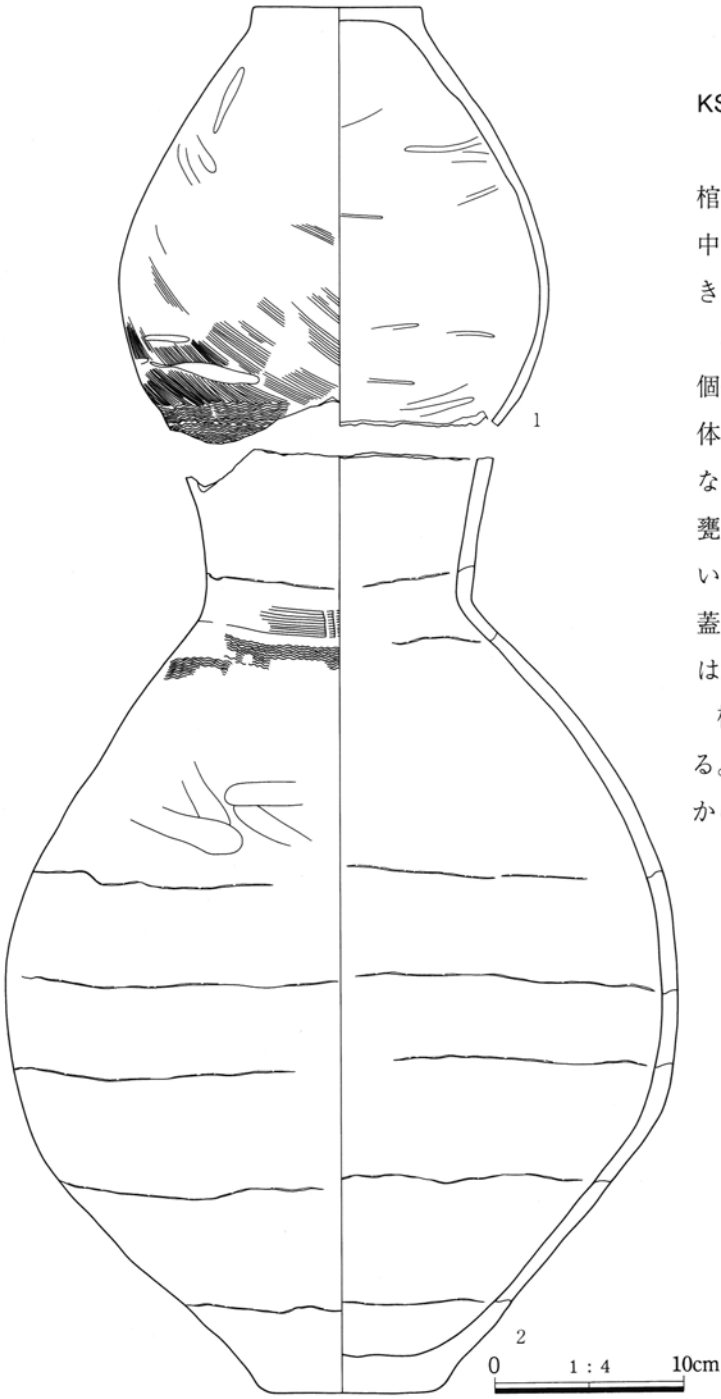


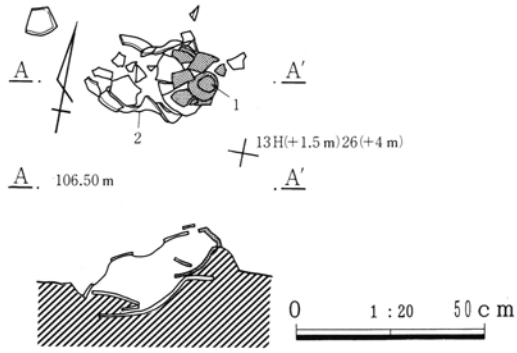
図57　KS1-38号遺構出土遺物

KS1-40号遺構

13H26グリッド　1区のほぼ中央で蓋を持つ土器棺の集中する区域の北に位置する。As-C混土除去中に確認された。棺を埋設した土坑の状況は確認できなかった。設置状態の保存は良好である。

棺は甕を本体とし、別個体の甕の口縁部を欠いた個体を蓋としたもので、斜位に設置されている。本体の口縁部の内側に蓋が入る唯一の組み合わせになっている。口縁部は西を向く。棺の本体は樽式の甕の口縁から胴部の最下部である。底部は破損している。残存高は29.4㎝、胴部最大径は21.8㎝である。蓋は樽式の甕の頸部以下を利用したもので、残存高は20.4㎝、胴部最大径は16.4㎝である。

棺の内部を埋める土は周辺と同様の暗褐色土である。出土時には棺内は埋土で充填されていた。棺内からは骨や副葬品は出土していない。



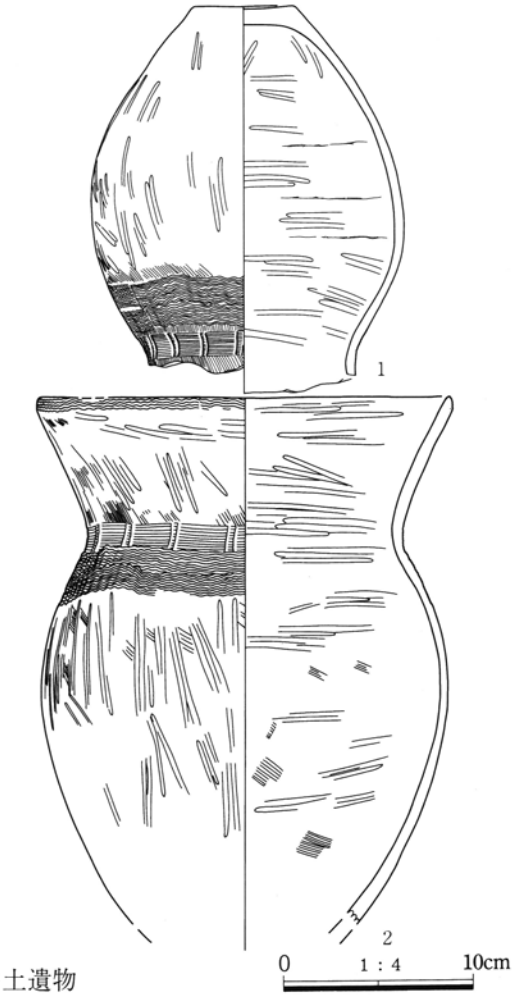


図58　KS1-40号遺構・出土遺物

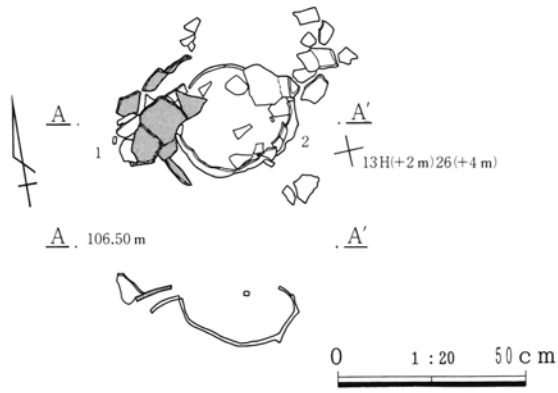
KS1-41号遺構

13H26グリッド　1区のほぼ中央に位置する。40号遺構に隣設する。As-C混土を除去中に確認された。棺を埋設する土坑の埋没状況は確認できなかった。

棺本体は甕1個体を斜位に設置したものである。口縁部は西を向く。胴部の上面は破損しているが、口縁部だけはつぶれてやや下方に落ち込んだ状態で確認された。

使用されている土器は樽式の甕で口縁部と胴部の波状文下に貼付文を持つ。頸部のくの字のくびれが強く、胴部は丸く張る。

棺の内部を埋める土は周囲と同様の暗褐色土であり、棺内からは骨や副葬品は出土していない。



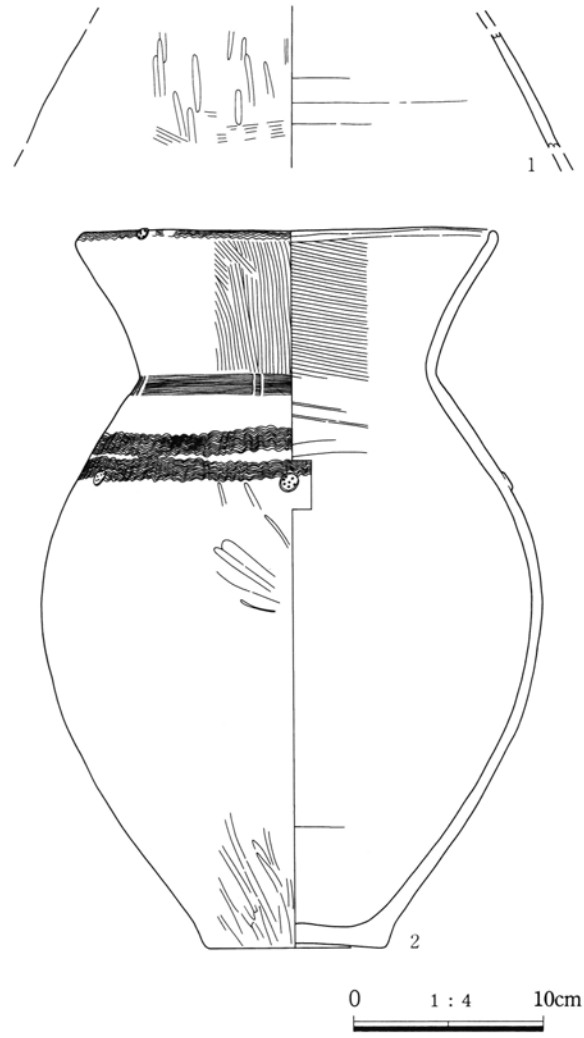


図59　KS1-41号遺構・出土遺物

KS1-42号遺構

13J26グリッド　1区の北西に位置する。重複する遺構はない。遺構の周囲には14・15号遺構の土器破片が薄く分布している。As-C混土除去中に胴部上面が確認された。棺を埋設する土坑は北を長軸とする不整の楕円形である。埋土は周囲とほとんど変わらない暗褐色土であるが、粒子の乱れと土の締まりにより土坑を検出した。

棺本体は甕1個体を横位に設置したものである。口縁は南西を向く。使用されている土器は樽式の小型甕で、ほぼ完形で出土した。器高は23.6cmを計る。頸部の簾状文を挟んで口縁部から胴部まで連続して波状文が施文されており、口縁部と波状文最下部には貼付文が付く。

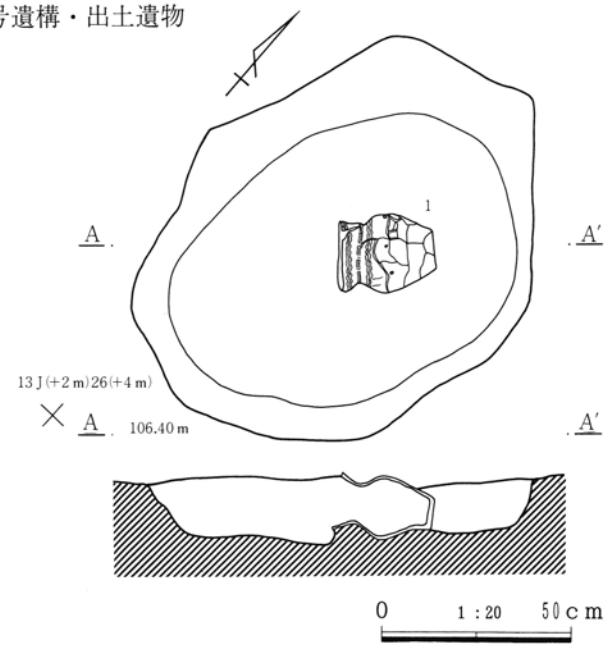


図60　KS1-42号遺構

出土時、棺内は土で充填され、甕の形状を良く保っていた。棺を充填する土は土坑の埋土とほぼ同じである。棺内からは骨や副葬品は出土していない。

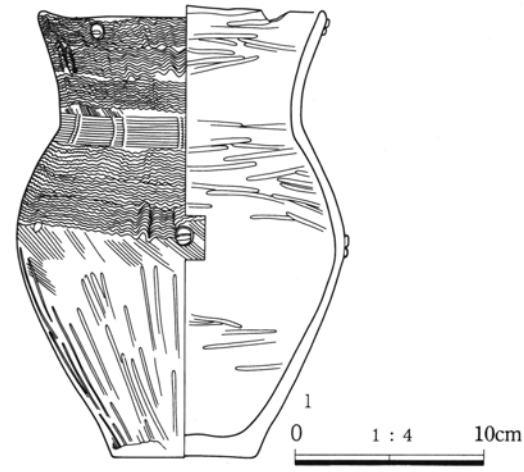


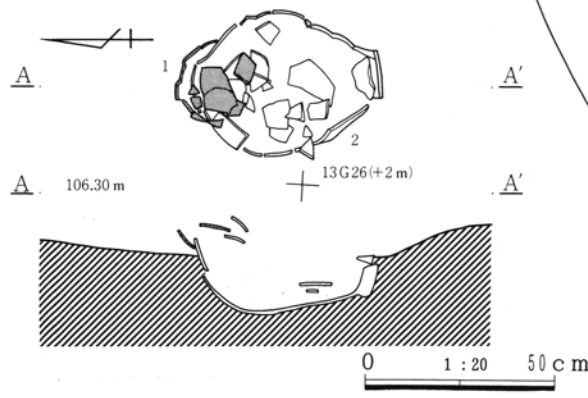
図61　KS1-42号遺構出土遺物

KS1-52号遺構

13G25グリッド　1区のほぼ中央に位置する。蓋を持つ土器棺墓が集中する地域の南に位置する。重複する遺構はない。周囲には土器集中地域の土器片が薄く分布している。棺はAs-C混土除去中に確認された。上の部分は破損し、破片は一部が棺内の中位に落ち込んでいるが、多くは失われている。棺の底部はAs-C軽石を含まない黒色土中に約40㎝埋没していたが、棺を埋設する土坑の形状は不明である。

棺は大型の壺を本体とし、別個体の壺の破片を蓋として横位に設置したものである。口縁方向は真北を向く。棺本体は樽式の壺で、頸部以上を欠く。残存高は48.1㎝を計る。蓋は樽式の壺の肩部から胴部である。口縁部と胴部以下を欠き、筒状になったものを本体の肩部に重ねて設置している。文様を含む部分はない。

棺の埋土は、周囲と同じ暗褐色土である。棺内からは骨や副葬品は出土していない。



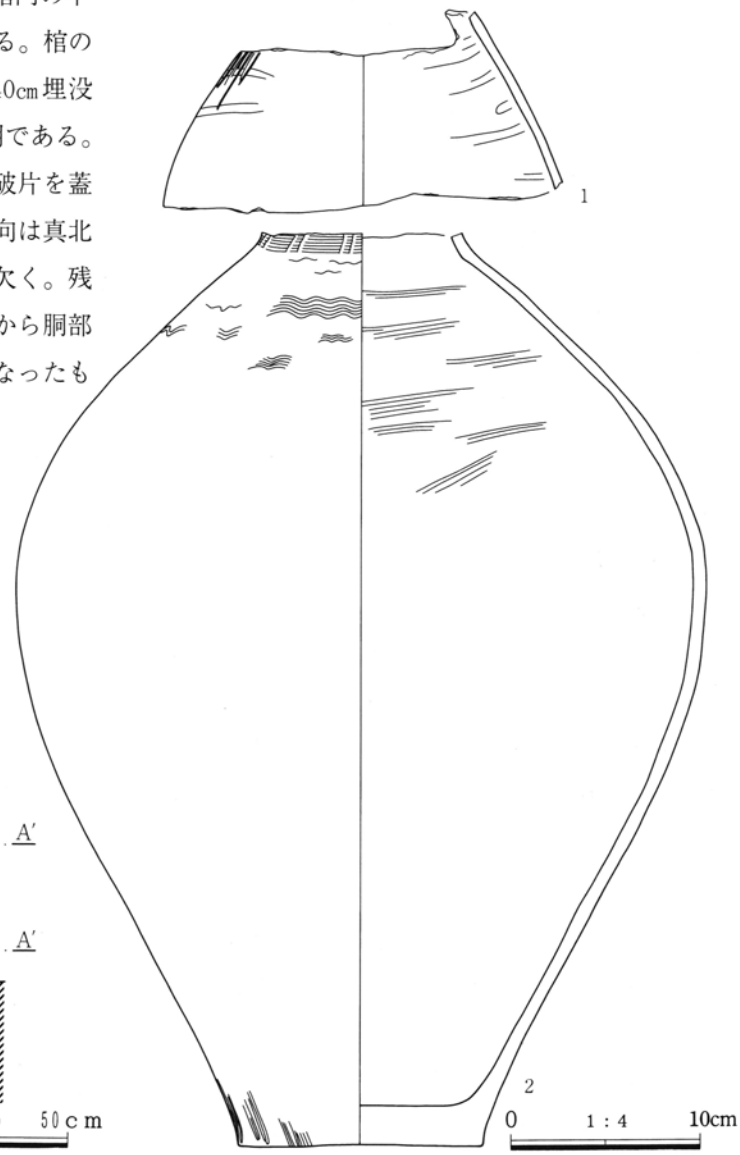
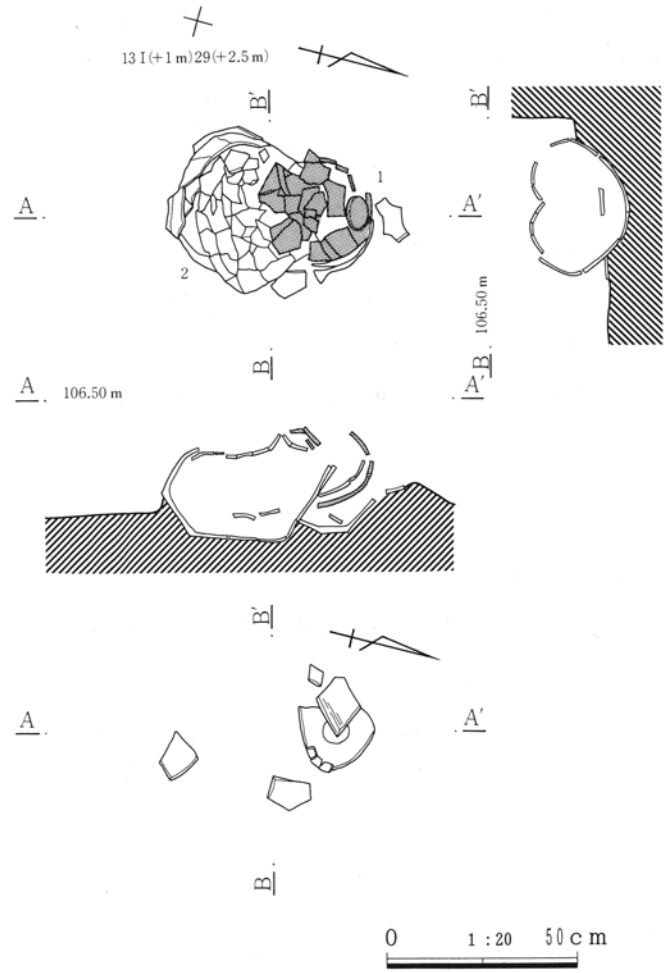


図62　KS1-52号遺構・出土遺物

KS1-54号遺構

13I29グリッド　1区北西の調査区壁際に位置する。重複する遺構はない。周辺は覆土が薄く、As-C混土層は攪乱により確認できなかった。現代の畠の耕作土の下はAs-Cを含まない暗褐色土である。本遺構はこの暗褐色土中から確認された。棺を埋設する土坑の状況は確認できなかった。

棺は壺を本体とし、甕の胴部以下を蓋として斜位に設置したものである。本体の頸部の下には別個体の甕破片が枕として設置されている。本体の口縁部方向は北西を向く。



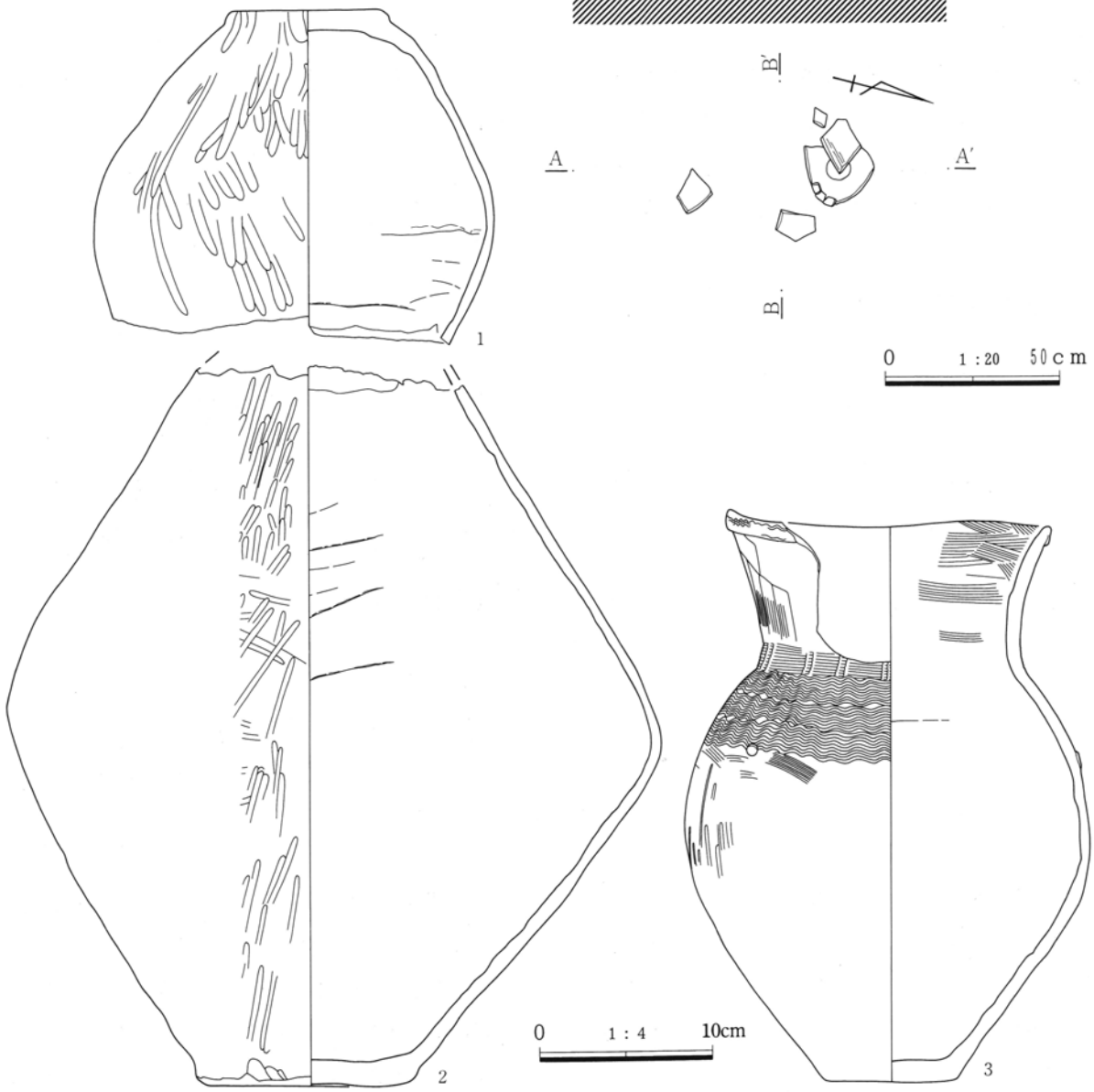


図63　KS1-54号遺構・出土遺物

棺身に使用されている土器は樽式の壺である。肩部以上を欠き、文様を含む部分はない。上部は割れてわずかに下方に落ち込むが、破片は遺存している。残存高は41.4㎝。胴部はそろばん玉状に張り、最大径37.6㎝を計る。

蓋は本体の開口部に被せて設置されている。使用されている土器は樽式の甕である。肩部以上を欠く。文様を含む部分はない。

枕に使用されているのは樽式の甕で、復元して1個体になったが、甕は胴部以上と以下とに割られている。胴部以下は正位に設置し棺身の頸部を支える枕として使用されている。胴部以上の破片は本体と枕の間に挟み込まれ、棺身の固定に使用されている。

棺の埋土は周囲の土と同じ暗褐色土である。棺内からは骨や副葬品は確認されなかった。

KS2-94号遺構

12M25グリッド　2区の北西、調査区壁際に位置する。周囲はローム上面までの現代の攪乱を受けており、As-C混土層は確認できない。現代の土を除去していったところ、部分的に遺構が残る部分があった。

本遺構は壺の胴部の破片が単独で出土したものである。斜位または横位に設置したものと考えられる。下部に相当する破片のみが出土しており上部の破片は失われている。使用された土器は、樽式に属する壺と考えられるが文様を含む部分は確認されていない。本遺跡内に数多く確認されている土器棺墓と同様に甕を埋設したものと推定する。

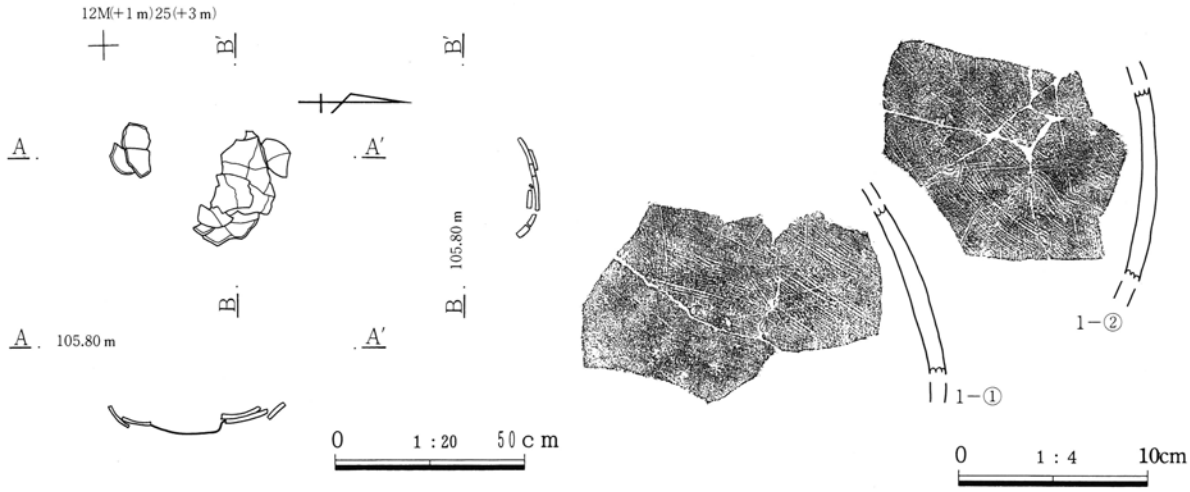


図64　KS2-94号遺構・出土遺物

KS2-102号遺構

12Q23グリッド　2区の北西に位置する。攪乱が激しく、棺本体の上部は失われている。上半分を100号遺構（弥生時代住居）に切られ、小型台付甕を出土するピットの上に位置している。

棺を埋設した土坑は平面では捉えられないが、100号遺構の土層断面でAs-Cを含まない黒褐色粘質土を掘り込む黒色土の土坑として確認されている。

棺の本体は壺の底部が単体で設置されたものである。底面は水平となっており、立位またはやや南向きの斜位に設置されたものと考えられる。使用された土器は樽式の壺である。胴部の最大径より下のみ

の残存であるため全体の大きさは不明だが、底径から推定すると大型に属する。

棺内及びその周辺には骨や副葬品の出土は確認されていない。

棺本体の南側には長径約30㎝の川原石が出土しているが、本遺構との関係は不明である。

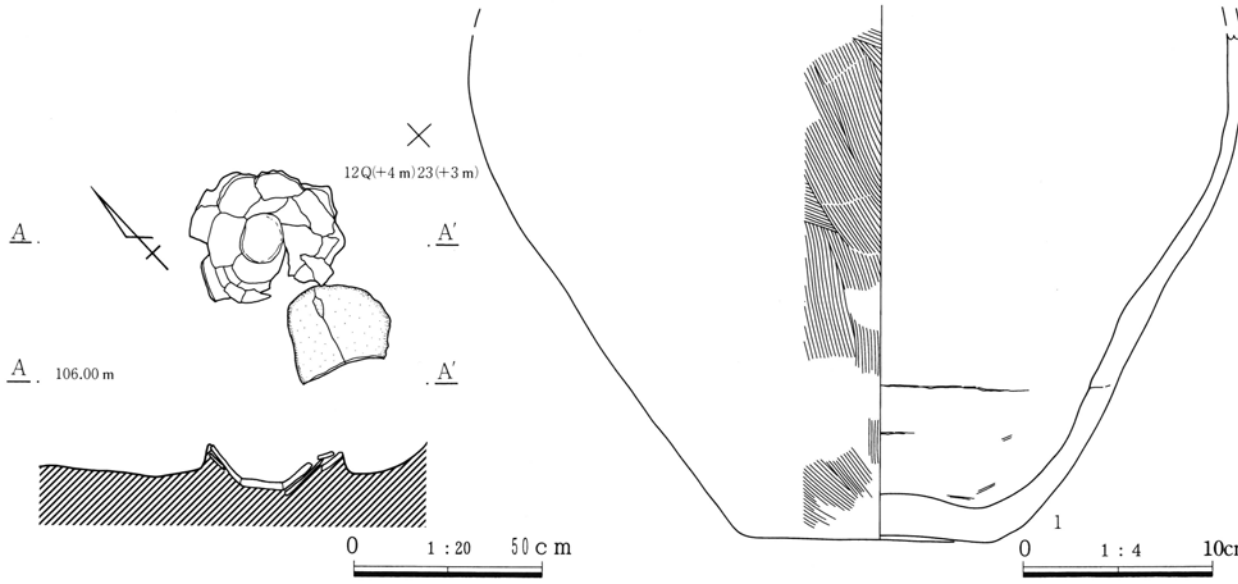


図65　KS2-102号遺構・出土遺物

KS2-103号遺構

12Q24グリッド　2区の北西に位置する。東には100号遺構（弥生時代住居）・102号遺構（弥生時代土器棺）がある。

棺を埋設した土坑は確認できなかった。棺本体は小型の甕を斜位に設置したものである。口縁部は北西方向を向く。上部の破片がわずかに落ち込むが、破片は失われていない。使用されている土器は樽式の小型甕である。器高は15.9㎝を計る。

棺内からは骨や副葬品は出土していない。

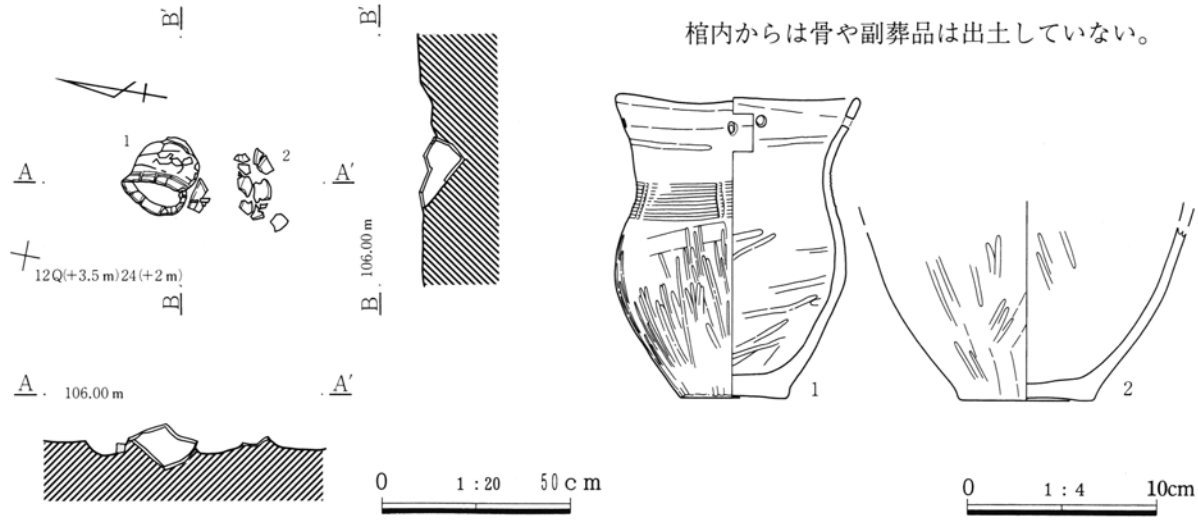


図66　KS2-103号遺構・出土遺物

（3）　濠

この遺構は小八木志志貝戸遺跡０区から１区にかけて検出された濠である。遺構の名称は各調査区で独立して通し番号をつけることを基本的な方針としたため、１区では07号遺構、０区では09号遺構と命名したが、同一の遺構であることから本文中ではKS1-07号遺構の名称を用いることとする。

遺構の概要　本遺構は調査区を北東から南西に向けて蛇行しながら斜めに横切っている比較的規模の大きな濠である。調査区内の確認長は約110ｍある。北東から南西方向にわずかに下る。

確認面からの深さは深いところで約90㎝あり、断面形は逆台形状である。また、土層断面の記録から、溝の東側にわずかな盛り上がりが見られ、土塁状の構造が付随したものと考えられる。１区の北寄りに柱穴群があり、ここに橋のような施設が作られていたと推定される。

遺構はAs-C混土層下で確認され、覆土中の中位にAs-C層がある。溝の底面近くで樽式土器の壺・甕・高坏などが出土している。

埋没土の状況　この遺構はAs-C混土層下の黒褐色粘質土からローム層までを掘り込んでいる。断面形は逆台形で、底面は平らで、部分的に砂の堆積が認められるが、水の流れた痕跡は認めがたい。濠の最下層にあたる埋没土は、As-Cを含まない黒褐色粘質土で、15㎝から40㎝ほどの厚さがある。この層の上にはプライマリーな状態に近いAs-Cが、最大厚５㎝ほどでレンズ状に堆積している。このAs-Cの上面が攪拌されてAs-C混土層となっており、As-C混土層の上面にはHr-FAが15㎝ほどの厚さをもって、ほぼ水平の状態で堆積した層がある。このAs-C混土層とHr-FA層は、濠の東側の平坦部分でも同様に確認されている。このことからみて、Hr-FA降下時には、濠がほぼ完全に埋没していたことがわかる。

形状　確認面での上端幅約３ｍ、下端幅約１ｍ、深さ0.9ｍから0.6ｍほどの規模で、調査範囲内では上幅、下幅ともに変化はほとんどない。底面は北から南にゆるやかに傾斜している。

１区南端の断面で濠の東肩部がわずかに高まることが観察される。幅90㎝ほど、高さ５㎝ほどの規模であるが、掘削時の排土を盛り上げて土塁状の高まりを作ったものであろう。

濠は確認した範囲で４回蛇行している。０区の東壁から西に延び、約10ｍのところで東に曲がる。約５ｍで西に向きを変える。このカーブの南には遺物が集中して出土する地点がある。０区と１区の境界である現道を越えて南西に約45ｍ直進し、調査区西壁際で再び東に曲がる。柱穴群の東岸にはKS1-24号遺構があり、KS1-07号遺構に切られている。約17ｍを南東に進んでゆるやかに西に曲がる。ここでKS1-01号遺構が本遺構を切っている。ここから１区の調査区南端までの間には土器が集中する部分がある。濠は南西に進み、１区と２区の境界である現道を越えて２区の北端で調査区の西に抜けていく。

本遺構は、調査の初期には集落防衛の役割を持つ環濠的な性格の濠ではないかと考えられたが、蛇行しながらも環状になるような走行をとらない。灌漑用水路などの機能も想定されるが、埋没土や溝底には流水の痕跡には乏しく、部分的な調査にとどまることも合わせて、遺構の性格を確定するに足る材料は得られていない。

柱穴群　１区北寄りの濠の両壁斜面部に直径約60㎝～１ｍの柱穴が確認された。ほぼ等間隔に並ぶ３対６基と、柱穴群ほぼ中央の東岸に浅い掘り込み１基とが確認されている。柱穴は基盤層であるローム土を掘り込んでおり、深さは濠の底面よりやや深い。

出土遺物　As-C層上面から出土した遺物（上層出土遺物）と、その層下の黒色粘質土層中から溝底にかけて出土する土器（下層出土遺物）があるが、

上層出土遺物は溝の廃棄後にもたらされたものであり、下層出土遺物が本来この溝に伴う遺物である（遺物図中には下層のみ表現したが、記述のないものは上層出土である）。

上層出土土器は埋没過程で濠が深さ約50㎝の窪みになった段階で埋まったものである。遺物の密度は１区内では南端部分がやや濃いが、他の部分はほぼ均一である。出土遺物は樽式土器の他に赤井戸式土器とＳ字状口縁台付甕などの古式土師器が混在している。南端には土器が集中し、完形の土師器の高坏が複数出土している。１区北寄りの部分では完形に近いＳ字状口縁台付甕などが点在している。

下層出土の土器は主に樽式土器である。１区南端に集中して出土しており、出土層位は溝の底面直上ないしはやや浮いた位置である。器種は壺・甕・高坏・有孔鉢などで、完形に近いものもある。０区の出土土器は小破片化している。

人面付土器（No.116）はＢ－Ｂ′土層断面観察用のベルト内ほか、As-Cの上下層の両方から破片で出土している。人面付土器の破片は破片数からすると本遺構からの出土が最も多いが、濠の東岸の土器集中地域内からも出土している。接合関係から見ると土器集中地域中のものが破片になって濠中の下層に落ち込み、古墳時代になっても破片の落ち込みが続いたものと考えるのが妥当であろう。破損しやすい耳や鼻が出土しているのもそれを裏付けるものと考えられる。

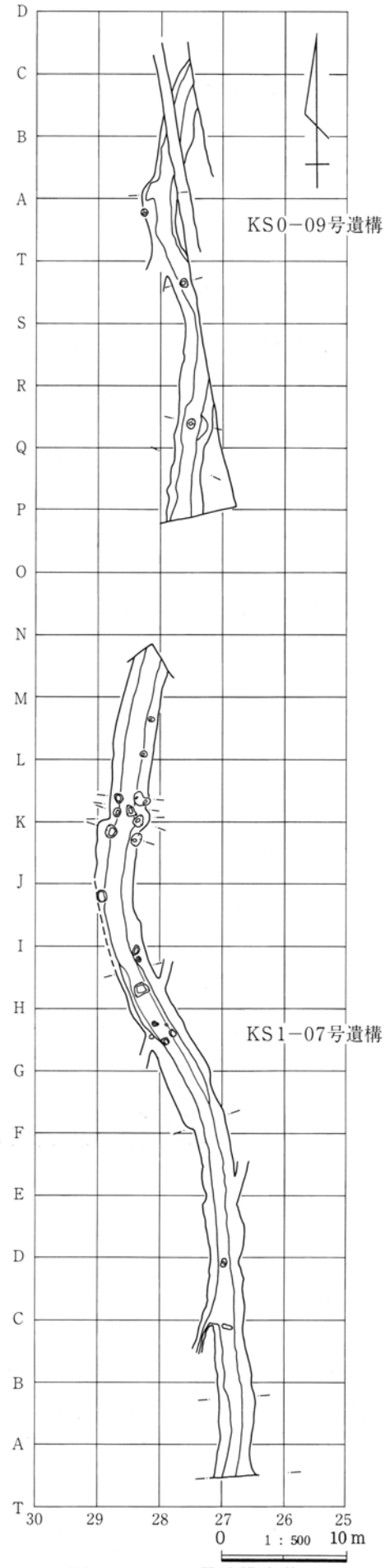


図67　KS1-07号遺構全体図

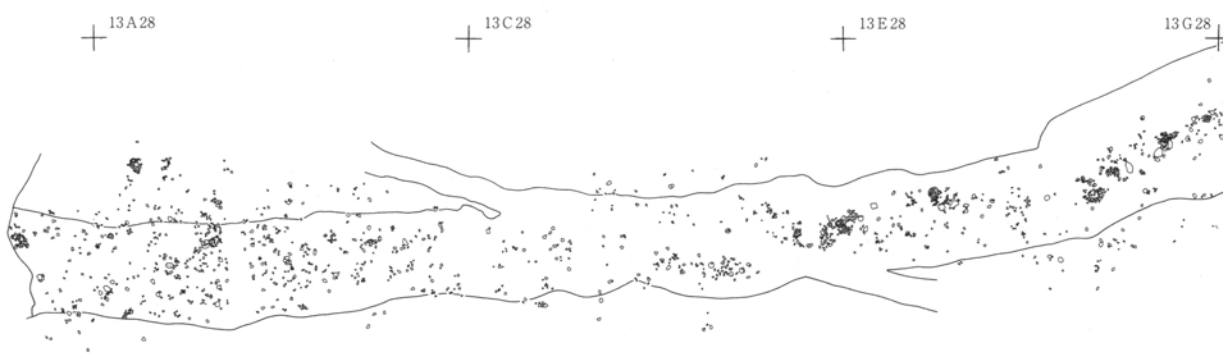


図68　KS1-07号遺構上層

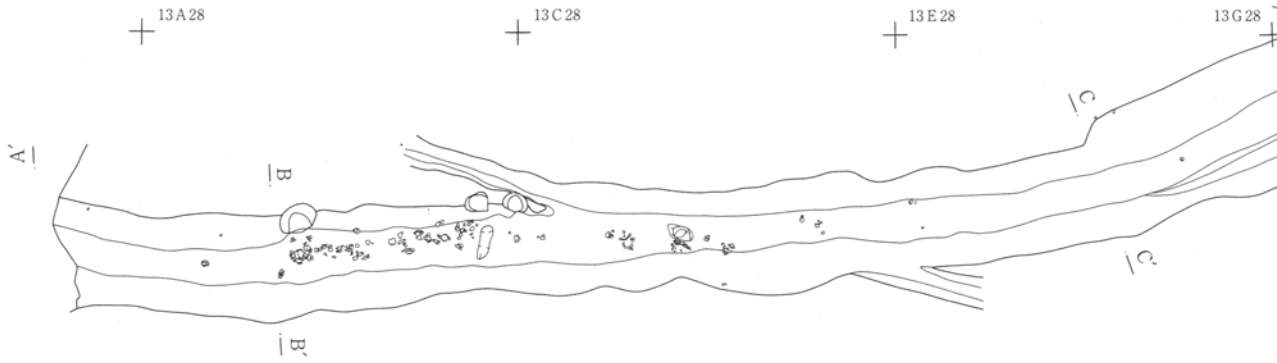
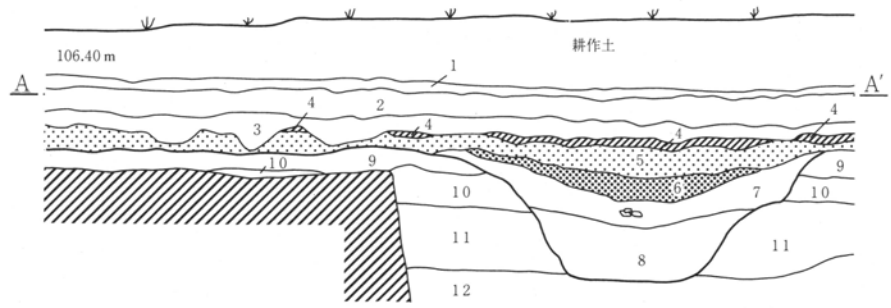


図69　KS1-07号遺構下層



A－A′・B－B′・C－C′・D－D′

1暗赤褐色砂質土(5YR3/2) 粒子粗 しまりやや弱 全体に鉄分多く混在
2黒褐色砂質土(10YR3/2) 粒子粗 しまりやや弱 As-B軽石(径2-3㎜)混じる
3暗褐色粘質土(10YR3/3) 粒子細 しまりやや弱 Hr-FA粒(径5-10㎜)As-C軽石(径3-5㎜)一部混じる
4明褐色シルト質土(7.5YR5/8) 粒子細 しまりなし Hr-FA純層9号(畠) 埋土
5黒褐色粘質土(10YR3/1) 粒子細 しまり弱 全体にAs-C軽石(径3-10㎜)やや多く含む 遺物多 7号上層
5′ 暗褐色粘質土(10YR3/3) 粒子やや粗 しまり弱 As-C軽石約70％含む 7号上層
6灰黄褐色軽石(10YR4/2) 粒子粗 しまりなし As-C軽石純層
7黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり強 粘性強 鉄分 炭化粒混じる 遺物多 7号下層
7′ 7層とほぼ同質だがしまりやや弱く砂含まず 柱穴埋没土
8暗褐色粘質土(7.5YR3/3) 粒子細 しまり強 粘性強 鉄分含有多い 砂はほとんど含まない 7号下層
8′ 黒褐色(10YR2/3) 粒子細 しまりやや強 部分的に砂の堆積有り 土器片やや多い 7号下層
8″ 褐色(10YR4/6) 粒子細 しまりやや弱 7層中に微少のローム粒 砂粒混じる 7号下層
9黒褐色粘質土(10YR2/3) 粒子細 しまり強 粘性やや強 含有物なし
10黒褐色粘質土(7.5YR3/2) 粒子細 しまり強 粘性強 鉄分含有
11褐色シルト質土(10YR4/6) 粒子細 しまりやや弱 ローム質
12灰白色粘土(10YR8/2) 粒子細 しまり良

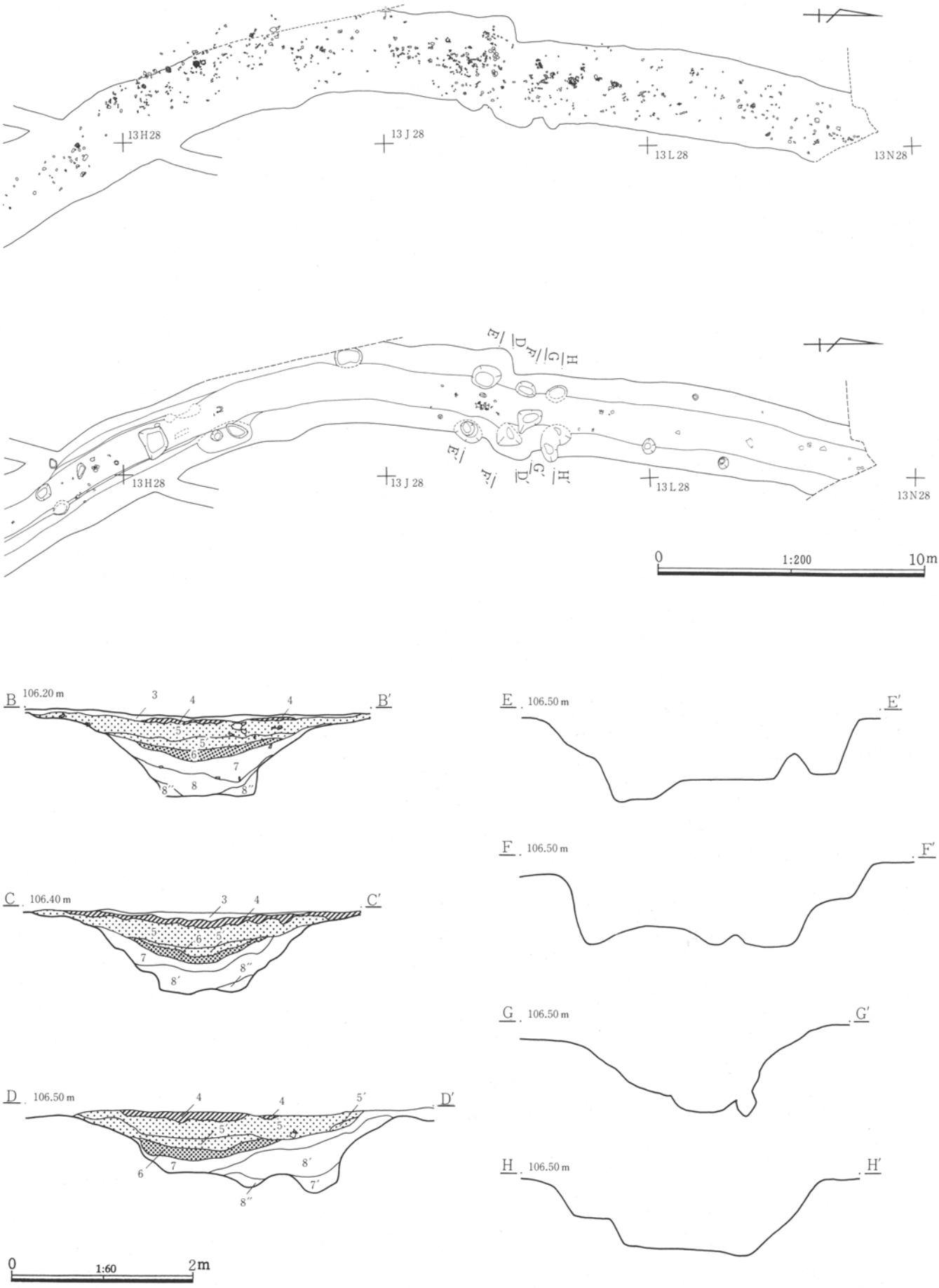
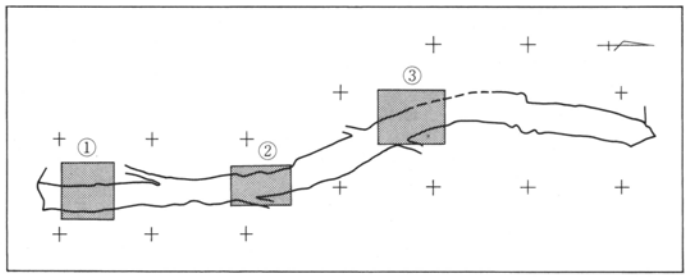


図70　KS1-07号遺構土層断面・柱穴群エレベーション図



8
20
75
103
104
88
79
3
13B27
43
99
34
106
0
1:30
1m

図71　KS1-07号遺構上層部分拡大図 ①

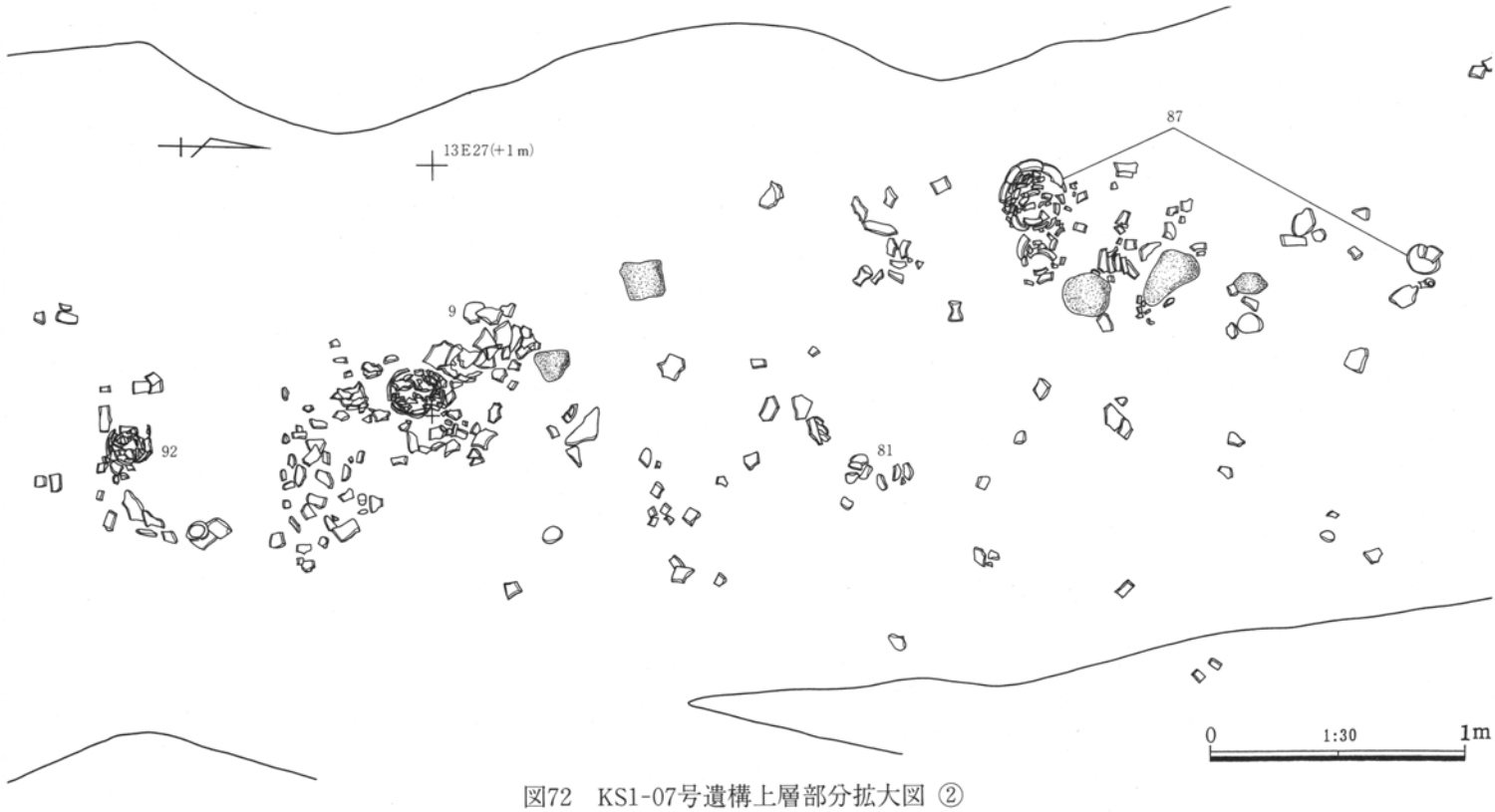


図72　KS1-07号遺構上層部分拡大図 ②

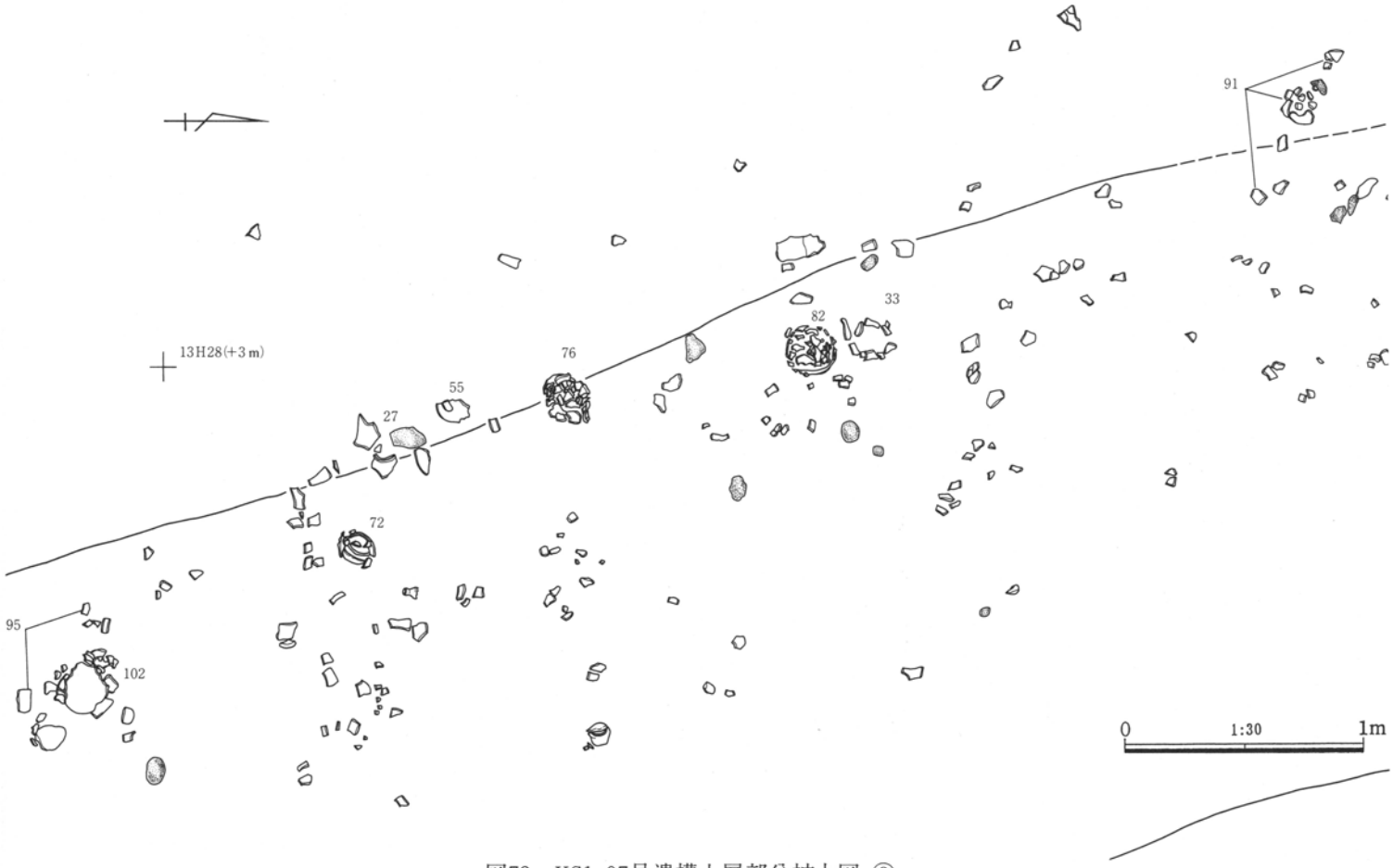


図73　KS1-07号遺構上層部分拡大図 ③

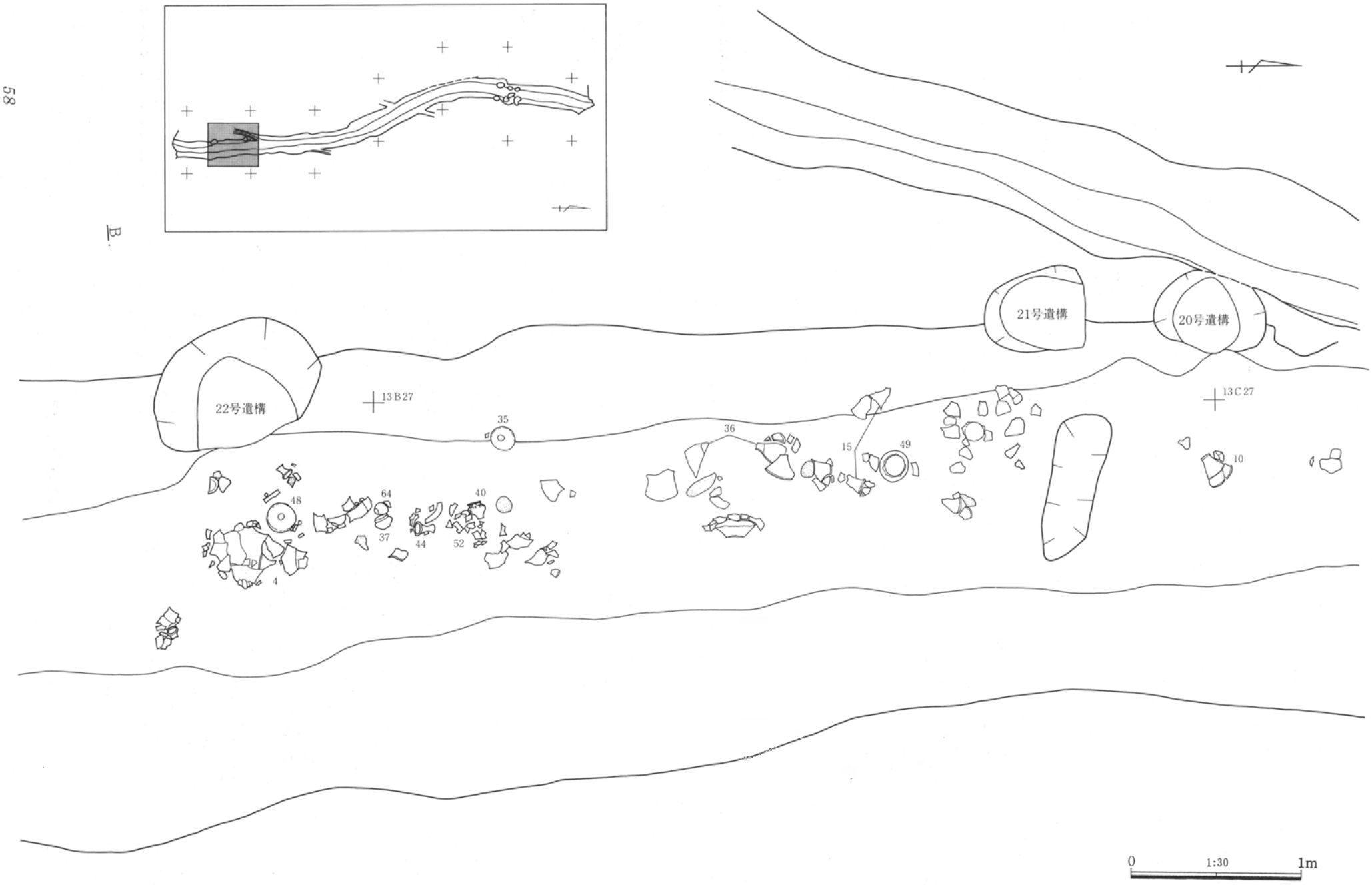


図74　KS1-07号遺構下層部分拡大図 ④

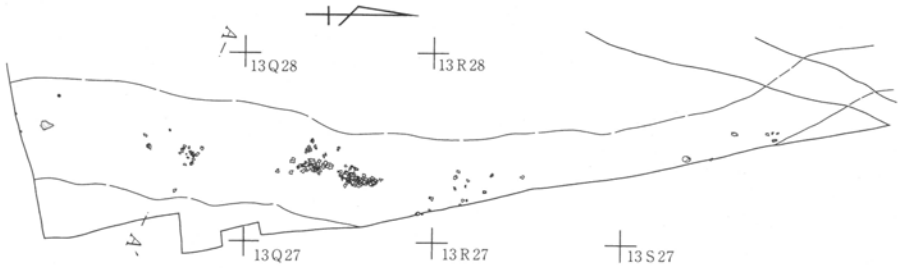


図75　KS0-09号遺構上層

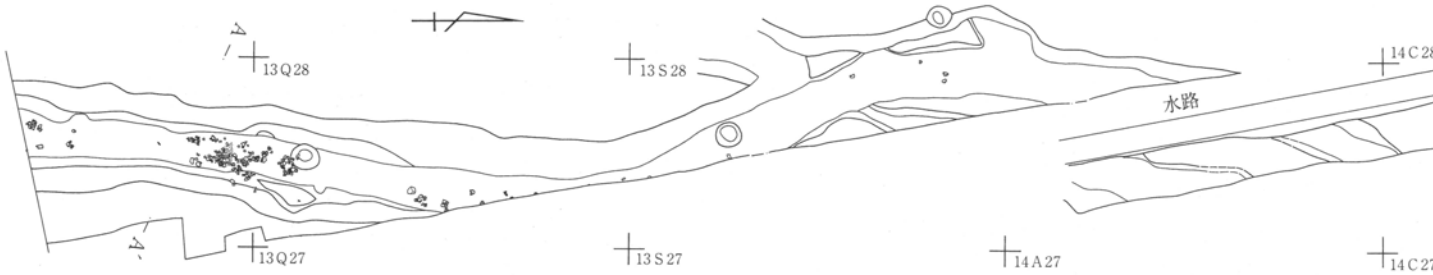
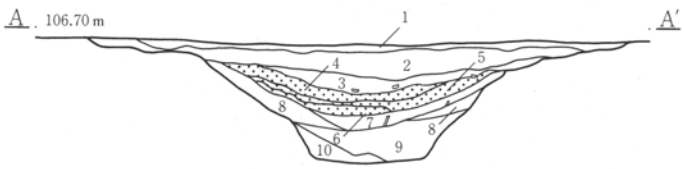


図76　KS0-09号遺構下層

0　1:200　10 m



1 明黄褐色土(10YR7/6) Hr-FA火山灰層
2 黒褐色土(10YR3/2) As-C軽石を含む
3 灰黄褐色土(10YR4/2) As-C軽石を含む
4 灰黄褐色土(10YR4/2) As-C軽石を含む 遺物を含まない
5 灰黄褐色土(10YR5/2) As-C軽石 しまり弱い 砂粒の混土
6 明褐色土(7.5YR5/8) 粗い軽石粒鉄分凝集
7 暗褐色土　粘土強 炭化物を層状に含む
8 灰黄褐色土　鉄分凝集
9 灰黄褐色砂質土　鉄分含む 流水堆積
10暗褐色粘質土

0　1:60　2 m

図77　KS0-09号遺構部分

重複する遺構

KS1-16号遺構

13H28グリッドに位置する。溝の底面で確認された。隅丸方形の浅い土坑である。土坑の埋没土は砂質土である。出土遺物はない。

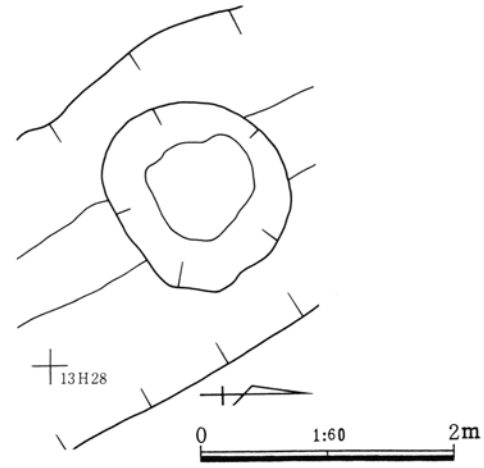


図78　KS1-16号遺構

KS1-17号遺構

13I28グリッド　溝の西壁斜面に確認された。楕円形の土坑である。埋没土はAs-C軽石を含む黒褐色砂質土である。土坑の中位から完形の小型壺が出土している。07号遺構より新しく、As-C降下後に埋没した土坑である。

1 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子やや粗 しまりやや弱
　全体にAs-C軽石(径2-5㎜)多く含み鉄分も多い
2 黒色粘質土(10YR2/1) 粒子細かくしまり粘性
　やや強 As-C軽石(径5㎜ほど)混じる
3 黒褐色砂質土(10YR3/2) 粒子やや粗 しまり
　やや弱 As-C軽石(径5-10㎜)混じる 鉄分含む
4 黒褐色砂質土(10YR3/2) 3層中にローム粒(径5-10㎜)
　混じる しまり弱
5 暗褐色粘質土(10YR3/4) 粒子細かくしまり良
　鉄分斑状に混じる　地山

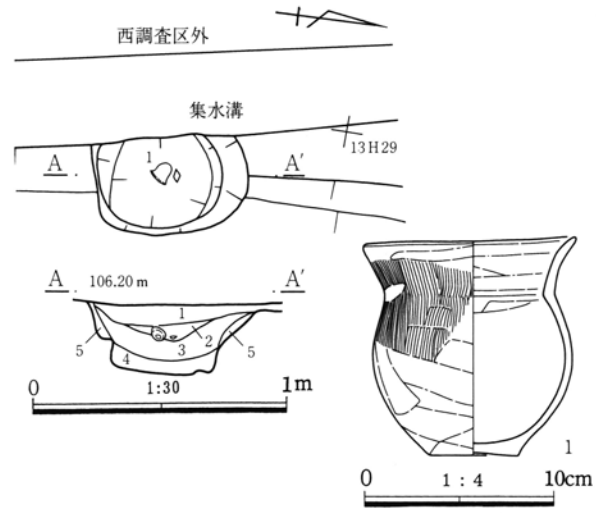


図79　KS1-17号遺構・出土遺物

KS1-20,21,22号土坑

13B27グリッド　溝の上層の調査時には確認できなかったが、完掘した際にAs-C混土の残存として確認された。いずれも円形の土坑である。埋没土はAs-C軽石を含む砂質土である。20・21号遺構は並び、その南に22号遺構が位置する。出土遺物はない。

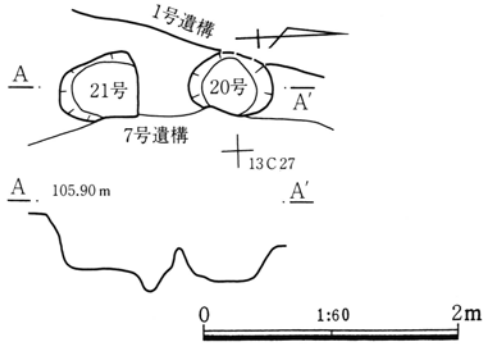


図80　KS1-20, 21号遺構

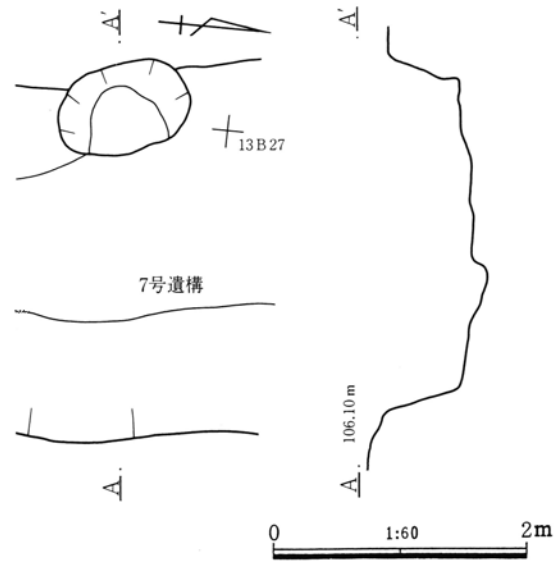


図81　KS1-22号遺構

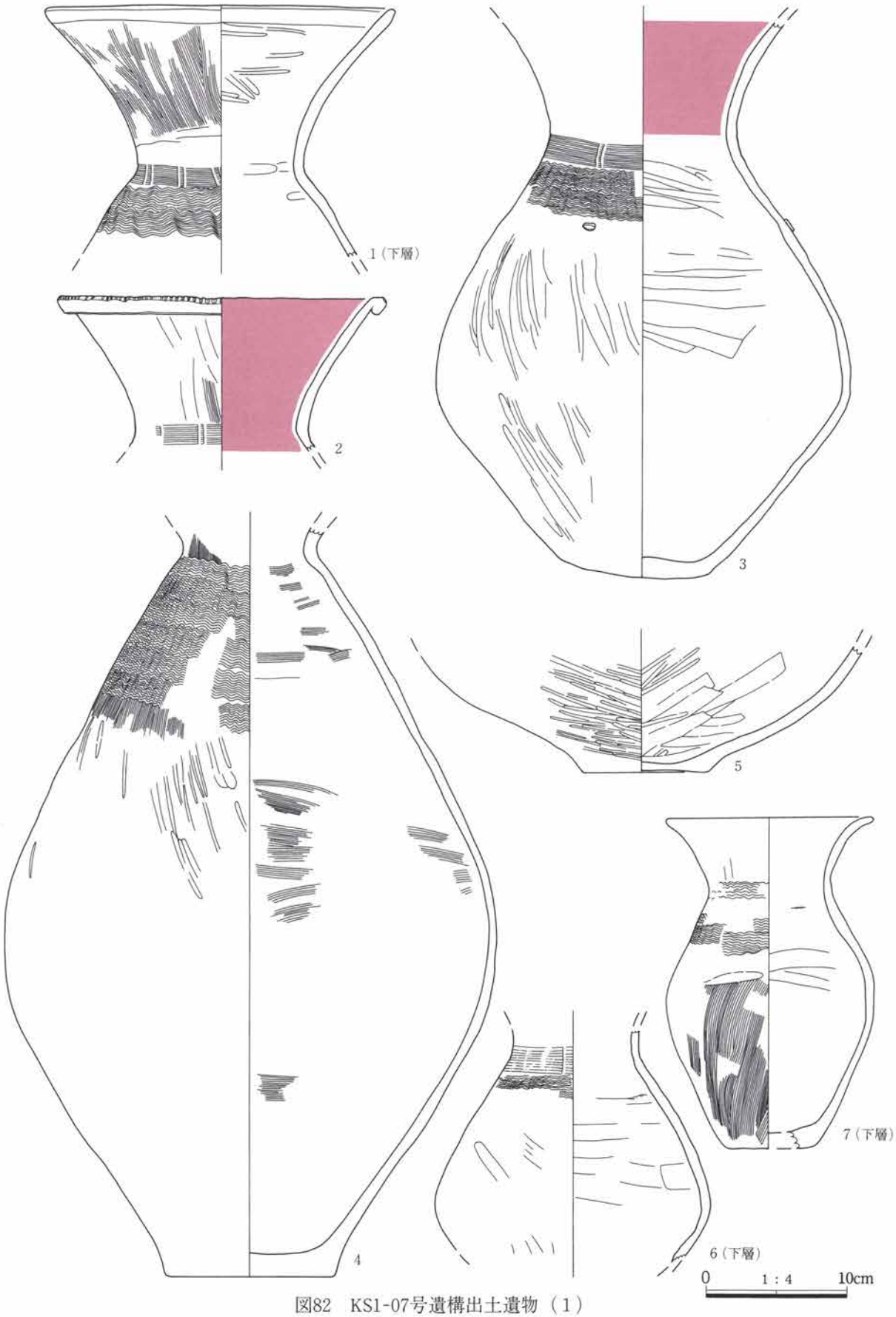


図82　KS1-07号遺構出土遺物（1）

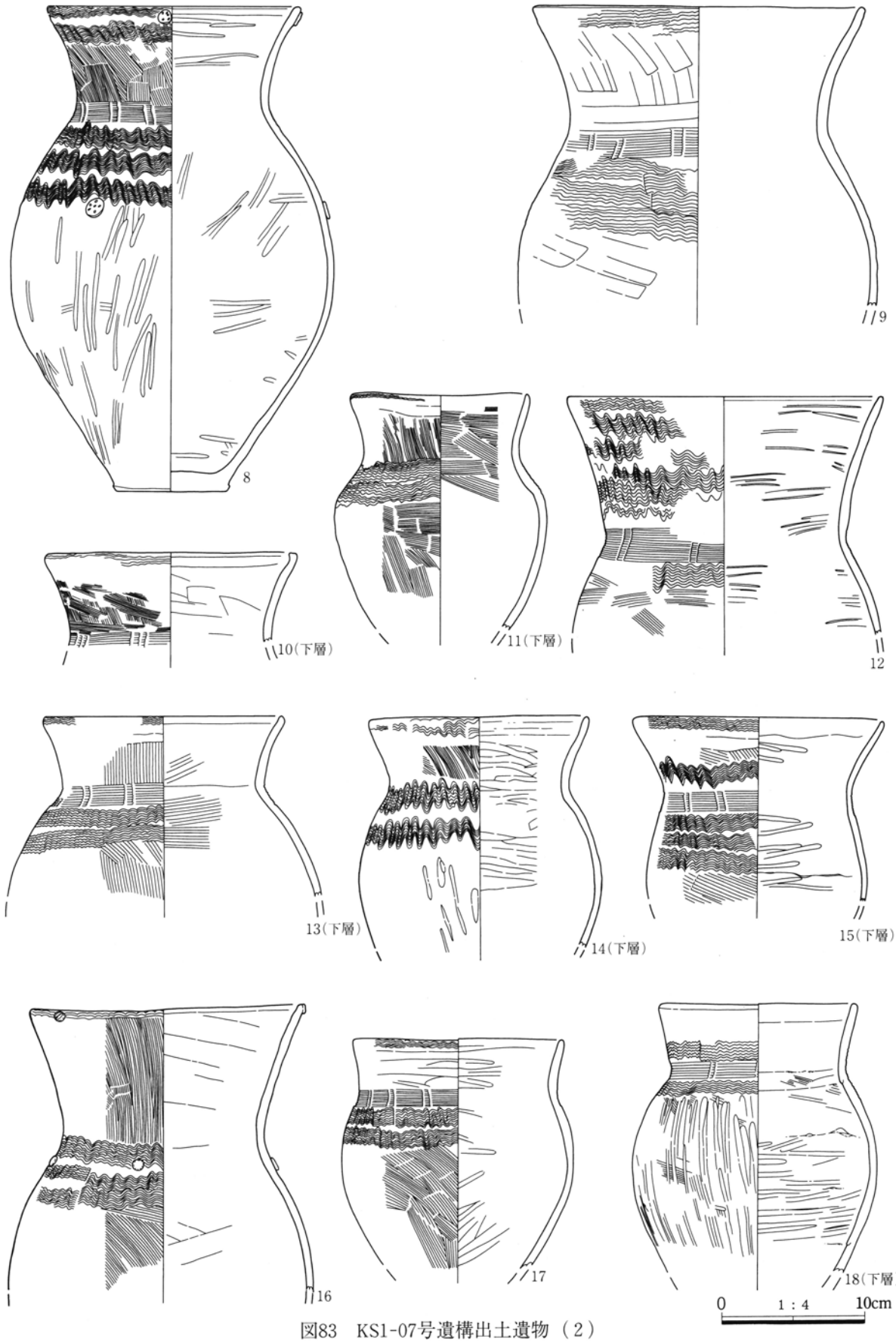


図83　KS1-07号遺構出土遺物（2）

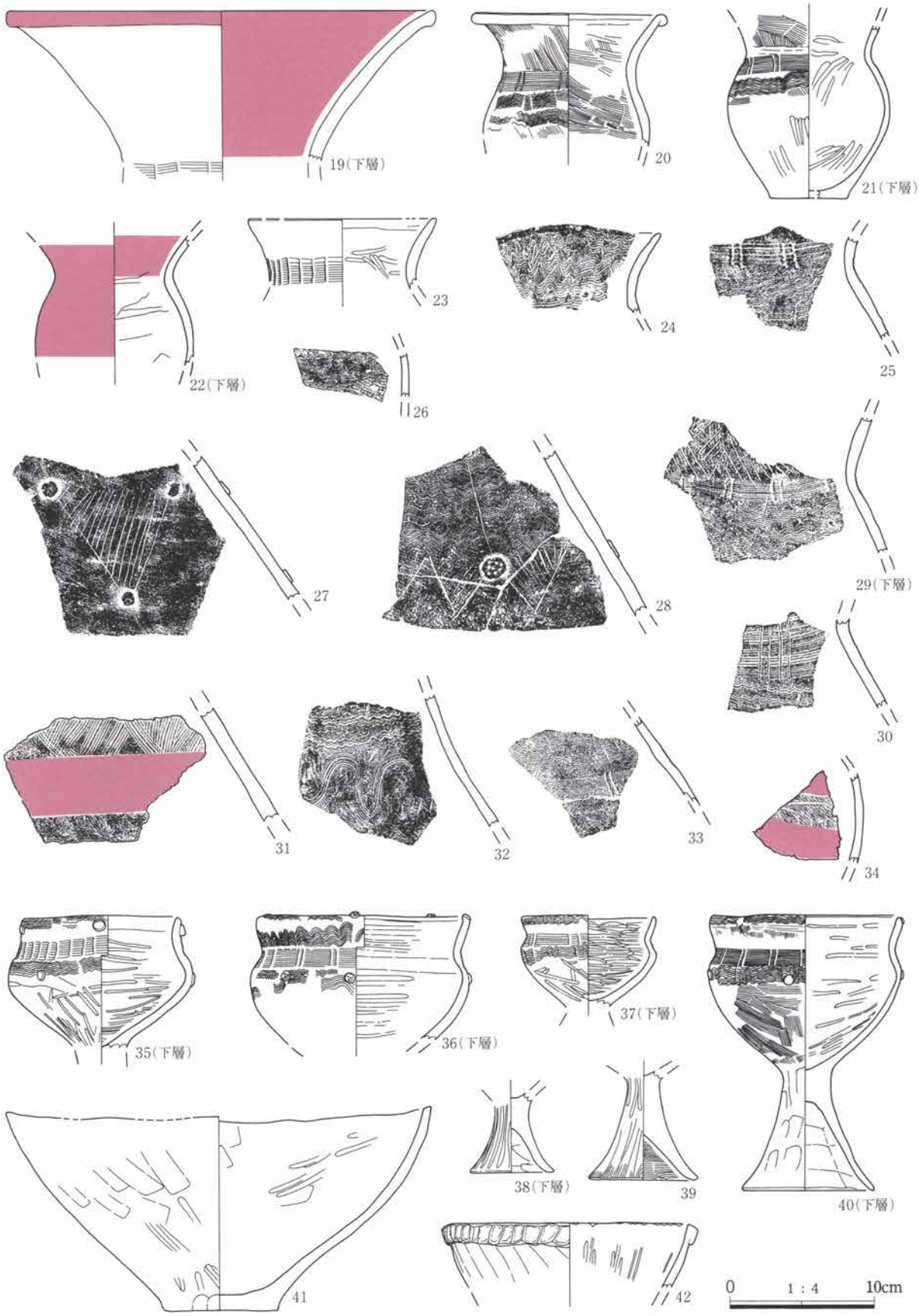


図84　KS1-07号遺構出土遺物（3）

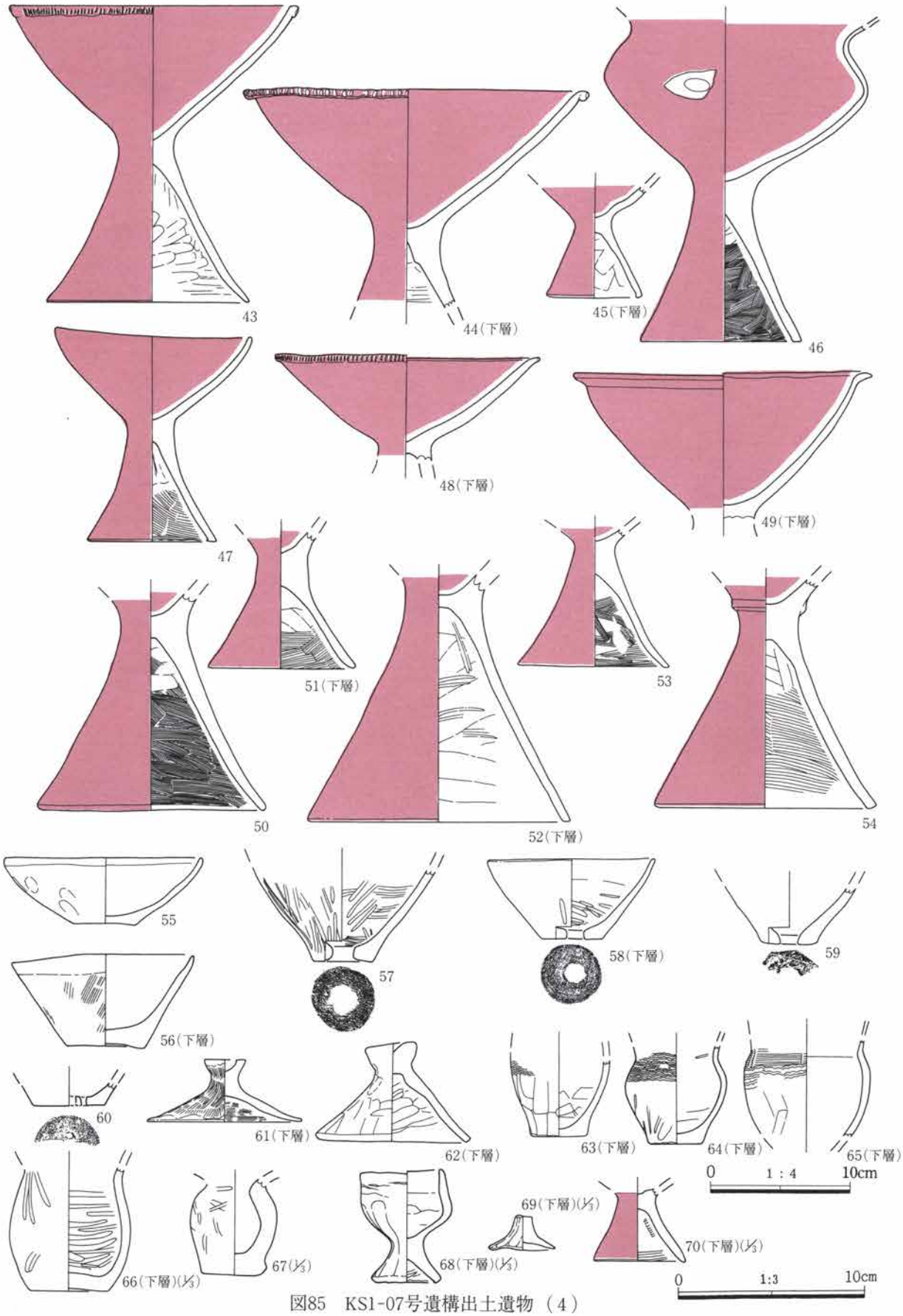


図85　KS1-07号遺構出土遺物（4）

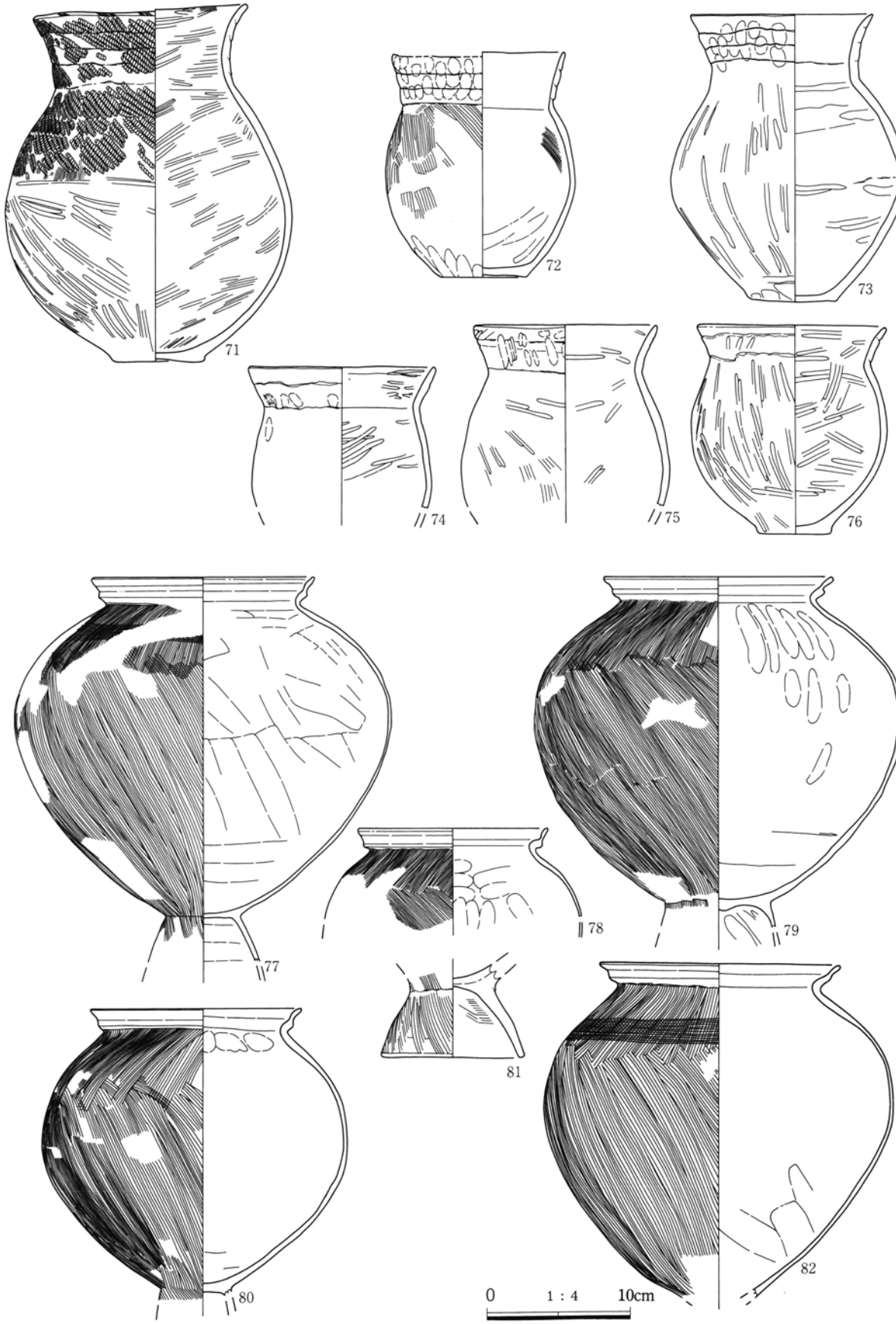


図86　KS1-07号遺構出土遺物（5）

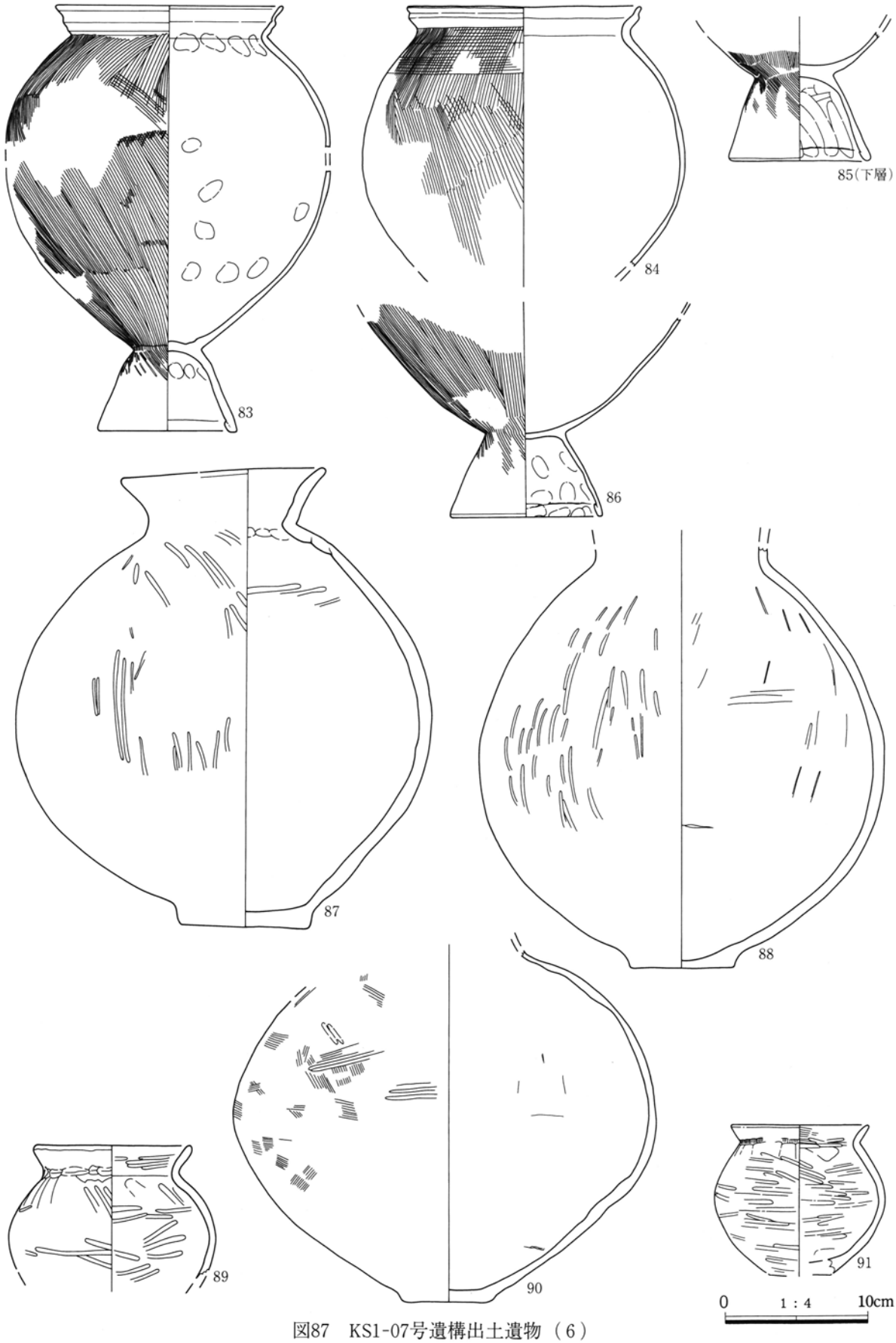


図87　KS1-07号遺構出土遺物（6）

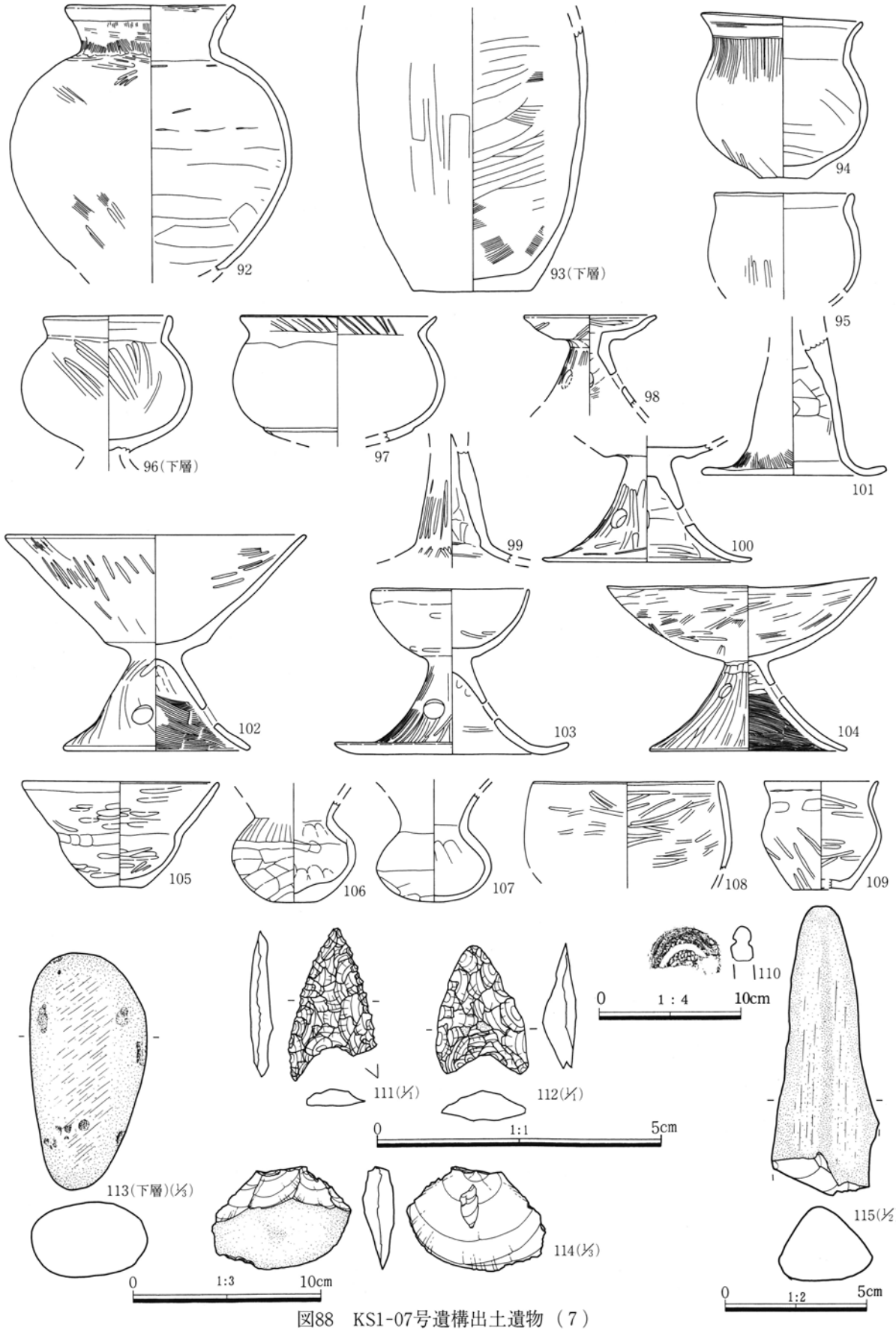


図88　KS1-07号遺構出土遺物（7）

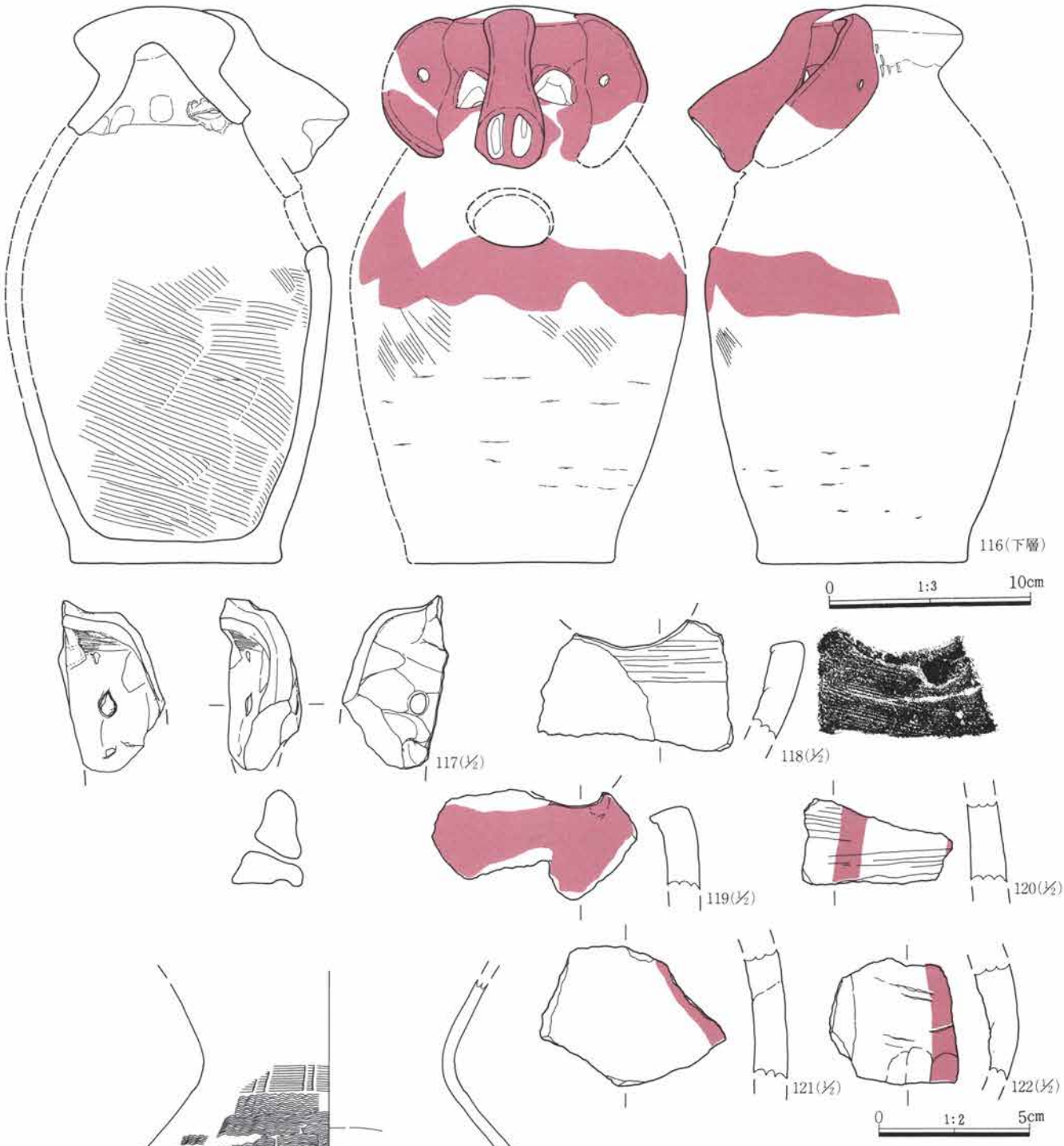


図89　KS1-07号遺構出土遺物（8）

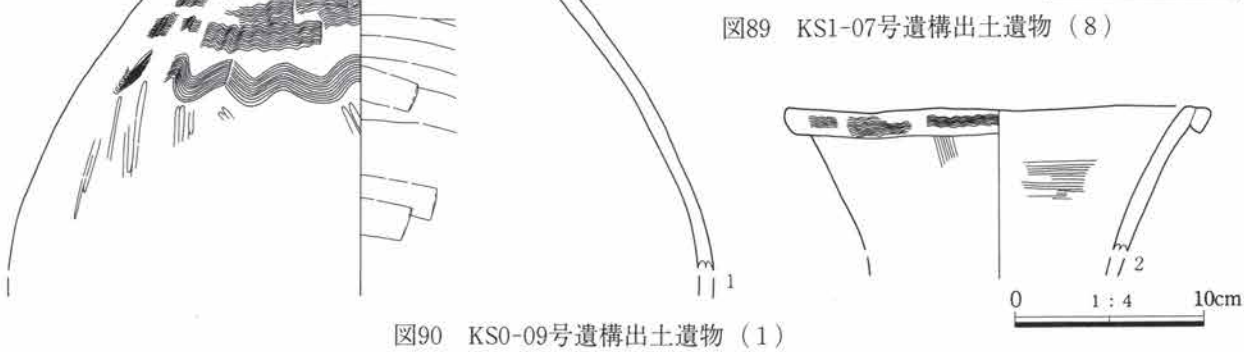


図90　KS0-09号遺構出土遺物（1）

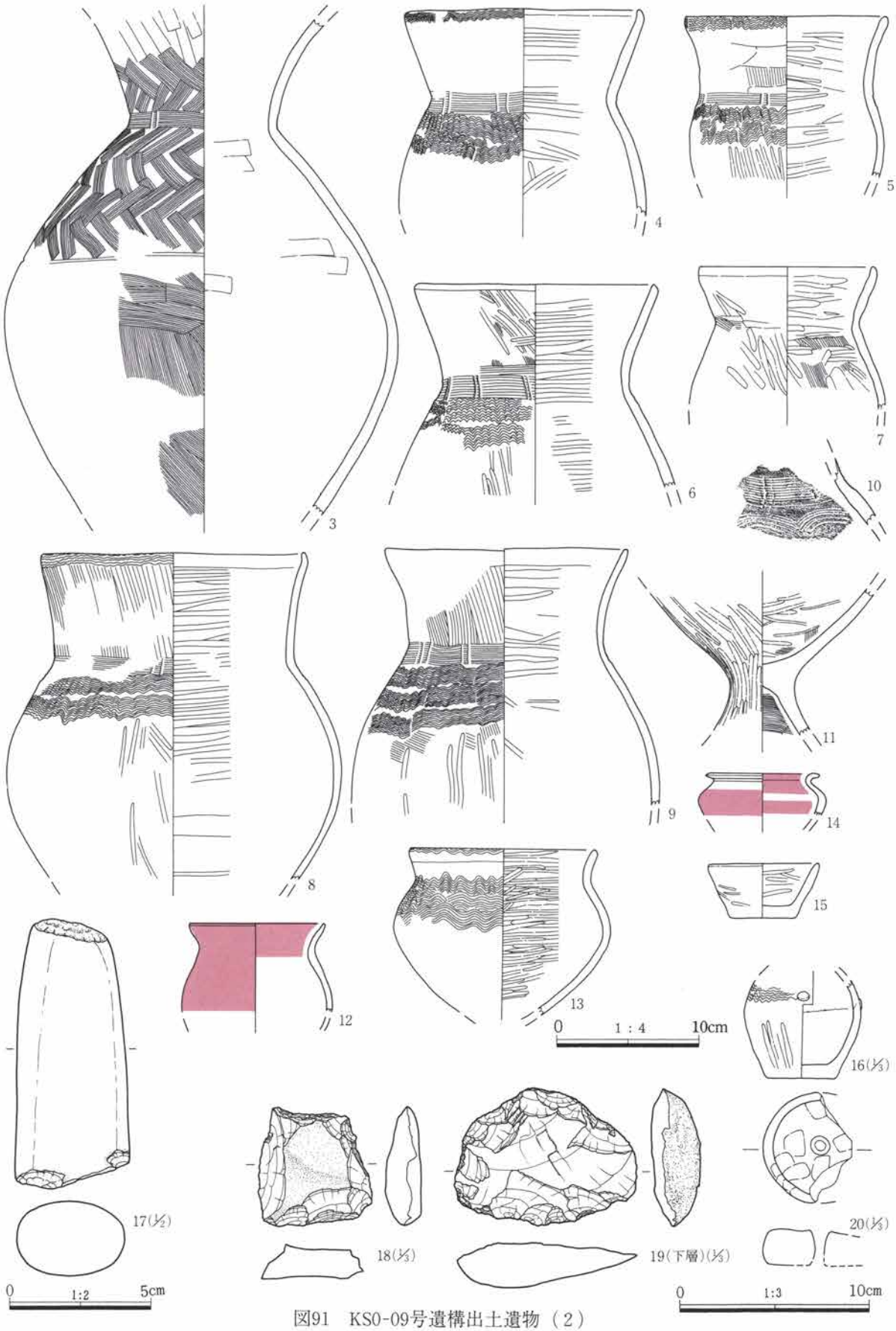


図91　KS0-09号遺構出土遺物（2）

（4）　土器集中地域

図92～104　　付図　3

小八木志志貝戸遺跡は天王川東岸の自然堤防にあたる微高地と低地にまたがっている。土地改良事業により旧地形が大きく改変されているが、事業施工以前は０区の南端から２区にかけての範囲が微高地部にあたり、０区の北部が低地にあたる。１区の北寄りから２区の北にかけての微高地上にあたる部分で、広範囲に弥生土器の濃密な散布が見られた。調査時には１区の南を14号、半ばを15号、北を31号、２区では97号の遺構番号を付したが、個別に遺構として区分できるものではなく、構造物としての遺構も認められない。ただし、人為的にこの場に土器ないし土器片がもたらされたことは明らかであり、ここでは、土器の集中というあり方を示す遺構としてこれらを一括し、土器集中地域と呼称する。また、土器集中地域の北には小規模な土器破片の集中部分が数カ所ある(39・43号遺構)。これらも同様に遺構として捉え、章末に「その他の土器集中遺構」として報告する。

遺構の概要　南北40ｍにわたって濠（07号遺構）の両側に広がる。特に東側に多く分布が確認され、１区の南端周辺には特に顕著な土器集中部分が数カ所認められる。この集中部分から離れるにつれて土器の分布密度は薄くなる。溝の西側部分は調査範囲が狭く、この部分の調査時点では遺構としての認識がなかったため、遺物を包含層出土土器として一括して取り上げている。このため、土器片のあり方を東側と対比することができない。北方向では13Lライン近辺まで遺物の広がることが確認されているが、出土量は比較的少ない。

土器集中地域の北には土器棺墓が集中している。土器破片は土器棺墓の周囲にも分布しているが、密度はごく薄い。東方向では調査区端まで破片が出土する。南方向では13Rラインまでは破片の分布が確認されているが、２区の調査区内で出土した土器はいずれも小破片である。13Rライン以南は攪乱により不明瞭であり、攪乱範囲の南では土器片の広がりは確認されていない。

遺物はAs-C混土層上面から確認されはじめたが、主体はAs-C混土層中にあったため、この層からは、できる限り遺物を残して調査を進めた。最終的にはAs-Cを含まない黒褐色土層まで掘り下げたが、黒褐色土中からは遺物の出土はなかった。本調査区ではAs-Cの一次堆積層はないため、直接的にAs-Cとこの遺構との層位的関係を捉えることはできない。土器集中地域の下には竪穴住居（18号遺構）、土器棺墓（24号遺構）、土坑(19号遺構)などが重複している。24号遺構の土坑は中位にAs-C混土層が堆積しており、多くの土器破片が落ち込んでいた。

調査では完形または半完形の土器や石器、特徴ある外来系の土器片などは出土位置を記録し番号を付けて取り上げた。破片については１ｍ四方のグリッド単位で取り上げ、総量把握に努めた。

出土遺物は土器・石器・ガラス小玉・焼けた動物骨等がある。土器は樽式土器が主体である。また、天王山式など外来土器の破片も出土している。調査区内で破片にして約１万点の土器が出土し、このうち個体識別して取り上げたものが約400点ある。器種は壺・甕・高坏等の主要器種の他に蓋・小型壺類・ミニチュアなどを含む。石器は整理箱に５箱分が出土している。石器の種類は川原石を用いた磨石、敲石や片岩製の砥石、黒色頁岩製の剝片石器・黒曜石製の石鏃、頁石製の磨製石剣などがある。また、濠（07号遺構）から多くの破片が見つかった人面付土器の鼻と耳の部分が出土している。

遺物の分布　濠（07号遺構）の東岸には、約２～３ｍの幅で遺物をほとんど出土しない空白帯があり、この部分に濠の掘削排土による土塁状の構造があったことが溝南端の土層断面で確認されている。空白帯の東には、濠に沿って土器が出土している。とくに空白帯に隣接する東西幅約５ｍ、南北約10ｍ

の帯状の範囲には遺物が集中している。帯状の集中部分の東でも土器破片が出土するが、全体的に遺物量は少なく、分布も疎になる。完形品の出土はなく、接合できる破片も少ない。一方、焼けた動物骨の破片はこの範囲に多く出土している。

帯状の集中部は本遺構中で最も濃密に遺物の出土するところであり、この部分の出土遺物には完形品ないしは半完形品が多いのが特徴である。この範囲には、土器がまとまる、小規模なブロック状の土器集中地点が数カ所形成されている。

土器集中地点Ａは、調査区内の13B25・13B26グリッドの境界部にある（図94）。調査区内で最も遺物が密集している部分であり、その中にはブロック状に土器が集中する部分が３カ所認められる。１カ所のブロックでは土器破片多数とブーツ型の砥石１点が出土しているが、土器が小破片化しており、個体復元できなかった。２カ所は調査区内で最も完形品の出土の多い集中地点を形成している。出土した多くの破片中から樽式土器の壺３個体・甕４個体・高坏２個体・台付甕１個体・小型甕３個体が復元できた。甕は隣接するブロックの土器片とも接合しており、若干の土器の動きがある。他に天王山式土器の沈線と連弧文のついた頸部破片が出土している。

土器集中地点Ｂは13C25グリッドにある（図95）。集中Ａからやや間隔を置いた北側に位置する。中型の甕がやや間隔を置いて出土しているのが特徴である。５個体を確認したが、復元可能個体は３個体であった。うち２個体は単口縁で頸部のくびれの弱い甕である。

土器集中地点Ｃは13D25グリッドにある（図95）。復元された土器は甕１個体・台付甕１個体・高坏２個体・小型甕１個体であり、他に石鏃１個、および人面付土器の鼻破片が出土している。

土器集中地点Ｄは13E25グリッドにある（図96）。復元された土器は、中型の甕２個体・台付甕１個体・高坏２個体・片口１個体・ミニチュア高坏１個体で、他に片岩製の磨石１個などがある。高坏は調査区の南端部から出土した破片と接合しており、かなり大きく土器破片が動いていることがわかる。土器集中部分の西側にはやや大型の壺２個体が出土している。

ブロック状の土器集中部分は、確認当初には土器棺墓が破砕された残痕と見られた。しかし、いくつかの要素から土器棺墓群とは異なる存在として捉えられる。まず、出土する土器が土器棺墓に用いられるような大型の壺や甕ではなく、中型ないしは小型のものが多い。また、壺や甕といった特定の器種に偏ってはおらず、台付甕や高坏といった器種も多く出土している。その構成比は樽式土器の標準的な器種構成とほぼ同様である（Ⅳ-１「弥生土器について」参照）。こうしたことから見ると、これらの集中部は北部で見られる土器棺墓の一部が攪乱を受けて破片化したことにより形成された、というものではないと考えられる。小ブロックを構成する土器の様相などから、ある程度のパターンがあることが想定でき、土器の廃棄単位というようなものである可能性が考えられる。土器集中地域の北にある小規模な土器集中遺構（39・43号遺構）も同様の様相を示すことから、同じ性格を持つものと理解できる。

動物骨について　土器集中地点の東側では、土器の分布は疎であるが、焼けた動物骨の破片がブロック状に集中して出土している。これらの骨はAs-C混土層中から出土した。ほとんどがごく細かい破片のため、取り上げることはできなかった。

東西グリッドのＣラインからＦラインにかけて、特に集中する様相が認められる。13C24グリッドと13E25グリッドには２カ所の小規模なブロック状の集中地点が確認された。

出土した動物はイノシシ・シカ・鳥類であり、出土量としてはイノシシが最も多く、シカがそれに次ぐ。鳥類は数片の出土である。

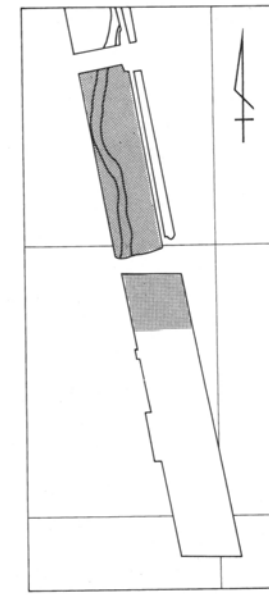
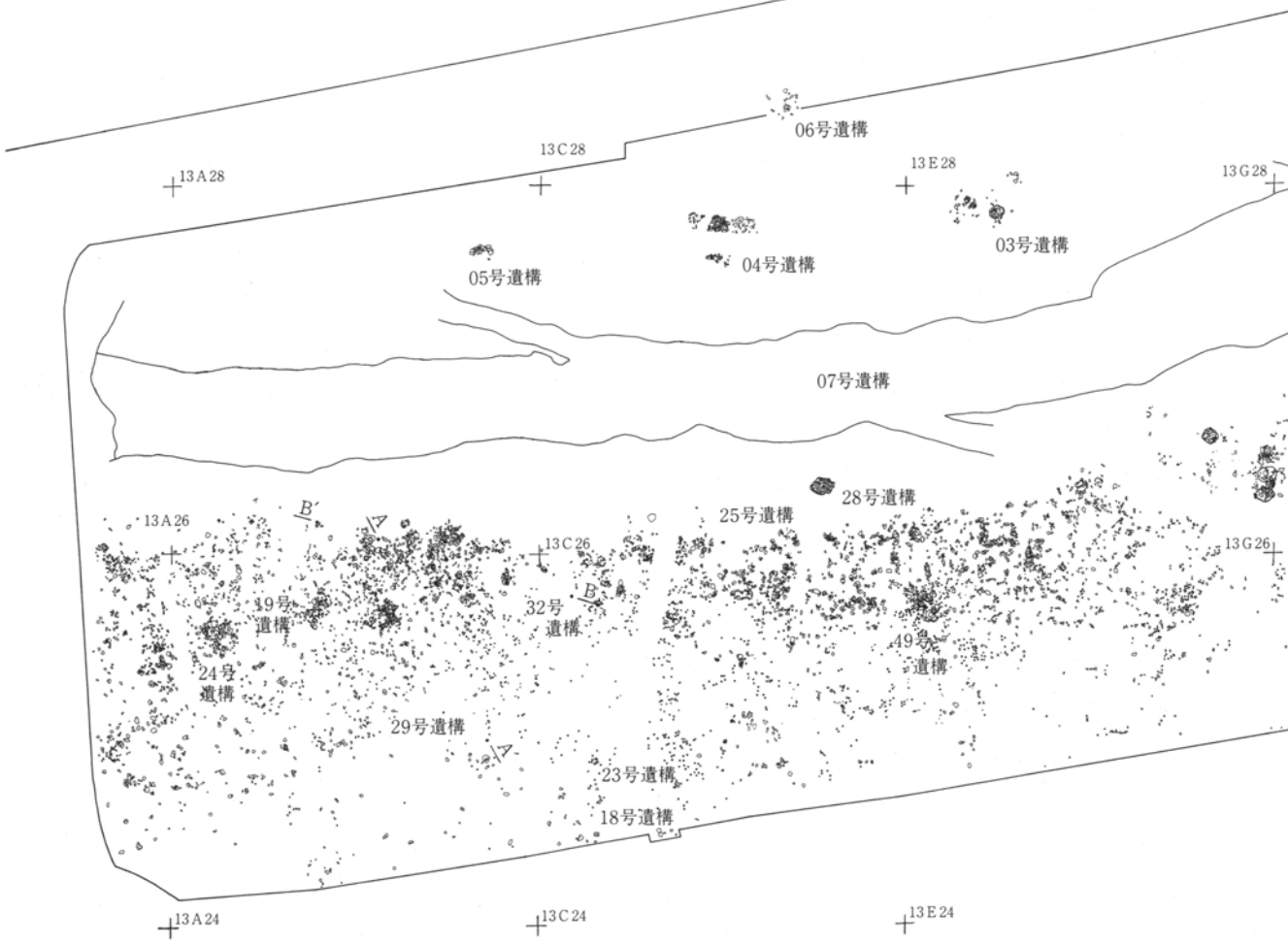
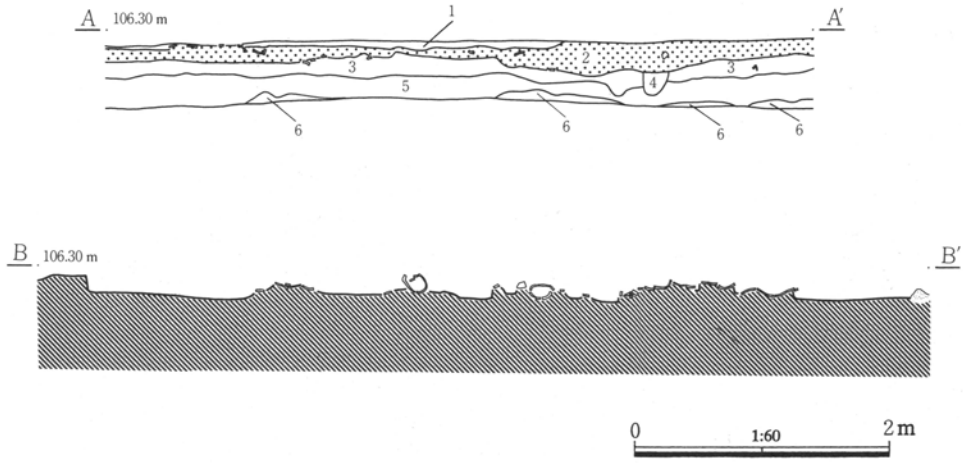


図92　KS2-97，99～103号遺構





1 灰黄褐色土(10YR5/2) 明黄褐色のHr-FA火山灰を混入する砂質土層
2 黒褐色土(10YR2/2) As-C軽石を約10％含む
3 黒褐色土(10YR2/3) 軽石を含まない やや粘質 白色 黄褐色小粒子を含む
4 黒褐色土(10YR2/2) ややしまり弱い 炭化物を含む
5 暗褐色土(10YR3/3) 白色小粒子を含まない やや粘質
6 にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム上面

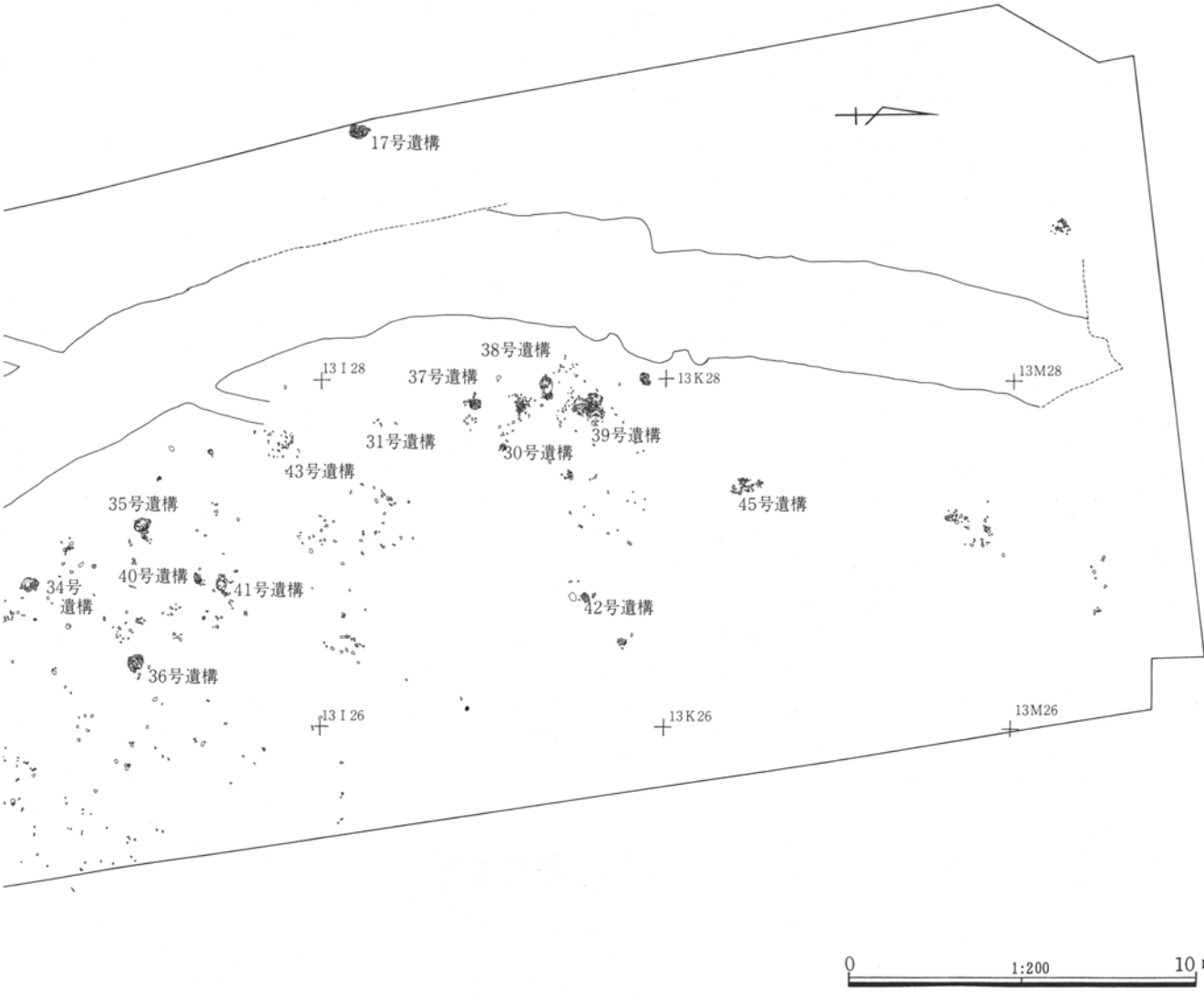


図93　KS1-14，15号遺構

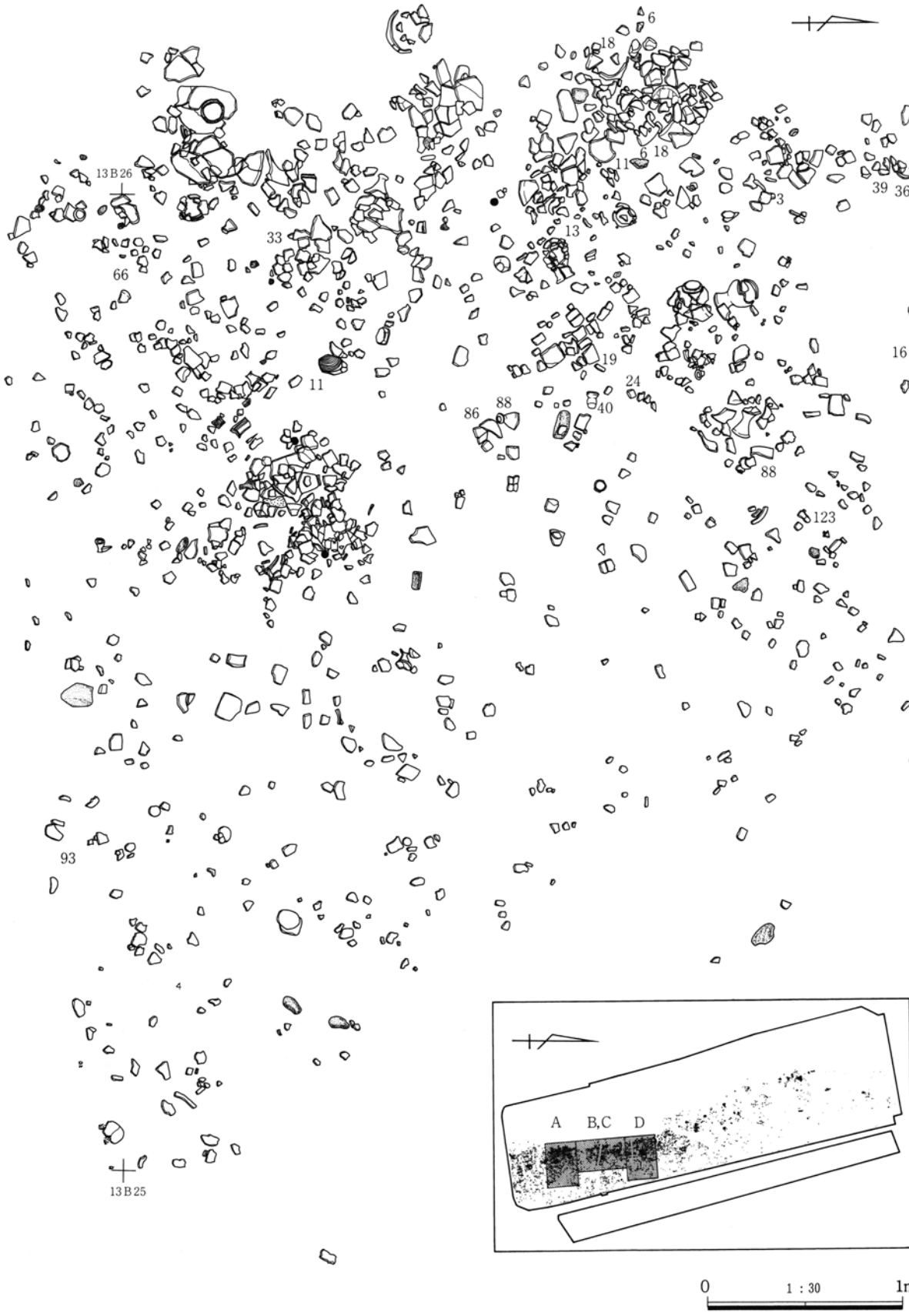


図94　KS1-14，15号遺構土器集中A

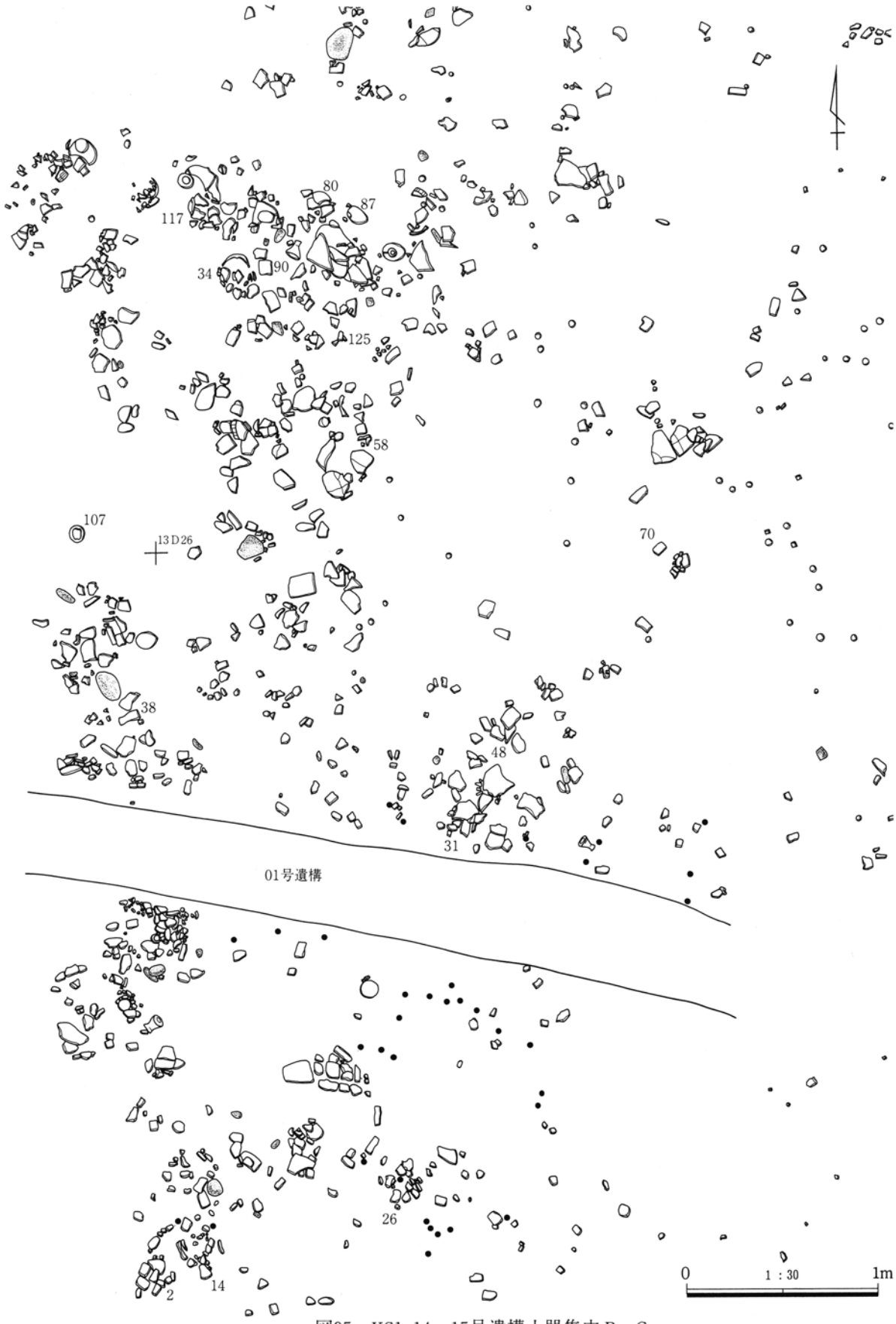


図95　KS1-14，15号遺構土器集中B，C

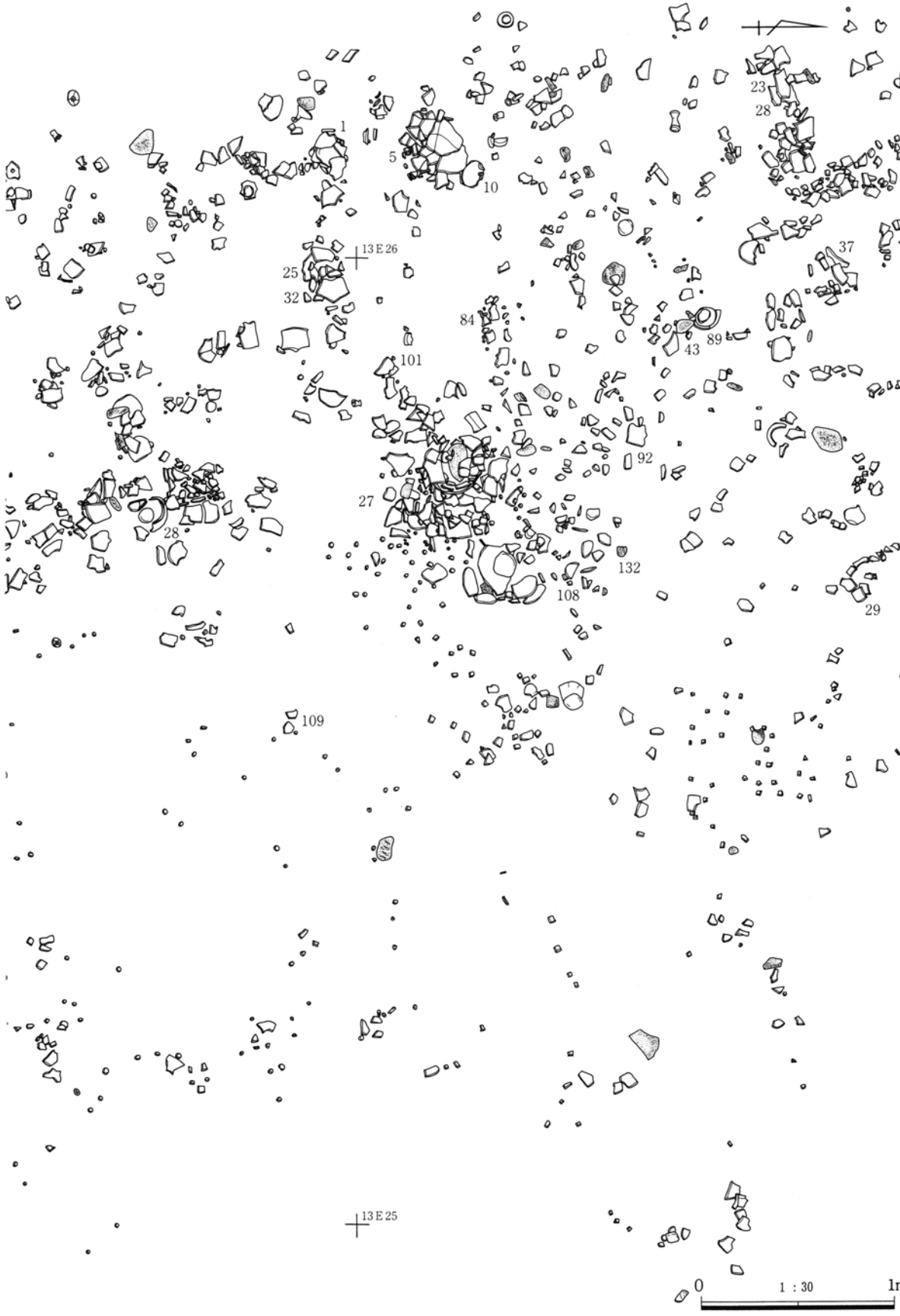


図96　KS1-14，15号遺構土器集中D

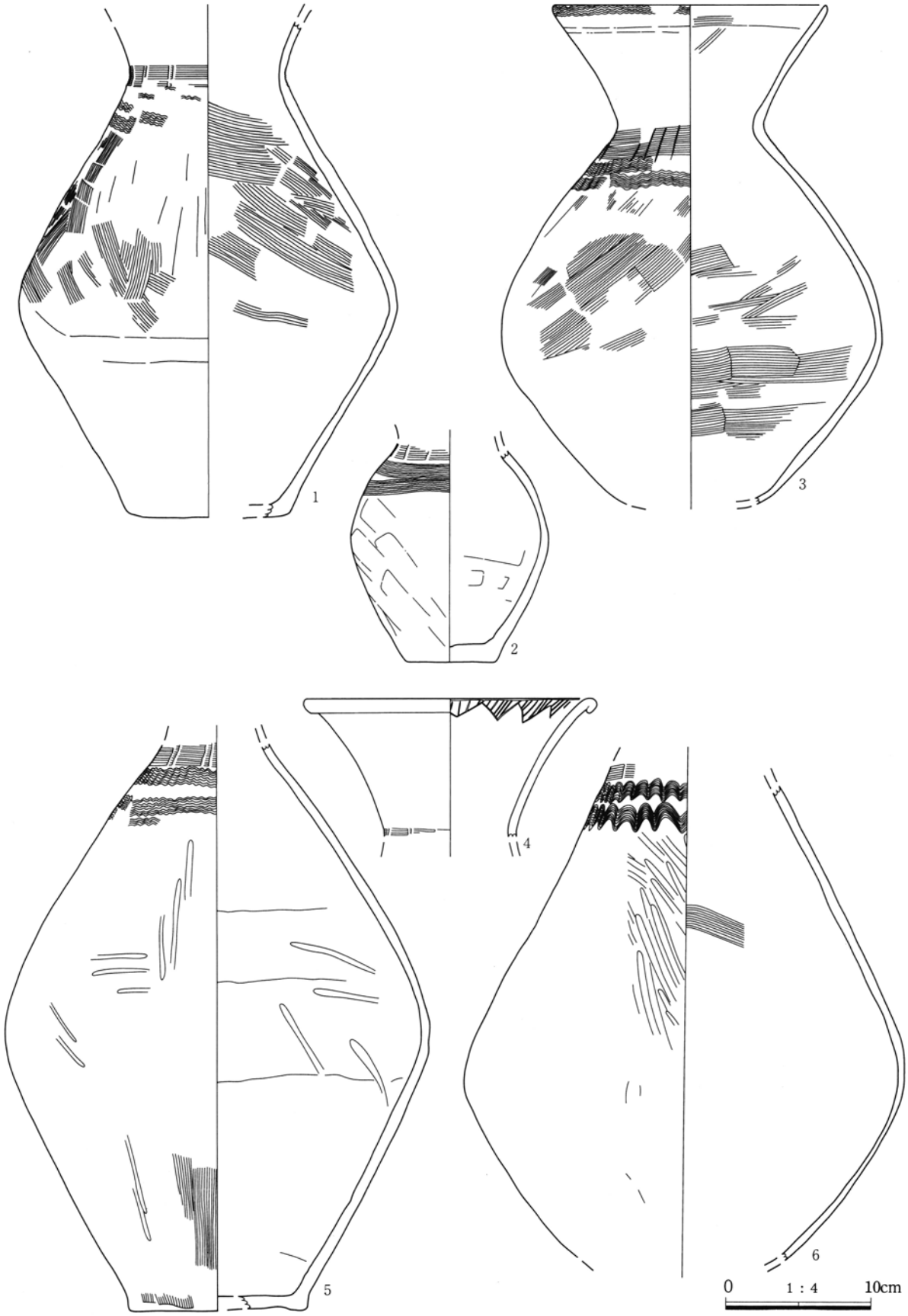


図97　KS1-14，15号遺構出土遺物（1）

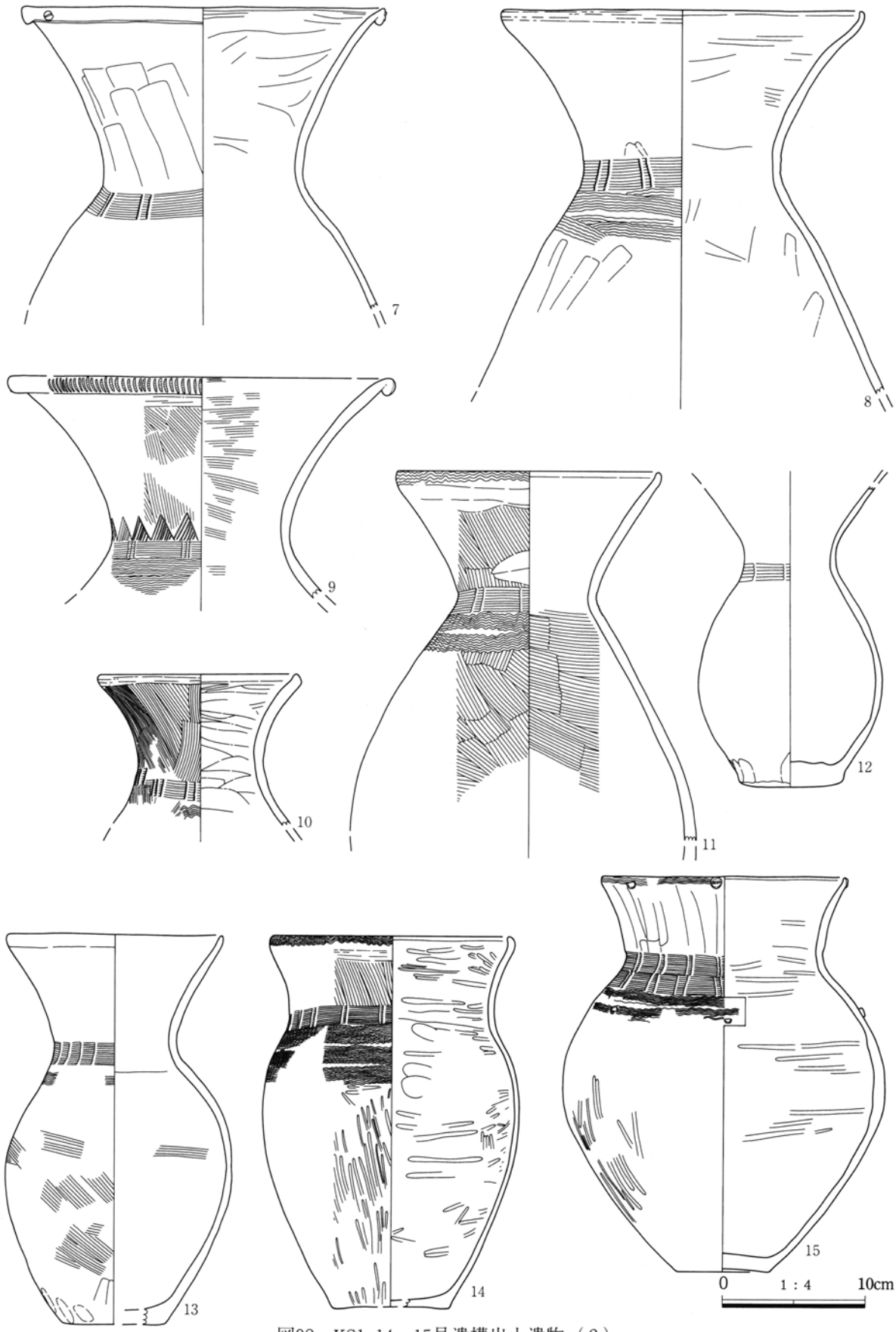


図98　KS1-14，15号遺構出土遺物（2）

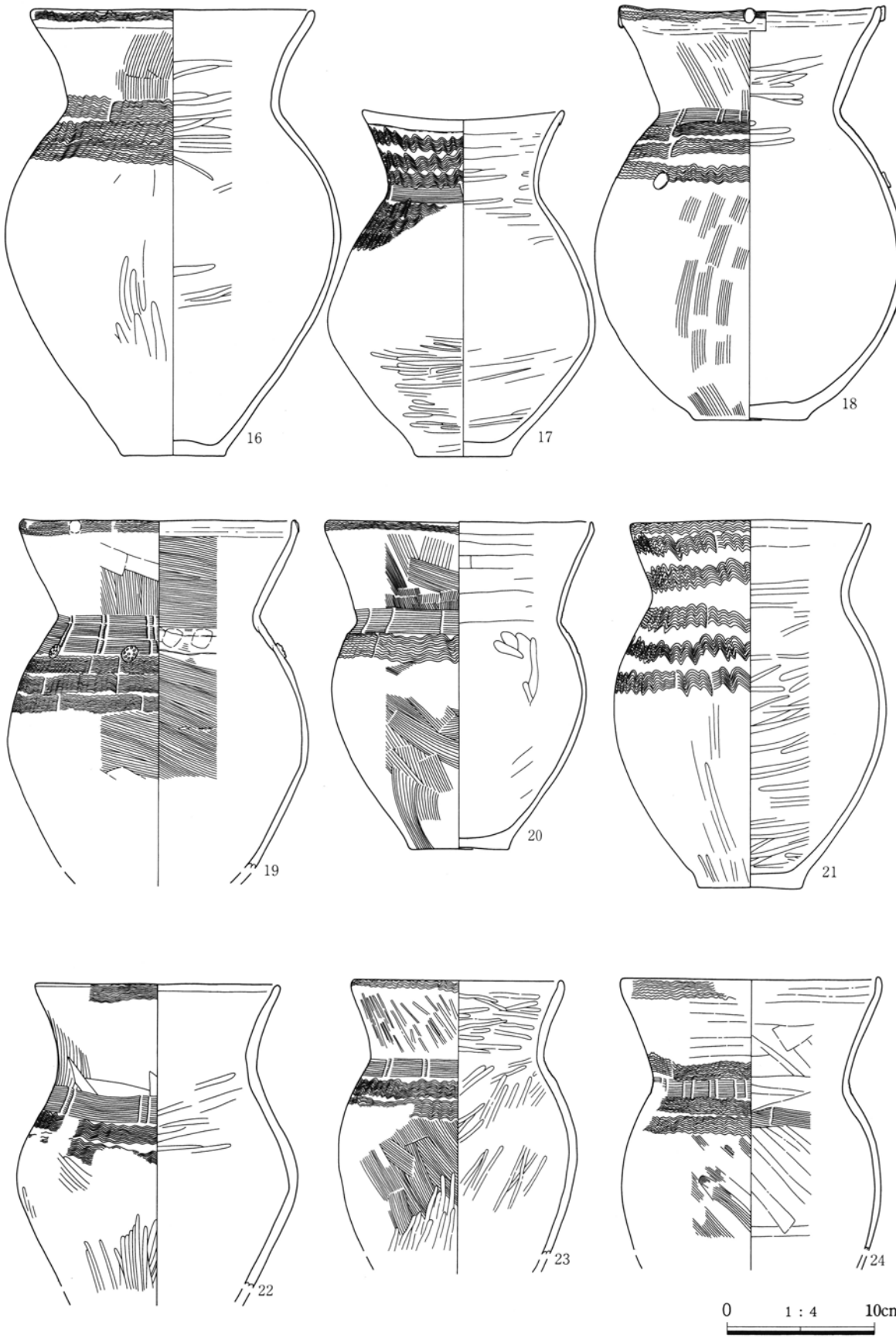


図99　KS1-14，15号遺構出土遺物（3）

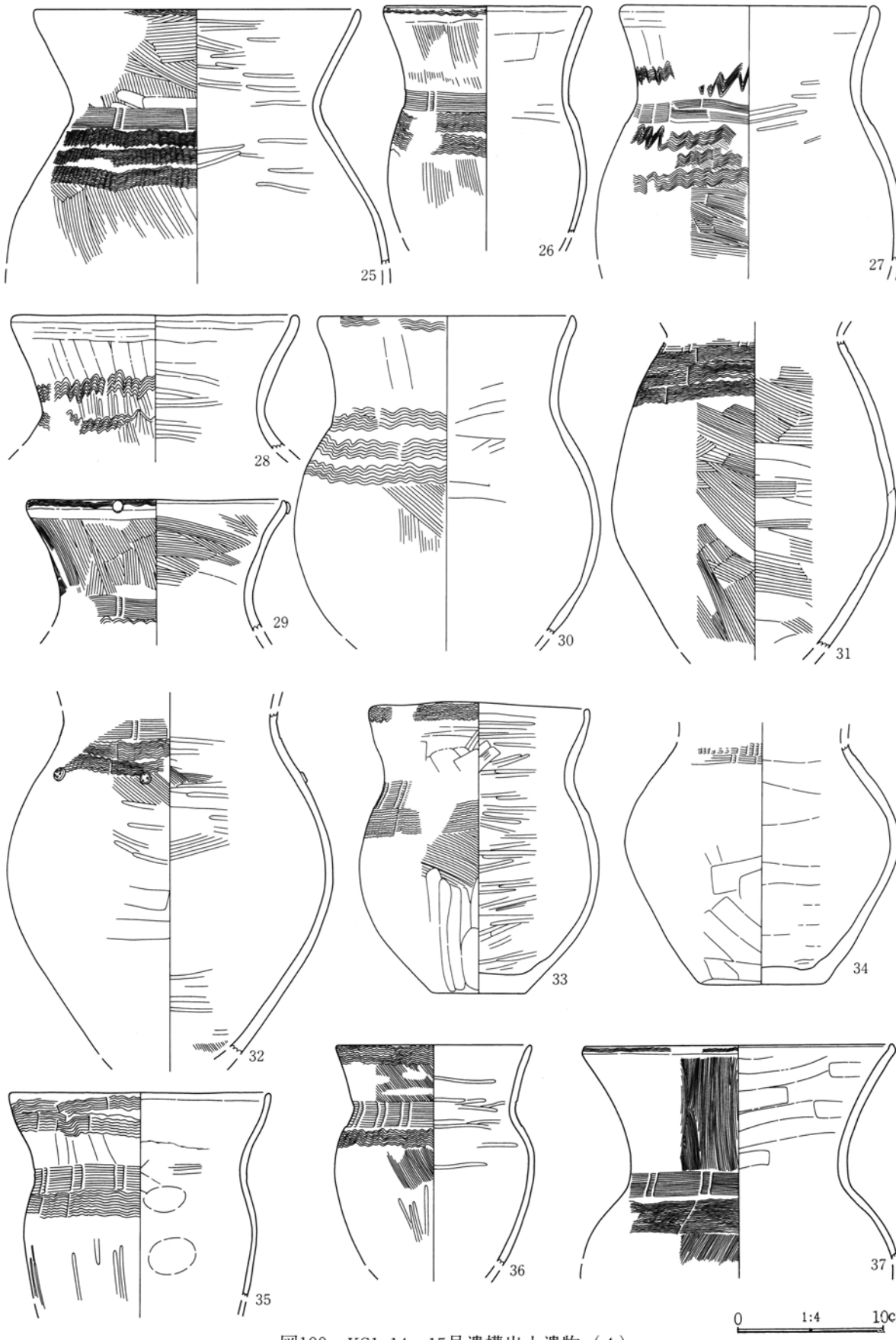


図100　KS1-14，15号遺構出土遺物（4）

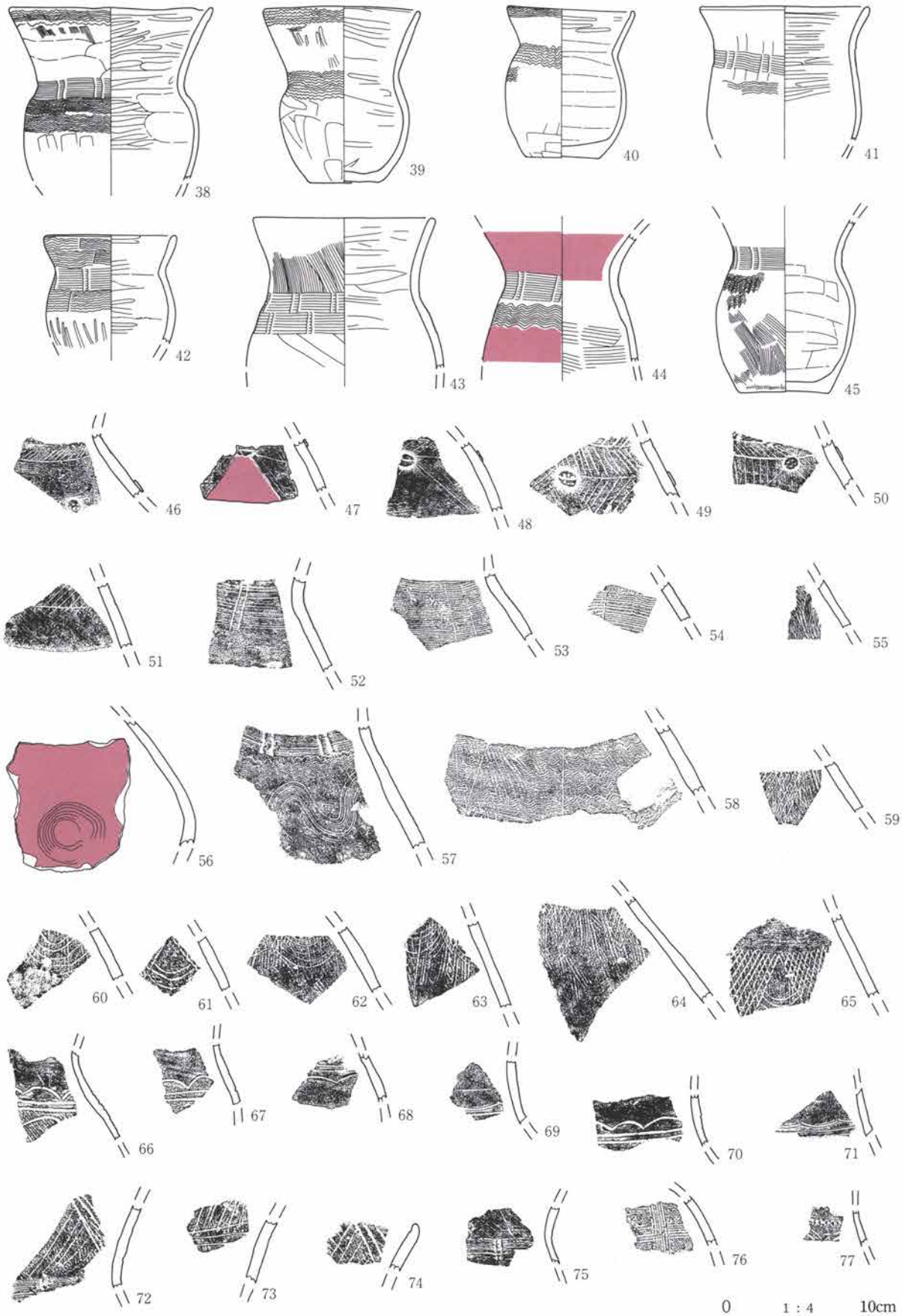


図101　KS1-14，15号遺構出土遺物（5）

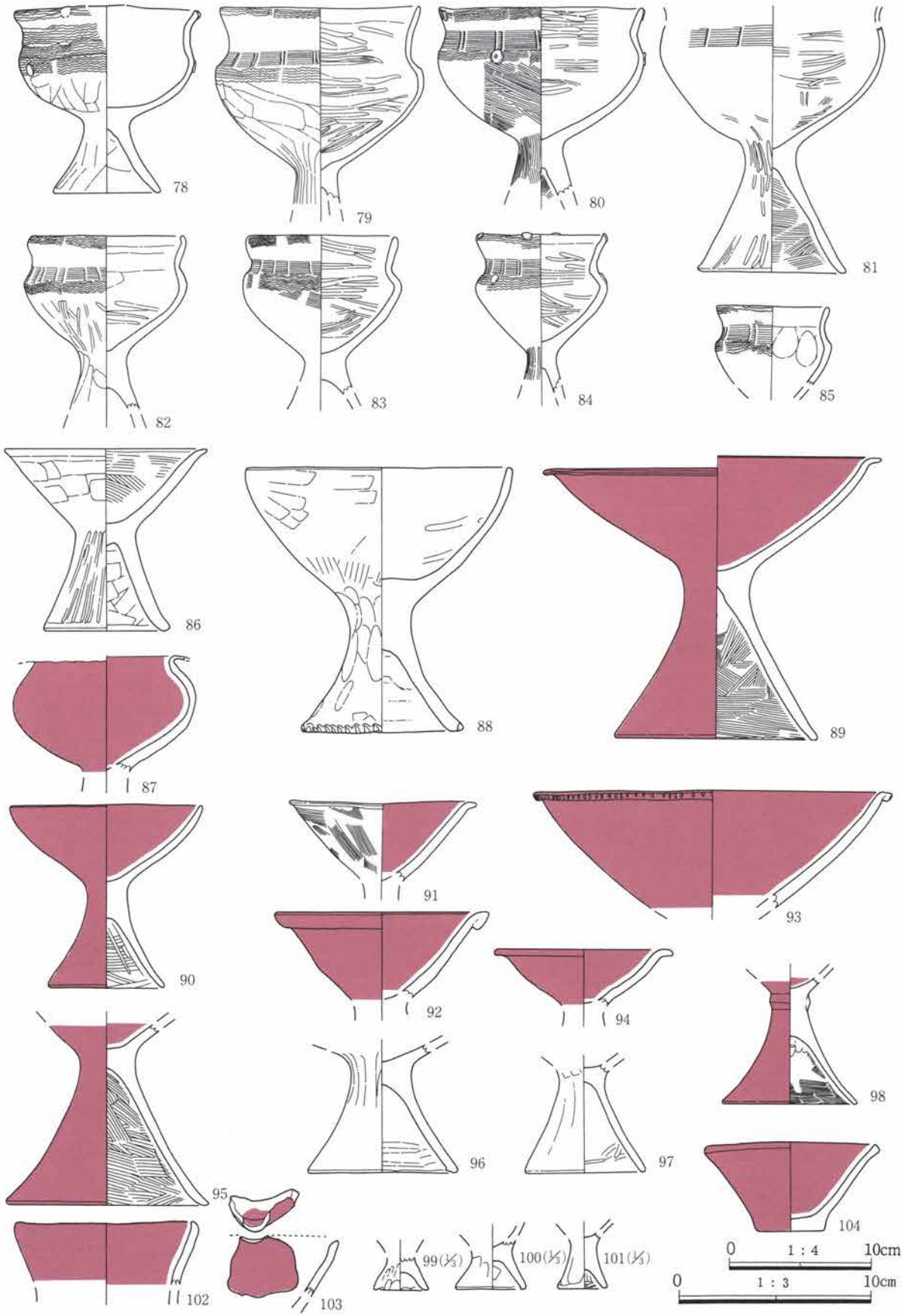


図102　KS1-14，15号遺構出土遺物（6）

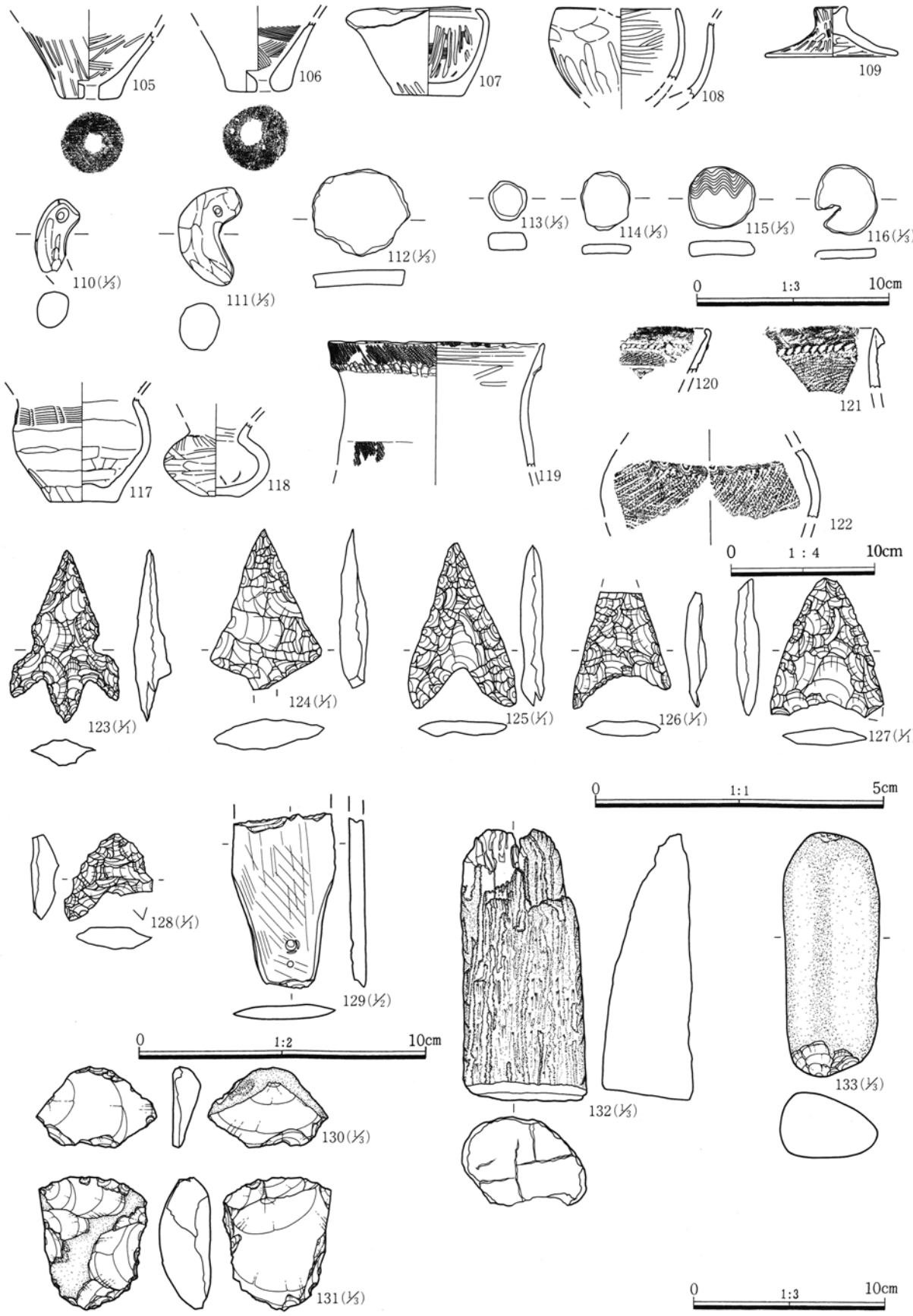


図103　KS1-14，15号遺構出土遺物（7）

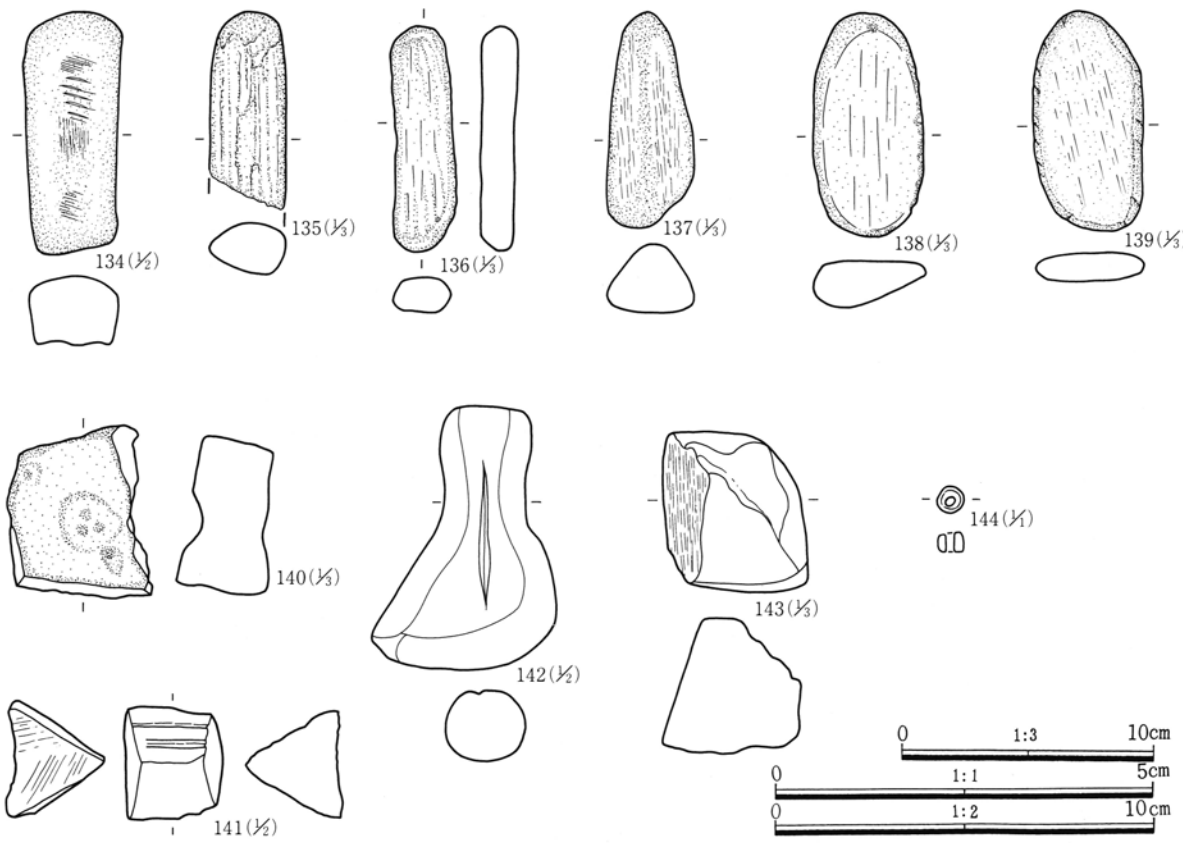


図104　KS1-14，15号遺構出土遺物（8）

その他の土器集中遺構

KS0-13号遺構

13Q26グリッド　0区南端の用水路東に位置する。As-C混土層下面で土器破片多数と打製石斧1点が集中して出土した。土器破片は壺・甕類で4個体分の底部破片を含む。いずれもほとんど接合しなかった。破片を取り上げたところ、その下位で胴部に赤彩のある壺が逆位で出土した。口縁部を欠くが胴部は完形である。その西にはやや大型で厚みのある壺ないし甕の底部が逆位で出土している。土器を埋設する土坑の掘り方は不明瞭だった。

KS1-19号遺構

13A25グリッド　隅丸方形の土坑である。ロームまでを掘り込む深い掘り方を持つ。断面形は中段のある箱掘り。埋没土は底面から中位まではAs-Cを含まない黒褐色土、中位以上はAs-C混土である。中位～下位に土器破片が出土している。出土した遺物は壺や甕であり、破片化していて殆ど接合しなかった。

KS1-24号遺構

13A25グリッド　1区南端に位置し、土器棺墓の上層にあたる。As-C混土を除去したところで浅い落ち込みに遺物が集中して出土した。この集中部分を遺構として認定したが、土器集中遺構の一部である。出土した遺物は壺・甕・高坏・小型壺・ミニチュア土器などであり、多くが小破片である。脚が四角柱状になる高坏がある。

KS1-39号遺構

13J27グリッド　37号遺構と38号遺構（いずれも壺棺墓）の間に位置する。長軸2.4m、短軸2mの楕円形の範囲に土器破片多数と片岩の砥石1点が集中して出土している。破片の下には土坑は確認されなかった。土器の構成は壺・甕・台付甕・高坏の破片である。中型品が多いが接合率は低い。三角すかしの高坏の脚破片1点を含む。

KS1-43号遺構

13H27グリッド　直径２ｍほどの範囲に土器破片が集中して出土している。土器の範囲の西側は２号遺構（中世溝）に切られている。破片の下には土坑は確認できない。出土した土器はほぼ完形の小型台付甕１点と壺・甕・高坏の細かい破片である。

KS1-45号遺構

13K27グリッド　１区北寄りに位置する。As-C混土層下面で直径１ｍほどの範囲に土器破片が集中して出土している。破片の下には土坑は確認されなかった。土器は甕・台付甕など複数個体である。細かい破片が多く復元率は低い。

KS1-49号遺構

13E25グリッド　１区南寄りに位置する。14・15号遺構の土器を取り上げたところ、下から土坑と土器を確認した。出土した土器は複数個体の壺と甕である。３個体は設置の状況を残す。土器１は壺の頸部から胴部、土器４は甕の口縁部～胴部である。土器１は正位、４は逆位で出土した。いずれも筒状の形態を保っている。土器３は甕の胴下半部以下から底部で、逆位に設置されていた。土坑は楕円形で丸底である。埋没土は黒色粘質土で、動物骨破片・炭化物を含む。土器棺墓の可能性もある。

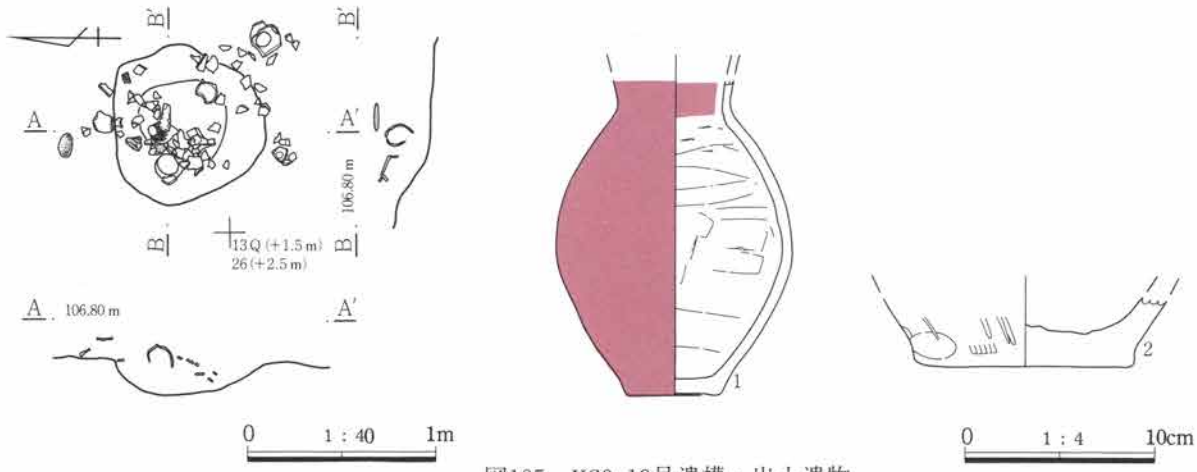


図105　KS0-13号遺構・出土遺物

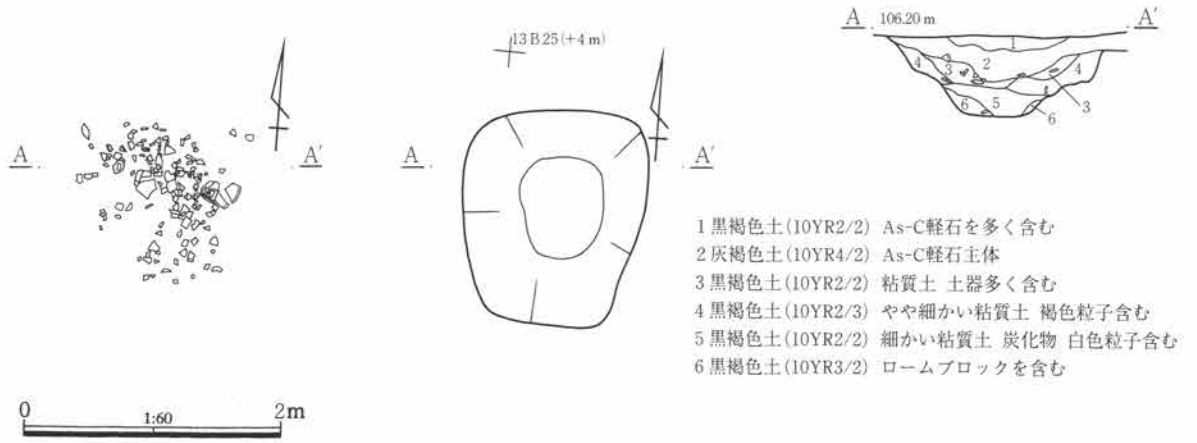


図106　KS1-19号遺構

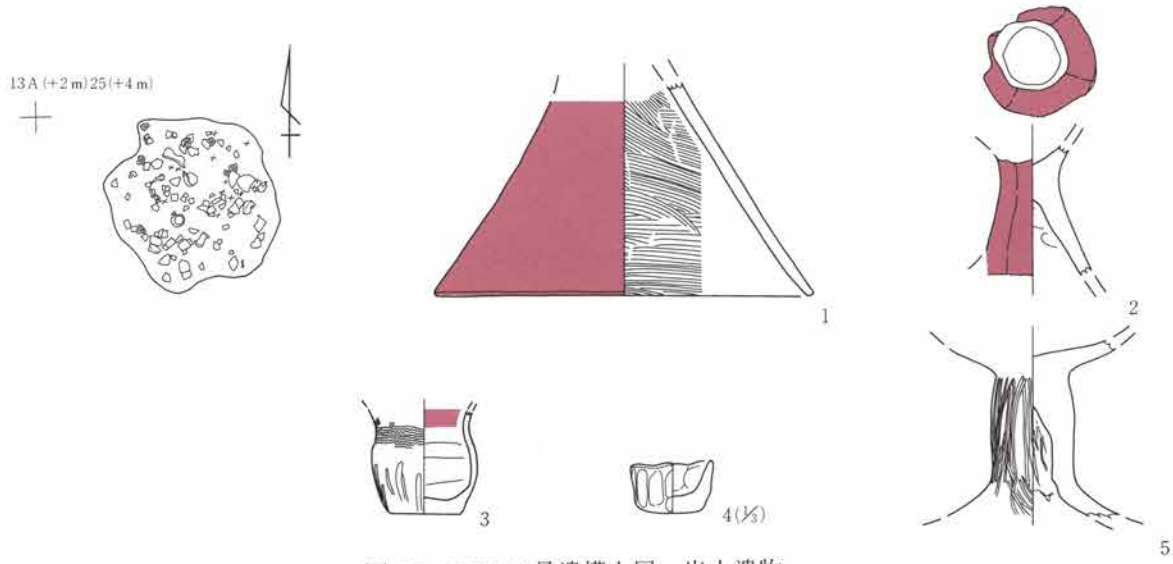
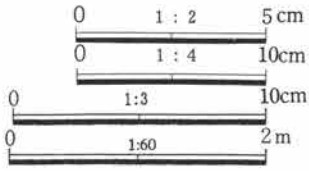


図107　KS1-24号遺構上層・出土遺物

図108　KS1-39号遺構・出土遺物



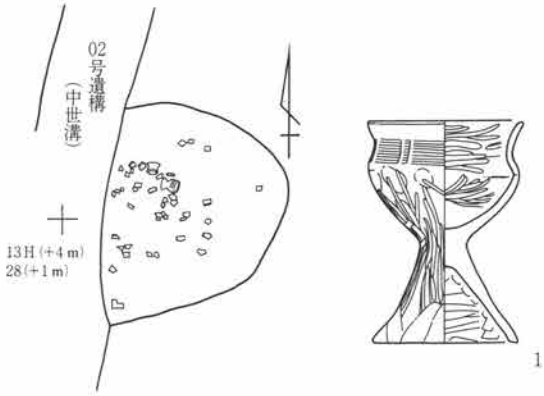


図109　KS1-43号遺構・出土遺物

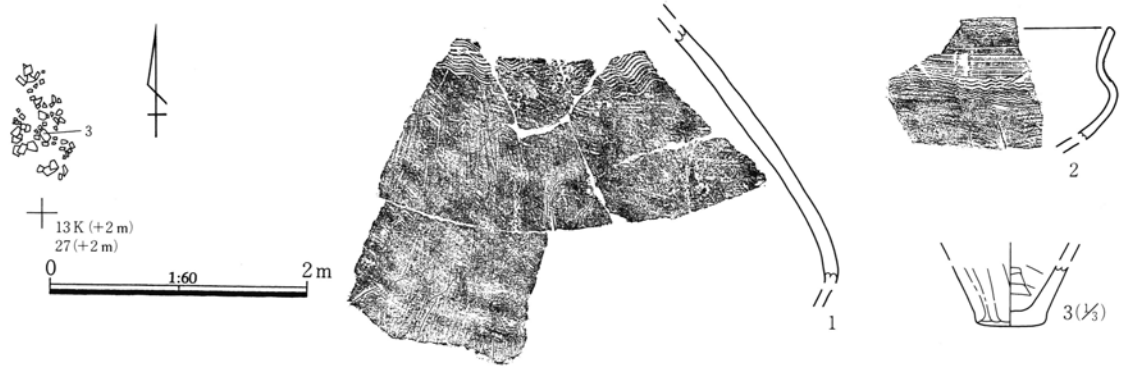


図110　KS1-45号遺構・出土遺物

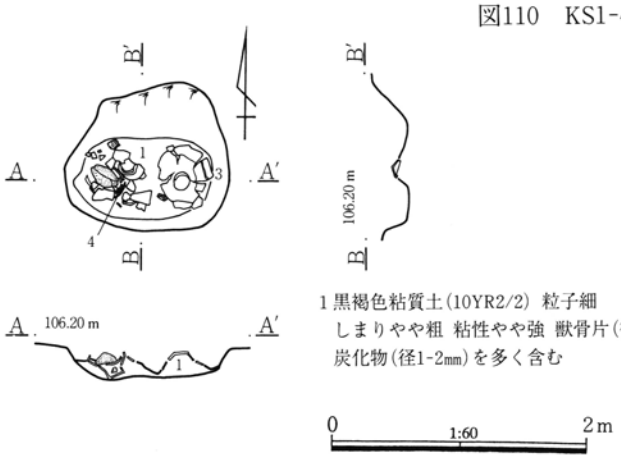


図111　KS1-49号遺構

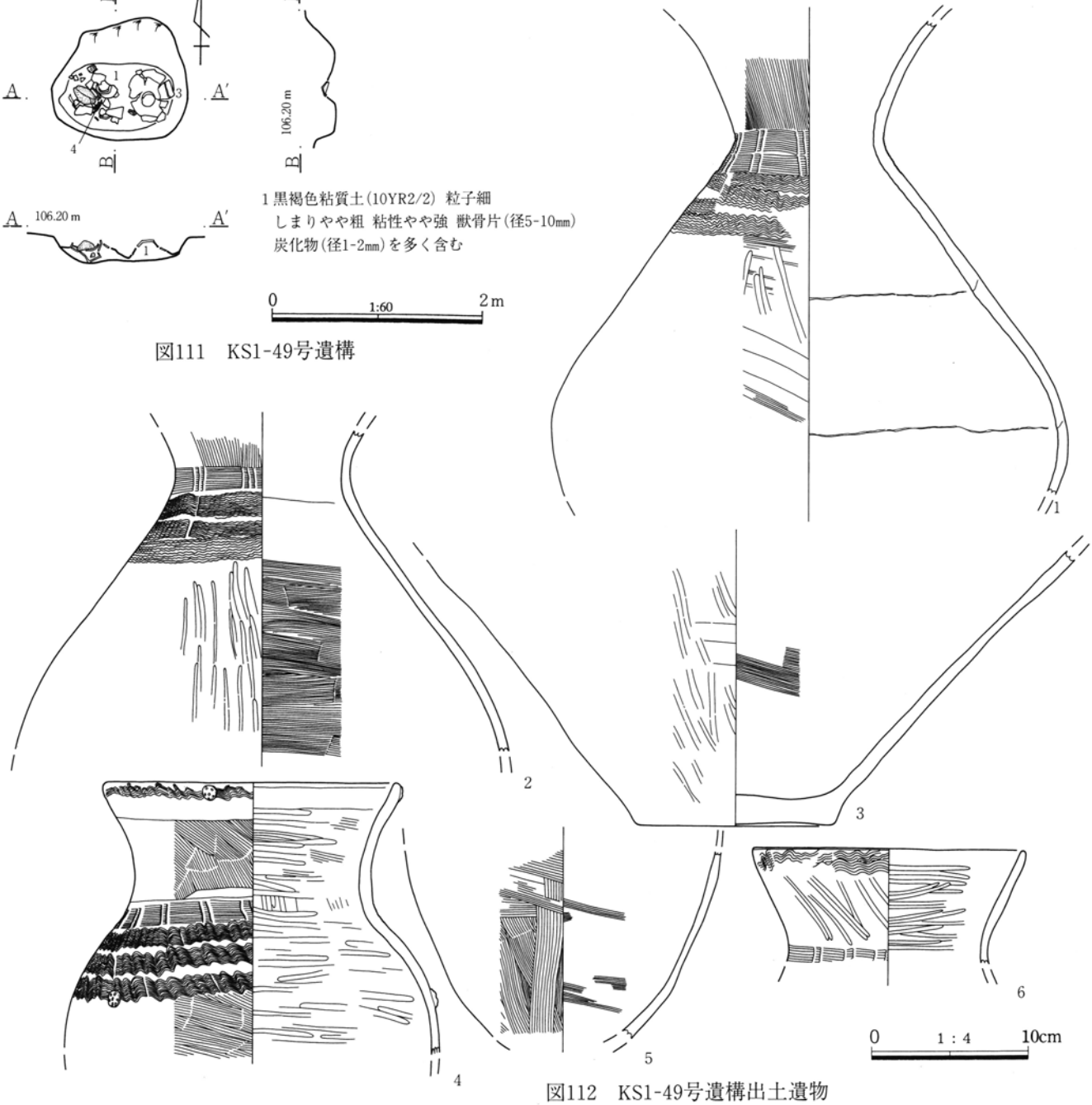


図112　KS1-49号遺構出土遺物

（5）　土坑

KS1-04号遺構

13D27グリッド　1区西よりに位置する。長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形土坑である。上層からは小型壺・凹石・土器破片が出土する。土坑の埋没土はAs-Cを含まない暗褐色粘質土である。

KS1-23号遺構

13B24グリッド　18号遺構（竪穴住居）の南西に位置する。円形、箱掘状の土坑である。土坑下面には壺の底部と破片が出土している。

KS1-25号遺構

13D24グリッド　18号遺構の北に位置する。円形、丸底状の浅い土坑である。埋没土は粒子の細かい灰と炭化物を含む暗褐色土である。下層では白色の灰が層状をなして堆積する様子が観察される。焼土は含まれない。

KS1-26号遺構

13F24グリッド　1区東の壁際に位置する。不整形、皿状の土坑の中に、壺の口縁部と完形の鉢が出土した。記録は遺構写真のみである。

KS1-06号遺構

13C27グリッド　1区西寄りに位置する。隅丸長方形の土坑である。掘り方は浅い箱掘状、埋没土の上層からは壺、甕などの土器片、下層からは灰と炭化物が出土している。遺物は無文の壺の口縁～胴部、壺や甕の底部片など複数個体である。未焼成土器片も見られ、土器焼成跡の可能性がある。

KS1-30号遺構

13D25グリッド　29号遺構の北に位置する。As-C混土を除去したところで落ち込みとして確認された。底部は円形、全体に形を整えて掘った意図が見いだせない不整形の土坑である。As-C混土層下に土器破片、炭化物、焼土粒を含む黒褐色土層がある。またその下には下面に灰層が認められる暗褐色土層がある。

KS1-55号遺構

13G28グリッド　1区西端に位置する。As-C混土層下で確認された。楕円形、皿状の浅い土坑である。埋没土中には灰と微少の炭化物粒を含む。

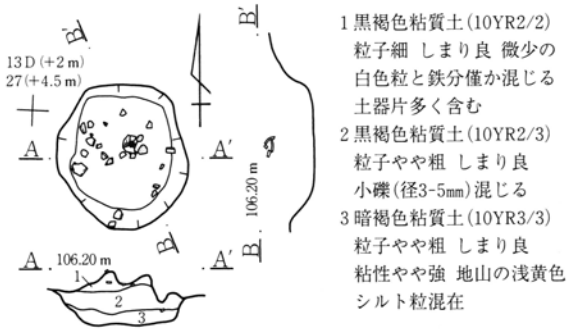


図113　KS1-04号遺構

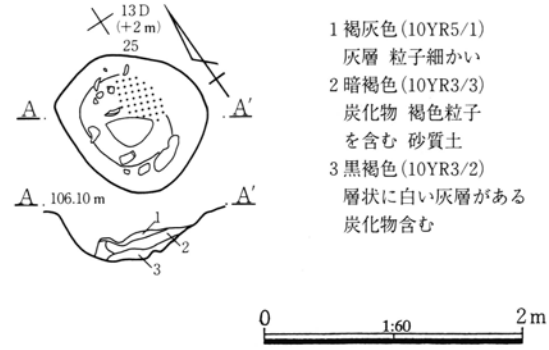


図114　KS1-25号遺構

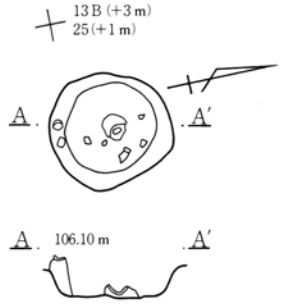
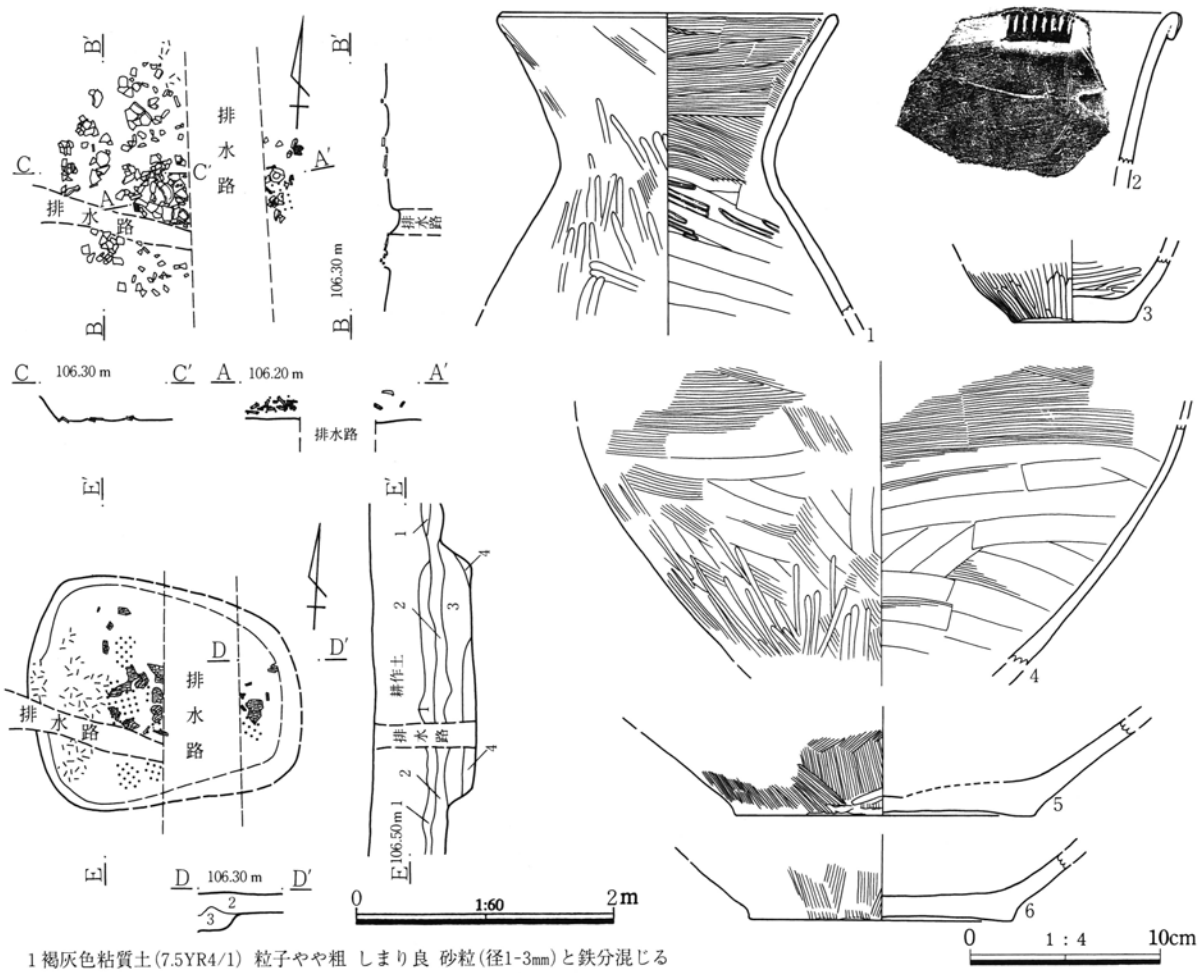


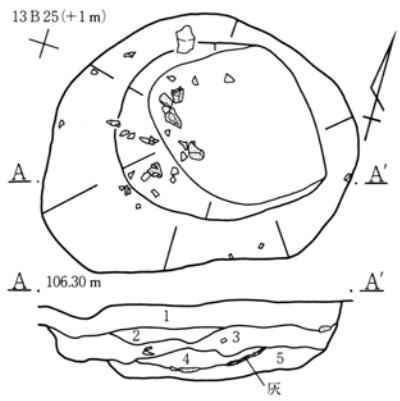
図115　KS1-23号遺構

図116　KS1-26号遺構出土遺物



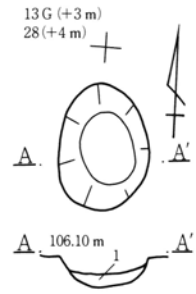
1 褐灰色粘質土(7.5YR4/1) 粒子やや粗 しまり良 砂粒(径1-3㎜)と鉄分混じる
2 黒褐色粘質土(10YR2/2) 粒子細 しまり良 As-C軽石(径1-5㎜)若干混じる
3 黒色粘質土(10YR2/1) 粒子細 しまり良 土器片と炭化粒(径5-10㎜)混じる
4 黒色粘質土(10YR2/1) 粒子細 しまりやや弱 土器片下に炭化粒と灰 又一部灰白色粘土粒を含む

図117　KS1-06号遺構・出土遺物



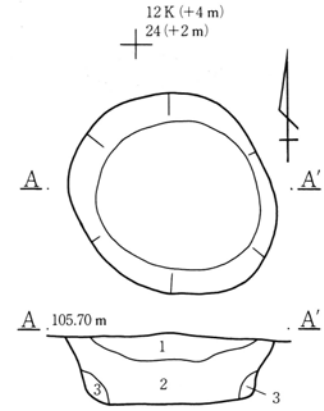
1 黒褐色土(10YR2/2) As-C軽石を多く含む
2 灰黄褐色土(10YR4/2) As-C軽石主体層
3 黒褐色土(7.5YR2/2) 土器 炭化物焼土粒を多く含む粘質土
4 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色粒子を多く含みやや砂質＋灰層
5 黒褐色土(10YR2/2) 細かい粘質土

図118　KS1-30号遺構



1 褐灰色粘質土(7.5YR4/1) シルト質 粒子細 しまりなし 灰と微細粒の混土

図119　KS1-55号遺構



1 黒色粘質土(10YR7/1) 粒子細 しまり弱 含有物なし
2 黒色粘質土(10YR2/1) 粒子細 粘性やや強 含有物なし
3 にぶい黄褐色シルト質土(10YR4/3) 粒子やや細 ローム粒混

0　1:60　2m

図120　KS2-89号遺構

（6） 遺構外遺物

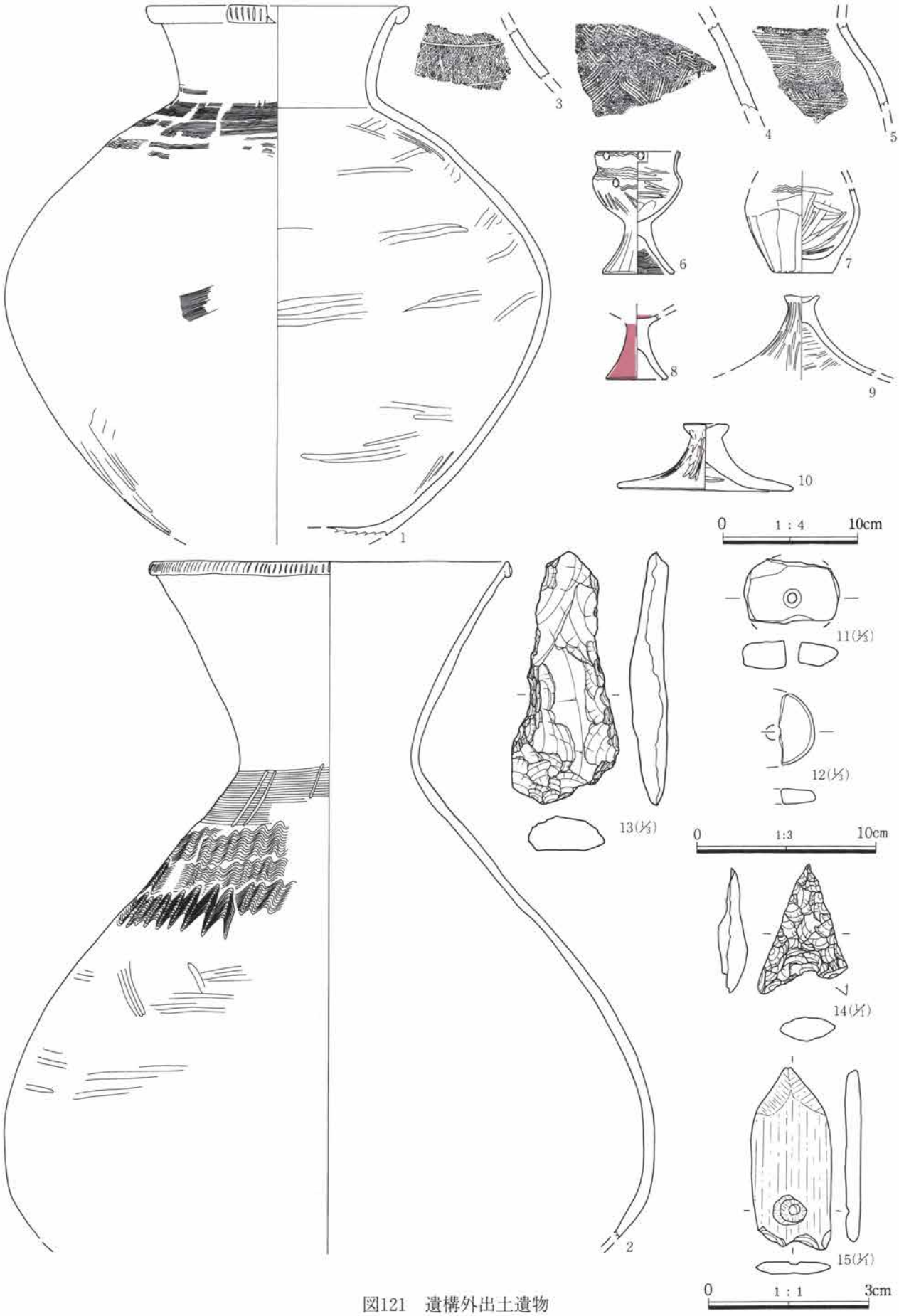


図121　遺構外出土遺物

3　正観寺西原遺跡

SN29号遺構

調査区北端の北西から南東にのびる台地上に位置する竪穴住居である。上面が削平され、確認面から床面までの深さも最大で10㎝強しかない。西壁部は調査区外だが平面形は隅丸方形と推定できる。床面からは樽式の甕、台付甕が出土している。

この台地上で確認された弥生時代の遺構はこの住居のみであるが、北に接する菅谷石塚遺跡のAs-C混土層下で、ほぼ同時期の土器破片が出土しており、関連が推測される。

位置　18H48グリッド

規模　縦（7.2）m、横（5.9）m

形状　隅丸方形か　西壁は調査区外

重複　なし

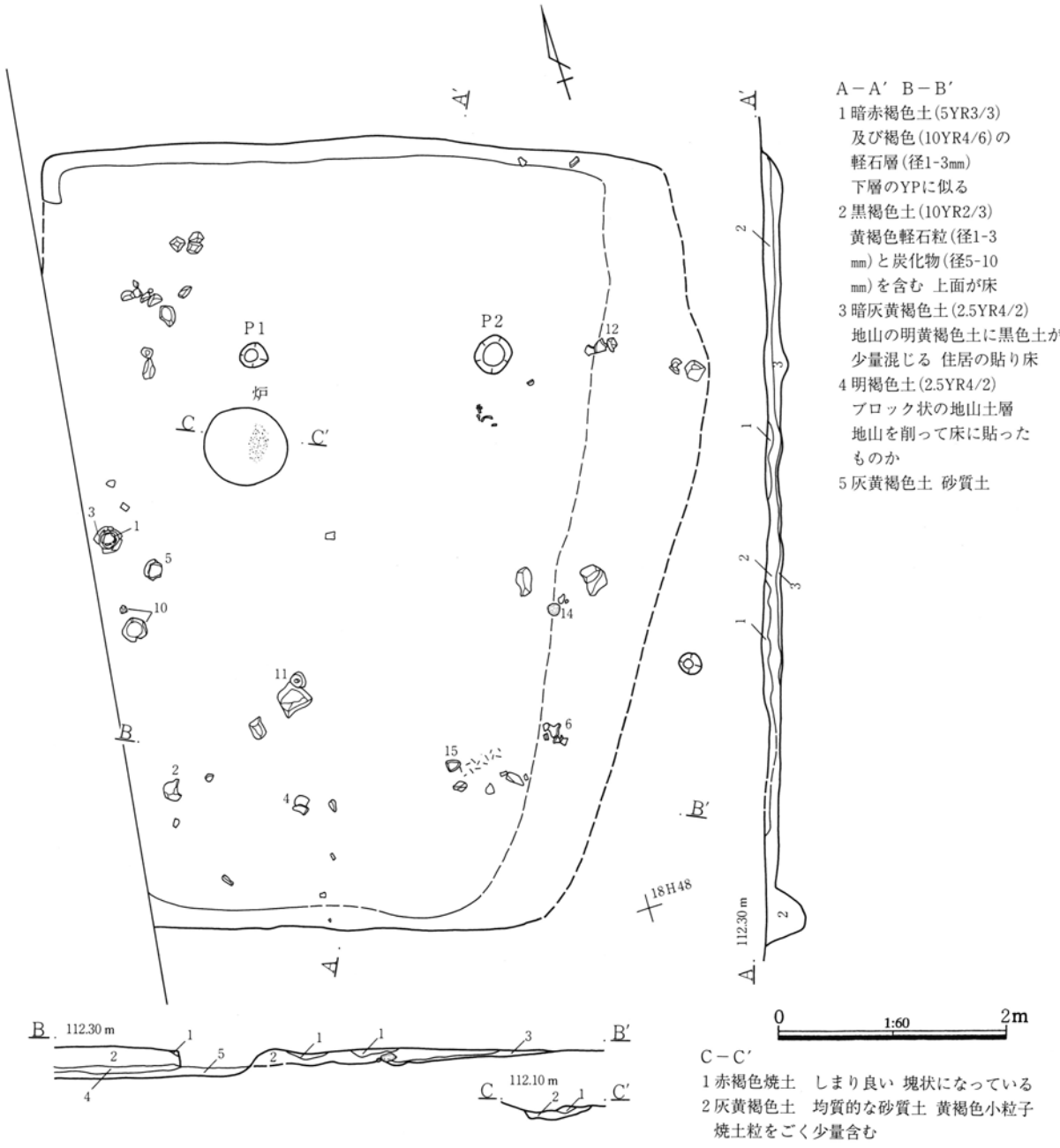


図122　ＳＮ29号遺構

主軸方位　N12°E

埋土　黒褐色土。炭化物を少量含む。As-Cは含まない。

床面　暗灰褐色土の貼り床を持つ。

柱穴　4本を確認した。

炉　北西柱穴の南側に地床炉がある。皿状の窪みに焼土塊が残存していた。

その他　南辺の柱穴近くにピットがある。住居南東隅に炭化物が出土している。

出土遺物　樽式土器の甕・台付甕が床面で出土。土器3は甕の口縁部～胴部を器台に転用した土器で、3の上に1を載せた状態で出土した。1は小型の甕の頸部以下であるが、遺構確認面で破断面が露出しており、頸部以上は攪乱で破壊されている可能性もある。近接して同様に器台の用途が推定される甕の口縁～頸部と、大型台付甕が出土している。床下からは石核1点が出土している。

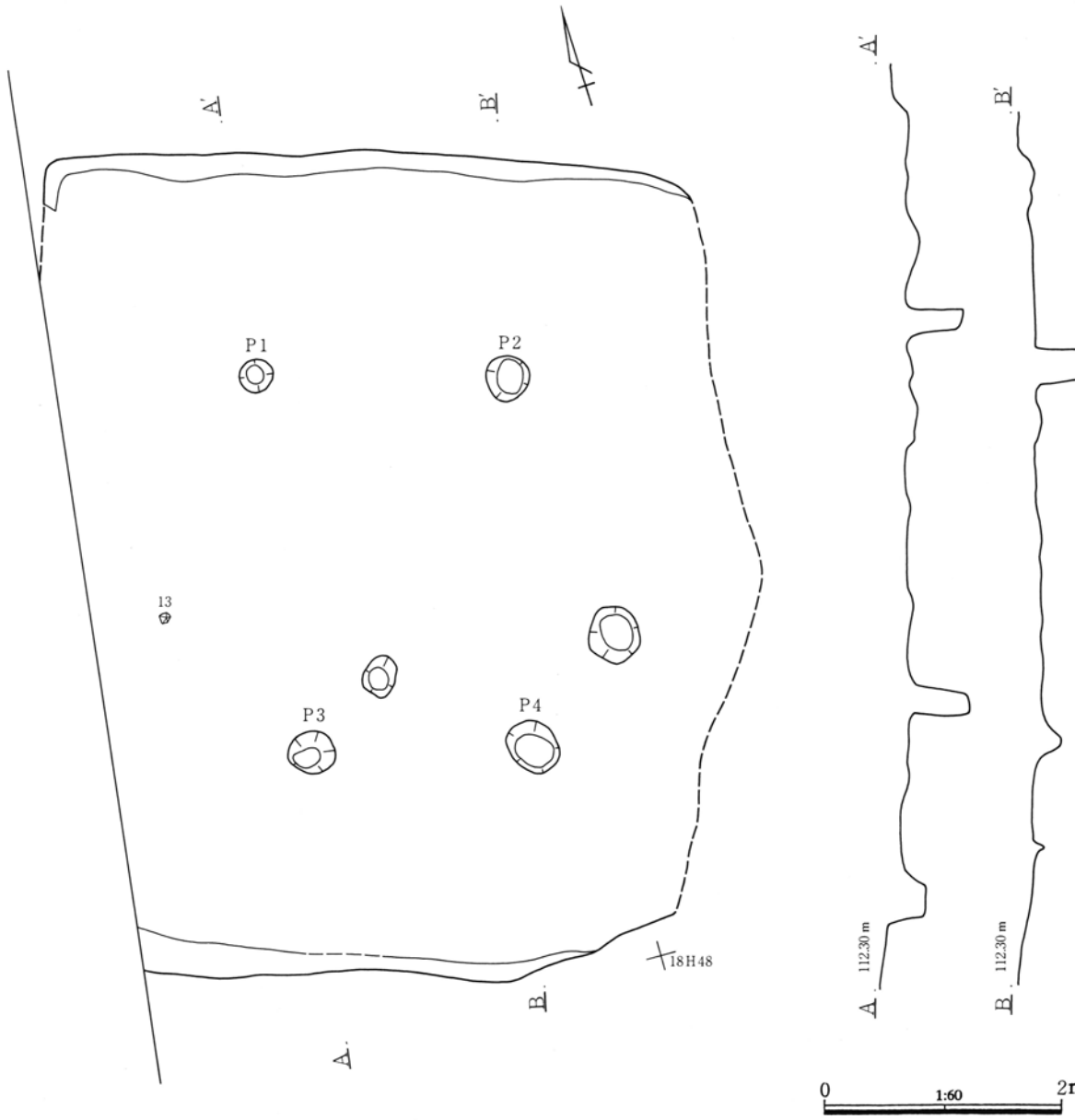


図123　ＳＮ29号遺構掘り方

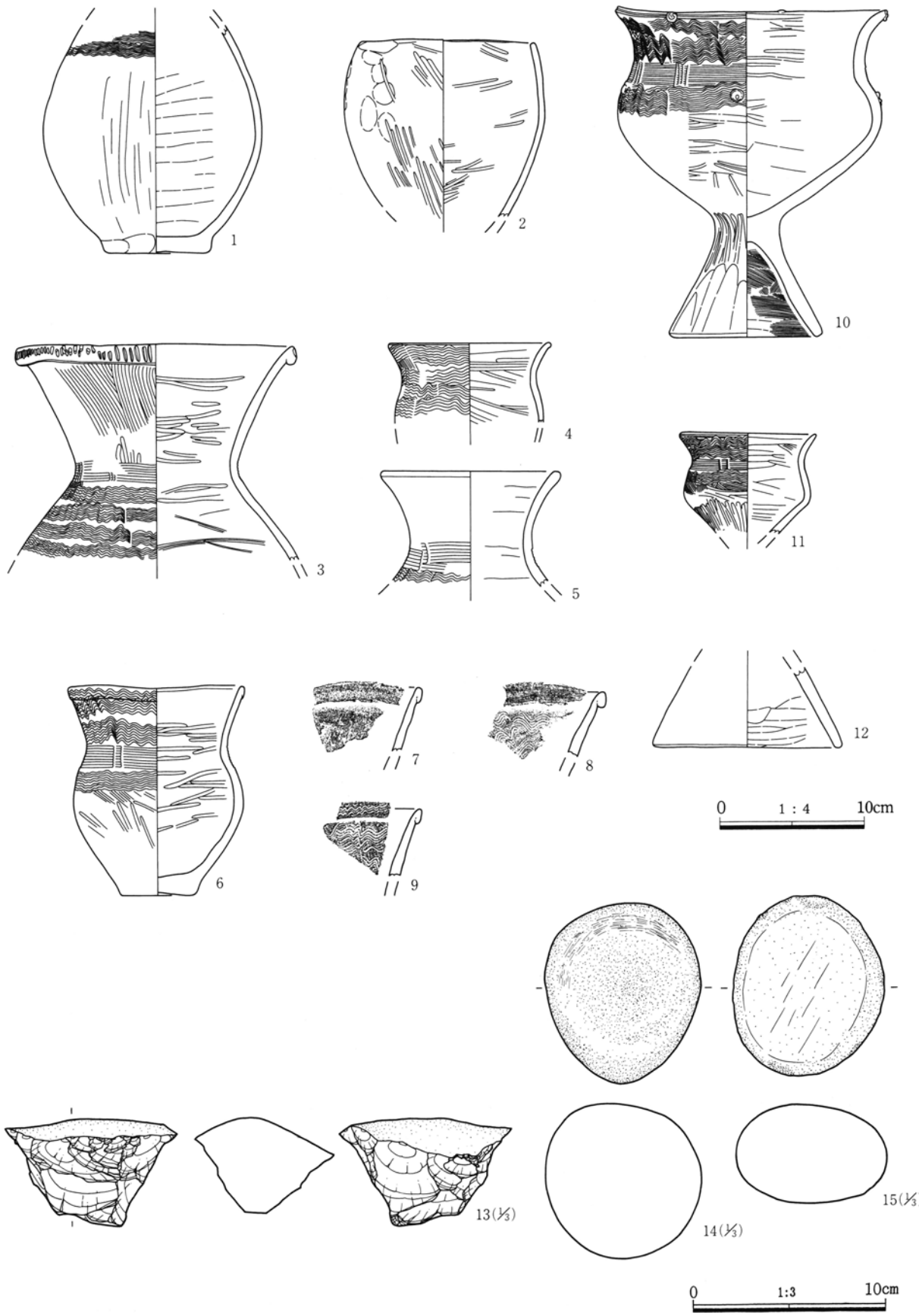


図124　ＳＮ29号遺構出土遺物

SN14号遺構

17B40グリッド　正観寺西原遺跡の調査区のほぼ中央、泥流丘の南に位置する。樽式の土器を一列に並んだ土器埋設遺構である。泥流丘は土地改良により削平されている。遺構の位置するところは泥流丘から南に地形が下がっていくところにあたる。現代耕作土を除去した下はAs-Cを含まない黒色土であり、この土層から土器が出土した。土器は５個体が北西から南東にほぼ一直線に並ぶ。周囲には自然の角礫が点在する。出土レベルは北から南に地形に合わせて下がっている。器種は北東から赤彩の坏・折り返し１段の口縁を持つ中型甕・同じく２段の口縁を持つ中型甕・小型台付甕・無彩の坏の順に並び、他に出土位置不明の無彩の坏１点が出土している。破損はきわめて少なく、小型台付甕は完形である。土器の周囲には埋設するための土坑は確認できなかった。

地形の変わり目あるいは生産域の端を意識して作られた祭祀遺構と推定する。

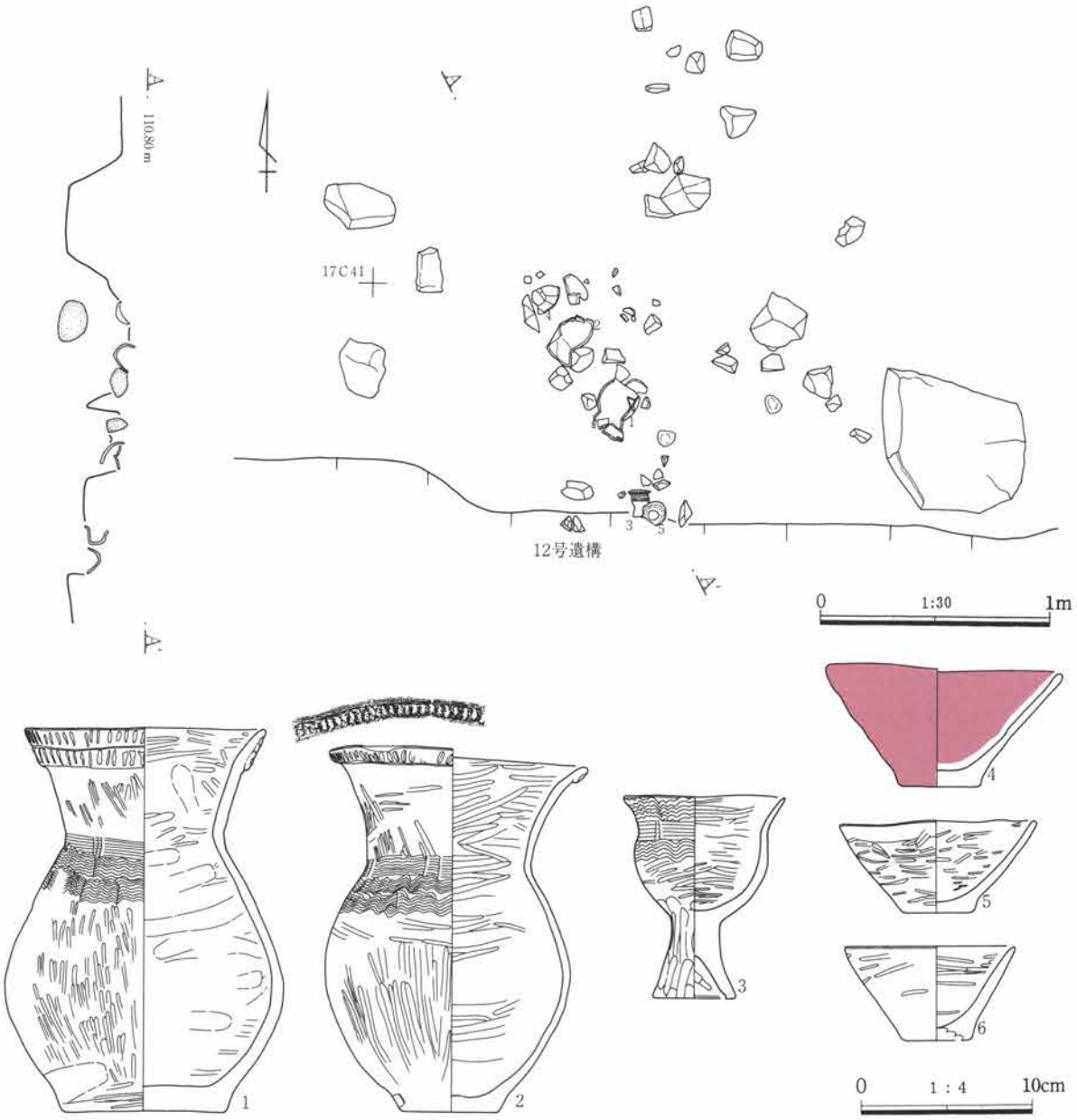
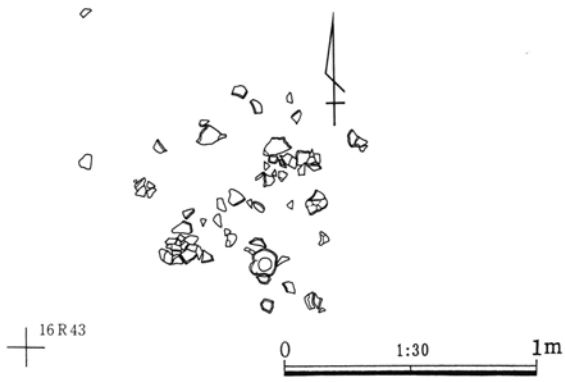


図125　ＳＮ14号遺構・出土遺物

SN27号遺構

16R42グリッド　調査区のほぼ中央に位置する。

As-C混土層下で確認された。壺１点がつぶれた状態で出土した遺構である。破片は直径約１ｍの範囲に散る。土器を埋設した土坑は確認できなかった。出土した土器は破損と風化が激しく完形には復元できないが、全ての破片が同一個体である。



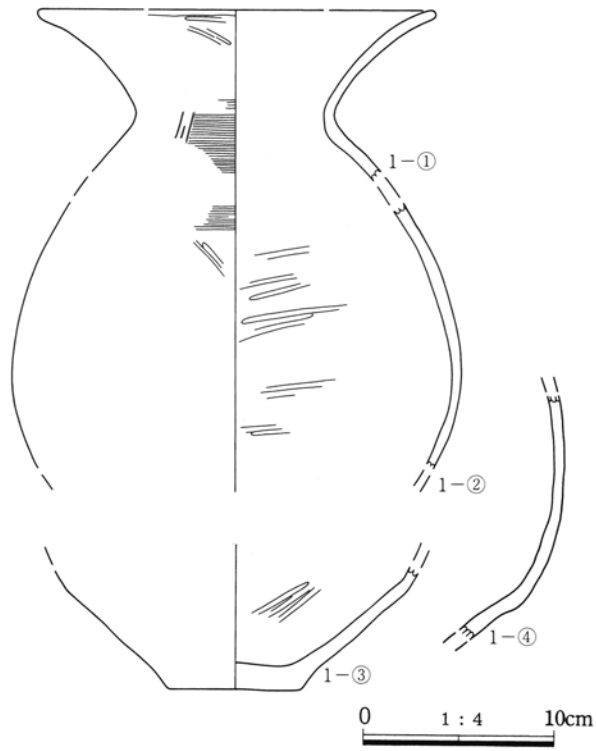


図126　ＳＮ27号遺構・出土遺物

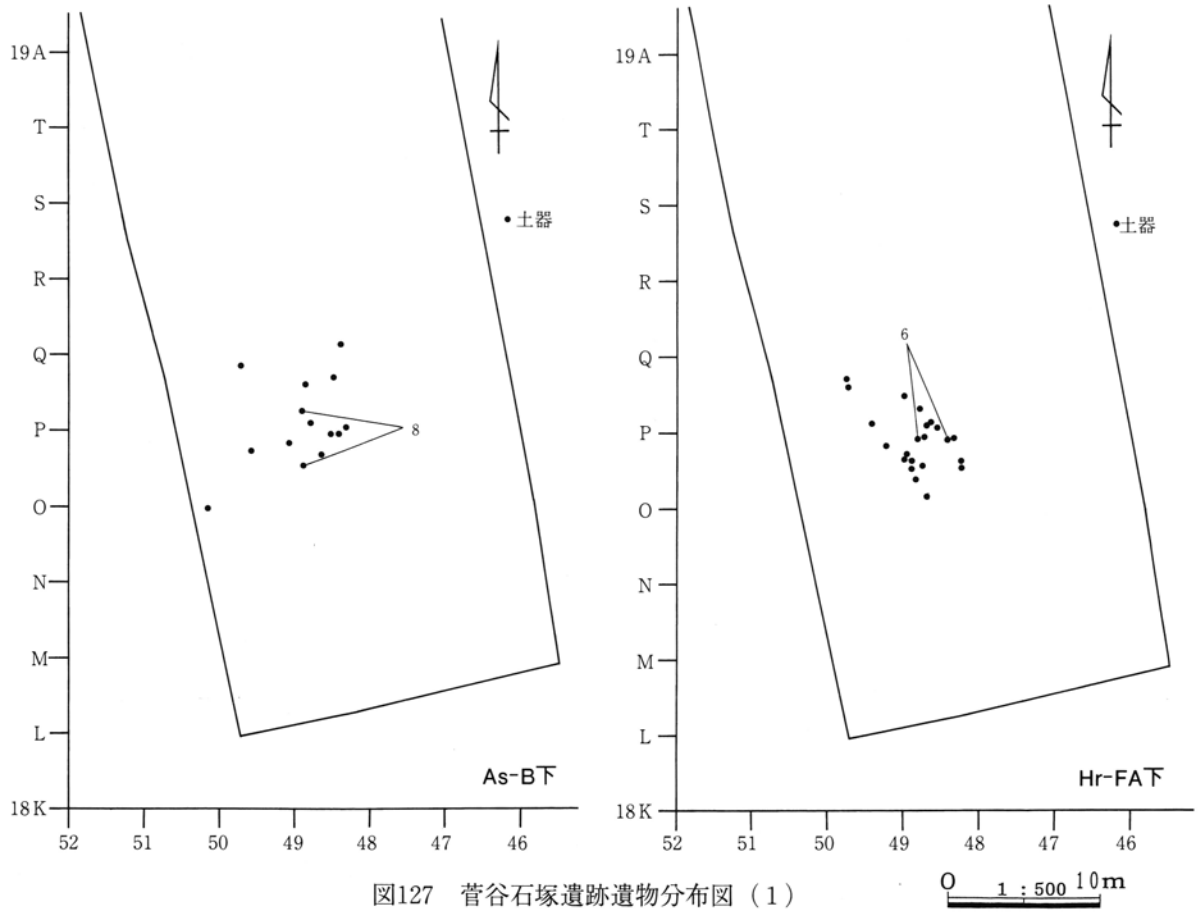


図127　菅谷石塚遺跡遺物分布図（１）

4　菅谷石塚遺跡

本遺跡調査区内ではAs-B下、Hr-FA下、As-C混土層下、ローム上面の４面調査を行い、各面で遺構が確認されている。弥生時代のものとしては調査区南端で樽式土器の破片の散布が見られた。

遺物の散布状態　遺物はAs-B下、Hr-FA下で数片ずつが確認されたが、最も多く出土したのはAs-C混土層下である。分布の範囲は調査区の南端の北西から南東にかけて、帯状に広がっている。特に集中が見られるのは18P49グリッド近辺である。この分布は本遺跡調査区から正観寺西原遺跡の北にある台地の縁辺に沿ったものと考えられる。

土器散布する範囲の中には自然礫と考えられる角礫が散じて出土しているが、角礫が集まっているところが２カ所確認されている（集石1・2）。また、１カ所で少量の焼土が確認されている。

出土遺物　遺物の多くは細片化していたが、特徴の捉えられるものを図化した。１・２のような１段折返しの口縁を持ち、口縁部に波状文を施文した甕や２段折返しを持つ壺が出土しており、樽式土器の中でも新相のものである。本遺構の南の台地上には同時期の住居があり、関連が推定される。

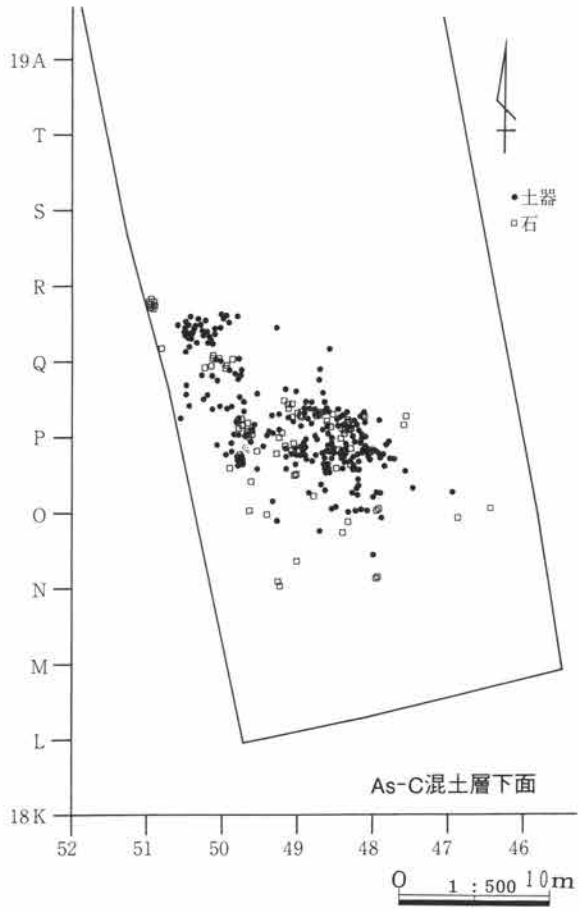


図128　菅谷石塚遺跡遺物分布図（２）

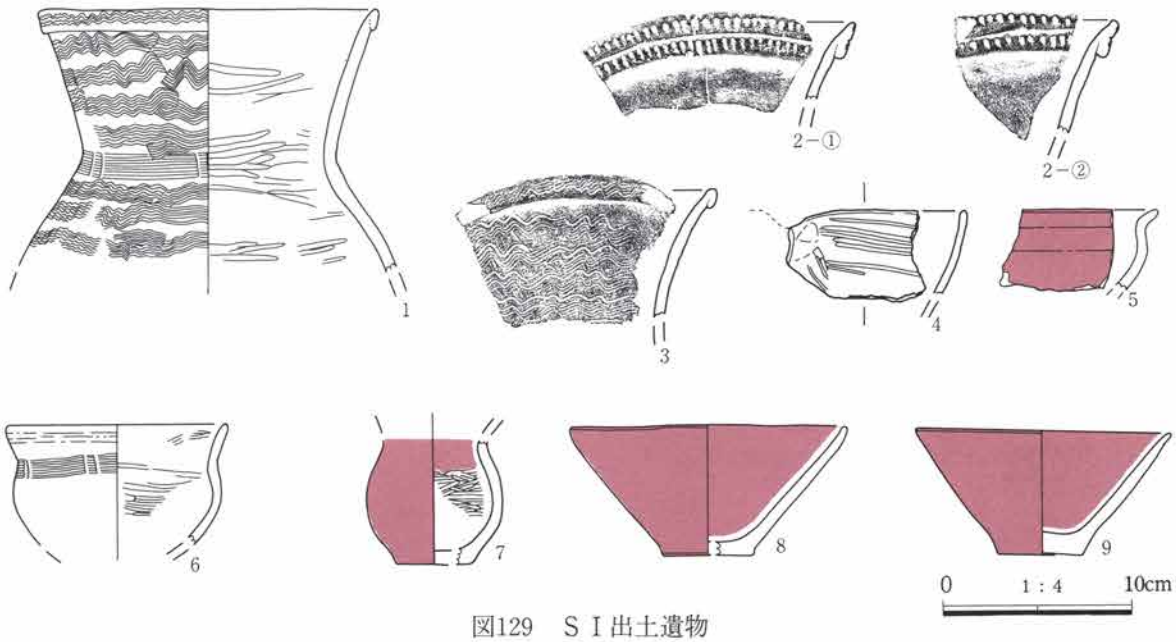


図129　ＳＩ出土遺物

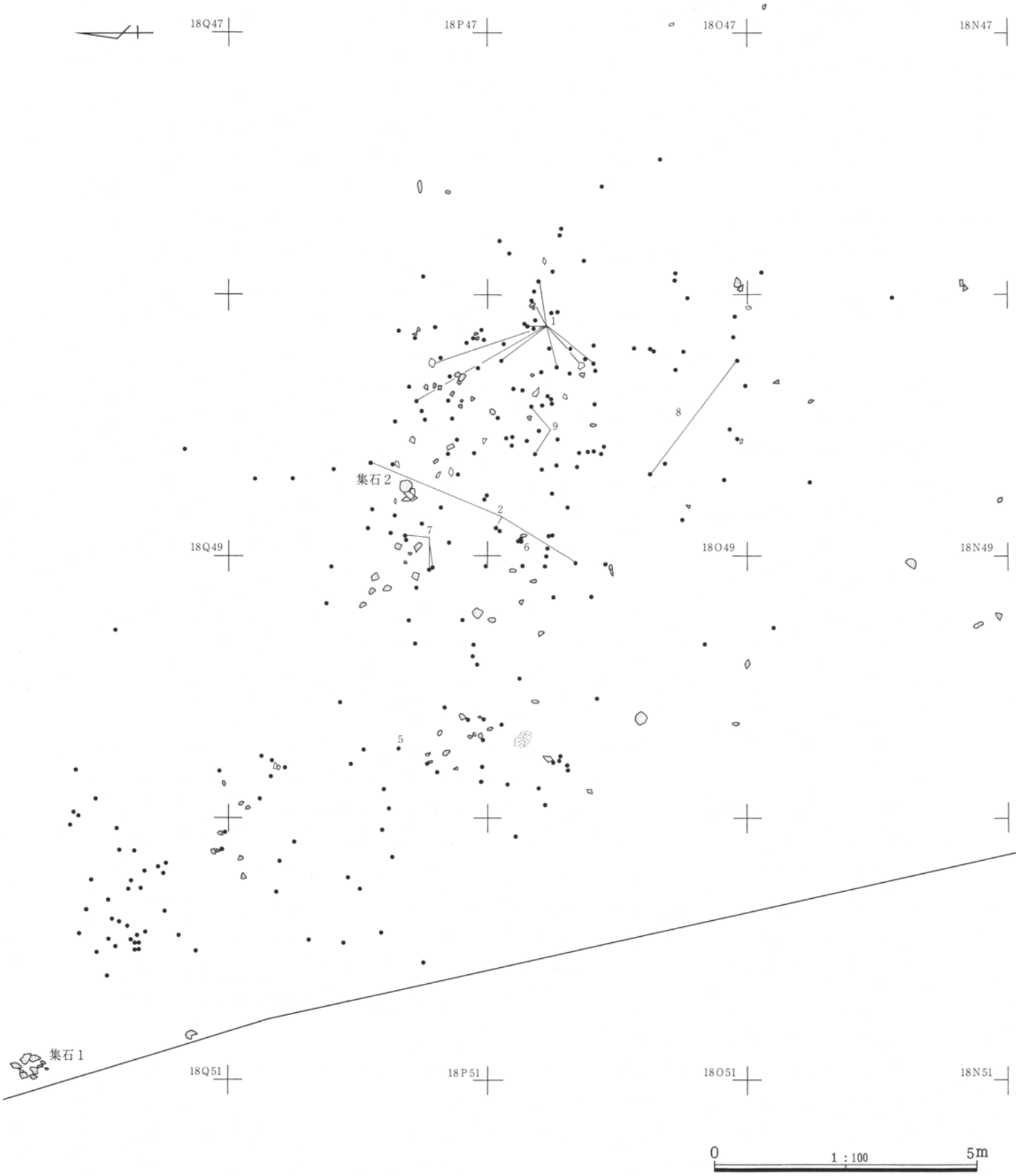


図130　ＳＩ　As-C混土層下面部分拡大図

Ⅲ　自然科学調査

1　遺物集中地域の動物骨

宮崎重雄（群馬県立大間々高等学校）

1-1　まえがき

本遺跡は群馬県高崎市小八木町志志貝戸にある。本遺跡1区の弥生時代後期の遺構から動物骨を出土した。出土した骨は800℃前後の火熱を受けて灰白色化し、亀裂や歪みを生じて細片化している。獣種はシカ、イノシシが主で、鳥類2点、ウマ1点が加わり、人骨と認められるものは検出されていない。種の同定ができた骨片は、細片化してもその特徴を明確に残すものに限られ、ごく少数であった。他の同定不可能な多数の骨片はおそらくシカまたはイノシシのものであろうが、確証を得るまでには至っていない。

1-2　検出骨

1　シカ（*Cervus nippon*）

シカの骨と認められるものは18片である。14・15号・18号・32号・49号の4遺構からで、14・15号遺構が9点でもっとも多く、49号遺構が5点でこれに続き、残り3遺構からそれぞれ1点づつ出土している。

基節骨には近位骨端の離脱したものが2点あり、幼獣がいたことを示している。14・15号遺構の2地点から臼歯歯冠部片が検出されたことは、火熱を受けてないか受けてもかなり低温で、300℃どまりの部分もあったことを伺わせている。歯のエナメル質は400℃を越える高熱が加わると、崩壊してしまうからである。

2　イノシシ（*Sus scrofa*）

イノシシと確認できた骨は14・15号・19号・25号の各遺構から知られている。4号および14・15号遺構が5点ともっとも多く、19号・25号遺構が各1点づつ出土している。

19号遺構のものは左上顎第2後臼歯で、ほぼ完全な形を保有し、咬耗は全くない。まだ萌出前で顎骨内にあったものと思われる。このため、高温に直接さらされることなく、崩壊を免れたのであろう。

イノシシの第2後臼歯の萌出は生後19-20か月とされていることから、この個体の年齢は1-1.5才ほどであろう。25号遺構のものは切歯片で、咬耗痕があり、萌出した歯であることは明らかである。それでもこの歯はエナメル質を保有していることから、火熱は殆ど加わらなかったのであろう。

3　鳥類

15号と32号遺構から出土する。いずれも鳥類の骨ではあるが、細骨片で種の同定までは困難である。32号遺構の指骨片がキジかそれよりやや小型の鳥類と推定されるにとどまる。

4　ウマ（*Equus caballus*）

表土中からウマの左下顎第2後臼歯片と思われる歯片が3片出土している。doubleknot長は13.2㎜、歯冠高は46.4㎜である。歯冠高から推定される年齢は9-10才程の壮令馬である。

1-3　むすび

14・15号遺構ではシカが10点、イノシシが5点ほど出土している。この遺跡全体からの出土点数がそれぞれ17点、7点であることからみると、この両遺構にかなり高い密度で獣骨類が集中していることがわかる。49号遺構でも5点のシカ骨が検出され、その多さが目立つ。

関東地方およびその周辺地域の縄文時代後期～晩期の遺跡ではシカ、イノシシを主体とする焼骨が出土することが多い。群馬県内でいえば、桐生市千網谷戸遺跡、利根郡月夜野町矢瀬遺跡、北群馬郡榛東村茅野遺跡、邑楽郡明和村矢嶋遺跡などである。多くの場合、焼骨は祭祀と関連しているとみられている。

本遺跡の焼骨は弥生時代後期のものであるが、種の構成、焼け方、破片化のようす、色調などでこの縄文後～晩期遺跡の焼骨に酷似している。

弥生時代に至っても、再葬墓・方形周溝墓に伴なってシカ・イノシシの焼骨の出土する例が高崎市の新保遺跡・新保田中村前遺跡、福島県石川町の鳥打遺跡などで知られている。本遺跡においてもこういった葬制と焼骨との関連を考えてみる必要もあろう。

参考文献

林　良博・西田隆雄・望月公子.1977「日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定」『日本獣医学雑誌』39(2)、p.165-174

平野賢二.1935「歯牙の熱処理に関する研究（第一編）人類歯牙の熱処理に就いて」『口腔病学雑誌』9、p.375-393

Levine, M.1982 : 'The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horse teeth'. *In* Wilson B., Grigson C. and Payne S. eds. *Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites*. Bar British Series 109,p.223-250

長安　清.1958「歯牙の熱処理に関する研究」『大阪大学歯学会雑誌』3(2)、p.155-183

表2　出土動物骨一覧表

遺　構	位置	部　位	破片数	状況	備　　考
シカ					
KS1-14,15		種子骨	1	焼骨	
KS1-14,15		臼歯片	数片	焼骨？	
KS1-14,15		脛骨粗面部	1	焼骨	
KS1-14,15		左踵骨片	1	焼骨	
KS1-14,15	下層	基節骨片	1	焼骨	骨端離脱、幼獣
KS1-14,15		基節骨遠位端		焼骨	
KS1-14,15	上層	臼歯片	数片	焼骨？	
KS1-14,15	上層	左踵骨	1	焼骨	載距突起付近
KS1-14,15		手根骨	1	焼骨	現生雄成獣シカよりやや小型
KS1-14,15		中手骨又は中足骨	1	焼骨	
KS1-18		基節骨近位端	1	焼骨	
KS1-32		末節骨片	1	焼骨	
KS1-49		種子骨？	1	焼骨	
KS1-49		手根or足根骨	1	焼骨	
KS1-49		角片	1	焼骨	
KS1-49		末節骨	1	焼骨	全長27.4mm，上下径15.6mm
KS1-49		基節骨近位端	1	焼骨	離脱骨端、幼獣
KS1-14,15	13D24	肢骨片	1	焼骨	シカ？
KS1-14,15	下層	下顎骨片？	1	焼骨	シカ？
イノシシ					
KS1-14,15		基節骨遠位端	1	焼骨	
KS1-14,15		第3中手骨片？	1	焼骨	
KS1-14,15		左距骨片	1	焼骨	
KS1-14,15	下層	中節骨	1	焼骨	
KS1-14,15	上層	右第4中手骨近位端	1	焼骨	
KS1-19		左上顎第2後臼歯	1？	未萌出	1才前後か
KS1-25		切歯片	10		
シカ or イノシシ					
KS0-09	下層	肢骨片など	10数片	焼骨	
KS1-14,15	3A24	末節骨？片	1	焼骨	
KS1-14,15		頭蓋骨片	1	焼骨	
KS1-14,15		中節骨片	1	焼骨	
KS1-18	覆土	肢骨片など細片	12	焼骨	
KS1-31		尾椎	1	焼骨	
ウマ					
KS1- 水路西	表土	左下顎第2後臼歯	3		doubleknot 長：13.2mm，歯冠高：46.2mm
鳥類					
KS1-14,15		手根骨片？	1	焼骨	
KS1-32		指骨片	1	焼骨	キジかそれより小型鳥類
不明					
KS1-07		骨片	1	焼骨	
KS1-14,15	上層	細骨片	10数片	焼骨	
KS1-14,15		肢骨片など	数10片	焼骨	
KS1-14,15		肢骨片など骨片	数10片	焼骨	
KS1-14,15		肢骨片．細骨片	2	焼骨	
KS1-14,15		頭蓋片	1	焼骨	
KS1-14,15		下顎頭片	1	焼骨	
KS1-14,15		手根又は足根骨	1	焼骨	
KS1-14,15	下層	末節骨片	1	焼骨	
KS1-14,15		細骨片	1	焼骨	
KS1-14,15	下層	歯片	1	焼骨	
KS1-14,15	下層	頭蓋骨片	2	焼骨	
KS1-14,15	下層	細骨片	多数	焼骨	
KS1-14,15		細骨片	2	焼骨	
KS1-14,15		細骨片	数片	焼骨	
KS1-14,15	上層	細骨片	28	焼骨	
KS1-14,15	水路東	細骨片	1	焼骨	
KS1-14,15	上層	細骨片	数10片	焼骨	
KS1-14,15		細骨片	1	焼骨	
KS1-18	覆土	細骨片	10片	焼骨	
KS1-23	覆土	微細骨片	8	焼骨	
KS1-24		細骨片	1	焼骨	
KS1-24		細骨片	6	焼骨	
KS1-24		細骨片	10	焼骨	
KS1-24		頭蓋骨片を含む微細骨片	4	焼骨	
KS1-24		細骨片	数片	焼骨	
KS1-25		細骨片	10数片	焼骨	
KS1-26	覆土	微細骨片	2	焼骨	
KS1-28	覆土	細骨片	2	焼骨	
KS1-29	覆土	肢骨片．細骨片	7	焼骨	内6は細骨
KS1-30	覆土	細骨片	8	焼骨	
KS1-31		肢骨片	数10片	焼骨	
KS1-32		細骨片	10	焼骨	
KS1-32	覆土	肢骨片含む細骨片	20数片	焼骨	
KS1-41	覆土	骨片？	1	焼骨	
KS1-48	ピット	微細骨片	10数片	焼骨	
KS1-49		細骨片	10数片	焼骨	
KS1-49		細骨片	数10片	焼骨	
KS1-49	No.3	肢骨片含む細骨片	4	焼骨	
KS1	13L27	細骨片	13	焼骨	

2　土層分析

古環境研究所

2-1　はじめに

関東地方北西部に分布する後期更新世以降に形成された土壌や水成堆積物中には、浅間火山や榛名火山をはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の姶良カルデラや鬼界カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、土層の形成年代のほか、遺構や遺物包含層の年代を知ることができるようになっている。

そこで、小八木志志貝戸遺跡において、微化石分析に先だって地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、示標テフラの層位を把握して、土層や遺構の年代に関する資料を収集することにした。調査分析の対象となった地点は、KS1-07号遺構および1-13C25グリッドの2地点である。

2-2　土層の層序

（1）KS1-07号遺構

溝状遺構であるKS1-07号遺構の覆土は、下位より灰褐色粘質土（層厚2㎝）、砂混じりで若干色調の暗い灰色粘質土（層厚14㎝）、砂混じりで褐色がかった灰色粘質土（層厚12㎝）、暗灰色粘質土（層厚8㎝）、灰色砂層（層厚3㎝）、暗灰色粘質土（層厚5㎝）、灰色軽石層（層厚9㎝、軽石の最大径11㎜、石質岩片の最大径3㎜）、下位の灰色軽石に富む灰色砂質土（層厚18㎝、軽石の最大径9㎜）、下位の灰色軽石を多く含む黒灰色土（層厚21㎝、軽石の最大径13㎜）、成層したテフラ層（層厚6.1㎝）、褐灰色土（層厚8㎝）、若干色調の暗い灰色砂質土（層厚26㎝）、灰色がかった褐色砂質土（層厚8㎝）、灰色砂質土（層厚3㎝）、褐灰色砂質土（層厚3㎝）、灰色砂質土（層厚7㎝）、若干色調の暗い灰色砂質土（層厚24㎝）からなる（図1）。

これらの土層のうち、灰色軽石層には、比較的よく発泡した軽石が多く含まれている。この軽石層については、軽石の特徴や純度が高いことを合わせて考慮すると、4世紀中葉[*1]に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、新井.1979）に同定される可能性が非常に高い。またその上位の成層したテフラ層は、下位より黄褐色細粒火山灰層（層厚1.1㎝）、灰色粗粒火山灰層（層厚1㎝）、白色軽石混じりでかすかに成層した黄色細粒火山灰層（層厚2㎝、軽石の最大径3㎜）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚2㎝）からなる。このテフラ層は、その層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、新井.1979・坂口.1986・早田.1989・町田・新井.1992）に同定される。

以上の土層断面の観察の結果から、1区7号遺構の年代は、As-C降灰を遡る可能性が非常に高い。このことは、発掘調査により溝の覆土中から樽式土器が検出されたことから弥生時代後期と推定されている遺構の年代と矛盾しない。

（2）1-13C25グリッド

1-13C25グリッドでは、下位より黒灰色土（層厚10㎝）、灰色軽石に富む黒灰色土（層厚14㎝、軽石の最大径11㎜）、成層したテフラ層（層厚3.7㎝）、若干褐色がかった灰色砂質土（層厚12㎝）、褐色砂質土（層厚3㎝）、灰色砂質土（層厚23㎝）、灰褐色土（層厚11㎝）、灰色土（層厚11㎝）が認められる（図2）。

これらの土層のうち、黒灰色土に多く含まれる灰色軽石は、比較的よく発泡しており、その特徴からAs-Cに由来すると考えられる。また成層したテフラ層は、下位より黄褐色細粒火山灰層（層厚0.4㎝）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.3㎝）、かすかに成層した黄色細粒火山灰層（層厚3㎝）からなる。このテフラ層は、その層相からHr-FAに同定される。

発掘調査では、最下位の黒灰色土から樽式土器が、またその上位の灰色軽石に富む黒灰色土からは、樽式土器のほか赤井戸式土器や石田川式土器が検出さ

れている。

2-3　小結

小八木志志貝戸遺跡1区において地質調査を行い、分析地点の土層を記載するとともに、分析試料の採取を行った。土層観察の結果、下位より浅間C軽石（As-C、4世紀中葉※1）と榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）が検出された。これらの層位は、遺物の形式から推定されている遺構や土層の年代と矛盾しない。

※1　最近では4世紀初頭以前（友廣.1988）あるいは西暦300年前後（若狭.1990）と推定している研究もある。

参考文献

新井房夫.1979「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』no.53、p.41-52

坂口　一.1986「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』、群埋文、p.103-119

早田　勉.1989「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27、p.297-312

友廣哲也.1988「古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石」『群馬の考古学』、群埋文、p.325-336

町田　洋・新井房夫.1992『火山灰アトラス』、東京大学出版会、p.276

若狭　徹.1990「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』、p.11-32

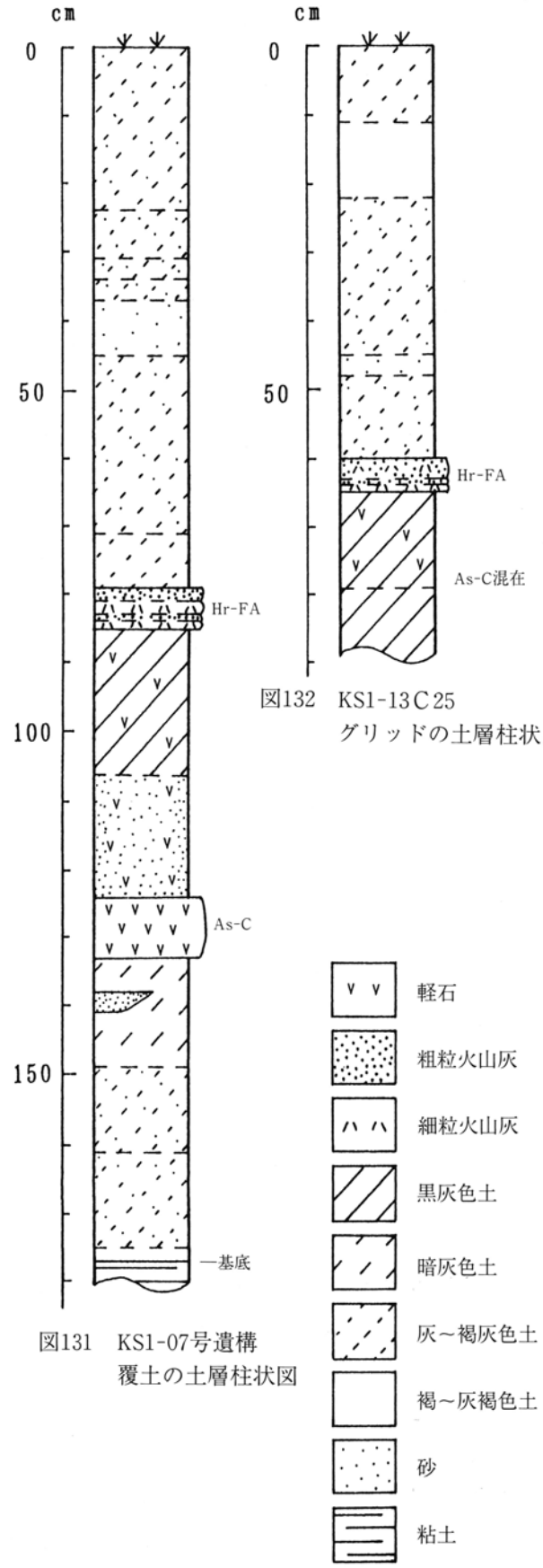


図131　KS1-07号遺構覆土の土層柱状図

図132　KS1-13C25グリッドの土層柱状図

3　植物珪酸体分析

古環境研究所

3-1　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山.1987）。

3-2　試料

調査地点は、KS1-07号遺構（弥生時代後期の溝）およびKS1-13C25グリッドの2地点である。分析試料は、KS1-07号遺構では溝の覆土基底からHr-FA直下層までの層準について、KS1-13C25グリッドではAs-Cの下層およびHr-FA直下層について、計9点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3-3　分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原.1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約1gに対して直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚1㎝あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

3-4　分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1、図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、サヤヌカグサ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、Bタイプ

穎の表皮細胞由来：イネ

〔イネ科ータケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

3-5　考察

（1）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネとヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1）イネ

イネの機動細胞に由来する植物珪酸体は、KS1-07号遺構のHr-FA直下層（試料1）から検出された。密度は1,400個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。なお、同層準からはイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も検出されている。

2）ヒエ属型

ヒエ属型は、KS1-07号遺構のHr-FA直下層（試料1）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを完全に識別するには至っていない（杉山ほか.1988）。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

3）その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものが含まれており、ウシクサ族B（大型）の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

（2）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

1）KS1-07号遺構（弥生時代後期の濠）

覆土基底（試料6）では、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型、クマザサ属型などが検出されたが、いずれも少量である。また、同層準では、ブナ科コナラ属などの樹木に由来する植物珪酸体も検出された。覆土底部（試料5）からAs-C直下層（試料3）にかけても、おおむね同様の結果であるが、試料3ではネザサ節型などのタケ亜科が増加している。As-C直上層（試料2）では、ネザサ節型などのタケ亜科が減少しており、Hr-FA直下層（試料1）では、前述のようにイネやヒエ属型が出現している。おもな分類群の推定生産量によると、覆土底部ではヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、弥生時代後期とされる溝の埋没当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であり、周辺ではススキ属やチガヤ属、ネザサ節などのタケ亜科、およびコナラ属などの樹木も見られたものと推定される。As-C直下層でも、おおむね同様の状況であったと考えられるが、この時期には周辺でネザサ節が増加したものと推定される。Hr-FA直下層の時期には、前述のように調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたものと推定される。

2）KS1-13C25グリッド

As-Cの下層（試料2）では、ネザサ節型などのタケ亜科が比較的多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Aなども検出された。Hr-FA直下層（試料1）でもおおむね同様の結果である。おもな分類群の推定生産量によると、As-Cの下層ではヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、弥生時代後期とされる土層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であり、周辺ではススキ属やチガヤ属、ネザサ節などの

タケ亜科も見られたものと推定される。

3-6　まとめ

弥生時代後期とされる溝の埋没当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であり、周辺ではススキ属やチガヤ属、ネザサ節などのタケ亜科、およびコナラ属などの樹木も見られたものと推定される。

参考文献

杉山真二.1987「遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点」『植生史研究』2、p.27-37

杉山真二・松田隆二・藤原宏志.1988「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－」、『考古学と自然科学』20、p.81-92

藤原宏志.1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9、p.15-29

藤原宏志・杉山真二.1984「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17、p.73-85

表3　小八木志志貝戸遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	1区7号遺構覆土							1区13C25グリッド	
			1	2	3	3'	4	5	6	1	2
イネ科	Gramineae (Grasses)										
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		14								
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	Rice husk Phytolith		7								
ヒエ属型	*Echinochloa* type		7								
キビ族型	Paniceae type		29	23	13	14	14	26	15	15	24
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		7	8	20	29	27	19	8	7	18
サヤヌカグサ属	*Leersia*				7						
ススキ属型	*Miscanthus* type		51	30	20	29	61	19	45	52	24
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		87	45	85	58	75	39	38	96	47
ウシクサ族B	Andropogoneae B type				7		7	13		15	6
Bタイプ	B type						14				6
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)										
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*				13						
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*		22	53	144	22	20	6	8	81	83
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)				7			6	15	15	6
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*					7		13			
未分類等	Others		65	23	216	101	96	97	53	199	219
その他のイネ科	Others										
表皮毛起源	Husk hair origin		36	8	7	22	7	6	8	29	18
棒状珪酸体	Rod-shaped		376	30	393	345	403	291	233	508	563
未分類等	Others		636	180	525	511	594	408	361	530	515
樹木起源	Arboreal										
多角形板状(コナラ属など)	Polygonal plate shaped (*Quercus*)		7						8		
その他	Others		7								
植物珪酸体総数	Total		1351	398	1456	1136	1318	945	789	1546	1528

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	0.42								
ヒエ属型	*Echinochloa* type	0.61								
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.46	0.47	1.24	1.82	1.72	1.22	0.47	0.46	1.12
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.63	0.37	0.24	0.36	0.76	0.24	0.56	0.64	0.29
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*			0.15						
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	0.10	0.25	0.69	0.10	0.10	0.03	0.04	0.39	0.40
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)			0.05			0.05	0.11	0.11	0.04
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*				0.02		0.04			

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*			17						
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	100	100	77	83	100	26	24	78	90
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)			6			41	76	22	10
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*				17		33			

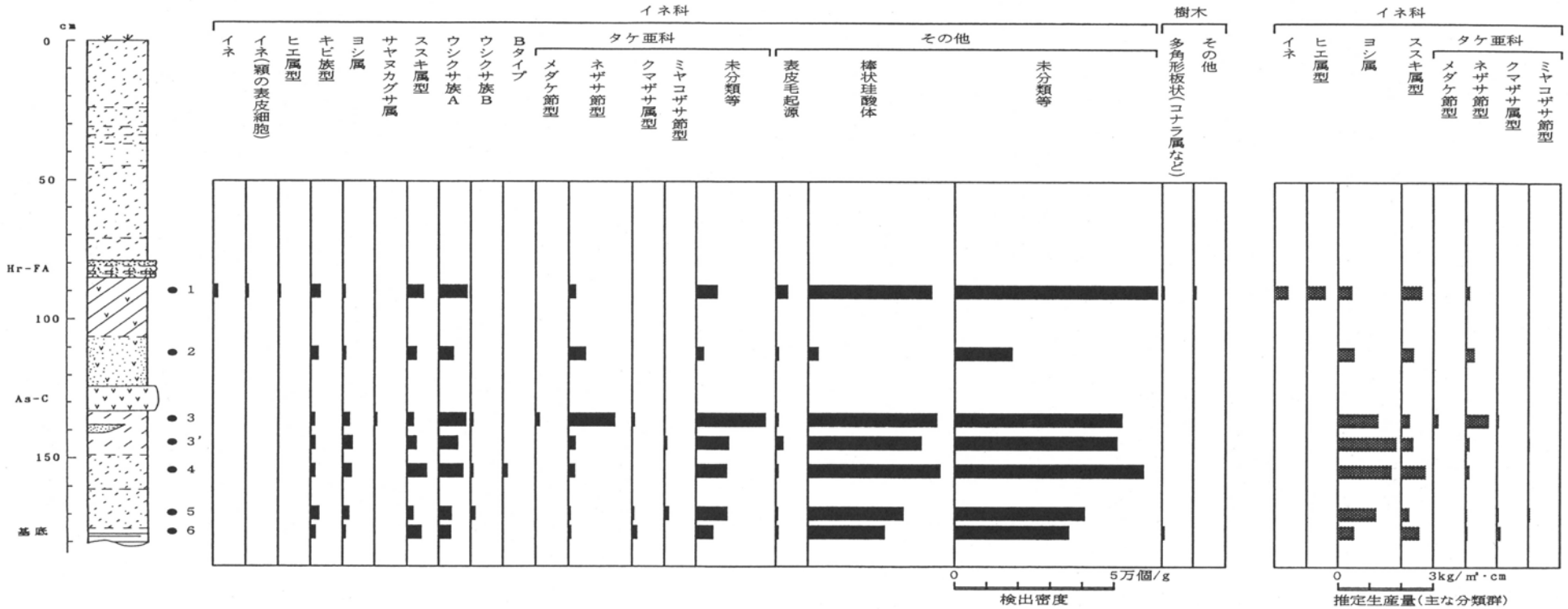


図133　KS1-07号遺構覆土における植物珪酸体分析結果

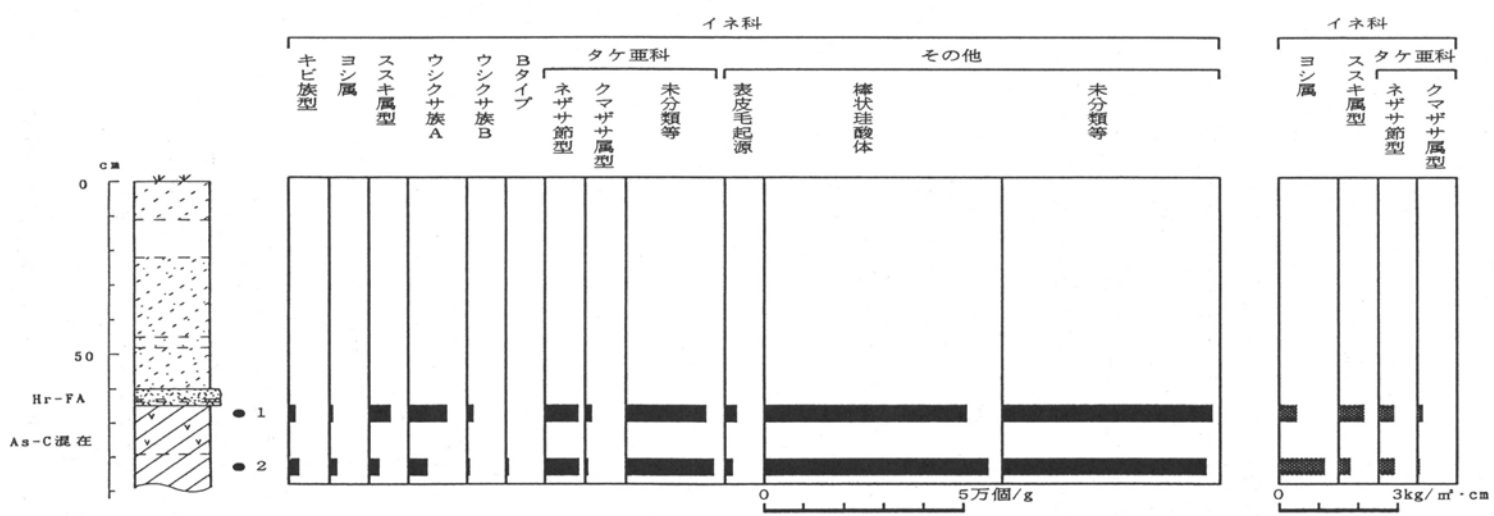


図134　KS1-13C25グリッドにおける植物珪酸体分析結果

4　弥生時代溝における微遺体の検討（トイレ遺構分析）

古環境研究所

4-1　はじめに

溝などの遺構内の堆積物には、木材や骨等の大型遺体のほかに、花粉、寄生虫卵、植物珪酸体、微細種実などの小型の遺体が含まれている。このうち、寄生虫卵の密度や花粉群集組成、種実群集組成の特異性から、排泄物による堆積物の認識や、トイレ遺構の識別が可能である。また、遺体群集の構成と組成から、食物や堆積環境の検討も可能である。

4-2　試料

分析試料は、KS1-07号遺構（弥生時代の溝）覆土およびKS1-13C25グリッドから採取された計9点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

4-3　寄生虫卵分析

（1）方法

微化石分析法を基本に、以下のように行った。

1）サンプルを採量する。
2）脱イオン水を加え攪拌する。
3）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
4）25%フッ化水素酸を加え30分静置。（2・3度混和）
5）水洗後サンプルを2分する。
6）片方にアセトリシス処理を施す。
7）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
8）検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

（2）結果

1）KS1-07号遺構

溝基底（試料6）から、回虫卵と鞭虫卵が検出された。密度はいずれも1ccあたり6個と微量である。

2）KS1-13C25グリッド

寄生虫卵は検出されなかった。

4-4　花粉分析

（1）方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村.1973を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1）5％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
2）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉.1973および中村.1980をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科・亜科・属・亜属・節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合は、それらを別の分類群とした。

（2）結果

出現した分類群は、樹木花粉11、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉７、シダ植物胞子２形態の計21である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリーシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

１）KS1-07号遺構

溝覆土（試料３～６）では、イネ科やヨモギ属、コナラ属などが検出されたが、いずれも少量である。As-C直上層（試料２）とHr-FA直下層（試料１）では、花粉がほとんど検出されなかった。

２）KS1-13C25グリッド

As-Cの下層（試料２）では、イネ科やヨモギ属、マツ属複維管束亜属、スギなどが検出されたが、いずれも少量である。Hr-FA直下層（試料１）では、花粉がほとんど検出されなかった。

4-5　種実同定

（1）方法

試料（堆積物）200ccについて、0.25㎜篩を用いて水洗選別を行い、残渣を実体顕微鏡で観察した。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、同定レベルによって種・属・科などの階級で示した。

（2）結果

１）KS1-07号遺構

溝底部（試料４）から、カジノキ種子１個、クワ科種子２個が検出された。他の試料からは、種実は検出されなかった。

２）KS1-13C25グリッド

種実は検出されなかった。

4-6　考察

弥生時代後期とされる溝の基底からは、回虫卵と鞭虫卵が検出された。いずれも微量であり、人の居住域周辺における汚染の範囲と考えられる。なお、花粉や種実があまり検出されないことから、土壌生成作用などによって寄生虫卵が分解された可能性も考えられる。

溝の埋没当時は、イネ科やヨモギ属などが生育する草本植生であったと考えられ、周辺ではコナラ属などの樹木も見られたものと推定される。なお、花粉や種実があまり検出されないことから、植生や環境の詳細な復原は困難である。

参考文献

WARNOCK,Peter J. and REINHARD,Karl J.1992 : 'Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils', JOURNAL OF ARCHAEOLOGICAL SCIENCE, 19, p.231-245

金子清俊・谷口博一.1987「線形動物・扁形動物」『医動物学　新版臨床検査講座』８、医歯薬出版、p.9-55

金原正明・金原正子.1992「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－』、奈良国立文化財研究所、p.14-15

金原正明.1993「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻　古代資料研究の方法』、角川書店、p.248-262

金原正明・松井章・金原正子.1994「便所堆積物から探る古代人の食生活」『助成研究報告（平成４年度）』、財団法人味の素食の文化センター、p.35-48.

島倉巳三郎.1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集』、60p

中村純.1973『花粉分析』、古今書院、p.82-110

中村純.1980「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』、91p

表4　小八木志志貝戸遺跡における寄生虫卵分析結果

分類群		1-07号遺構							1-13C25グリッド	
学名	和名	1	2	3	3'	4	5	6	1	2
Helminth eggs	寄生虫卵（試料1cc中）									
Ascaris	回　虫							6		
Trichuris	鞭　虫							6		
Total	計	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	12	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表5　小八木志志貝戸遺跡における花粉分析結果

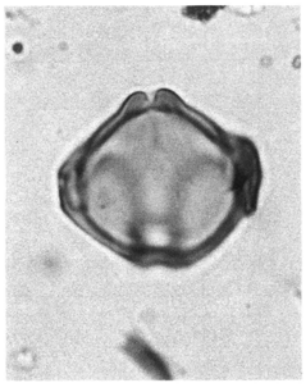
分類群		1-07号遺構							1-13C25グリッド	
学名	和名	1	2	3	3'	4	5	6	1	2
Arboreal pollen	樹木花粉									
Podocarpus	マキ属			1						
Abies	モミ属			1						
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属				2		2	1	1	2
Cryptomeria japonica	スギ				1			1		3
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ			1	1			1		
Alnus	ハンノキ属									1
Betula	カバノキ属	1								
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ			1						
Castanea crenata-Castanopsis	クリ-シイ属	2		5	2			1		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属			2	1	1				
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属			2	1	1	1	1		1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉									
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科							1		
Nonarboreal pollen	草本花粉									
Gramineae	イネ科	2		2	10	2	2	4		3
Cyperaceae	カヤツリグサ科							1		1
Cruciferae	アブラナ科							1		
Apiodeae	セリ亜科			1						
Lactucoideae	タンポポ亜科									1
Asteroideae	キク亜科	1					1	1		
Artemisia	ヨモギ属	1		1	11	14	29	9		3
Fern spore	シダ植物胞子									
Monolate type spore	単条溝胞子			10	5	6	9	9	1	1
Trilate type spore	三条溝胞子			1			1	1		
Arboreal pollen	樹木花粉	3	0	13	8	2	3	5	1	7
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	1	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	4	0	4	21	16	32	16	0	8
Total pollen	花粉総数	7	0	17	29	18	35	22	1	15
	試料1cc中の花粉数	35	0	77	131	81	140	132	5	60
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	1	0	2	0	0	1	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	11	5	6	10	10	1	1

表6　小八木志志貝戸遺跡における種実同定結果

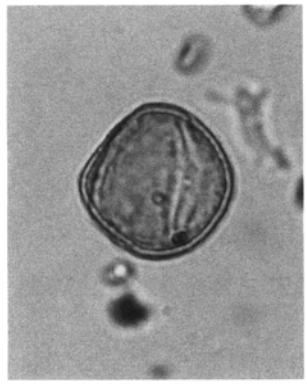
分類群		(200cc中)	1-07号遺構							1-13C25グリッド	
学名	和名	部位	1	2	3	3'	4	5	6	1	2
arbor	樹木										
Broussonetia papyrifera Vent.	カジノキ	種子					1				
Moraceae	クワ科	種子					2				
Total	合計		0	0	0	0	3	0	0	0	0

図版1　小八木志志貝戸遺跡の花粉・寄生虫卵・胞子遺体

1　スギ

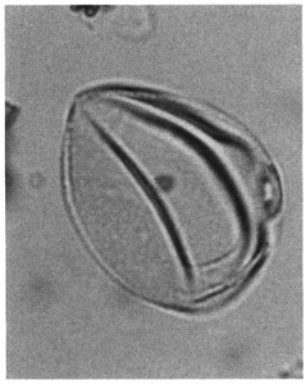


2　ハンノキ属

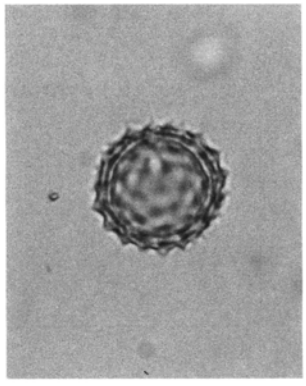


3　コナラ層コナラ亜属

4　コナラ属アカガシ亜属



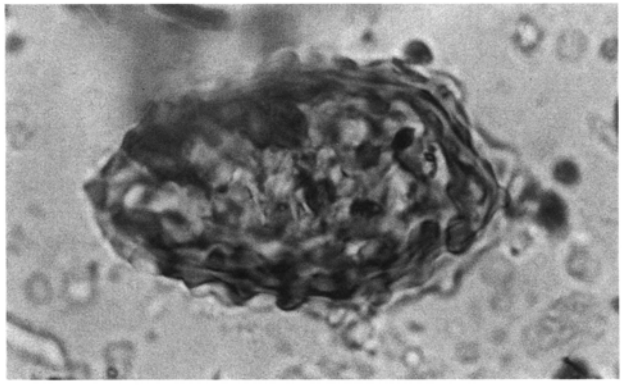
5　イネ科



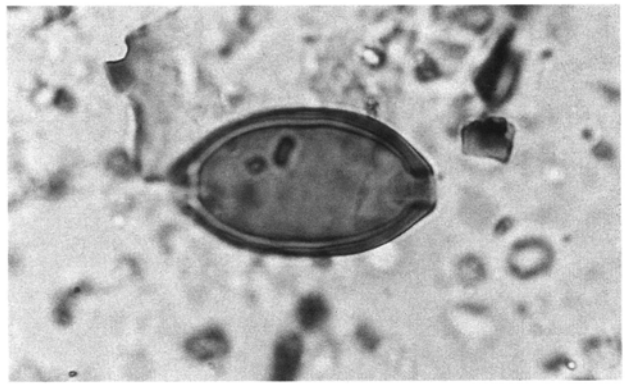
6　キク亜科

7　ヨモギ属

8　シダ植物単条溝胞子



9　回虫卵

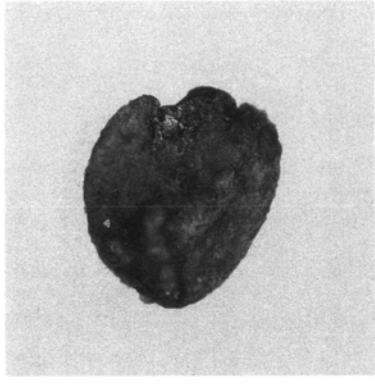


10　鞭虫卵

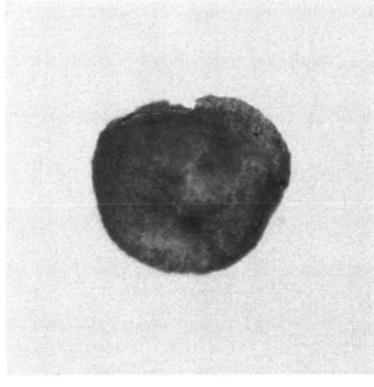
45 μm

小八木志志貝戸遺跡種実

1　カジノキ　0.5mm



2　クワ科　0.5mm



3　クワ科　0.5mm

5　炭化米同定

パレオ・ラボ

5-1　試料

大型植物化石の検討を行った試料は、KS1-07号遺構より出土した炭化物試料である。以下にその結果を示す。

5-2　結果

大型植物化石として同定し得る炭化物は、イネの炭化胚乳（炭化米）のみであった。出土個数は、完形127点、破片67点である。そのうち、完形で比較的保存状態のよい任意の30粒については、長さと幅の計測を行った。その結果を表に示す。

5-3　形態記載

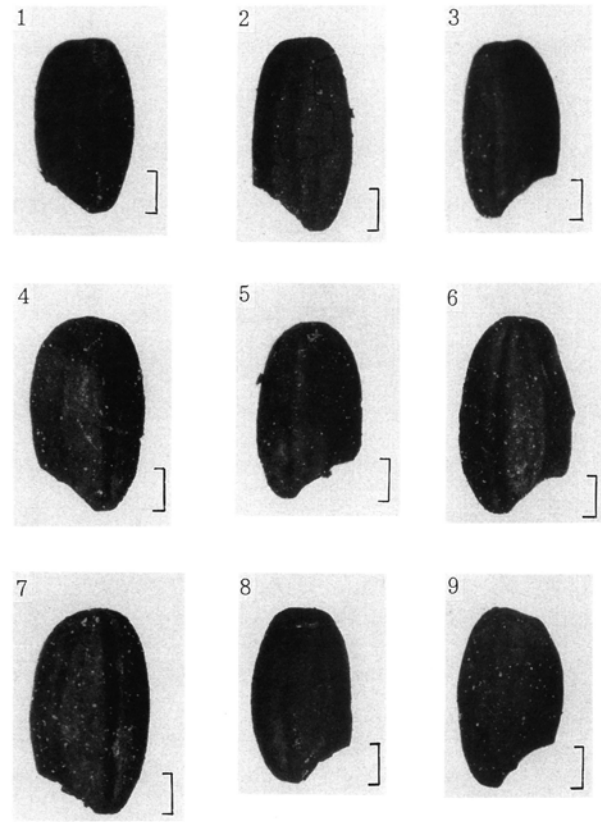
イネ　*Oryza sativa* Linn.　炭化胚乳

イネはやや扁平な楕円形で穎の表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。出土したのは炭化胚乳のみであった。炭化胚乳の大きさは、表1に示した。なお、平均は長さが4.4、幅が2.5、長さ／幅が1.74である。

表7　イネ炭化胚乳計測値一覧表

（★：最大、☆：最小）

長さ(mm)	幅(mm)	長さ／幅	長さ(mm)	幅(mm)	長さ／幅
4.4	2.6	1.69	4.2	★3.0	☆1.40
4.0	2.4	1.54	4.4	★3.0	1.47
4.2	2.8	1.50	4.6	2.8	1.64
4.4	2.4	1.83	★4.8	2.6	1.85
4.4	2.0	★2.20	4.4	2.4	1.83
4.6	2.8	1.64	4.6	2.8	1.64
★4.8	2.4	2.00	4.6	2.4	1.92
4.0	2.4	1.67	☆3.6	☆1.8	2.00
4.4	2.4	1.83	4.2	2.4	1.75
3.8	2.0	1.90	4.6	2.8	1.64
★4.8	2.4	2.00	4.2	2.4	1.75
4.6	2.8	1.64	4.0	2.4	1.67
4.0	2.4	1.67	★4.8	2.8	1.71
4.0	2.4	1.67	4.4	2.4	1.83
4.4	2.6	1.69	4.2	2.6	1.62



図版2　出土した炭化米（スケールは1㎜）
1～9炭化米（イネ　炭化胚乳）

6　樹種同定

パレオ・ラボ

6-1　樹種同定の方法

未炭化の材は、片刃剃刀を用いて横断面（木口と同義・写真図版a)、接線断面（板目と同義・写真図版b)、放射断面（柾目と同義・写真図版c）の3方向を作成した。これらの切片をガムクロラールにて封入し、永久標本を作成し、光学顕微鏡下で組織を観察し原生標本との比較により樹種を決定した。作成した木材組織プレパラートは、㈱パレオ・ラボで保管されている。

炭化試料は、走査電子顕微鏡を用いて材の3方向の破断面組織を観察し同定を行った。横断面は炭化材を手で割り新鮮な面を出し、接線断面と放射断面は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて弾くように割り平滑な面を出す。この3断面の試料を直径1㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察・写真撮影をした。炭化試料の残りは、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

6-2　結果

同定結果の一覧を表にまとめ、発掘区ごとに結果を記し、同定根拠とした組織観察を以下に記載する。

（1）KS1区の弥生時代後期から古墳時代前期の遺構から検出された樹種は以下の通りである。

KS1-06号遺構（土坑）から出土した薄片状の炭化物は樹皮であったが、現時点では樹皮組織から分類群を明らかにするには至っていない。

KS1-07号遺構（濠）の柱穴内の未炭化材はクヌギ節であり、炭化米に共伴して出土した炭化物は散孔材であった。この炭化材は放射方向にやや圧縮変形しており同定には至らなかった。

KS1-18号遺構（土坑）の炭化木柱No.2はアカガシ亜属である。

KS1-19号遺構（土坑）からはクヌギ節とケヤキが検出された。

（2）KS2区から出土した材の同定結果は以下の通りである。

古墳時代中期の13号遺構（住居）から出土した炭化材の樹種のNo.5はモモまたはウメ、18号遺構（住居）のNo.2からはケヤキとヤシャブシ亜属であった。

奈良・平安時代の19号遺構（住居）の貯蔵穴内から出土した炭化材は、ケンポナシ属であった。

中世の31号遺構（土坑）から出土した竹と思われていた試料は、組織観察からはタケ亜科（竹笹類）の稈で有ることが判り、炭化木片もタケ亜科であった。

（3）組織記載

ヤシャブシ亜属　*Alnus* subgen. *Alnaster*　カバノキ科　図版3　1a.-1c.(KS2-18号遺構No.2)

小型の管孔が単独または2個が複合し均一に散在し年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は横棒数が15本前後の階段穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は小型で交互状、複合放射組織は観察されなかった。

ヤシャブシ亜属は落葉性の大型低木または小高木であり、亜高山から高山に生育するミヤマハンノキ、暖帯から温帯の崩壊地に生育するヒメヤシャブシとヤシャブシそして海岸の山地に生育するオオバヤシャブシがある。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版3　2a.-2c.(KS1-18号遺構)

集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列し、接線状の柔組織が顕著な放射孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性単列のものと広放射組織とがある。

アカガシ亜属は常緑性の高木でいわゆるカシの仲間で、暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成樹である。山野に普通にあるアラカシ・アカガシ・

シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具や建築材として遺跡からもよく出土する樹種である。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節　*Q.* subgen. *Q.* sect. *Cerris*　ブナ科　図版3　3a.-3c.(KS1-19号遺構)

年輪の始めに大型の管孔が1～3層配列し、晩材部は小型・厚壁の管孔が単独で放射方向に配列し、接線状・網状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列と集合状のものがあり、道管との壁孔は柵状である。

クヌギ節は暖帯の山林や二次林に普通の落葉性高木で、クヌギとアベマキが含まれる。関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。材は重厚で割裂性が良く、関東地方では遺跡からの出土例が多く、多用されている分類群である。

ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino　ニレ科　図版4　4a.-4c.(KS1-19号遺構)

年輪の始めに中型の管孔が1～2層配列し、晩材部では塊状に集合した小型の管孔が接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～10細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅く、木目が美しいが、狂い安いので充分な乾燥が必要な材である。用途は建築材や容器が多い。

モモ　*Prunus persica* Batsch. または　ウメ　*Prunus mume* Sieb. et Zucc.　バラ科　図版4　5a.-5c.(KS2-13号遺構No.5)

年輪の始めに中型の管孔が2～3層配列し徐々に径を減じ、晩材部では小型の管孔が単独または2～数個が複合し管孔の分布密度は多い散孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚と内容物がある。放射組織は異性、2～4細胞幅で細胞構成は不斉、細胞高は他のサクラ属に比べかなり高くなる。

モモもウメも中国原産である。材は縄文時代の遺跡から散点的に出土例があり、中世になると果実の核はもちろんのこと材の出土例も多くなる。材質は重硬で割れにくく耐朽性はよい。

ケンポナシ属　*Hovenia*　クロウメモドキ科　図版4　6a.-6c.(KS2-19号遺構貯蔵穴内)

年輪の始めに中型の管孔が1～2層あり除々に径を減じてゆき、晩材部は単独または放射方向に2～3個が複合した非常に小型で厚壁の管孔が散在し、周囲状・翼状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、1～5細胞幅、上下端に方形細胞・直立細胞が単列で伸び、結晶細胞がある。

ケンポナシ属は暖帯の山中に生育する落葉高木で、本州・四国に分布するケンポナシと北海道から九州に広く分布するケンポナシがある。果実は食べられる。材質は良い方で建築材など遺跡からの出土例も多い。

散孔材　diffuse-porous wood　図版5　7a.-7c.(KS1-07号遺構炭化米共伴の炭化物)

小型の管孔が単独または2～複数個が複合し、材は放射方向にやや圧縮変形しているとはいえ接線状や斜状の管孔配列が特徴的な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、らせん肥厚は見られない。放射組織はおもに3細胞幅の異性である。

樹皮　bark　図版5　8a-8b.(KS1-06号遺構)

厚壁で不定形なスクレレイドが多数集合し渦巻き状の団塊が顕著な樹皮である。

タケ亜科　Gramineae subfam. Bambusoideae　イネ科　図版5　9a.(KS2-31号遺構)

やや硬質の稈の破片。維管束は不整中心柱で散在している。維管束は向軸側に原生木部、その左右に後生木部の管孔が一対あり、背軸側に篩部があり、全体としては4～3個の穴の集合に見える。炭化試料では厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘が帽子状にあるのが見られたが、未炭化の試料では

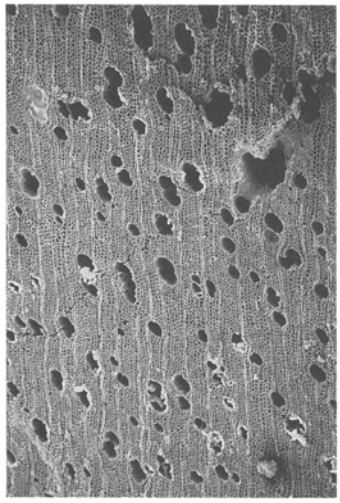
めだたなかった。

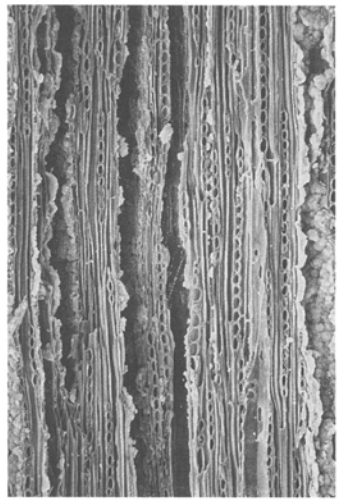
いわゆるタケ・ササの仲間で12属が含まれ、中国や東南アジアから移入され栽培により広まったものが多い。ササ類は多くの野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があるといわれる。稈の破片や組織のみからは属や種を識別することは難しい。

表８　小八木志志貝戸遺跡出土木材の樹種同定結果

地区・遺構	樹　種	時　代	備　考
KS1-06号遺構（土坑）	樹皮	弥生後期～古墳前期	炭化　薄片
KS1-07号遺構（溝）	クヌギ節	弥生後期～古墳前期	未炭化　柱穴内
KS1-07号遺構（溝）	散孔材	弥生後期～古墳前期	炭化　炭化米共伴　巾0.7㎝
KS1-18号遺構（土坑）	アカガシ亜属	弥生後期～古墳前期	炭化木柱　幅4.5㎝
KS1-19号遺構（土坑）	クヌギ節	弥生後期～古墳前期	炭化　1.3㎝角破片
KS1-19号遺構（土坑）	ケヤキ	弥生後期～古墳前期	炭化　小破片複数
KS2-13号遺構（住居No.５）	モモまたはウメ	古墳中期	炭化　半径約3㎝破片
KS2-18号遺構（住居No.２）	ケヤキ	古墳中期	炭化破片
KS2-18号遺構（住居No.２）	ヤシャブシ亜属	古墳中期	炭化破片
KS2-19号遺構（住居）	ケンポナシ属	奈良・平安	炭化　貯蔵穴内
KS2-31号遺構（土坑）	タケ亜科	中世	未炭化
KS2-31号遺構（土坑）	タケ亜科	中世	炭化薄片破片

図版３　小八木志志貝戸遺跡出土の材組織（１）

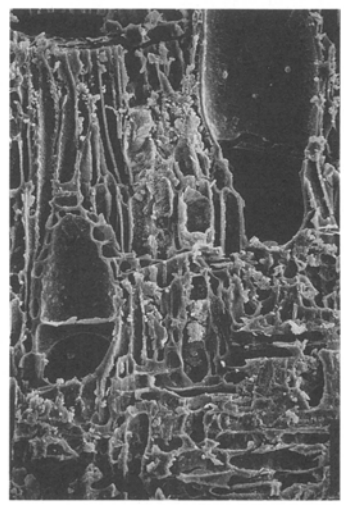




１a.ヤシャブシ亜属（横断面）
KS2-18号遺構No.２　bar：0.5mm

１b.同（接線断面）　bar：0.1mm

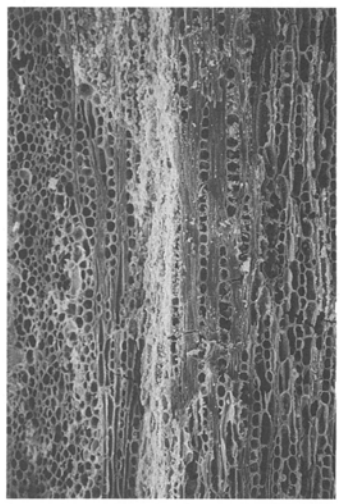
１c.同（放射断面）　bar：0.1mm

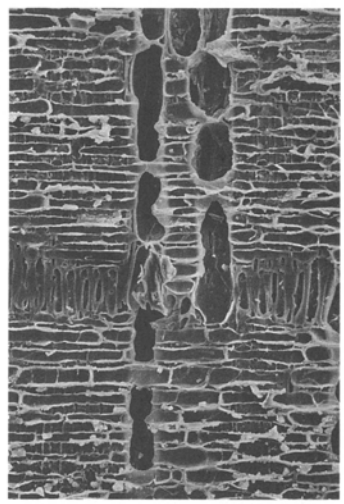


２a.アカガシ亜属（横断面）
KS1-18号遺構　bar：0.5mm

２b.同（接線断面）　bar：0.1mm

２c.同（放射断面）　bar：0.1mm



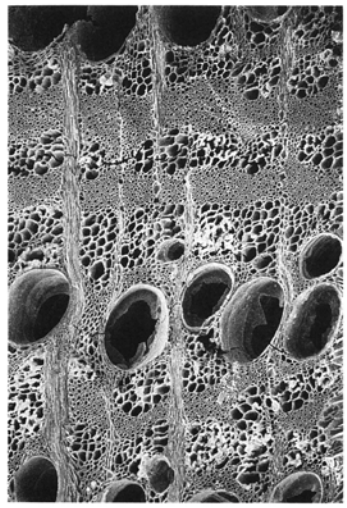


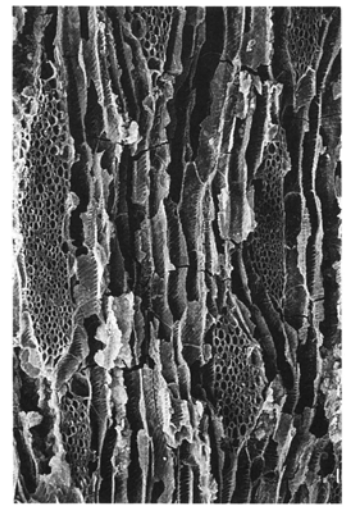
３a.クヌギ節（横断面）
KS1-19号遺構　bar：0.5mm

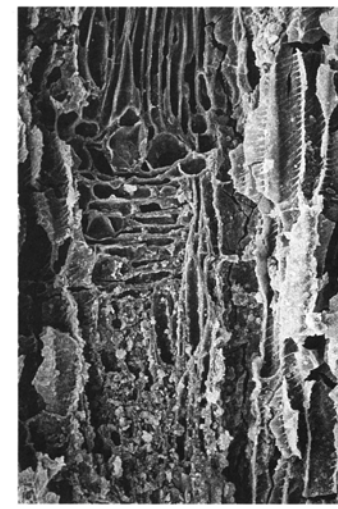
３b.同（接線断面）　bar：0.1mm

３c.同（放射断面）　bar：0.1mm

図版４　小八木志志貝戸遺跡出土の材組織（２）



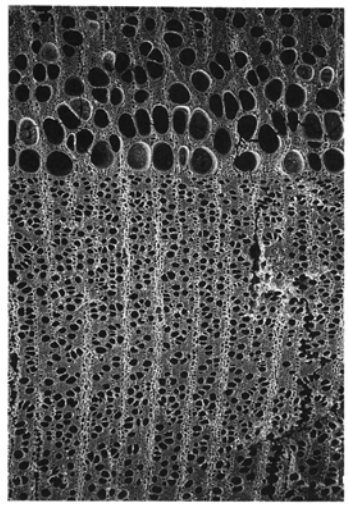


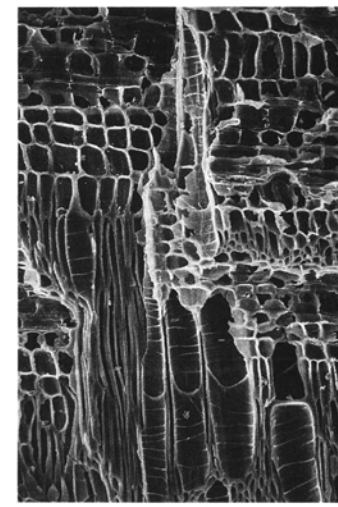


４a.ケヤキ（横断面）
KS1-19号遺構　bar：0.5mm

４b.同（接線断面）　bar：0.1mm

４c.同（放射断面）　bar：0.1mm

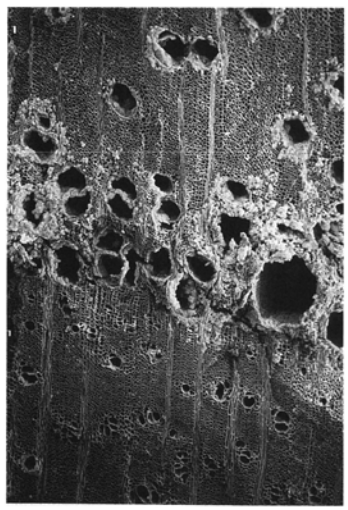


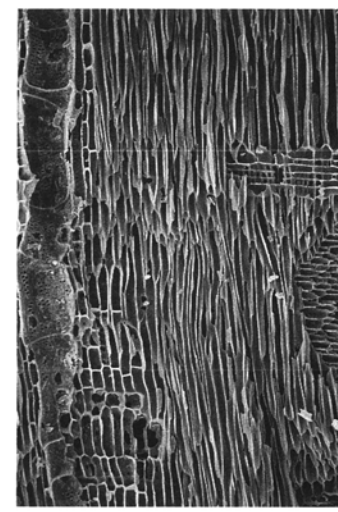


５a.モモまたはウメ（横断面）
KS2-13号遺構No.5　bar：0.5mm

５b.同（接線断面）　bar：0.1mm

５c.同（放射断面）　bar：0.1mm



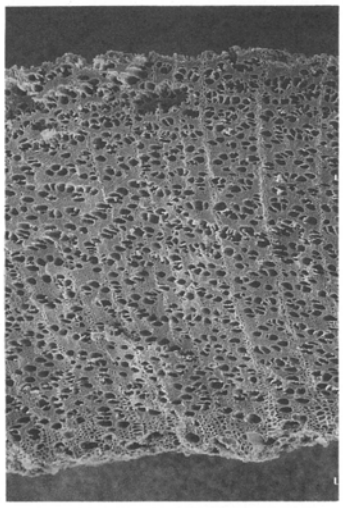


６a.ケンポナシ属（横断面）
KS2-19号遺構 貯蔵穴内　bar：1mm

６b.同（接線断面）　bar：0.1mm

６c.同（放射断面）　bar：0.1mm

図版５　小八木志志貝戸遺跡出土の材組織（３）



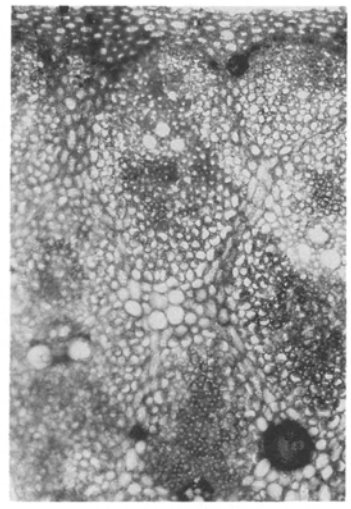
７a.散孔材（横断面）　bar：0.5mm
KS1-07号遺構 炭化米共伴の炭化物

７b.同（接線断面）　bar：0.1mm

７c.同（放射断面）　bar：0.1mm

８a.樹皮（横断面）　bar：1mm
KS1-06号遺構

８b.同（縦断面）　bar：0.1mm



９a.タケ亜科（横断面）
KS2-31号遺構　bar：1mm

Ⅳ　まとめ

1　弥生土器について

大木紳一郎

1-1　器種分類

壺・甕・台付甕・高坏・鉢・有孔鉢・片口鉢・蓋・小壺・ミニチュアがあり、更に壺・甕・台付甕は同一形態で大中小の3種、高坏と鉢は大小の2種に分けられる。なお、口縁が短く外反し、短い頸部から肩の張る胴部をもち、赤彩されることの多い「短頸壺」はここでは見られない。

1-2　型式分類と組列

壺　口縁形態は、

A類－単口縁で口唇部が内湾ぎみに立つもの

B類－単口縁で直状ないし外反して開くもの

C類－折り返し口縁

D類－多段口縁

に四分できる。

胴部形態は

A類－撫で肩で下半部が膨らむ

B類－やや肩が張り、中位が膨らむか算盤玉状に張り出す

C類－球形

に三分できる。

口縁形態に見られるA～B類の変化は同時存在におけるバラエティーで、胴部形態に見られる3種の変化は経時的変遷（A→B→C）をしめすものと考えている。従って分類方法としては、口縁形態で4類別し、胴部形態で3段階の変遷段階に位置付ける。

文様では、主に肩部文様の種類によって

1類－櫛描簾状文と櫛描波状文の組み合わせ

2類－沈線を垂下するT字文と櫛描波状文の組み合わせ

3類－櫛描波状文ないしは櫛描簾状文のみ

4類－櫛描羽状文

に四分できる。これ以外に鋸歯文を付加するものもあるが、肩部に単独で用いられることはない。このうち大部分を占めるのは1類であって、2類と3類は1類を変化させた少数例と考えられる。4類は鏑川流域西端部の富岡市周辺地域で一般的に見られるものである。筆者は以前、これを樽式土器のなかの地域色ととらえて「富岡型」と仮称した[1]。

また口縁文様には、櫛描波状文と刻み目の二者が見られるが、単口縁と櫛描波状文、折り返し口縁と刻み目の組み合わせにほぼ限定される。

なお、単位文様についても、簾状文の止め数、波状文の波形などによって更に細分が可能だが、繁雑を避けるためここでは分類基準としなかった。

以上の基準に従って壺を分類すると以下の4型式に分けられる。

壺A－口唇が内湾ぎみに立ち上がり、頸部が「く」の字状にくびれて撫で肩で下膨れないしは算盤玉形の胴部をもつ。文様は頸～肩部に櫛描簾状文と波状文を組み合わせる。口縁外面に櫛描波状文をもつものもある。

壺B－口縁が外反ぎみに開き、端部が折り返しとなる。胴部形態と頸～肩部文様はA類と同様。口縁には刻み目を施すものが多い。

壺C－口縁は内湾ぎみに立ち上がり、頸部は曲線的にくびれ、撫で肩の胴部に至る。24号遺構-3のみで、無文。

壺D－外反して開く口縁から頸部で「く」字状に屈曲し、中位の張る胴部に至る。頸部に簾状文、口縁下位と肩部に羽状文（文様4類）を施す。KS0-09-3の1例のみ。

樽式土器の型式組列では、壺Aでは口縁の内湾度が強いものから直線的なもの更に外反傾向となり、壺Bでは折り返し口縁の断面形状が厚い方形・蒲鉾形・涙滴形から薄く、かつ多段化すると考えられる。頸部のくびれも曲線的から「く」字状へ、胴部形状は撫で肩で下膨れ形から球形へと概ね変化すると考えられる。また文様では、壺AB類とも頸部簾状文が等間隔止めから間隔の狭い2連止め、さらに、新

しくなるに従い止めの間隔が広がり、止め数も３～４連が現れると考えられる。この組列にあてはめて本遺跡例をみると、大部分が中葉段階のものに位置付けられる。KS1-14・15-10や無文だが壺Ｃ類が最も古相形態で、壺Ａ類のうちKS1-14・15-3が新相形態といえる。また壺Ｂでは、口縁断面が厚いものが多く、大部分が中葉段階に位置付けられる。

なお、小型壺は細長い器形で変化が少ないが、口縁形状の内湾ぎみのもの（KS1-14・15-13）を古く、中位でやや折れて外反するもの（KS1-07-7）を新しく考えたい。

甕　器形と文様の組合わせから、以下の３分類５細分ができる。

A1類－口縁部が内傾、あるいは内湾ぎみに立ち上がり、胴部は肩がやや張って最大幅が中位より上にある。口縁に一条の櫛描波状文、頸部に簾状文、肩部に１～３段の波状文を施す。(KS1-14・15-20など)

A2類－口縁は直状に開き、胴部最大幅はやや上位か中位にある。口縁～頸部に３～４段の波状文、頸部に簾状文、肩部に波状文を施す。(KS1-42-1など)

Ｂ類－器形はA1類と同じで、頸部文様に波状文を施す。(KS1-14・15-16)

C1類－折り返し口縁をもち、頸部以下の形状と文様構成はＡ１類と同じ。(KS1-54-3)

C2類－折り返し口縁で、胴部最大幅が中位から下位にある球形胴部。口縁～頸部に３段以上の波状文、頸部に簾状文、肩部に３段以上の波状文を施す。(KS0-20-1など)

以上に分類したうち、本遺跡で主体を占めるのはA1類である。型式組列では、A1類→A2類→C2類と変遷することが考えられる。C1類は、A1類の新しいものかA2類と同じ段階に位置付けられ、C2類の先駆となるものだろう。また、A2類とほぼ同じ器形で、口縁上位に２～３段の波状文を施す例（KS1-07-8）は、A1類からA2類への過渡的な形態と考えられる。Ｂ類は頸部文様が入れ代わっただけで、A1類と同段階としてよい。文様に関しては、A1類とA2類が２連止簾状文に限定され、Ｃ２類では３～４連止簾状文が現れる。更にこの変化と同調して、止めの間隔は次第に広がる。肩部波状文の段数は、肩部形状が撫で肩になるにつれ２～３段→３段→４段以上と増加する。

組列での位置付けから、A1類は樽式の中葉、C2類は後葉段階、A2類は両者の過渡期に位置付けられる。

台付甕　台付甕は、器形と文様の組み合わせから３分できる。

A1類－口縁内湾し、肩が張る。脚は細長く高い。口縁に一段の波状文、頸部に簾状文、肩に一段の波状文。

A2類－口縁外反、体部最大幅が中位よりやや上で円みが強い。脚は円錐形。口縁全体に３段前後の波状文、頸部に簾状文、肩に１～２段の波状文。

Ｂ類－A1類と器形、施文部位が同様で、頸部簾状文のかわりに波状文を施す。

なお、台付甕は口縁と肩部に円形貼付文を付加する場合が多い。組列は甕に準じて、A1類→A2類と考えられる。Ｂ類はA1類と同段階と考えて良い。

高坏　高坏は口縁の変化と器形で五分できる。

A1類－単口縁で、体部は深い椀形。脚は体部接続部が細長く、やや外反して開く。KS1-14・15-88は脚端部に刻み目を巡らす。

A2類－単口縁で体部は浅い椀形。脚部は高い円錐形。

Ｂ類－口縁外折、体部と脚部はA2類と同形状。

Ｃ類－口縁折り返しで、端部に刻み目を巡らす例が多い。体部と脚部はＢ類と同形状。

Ｄ類－口縁外反、頸部でくびれ肩の張る「台付甕」形。脚部は背の高い円錘形。赤彩し、櫛描文の見られないことで台付甕と区別される。

このうち、体部が深く比較的脚部の小さいA1類

が古相でA2・B・C類はほぼ併存する段階のものだろう。D類も同時段階に存在し得るが型式的には後出するものと思われる。

鉢・有孔鉢・片口鉢・蓋・小壺については型式変化が少なく、また数量も不十分なため分類をしなかった。強いて言うならば鉢に見られる器高の深浅は、深いものが古相で浅いものが新相と考えられよう。

1-3　編年上の位置

以上、各器種毎に分類と新旧の組列を確認したが、大きな型式的ヒアタスは認められず、概ね継続的に変化したようである。高崎周辺地域での従来の編年[(2)]に従えば、樽2期に主体を置き、その中で古相と新相が存在し、更に樽3期のものが存在する。これよりも古い中期に属するものやその様相を強く残す例は見ない。樽3期に該当するのは、甕C2類や台付甕A2類で、壺では外反する口縁に球形胴部をもつ例がこれに伴うと思われる。樽3期に属するのは少数であるが、文様の省略や乱れは見られず、器形も球胴化が著しくないことから末期的段階には至っておらず、なお検討する余地はあるが土師器と共伴する時期まで2～3細分段階を想定しておきたい。これをまとめれば、本遺跡の弥生土器は後期の中葉から後半（若狭.1996「編年編　群馬県地域」YAY!編年によればV－2～3期）にかけての時期に属し、これらは型式的に連続し、概ね3段階程度の変遷が見られる。そして古い方では中期の竜見町式、新しくは土師器との間にヒアタスがあると捉えられる。

1-4　遺構毎に見られる特徴

「住居跡」

住居跡に確実に伴う土器は極めて少なく、器種組成を抽出する事は不可能である。時期的には樽2期～3期のものが見られる。

「土器棺墓」

壺と甕が用いられ、他の器種については明確でない。時期的には樽2期～3期に属しており、本遺跡出土弥生土器の最古相から新相まで含む。

「濠」

KS1-07号遺構出土土器を対象とする。分類された全器種がみられ、数量的に特定の器種が目立つ事はない。時期的には樽2期が主体を占めるが、3期のものも少数見られる。なお、上層では土師器が混在する。

「土器集中地域」

KS1-14・15号遺構出土土器を対象とする。濠と同様に、全器種が見られ、樽2期を主体とする。なお、ここでは東関東・南東北系の後期土器が伴出している（図103-119～122，図101-66～71）。

以上のように、遺構毎の出土土器の特徴を掲げたが、いずれも時期的には樽2期を主体として、一部3期まで下る。また器種組成では、濠と土器集中地域は、一般の集落遺跡とほぼ同様の内容を示しており、後述の「人面付土器」以外に遺構に特殊な性格を与えるような特殊性は見られない。出土土器から見る限り、住居・墓・土器集中地域・溝に新旧関係や同時性を限定する事は難しい。遺構の重複や性格から、これらが同一箇所に集中して同時存在したとは考えられず、その時期的な先後関係には慎重に検討する必要があるが、少なくともこれらは上記した土器編年の時間枠の中で、継起的に存在した可能性が高いと考えたい。なお濠（KS1-07号遺構）は、一部の土器棺墓を掘りこんで構築されているが、特に壺が多いという訳ではなく、むしろ甕や高坏の出土比率が高いことから、掘りこまれた土器棺墓が流れ込んだと限定する必要はない。出土土器に見られる器種と時期は、KS1-14・15号遺構とほぼ一致しており、ここからの流れ込み、あるいは同時の廃棄によるものと考えたほうが良いようである。

註

(1) 大木紳一郎.1977「弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺遺跡V』

(2) 飯島克己・若狭徹.1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9

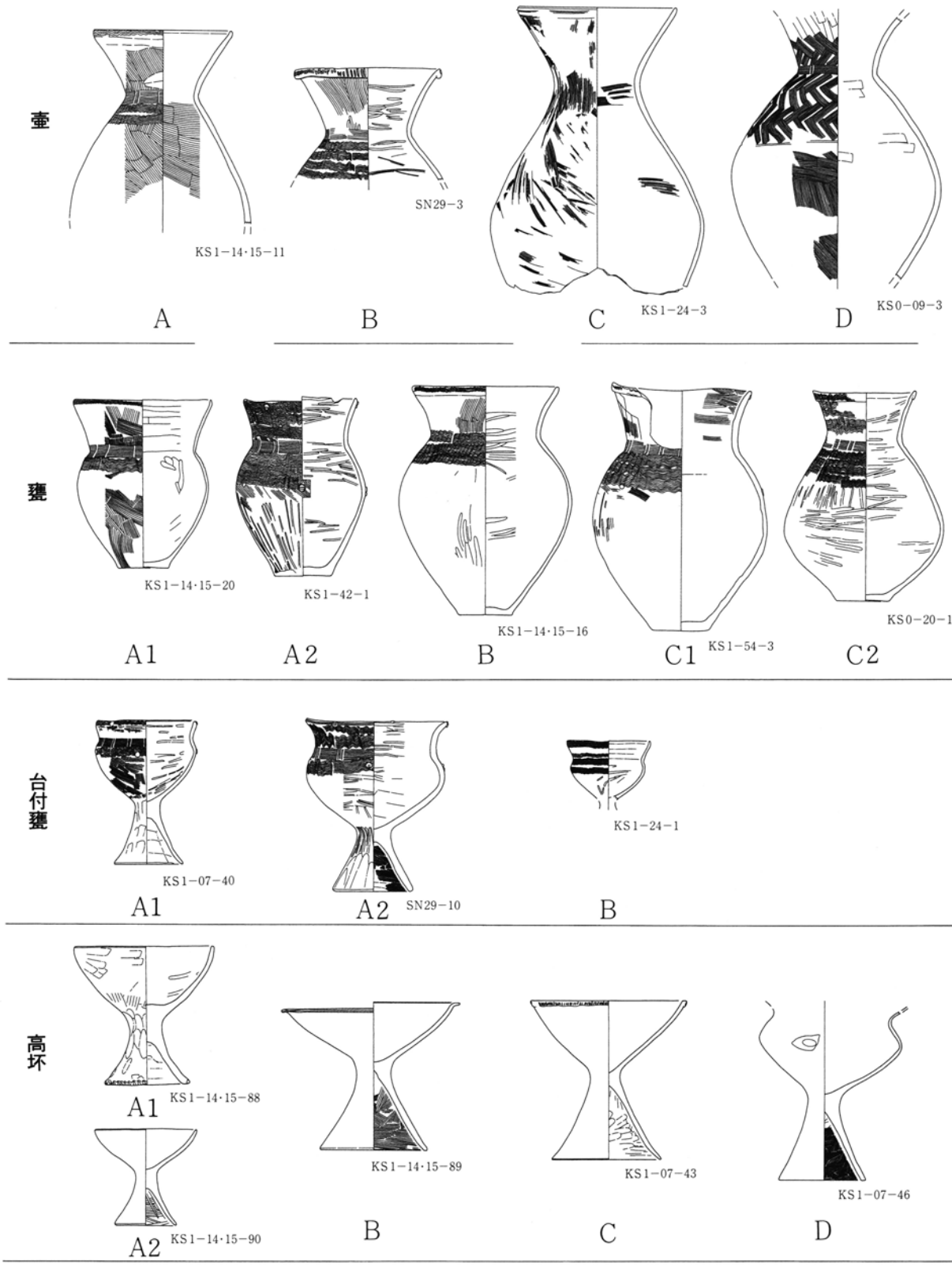


図135　弥生土器分類図

2　人面付土器について

平野進一

2-1　はじめに

小八木志志貝戸遺跡から弥生時代後期の人面付土器の出土があった。人面付土器は弥生中期初頭から中期前半にかけて、東日本の再葬墓に伴う遺物として知られているが、方形周溝墓が広く定着した弥生後期では極めてめずらしい。

本遺跡出土の人面付土器は北関東西部地方の後期弥生社会における信仰の一端を知る希少な資料と考えられる。

2-2　人面付土器の出土状態

人面付土器は本遺跡の1区から出土した。1区における弥生時代の遺構は、土器棺墓群・溝・竪穴住居・土器集中分布地域等がある。これらの遺構は弥生後期の時期にあり、遺構の新旧・土器の様相から、①土器棺墓の形成・廃絶、②溝の掘削・廃絶、③居住区から生活廃棄物の捨て場へと大きく推移している。人面付土器は溝、土器棺墓の形成による墓域及び生活廃棄物の捨て場から破片として出土している。その推移は人面付土器の時期と性格を考察する上で重要なので要約する。

(1)土器棺墓の形成と廃絶

土器棺墓は20数基が検出された。1区を中心に一部が北側0区、南側2区にかけて南北約120mの間に分布する。調査区では方形周溝墓の検出を見ていないので初生児・幼児を埋葬した土器棺墓による墓域が形成されたものと考えられる。

土器棺墓の16・17・20・21・22号は南北方向に蛇行する溝の掘削によって壊されており、その形成と廃絶の時期は土器の様相から後期中葉にある。土器棺墓は後期後半には継続せず、その後居住域からの土器廃棄の場として攪乱されるところとなった。

(2)溝の掘削から廃絶

上端幅3mほどの濠が南北方向に約150mにわたって蛇行して検出されている。逆台形状に大きく開き、底部は砂粒混じりの褐色粘質土、その上部に黒色の粘質土が厚く堆積する。上層に浅間火山を供給源とする浅間C軽石層（As-C）が弧状に堆積し、その降下年代の4世紀前半には半分以上が埋没していた。

出土遺物は底部から後期中葉の樽式土器、浅間C軽石層上から古墳前期の石田川式土器が出土している。人面付土器の頭部の一部は底部に近い黒褐色粘質土（7層）から出土した。

溝は南北方向に蛇行する形状から用水路として開削されたものとみられるが、比較的早くその機能が失われ、厚い黒色土の堆積から長く低湿な状態が続き、居住域から土器等の生活廃棄物が投棄されるようになった。

(3)居住域からの生活廃棄物の捨て場

土器棺墓群が分布する1区は、溝の東側にそって広範囲に多量の土器破片、それに混じってイノシシ・シカ等の獣骨・木炭などの細片が広がり、生活廃棄物の捨て場となった。そのため土器棺墓の多くは廃棄による多量の土器片が混じり、荒らされた状態で検出された。出土遺物は弥生後期中葉から後半に続く樽式土器や古式土師器の出土がみられている。

人面付土器の頭部と体部破片の一部は土器等の捨て場の下層から散じて出土している。

以上、1区における遺構の推移を述べたが、人面付土器の頭部破片は溝下部の黒褐色粘質土、土器棺墓群が分布する墓域及び土器等の捨て場から頭部と体部破片が散じて出土した。

人面付土器は弥生後期の中にあるが、土器棺墓が形成後、溝の掘削や生活廃棄物の捨て場として墓域が荒らされたため遺構との関連が明確にできなかった。東側に推定される居住区から廃棄物として捨てられた可能性もあるが、人面付土器という形態の特異性から日常生活の中で使用されたものとは考えがたく、土器棺墓にかかわるものと推定している。

2-3　人面付土器の特徴

頭部と体部の破片である。径5㎝ほどのやや平たい頂部をもつ頭部はつまみを思わせるようなふくらみを持つ。最も細まる目の周囲から下方に向かって広がり、目は写実的で上まぶたに脹らみがある。頭頂部から高く大きな鼻を付け、二つの鼻腔が穿けられる。頭頂部から頬の部分にかけて、半円状の大きな耳が付けられるが左耳は欠失、右耳の中央部分に一つ刺突孔がある。

体部は中央から底部にかけての破片で、下唇とみられる滑らかな窪み部分がある。体部外面は篦磨き、内面は横方向に刷毛目痕がある。色調は淡褐色で、頭部と体部中央は赤色塗彩される。体部上半部と底部を欠失しているが、図上復元から推定すると高さ27.5㎝前後、胴部中央部で17.5㎝前後の大きさと思われる。

人面付土器は、写実的な目・刺突孔のある大きな耳・赤色塗彩を施すなど強調された特徴を持つ。なお、体上半部は欠失しているため、腕を付けていたか人骨等の遺物が納められていたかはまったく不明である。

2-4　人面付土器の性格

弥生前期から中期前半に関東地方をはじめ、東日本に広く分布した再葬墓に代わり、方形周溝墓が波及・定着した中期後半から後期の段階に、わずかではあるが関東地方を中心に人面付土器の出土がある。

南関東地方では、千葉県三島台遺跡から中期末の腕を付けた人面付壺、後期では神奈川上台遺跡の人面付壺、神奈川県ひる畑遺跡の人面付土器等の類例が知られる。北関東地方では、礫床による埋葬施設をもつ周溝墓と土器棺墓群を検出した渋川市有馬遺跡の墓域から、両手を広げ頭に被り物を付したと思われる弥生後期の人面付壺が出土した（図136-6）。また近接する有馬条里遺跡でも、赤色塗彩された鼻腔のある人面付土器の破片が出土している（図136-7）。

本遺跡出土の人面付土器は体部上半が欠失しているため手の有無は確認できないが、強調する鼻や耳等類似性があり、有馬遺跡出土の人面付土器と用途・機能を同じくするものと推定できる。特に有馬遺跡の人面付土器は、周溝墓及び土器棺墓が検出される墓域から単独で出土しており、土器棺墓の埋葬にかかわり使用された可能性がある。広げた両腕は方向が異なるとはいえ、弥生前期から中期後半に幼児あるいは初生児の死と埋葬に深いかかわりが推察される容器型土偶との関連も今後の検討課題といえる。

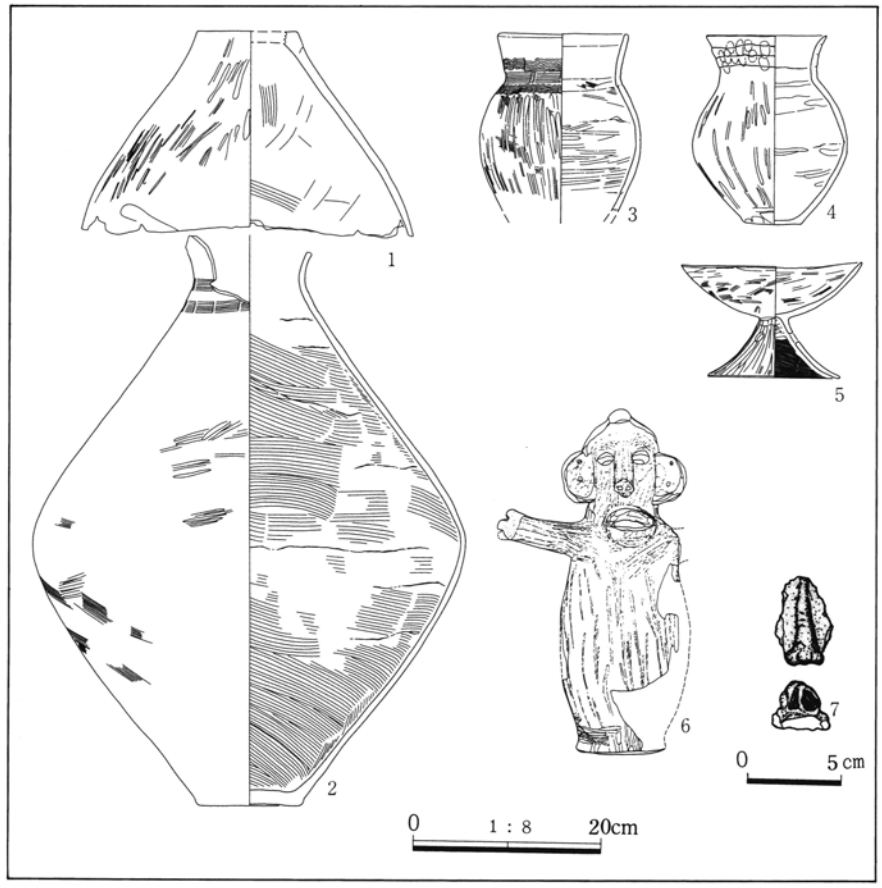
2-5　おわりに

以上、本遺跡出土の人面付土器について検討した。本資料を含め、有馬遺跡・有馬条里遺跡から人面付土器の出土があることは、方形周溝墓が広く定着した北関東西部地方の樽式土器を使用する後期弥生社会の中に、人面付土器を使用する伝統的な埋葬の風習が残存していたことがうかがわれる。その風習は再葬墓の系譜とみるよりも、乳幼児・幼児の埋葬にかかわり使用された可能性を想定している。

（本稿は『考古学ジャーナル』434に発表した速報に加筆したものである。なお遺構性格を考えて「濠」を「溝」と表現した。）

参考文献

荒巻　実・設楽博己.1985「有髯土偶」『考古学雑誌』71-1
石川日出志.1987「人面付土器」『季刊考古学』19
群埋文.1989『有馬条里遺跡Ⅰ』関越自動車道（新潟線）第29集
群埋文.1990『有馬遺跡Ⅱ　弥生・古墳時代編』関越自動車道（新潟県）第32集
宮下健二.1983「縄文土偶の終焉」『信濃』35-8



1·2：土器棺墓(28号)　3：07号遺構(下層)　4：07号遺構(上層)　5：07号遺構(上層)
6：有馬遺跡出土の人面付壷　7：有馬条里遺跡出土の人面付土器部分

図136　人面付土器関連図

3　土器棺墓群について

入澤雪絵

3-1　土器棺墓の分布

小八木志志貝戸遺跡からは、弥生時代後期に属する土器棺墓[1]が24基検出された。これら24基の土器棺墓は、グリッド区切りでみるとKS０区で４基、KS１区で17基、KS２区で３基検出されており、南北に広い分布状況である（図138参照）。実際の分布状況は、土器棺墓北端の標高は108.80ｍ、南端の標高は105.70ｍと、北から南への緩やかな微傾斜地上の分布である。

24基の土器棺墓は、中でもKS１区に集中して土器棺墓群を形成している。これらは07号遺構の両側に沿う形での構築である。一方単独で構築するものは、KS０区12号・20号・28号遺構（以下遺構を省略）の３基がある。互いの間隔を12号と20号では約100ｍ、20号と28号では約45ｍあけての構築である。

なおKS２区北側にもKS１区に繋がる土器棺墓の広がりが想定されたが、後世の攪乱が酷く良好な検出状況を得られなかった。

3-2　土器棺墓の墓坑と埋土

土器棺墓の掘り方を確認できたものは、KS０区12号・KS１区24号・27号・28号・35号・42号の６基である。他の土器棺墓についても掘り方の確認に努めたが、埋土と周囲の土との識別が非常に困難で、掘り方を確認するに至らなかった。これは墓坑内に土器棺を埋納した直後、墓坑を掘った土で埋め戻した行為に起因する。

断面・平面形とも墓坑規模を観察できたものは、KS０区12号・KS１区24号・35号・42号の４基である。平面形はいずれも不定な楕円形を呈するタイプで際立った相違は看取できない。一方断面形では墓坑を深く掘り込む24号のタイプと、浅く広く掘り込む12号・35号・42号のタイプがある。後者は墓坑底面を平底形にし、埋納土器より一回り以上大きく掘り広げる特徴がある。また墓坑の深さと埋納する棺身器高との関係は、24号が特殊な位置にある他はほぼ比例関係にあるといえる（図１）。これは24号が他の土器棺墓と比べて古相段階にある時期差が、墓坑の深さの相違と関係すると考えられる。

また埋納する土器と墓坑底面との設置面は、42号が墓坑底面と接しているほかは、墓坑底面より高い位置での出土であった。これを土器棺埋納過程として推測すれば、墓坑掘削後少し埋め戻した段階で埋納した可能性を指摘できる。

埋土に関する特徴は、35号の埋土の一部に焼土と炭化物粒子が確認されたことである。但しこれが葬送に関わるものであるかは不明である。また埋土の中にAs-C軽石が混入するものは、24号と35号である。24号は黒色粘質土中に混入する層が、上層部約15㎝レンズ状に堆積していた。そのため墓坑を埋め戻す際、埋土を充填させたのだろうかという問題も出てくる。

またKS１区内の土器棺墓群上層とその東側にかけて、As-C軽石の多量に混じる層を除去すると、同時期の包含層（KS1-14・15号遺構）が広く分布していた。包含層の中には、多量の焼けた鳥・獣骨片、ミニチュア土器、人面付土器の破片が散在し、土器棺墓群に伴う葬送儀礼の場の広がりが想定できる[2]。

3-3　土器棺墓の形式と埋設状態

土器棺墓の形式とは、棺がどのような状態で組み合わさっているかの相違を示す。大別すると、単棺（１個体の壺ないし甕のみで棺を構築）と複棺（２個体以上の壺ないし甕を合せ口状に構築）の２つの形式である。検出された24基の土器棺墓のうち、形式を判別できるものは19基あり、単棺は７基、複棺は12基であった[3]。このうち複棺12基の中で特徴ある合せ口の方法を示すものは40号で、唯一棺身の内側に蓋が入るものである。ほか複棺11基は全て棺身の外側に蓋を被せるものである。また複棺の土器棺使用個体数は、36号が３個体使用しているほかは全

て２個体使用で土器棺墓を構築していた。

埋設状態を知れるものは17基にのぼった。埋設状態はその検出状況から、立位・横位・斜位・逆斜位の分類をした[4]。その内訳は、立位３基、横位５基、斜位８基、逆斜位１基であった（表９）。

ここで土器棺墓の形式と埋設状態の関わりをみると、以下のようになる。

- 単棺７基　　立位１、横位２、斜位１、不明３
- 複棺12基　　立位１、横位２、斜位６、逆斜位１、不明２

単棺では埋設状態の傾向がつかめないが、複棺では斜位埋設が多い傾向が認められる。

斜位埋設の埋納方法における共通事項は、棺身の胴部最大径部から底部までの器面を基底にして斜位に設置していることである。斜位埋設全てで墓坑の掘り方を検出していないため、この基底が墓坑底面と接するかは不明であるが、おそらく掘り方に基底を水平に埋設し、斜位埋設できるような掘り方を有していたと思われる。

また墓坑内に斜位埋設で固定するために、蓋の下部へ枕状に土器を設置しているものが２基確認された[5]。KS１区28号のものは蓋と同一個体で、54号は土器棺墓使用のものとは別個体で斜位に支えていた。今日、このような複棺斜位埋設は各地で一定した検出例が報告されているが、これは棺身から蓋がずれるのを防ぐという機能面のほかに、埋葬する側の被埋葬者に対する葬送時の精神面も考慮する必要があるかもしれない。

これら土器棺墓形式、埋設状態別で分布状況をみると、単棺、複棺は混在しており、また07号で墓域を区画したような両側での状況変化も見られない。このため、土器棺墓形式別での際立ったグループ別けは難しい。だが埋設状態別でみると、複棺斜位埋設する一群はKS１区中央部に集中する様子が認められる（図138）。

３－４　土器棺使用器種と特徴

使用器種は、樽式土器の壺・甕が主体である。他の器種はKS０区28号の蓋に使用された有孔鉢のみがみられる。全体で壺と甕の使用頻度を個体数でみると、壺と甕計35個体中、壺22個体、甕13個体と壺の方が高い。これを単棺７基の中でみると壺３個体、甕４個体となり、全体の割合では壺の方が高かったのに対し、単棺では甕の使用頻度が高い。一方複棺12基の棺身＋棺蓋の組み合せでは、壺＋壺は６基、壺＋甕は４基、甕＋甕は１基、壺＋有孔鉢は１基となる。これを棺身に限り使用器種をみると、壺11個体、甕１個体となり、棺蓋では壺６個体、甕５個体となる。このように棺蓋に比べ棺身への壺の優位制（埋葬する側が故意に選定）が想定できる。

土器棺墓使用土器を観察すると、甕では器面外面にススやコゲによる炭化物の付着が見られ、多くは強い火熱を受けた事による器面の赤色変化が見られる。そのため土器棺墓に使用された甕は、日常生活で使用したものを転用した可能性もある。

棺身に底部穿孔のみられるものは、24号・36号・40号の３基であった。しかし36号は穿孔した底部に別個体の底部を補って埋設している点、24号は別個体の底部が墓坑から共伴している点を考慮すると、底部穿孔のまま埋納したものは40号のみとなる。

土器棺破砕部割れ口を観察すると、以下の３点が認められた。

①　打ち欠いた面をそのままにするもの。

②　粘土帯で大方きれいに打ち欠け無調整のもの。

（KS０区28号棺身、KS１区40号棺蓋）

③　②の面を削りほぼ平らに調整するもの。

（KS１区28号棺蓋・36号棺蓋・54号棺蓋）

大方は①に属し、割れ口を調整するものは３個体（全て棺蓋）しか見られなかった。

なお土器棺破砕部の接合資料は、包含層から大量に出土した土器群から得られなかった。弥生前期の再葬墓事例である、藤岡市沖Ⅱ遺跡でも土器棺破砕部資料は土器溜りから得られなかったという。ここでは「周囲の包含層からも接合資料をえられなかったことから、埋設時に既に失われていた可能性が高

い」[6]と推測し、本遺跡も現時点では同様の解釈になろう。

3-5　土器棺墓群の埋設時期

検出された土器棺墓を弥生後期樽式土器編年1～3期[7]に区分すると以下のようになる。

- 1～2期－KS1区05、24号
- 2期－KS1区27、28、33、34、35、36、37、38、40、41、42、54、52号
- 2～3期－KS0区11、12、20、28号

1期に該当するものは少なく、KS1区の南側に分布する。24号は無文で胴部、肩部とも張りの弱い古相で、05号は等間隔簾状文を施し24号と器形、胎土とも似るものである。2期に該当するものは多く、KS1区中央部に集中し一群を形成する。多くは複棺形式で、前述の斜位埋設の集中する一群と重複する。またこの時期から大型壺の使用が見られる。3期に該当するものはKS0区内で、2期が集中する一群より北側に分布する。3期のものは群を形成せず、単独でばらついた分布である。

これらを埋葬頭位[8]でみると、2期に該当する中に棺身口縁部を北方へ向ける共通点が認められるものがある（図137B）。これらは他に複棺形式である点、斜位埋設にする点という共通事項が認められる。このことからこの一群は同時期埋葬であり、また埋葬者間の親近性も強く求められよう。なお他の2期に該当するもの、1期、3期のものに関して、型式別でグループ化し包括するには、積極的な材料に欠け危険であるためあえて分布に留めた（図138）。

また近年問題が指摘されている複棺における一型式を越す組み合せ事例であるが[9]、本遺跡では見られない。大方棺身、棺蓋とも同一型式内でのセットである。

3-6　土器棺墓の被葬者

検出された土器棺墓全てに細心の注意を払って土の振るいを行なったが、被葬者の骨や副葬品の検出はなかった。そのため被葬者について語る資料がないのであるが、県内の土器棺出土事例をみると新保遺跡7号、11号周溝墓主体部壺棺から幼児の歯の出土[10]、有馬遺跡SK70、119、127、367、370壺棺からも幼児の歯、骨の出土[11]があり、また県外においても大方土器棺墓は幼児用の棺という認識がされている[12]。報告書によると新保遺跡11号周溝墓壺棺出土の歯は、4～5歳の幼児歯と鑑定され、埋納する土器棺の開口部径は22.0×24.0㎝であった。今日4歳という幼児の頭骨計測値は、頭最大長160㎜、頭最大幅130㎜であり[13]開口部からの埋納は十分可能である。また有馬遺跡SK70壺棺出土の骨、歯は1歳前後と鑑定され、開口部径は22×26㎝であった。同じくSK367壺棺出土の歯は3歳前後と鑑定され、開口部径は22.5×23.0㎝であった。

同様な視点で本遺跡の土器棺墓について、開口部径、器高を示すと次のようになる（図137C）。開口部径が判別可能なものは17基あり、数値の集中は12～14㎝で、平均値は13.8㎝であった。最小開口径のものはKS2区103号で9.0×10.0㎝、最大開口径はKS1区36号でも17.0×18.5㎝であった。これは関東地区の集成分析の平均値18.4㎝[14]からみても少なく、本遺跡のものは開口部径が小さい特徴がある。

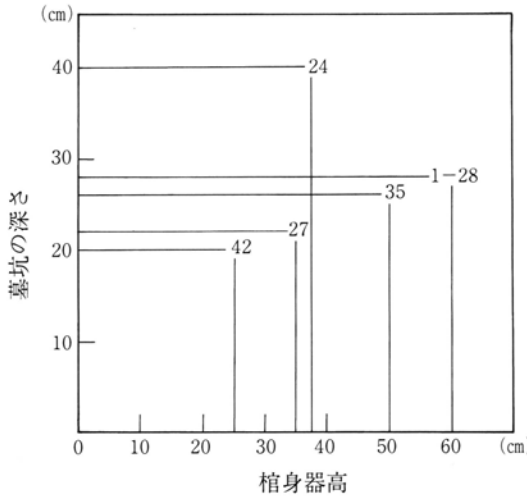
今日新生児の頭骨計測値は120×95㎜[13]であり、本遺跡のもの全てを幼児棺であると認めると、開口部径から埋納するには穴が小さく苦しいものが多い。だが開口部径12㎝に達しないものについては、被葬者を胎児（早産・流産などによる死産）と想定すれば、胎児3ヵ月の頭骨計測値33×30㎜から、9ヵ月の100×80㎜まで、十分埋納するに可能な数値である。

一方棺身器高は40㎝前後で集中する数値がみられる。だが最小器高はKS2区103号の16㎝から、最大器高はKS0区28号の62.5㎝まで、数値に幅がみられる。なお棺身器高の関東地区の集成分析の平均値は39.9㎝[14]で、本遺跡の集中値とほぼ同じであった。

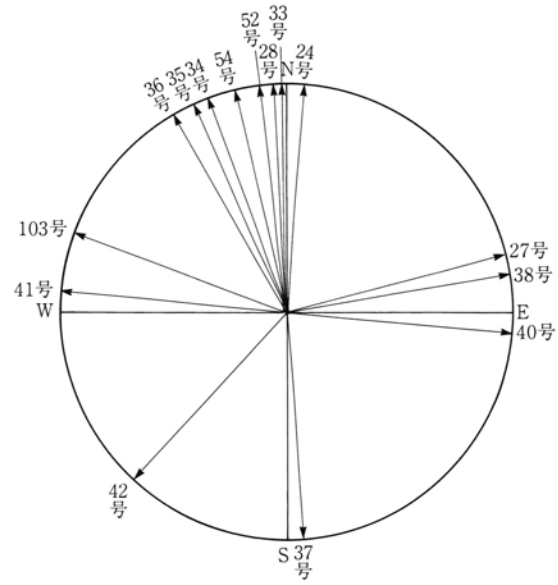
今日新生児の身長は45～50㎝であるという[13]。この数値に達しない棺身器高が多くあるが、足を屈折して埋納したと仮定すれば、器高30㎝もあれば十分

遺構名	棺の型式	埋設状態	棺身					棺蓋		墓坑確認	備考
			器種	開口部径cm	残存器高cm	穿孔	特徴	器種	特徴		
0-11	複棺	立位	壺	13.5×14.0	24.9		肩部赤彩施す	壺			
0-12	単棺	(不明)	壺							○	破砕状態で出土
0-20	単棺	立位	甕	9.5×10.0	28		復元後完形				
0-28	複棺	(不明)	壺	15.5×17.0	62.5		割れ口粘土帯で切れる	有孔鉢	有段折返し口縁に刺突施す		破砕状態で出土
1-03(1)	複棺	(不明)	壺					壺			
1-03(2)	単棺	(不明)	甕								
1-05	単棺	(不明)	壺	12.0×13.5	39.8		復元後完形				破砕状態で出土
1-24	単棺	斜位	壺		38	○				○	墓坑中位から出土
1-27	(不明)	横位	甕	13.0×14.0	34					○	07号遺構に切られる
1-28	複棺	斜位	壺		59.6			壺	割れ口調整あり	○	蓋と同一個体(口縁～胴部)の枕を設置
1-33	複棺	斜位	壺	11.0×14.5	43.3		鋸歯文施す	壺			
1-34	複棺	斜位	壺	11.5×13.0	36.5			壺			
1-35	複棺	逆斜位	壺	10.5×11.0	50.5		T字文施す	壺	鋸歯文施す	○	
1-36	複棺	斜位	壺	17.0×18.5	36.8	○		壺	割れ口調整、底部欠損あり		底部に別個体(胴部～底部)の土器を設置
1-37	単棺	横位	甕	16.0×17.0	29.8		復元後完形				
1-38	複棺	横位	壺	14.0×14.5	49.2			甕			
1-40	複棺	斜位	甕	16.5×17.0	38	○		甕	割れ口粘土帯で切れる		棺身内側に蓋が入る
1-41	(不明)	斜位	甕	12.0×12.5	37		復元後完形				
1-42	単棺	横位	甕	14.5×15.0	23.6		復元後完形			○	
1-52	複棺	横位	壺	10.5×11.0	48.1			甕			
1-54	複棺	斜位	壺	13.5×14.5	42			甕	割れ口調整あり		甕1個体を枕状に設置
2-94	(不明)	(不明)	壺								
2-102	(不明)	立位	壺								100号遺構に切られる
2-103	(不明)	(不明)	甕	9.0×10.0	16		小穿孔あり復元後完形				

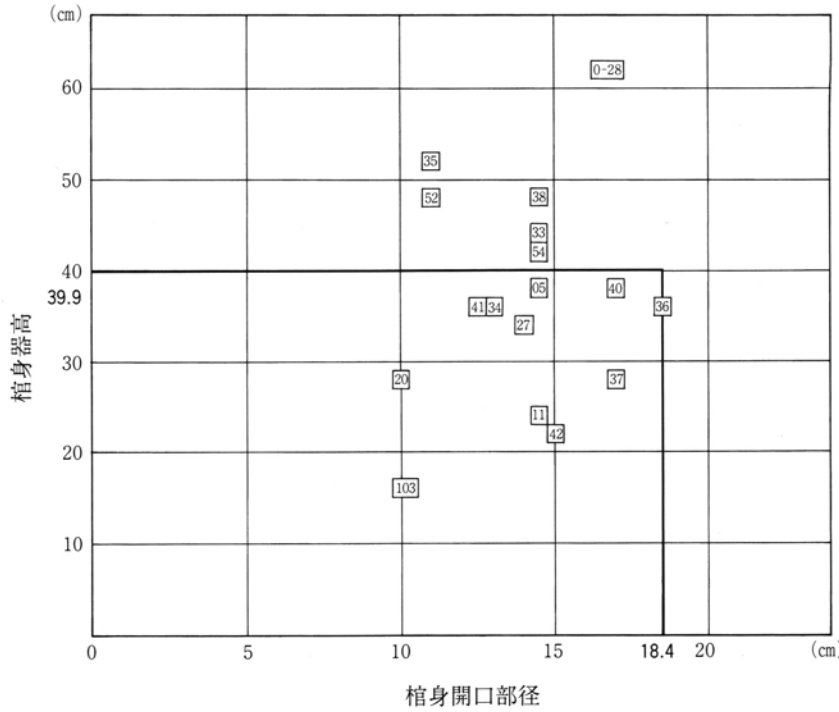
表9　土器棺墓分類表



第Ａ図　墓坑の深さと棺身器高の対応



第Ｂ図　斜位及び横位埋設の埋葬頭位



第Ｃ図　棺身開口部径と棺身器高の対応

図137　土器棺墓分類図

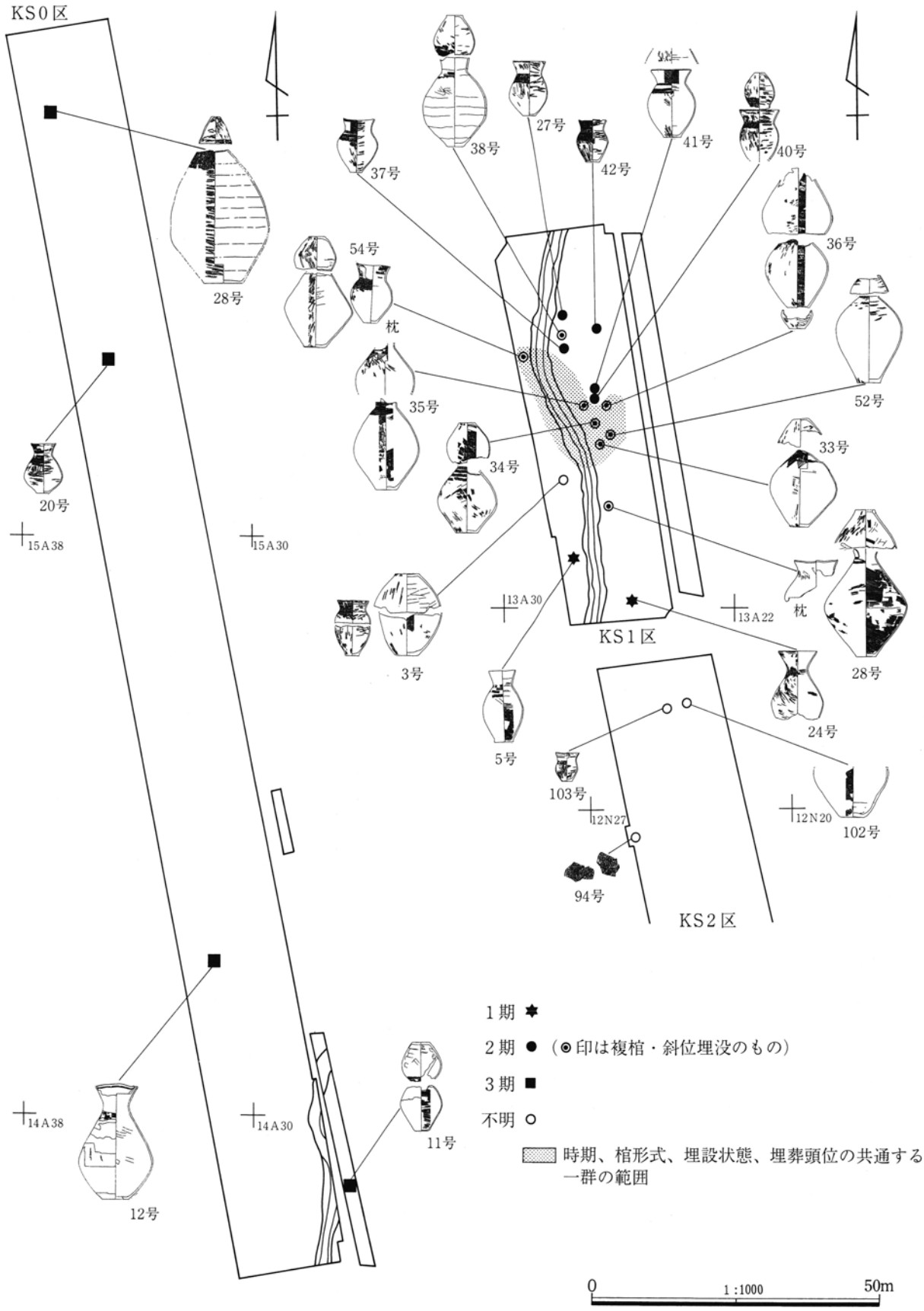


図138　土器棺墓の分布状況

埋納するに可能となる。

3-7　結び

これまで県内の土器棺墓の多くは、円形・方形周溝墓に伴って検出された。新保遺跡では方形周溝墓の中央主体部に土器棺が埋置され、有馬遺跡では円形周溝墓、礫床墓の近辺に埋置される。しかし本遺跡からは周溝墓の検出はなく、土器棺墓のみで墓群を構成しているところに小地域色を看取できる。

なおこれまで土器棺墓は「幼児棺」であるという前提に従い埋葬者の分析をしたが、本遺跡のものは「幼児」の中に胎児も含めなければ多くは埋納不可能であった。これは換言すれば、胎児を除外することは現状認識を否定することに繋がってしまう。つまり、前提に従って検出された24基全てを幼児棺と限定することは、現時点ではやはり推論にすぎないのである。“幼児棺のみで形成された広い墓域”という特異な墓制を考えるには、まだまだ今後の検出例と合わせ検討していかなければ解釈は難しい。

註

(1)　用語の定義としては「土器棺墓」は土器棺だけで一つの墓制をなすものを示し、「土器棺」は他の墓制の中で棺を構築するものを示す。
(2)　墓上に同時期の包含層や焼けた獣骨などが広く分布する例として、藤岡市沖Ⅱ遺跡、高崎市新保遺跡、福島県一ノ堰B遺跡、同県鳥内遺跡などが知られている。
(3)　24基の中で判別は不明なものが5基ある。KS2-94、102、103号の3基は良好な検出状況を得られなかったため、KS1-27、41号の2基は単棺であるが別個体の破片が数点共伴し、複棺の可能性もあるため分類に含めなかった。
(4)　坂口.1991の分類に準拠した。
(5)　斜位埋設する際、河原石で枕状の機能を設ける例として、渋川市空沢遺跡第5次3号壺棺、長野県屋地遺跡、同県蔦石遺跡などがある。なおKS2-102号からも河原石が出土しているが、確実な使用は断定できない。
(6)　藤岡市教委.1988
(7)　飯島・若狭.1988に準拠した。
(8)　埋葬頭位は斜位、横位埋設について、棺身底部から口縁部方向が判明するもののみ示した。
(9)　再葬墓の福島県鳥内遺跡21号土坑、茨城県女方遺跡34号土坑例など。
(10)　群埋文.1988
(11)　群埋文.1990
(12)　馬目は福島県楢葉天神原遺跡検出の土器棺墓33基全てを幼児棺と認定した（馬目.1982）。
(13)　幼児、胎児に関する身体的統計値について、群馬県立自然史博物館学芸員楢崎修一郎氏に御教示頂いた。
(14)　坂口.1991の分析報告を参考にした。

参考文献

飯島克巳・若狭徹.1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9
石川町教育委員会.1998『鳥内遺跡』
馬目順一.1982『楢葉天神原弥生遺跡の研究』楢葉町教育委員会
群埋文.1988『新保遺跡Ⅱ』
群埋文.1990『有馬遺跡Ⅱ』
坂口滋皓.1991「東日本弥生墓制における土器棺墓(1)」『神奈川考古』27
福島県教育委員会.1988「一ノ堰B遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅵ』
藤岡市教育委員会.1986『C11　沖Ⅱ遺跡』

4　土器散布について

横山千晶

4-1　はじめに

本書では小八木志志貝戸遺跡の弥生時代遺構を中心に報告を行った。弥生時代の遺構はKS１区から２区にかけて集中している。特にKS１区には土器棺墓、濠（07号遺構）、土器集中地域（14,15号遺構）などが比較的狭い範囲で、密集して見つかっている。この中でも土器集中地域は、その膨大な遺物量と人面土器という特異な遺物の出土から、本遺跡の遺構の中でも中心的な存在である。

「土器が集中して出土する」という遺物の産状においては、濠上層で出土した土器群も同様に「土器集中遺構」である。こうした、いわば遺構の「表現形」の共通性から、先に発表した速報（平野ほか1998）では土器集中遺構と濠上層の土器群という二つの「土器集中遺構」を一連のものとして考えた。しかし、整理作業の進行に伴って、両者が時期的にも性格的にも異なる、明確に分離されるべきものであることがわかってきた。本節では、この両者を分離することにより、濠の形成、土器集中遺構の形成、濠の埋没という時間的序列を復元し、両者のあり方を改めて整理したい。

4-2　土器出土位置の検討

調査時において、平面位置とレベルを記録して取り上げた遺物は、濠出土のものが上下層合わせて580点、土器集中遺構出土のものが520点の計1100点ある。これらの遺物の出土位置をグラフ化して図に示した。

図139-1は土器の平面的な分布状況を示したものである。赤線は濠の上端線を、▲マークは土器墓を示す。図139-2～6は東西グリッドラインの北５ｍの範囲で出土した土器の標高をプロットした見通し図と、赤線で示した基準線上で想定される旧地形の高低線を重ね合わせたものである。グリッドライン上の高低線と見通し図としての土器の位置を重ねているため、土器の位置と高低線とは必ずしも一致していない。

ここに示した高低線は、濠部分については等高線図から読みとった基準線上での高低を示し、この範囲外の部分（土器集中遺構部分）については部分的な標高記録と基準線上にかかった土器の標高をもとに高低線を作成した。土器の標高を使用したのは土器集中地域の土器は、土器棺のように埋設されたものではなく、周辺の土器破片間にも大きな標高差は認められないため、土器の下底面が旧地表面とかなり近接したものと想定しても大過ないものと思われるからである。濠と土器集中地域の間にあって土器の出土がない空白帯については、濠の上端を含めて、旧地表の形状を復元するデータがないため、直近で得られる標高値を結んでいるが、後述するように土手状の構造があったものと推定されることとなった。

4-3　溝上層の土器

濠上層出土土器には樽式土器と赤井戸式土器、いわゆるＳ字状口縁台付甕に代表される古墳時代前期の土師器が混在している。本調査区で赤井戸式土器と古墳時代前期の土師器を出土するのは濠上層のみである。図の白抜きの丸は樽式土器を表し、黒丸は古墳時代前期の土師器及び赤井戸式土器を示したものである。黒丸は濠部分にのみ現れている。図139-2～6の垂直的な分布を見ると、黒丸は濠中の土器群の上位に現れることがわかる。分布の傾向としては１区の南端に高坏の集中がみられることと、完形に近いＳ字状口縁台付甕が全体に散じて出土していることが挙げられる。

濠の上層、下層の区分は図139-2・3にも明瞭に示される。一次堆積に近いと思われるAs-Cを境界として区分したものである。濠上層とした土器群はAs-Cの上位にあたるもので、古墳時代の所産であ

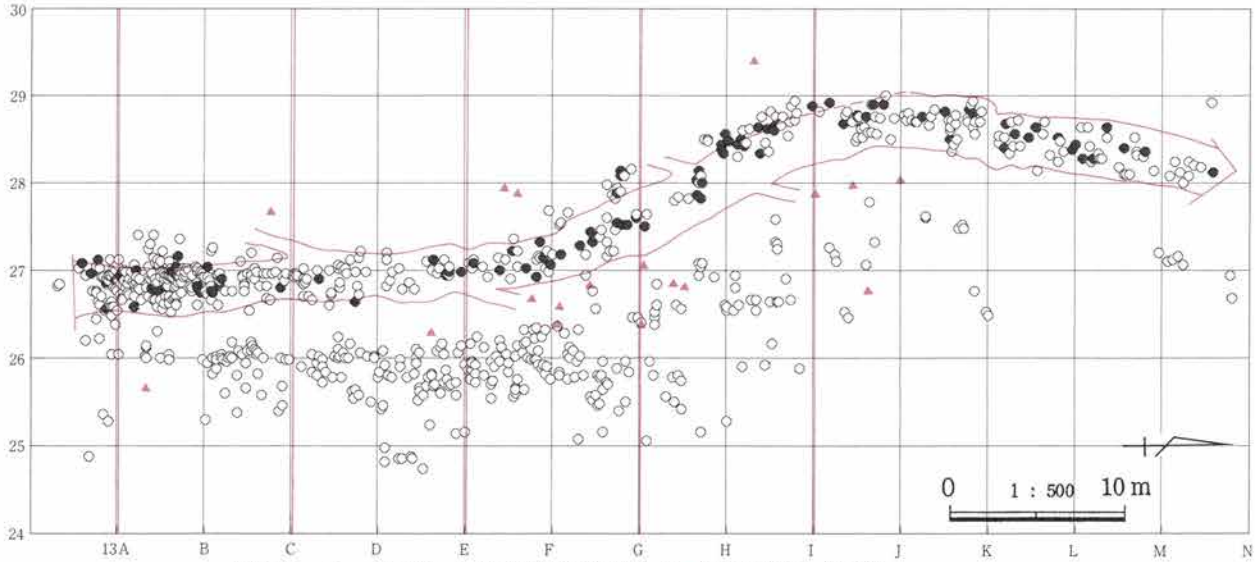


図139－1　遺物出土位置平面分布図（▲は壺棺出土位置）

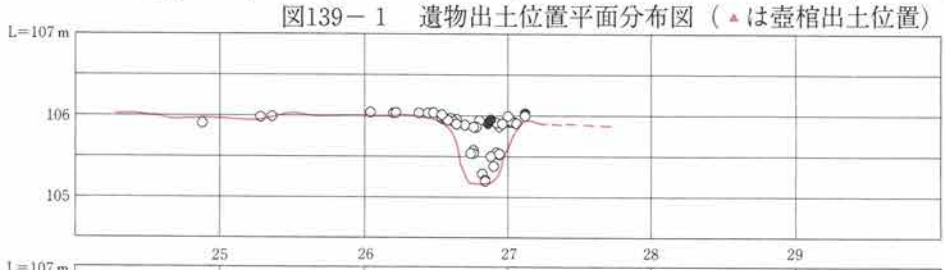


図139－2　遺物出土位置垂直分布Aライン

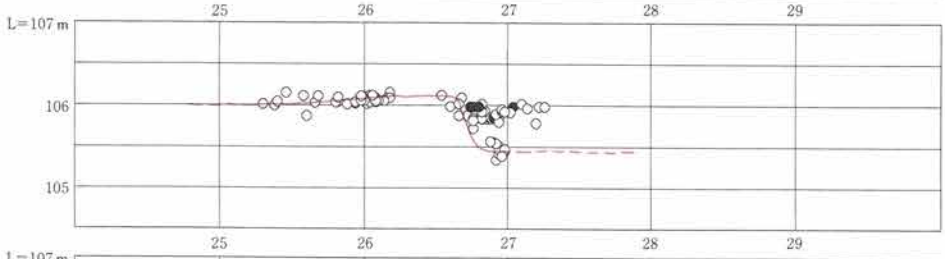


図139－3　同Cライン

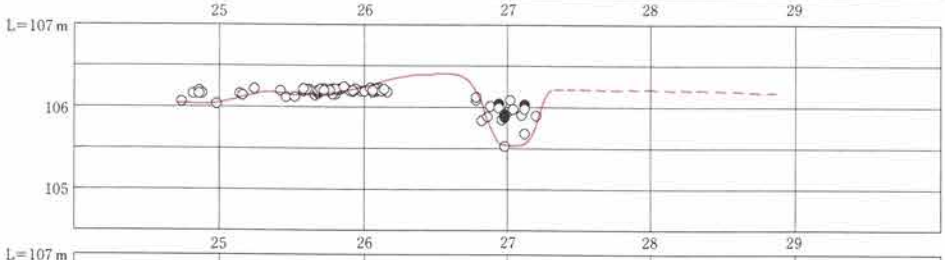


図139－4　同Eライン

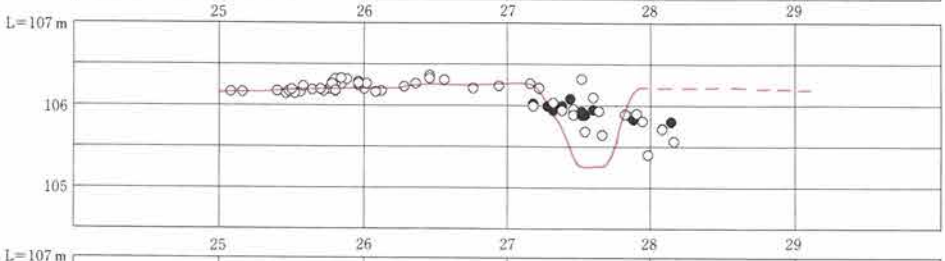


図139－5　同Gライン

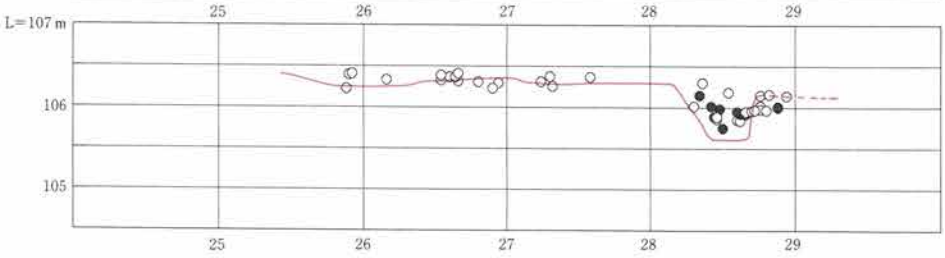


図139－6　同Iライン

ることは明白である。一方、濠の下層や土器集中地域には古墳時代前期の土師器や赤井戸式土器は含まれていない。土器集中地域部分ではAs-Cの一次堆積層は確認できないが、これが層位的にはAs-Cの下位にあたり、土器そのものの点からも弥生時代の所産であることが示されている。

4-4　土器集中地域と濠

濠際には土器の密集しない空白帯がある。この空白帯については、土層断面でも観察される土塁状構造の上面が削平されたために形成されたものと考えられる。土塁状構造は遺物の垂直的分布からも看取することができる。図139-4に特に明確に現れるが、空白帯に近付くに従って土器の標高が高まっていく。

このことから、2つの事象を想定することができるのではないだろうか。一つは、土塁状構造形成以前には土器集中地域は形成されていなかったということである。土塁状構造に先行して土器集中地域があったとすれば、土塁状構造下に埋没した土器が見つかるはずであり、土器が分布しないことによって土塁状構造の形成→土器集中地域の形成という時間的序列が与えられよう。濠下層の土器と土器集中地域の土器との間に型式学的な時間差を読みとることは困難であるが、土塁状遺構は溝に伴うものと考えられるから、これを濠の形成→土器集中地域の形成と読み替えることができる。

もう一つは土塁状構造の上にも土器集中地域が広がっていただろうということである。土器集中地域の土器は空白帯際で特に密度を高めているが、空白帯に近い土器ほど標高を高めている。土塁状構造に乗り上げるように分布することになる。

4-5　濠の埋没

前項の想定は、濠上層の土器群中に弥生土器が多量に含まれることをよく説明する。先に見たとおり、濠上層の土器群は古墳時代前期の所産であるのだが、量的には樽式土器が多数を占める。型式的に共伴するものとは認められず、この場にもたらされるまでの過程が異なるものと見なくてはならない。土塁状構造の上にあった土器が、土塁状構造の崩落とともに濠中に転落したと考えることが妥当なのではないだろうか。

こう考えた場合には、土塁状構造から崩落した土器が、連続的に堆積しているべきであってAs-Cという間層を挟むにしても図2や3のように上下2層にくっきりと分かれるのは不自然であるように思われるかもしれない。しかし、土層断面を見ると、濠埋土の中間層が西側から流入した状態を示しており、西側から濠の埋没が活発化したものとしてこれを説明することができるだろう。

土器集中地域は、一見無差別な土器の集中と見られる。器種ごとの明確なまとまりも捉えがたいのであるが、例えば壺のみの分布を見ると図140-1のようになり、いくつかのブロック状構造が比較的はっきりと見られる。本文中でも4つの単位について紹介した。ただし、これらの単位に含まれる土器がすべて本来の位置を留めるものと考えるのは困難であって、こちら側にも土塁状構造から転落したものが少なくないであろうことが予測される。

4-6　土器棺墓と濠、土器集中地域

上記により、濠・土塁状構造の形成→土器集中地域の形成→濠の埋没→土塁状構造の崩落という時間的序列を得ることができたが、土器棺墓と濠、土器集中地域との時間関係は明確さを欠く。

土器集中地域出土土器の標高と土器棺の確認最低高及び最高高をやはり5m幅の見通し図として表したのが図140-2である。白抜きの丸が土器集中地域出土土器の位置を示し、垂直方向の太線が土器棺の高さを示す。先に述べたように土器集中地域出土土器の標高は旧地表面とごく近いものと考えられる。土器集中地域の中にある土器棺の確認された最高高は、想定される旧地表面とほぼ同じかやや高い位置にある。土器棺の上部は潰れ、あるいは攪乱されるなどして破損しているのが通例であるため、本来の

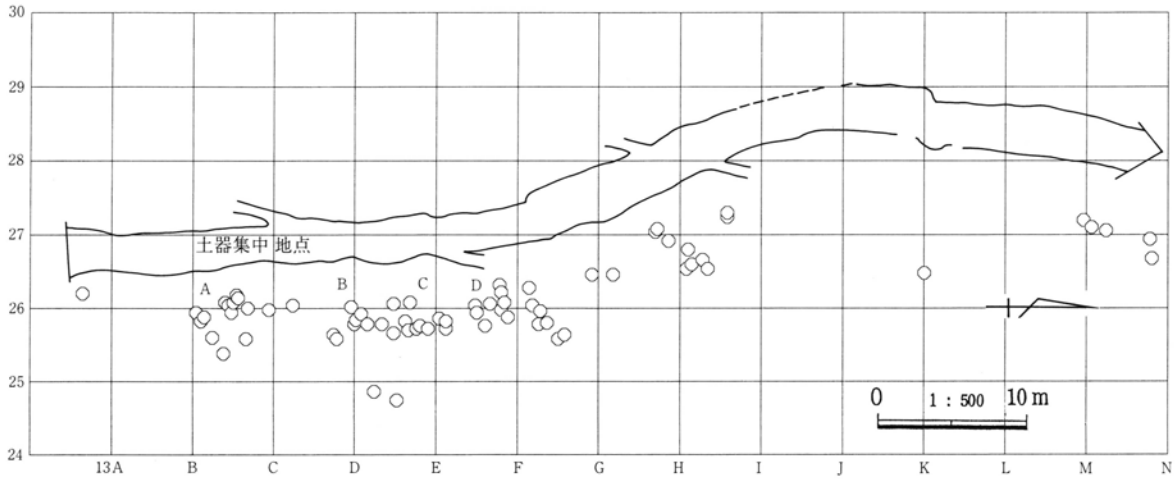


図140－7　土器集中遺構土器棺墓水平分布図

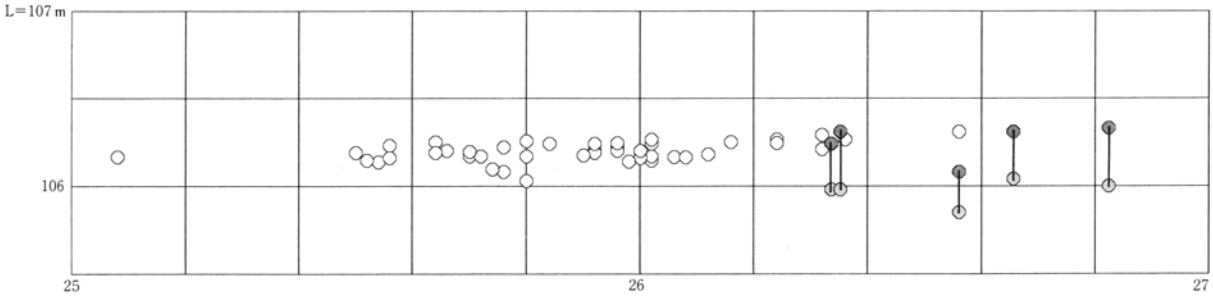


図140－8　土器集中遺構・土器棺墓出土位置垂直分布図（線で結んだものが土器棺の上下）

最高高は地表面より上位にあることになり、蓋部が地表に顔をのぞかせるか、あるいは盛り土がなされていたか、いずれにせよ埋設後も地上にその痕跡を示していたものが多いようだ。

土器棺墓のうち南端部に孤立的に作られた24号遺構は、05号遺構とともに土器型式の点から見ても他より古いことが確実である。しかし、他の土器棺については土器型式の上から濠との時間的序列を与えることができない。

遺構の状況からみると、土器棺墓の全体的なあり方として、濠と土器集中地域の間の空白帯近くにあることが注意される。図140-2によると、特に28号、33号、34号、35号の各遺構は、土塁状構造下にあたる可能性が高い。27号、37号、38号の各遺構も土塁状遺構の際か、もしくは下に入りかねない位置にある。28号遺構の土器型式もやや古層を示すかと思われる。他は土器集中遺構の土器と形式的な差を認められないのだが、上記の時間序列の中に組み込むとすれば濠の形成前にあたることになる。

4-7　人面付土器と土器集中地域

人面付土器は濠の下層、上層、土器集中地域からそれぞれ破片として、比較的広い範囲から破片の状態で見つかっている。正確な出土位置のわかっているものは土器集中地域出土の２点だけである。頭部の大きな破片や底部も含め、破片の多くは濠、特に下層から出土しているが、本来の帰属位置がここにあったと考えるのは困難であり、濠上層でもないことは明らかであろう。先に想定したように、土塁状構造の上にあったものが、濠に落ち込んでいったものと考えるのが妥当であろう。ここにもたらされた時点で人面付土器が完形であったか否かはわからないが、土器集中地域の出土遺物と内容的関連を持つ遺物であろう。

参考文献

平野進一・坂井隆・横山千晶.1998「高崎市志志貝戸遺跡出土の人面付土器について」『考古学ジャーナル』434

5　総括－小八木志志貝戸周辺の弥生時代

坂井　隆

5-1　検出遺構

今回の調査で検出した弥生時代の遺構は次の通りである（p.142遺構一覧表及びp.11・12全体図参照）。

土器集中地域　8カ所
濠　　1条
竪穴住居　　14軒
　（他に可能性のあるもの2軒）
土器棺墓　　23基
　（他に可能性のあるもの1基）
土坑　　6基
　（他に可能性のあるもの1基）
風倒木　　1カ所

これらは大部分が後期中葉（樽2期）を中心とする時期のものに集中している。僅かに北に離れた土器棺墓群と竪穴住居SN29号遺構が、後期後半（樽3期）に限定された遺構である。また土器棺墓の中には少数だが、後期前半（樽1期）のものもある。

5-2　考古学調査結果の検討

南北に細長い今回の調査範囲の中で、以上の遺構は極めて特徴的な分布状況を示している。即ち、緩やかな屈曲を持ちながら南北に少なくとも120m以上走る濠の周辺（南部とする）と濠のはるか北西側（北部とする）に分かれる。

北部は遺構密度が薄い。僅かに竪穴住居1軒と土器棺墓3基、土器集中地域1カ所、土坑2基が散見されただけである。ただ興味深い点は、竪穴住居と土器棺墓3基が上述のように、後期後半のものであったことである。

南部の大きなまとまりが崩壊した後に、残存集落が北部に散らばった感じである。

南部は遺構ならびに遺物密度が極めて濃い部分である。中でも、濠と重複する土器棺墓群、濠の東側に集中する土器集中地域、そして濠から15m以上離れた南東側に展開する竪穴住居群である。

濠は断面逆台形に設計された明らかに人為的なもので、調査範囲を越えてさらに南北方向に延びている。この範囲内では環状に収束する走向は認められないが、常時一程度の水流があって浸食された痕跡はほとんど見られない（調査時には大きな出水があったが）。

調査範囲内の所見では、水を流すより貯める機能が大きかったことは、内部に投棄された大量の土器類からも明らかである。その点では、水路というより環濠の要素がはるかに大きいのだが、環状の走向を示していない点に特徴がある（2区よりさらに南側は現在調査中のため状況は不明）。なおちょうど大規模な遺物集中分布（KS1-14,15号遺構）が途切れるあたりに、橋の柱痕が出ている。

また築造中に大きな礫が落下してきたため、その下を掘っていない箇所があった。それは水流の弱さを物語ると共に、使用期間の短さも示している。

土器棺墓群の分布は、明らかに濠と重複している。その範囲は、東側は概ね本調査範囲内からそれほど大きく展開しないのに対し、西側はまだ広がる傾向が見られる。その生成は、後期前半に南側から始まり、中葉においてやや北側に移って発展している。

この土器棺墓群は、調査範囲内では方形周溝墓とは分離した状態で現れている。当然容量的には一次埋葬であるなら、幼児もしくは胎児しか収納できない。またこの土器棺墓の埋葬に伴うと思われる、特徴的な人面付土器が出土している。これは、北に11kmほど離れた渋川市有馬遺跡の例に類似したものである。

ただ、土器棺墓としての幼児・胎児の埋葬だけが特定の領域を形成することは、これまで全く知られていない。二次埋葬（「再葬墓」）の可能性も含めて、その意味は今後の大きな検討課題となる。なお南東に3km離れた新保遺跡の方形周溝墓25基の主体部として、11基の土器棺が検出されている。また東に3km

離れた新保田中村前遺跡の同時期の方形周溝墓にも土器棺がある。東に2㎞離れた日高遺跡では、3基の方形周溝墓とは別に2基の土器棺墓があった。

大規模な土器集中地域は濠に沿った東側に延びており、細長い範囲（南北70m以上、東西約15m）に限定されている。しかも濠の東側立ち上がり際には数mの空白部分があり、濠及びその東側にあったと考えられる土塁の存在に規制されたあり方をしている。また基本的に竪穴住居群とも重複が見られない。

土器棺墓群の中心部は、この土器集中分布地域と重なっている。層位的に新旧関係があったわけではない。そのため、これを葬送儀礼に伴う行為の跡と見ることもできる。中期の再葬墓の葬送儀礼と遺物集中分布が関係している例は、藤岡市の沖Ⅱ遺跡がある。また福島県石川町の鳥内遺跡では、再葬墓の近くでシカ・イノシシの焼骨と人面付土器が出土し、儀礼に伴うと考えられている。さらに、新保遺跡の後期方形周溝墓上には、シカ・イノシシ焼骨が散布されている例があった。

しかし、土器集中地域と土器棺墓群の分布の重なりは中心部だけである。濠内側の土塁相当部分には土器棺墓はあるものの、この遺物分布は途切れている。また土器棺墓は明らかに竪穴住居と重複するが、土器分布地域はあまり明瞭ではない。そのため、葬送儀礼に伴うものとその後の廃棄行為によるものが混在したと考えるのが妥当である。

竪穴住居群は、基本的に濠から15m程度離れた東側に位置しており、攪乱された箇所にも同程度に分布していた可能性が高いため、今回の調査範囲内には20軒程度存在していたと思われる。分布はむしろ南側がやや濃いため、さらに南に延びる可能性も否定できない。同じ弥生の竪穴住居どうしの重複はわずかしかなく、広範囲の分布が想定できる。

これらの4要素の新旧関係を考えて見たい。

発掘所見より得られた前後関係は次の通りである。

旧		新
土器棺墓群	→	濠
	→	竪穴住居群

土器集中分布地域は、上記のように両時期と捉えられる。ただし、これら新旧の間には土器型式で分けられるほどの時期差は見られず、いづれも後期中葉の範囲内に入っている。

以上の各点から見れば、南部の様相変化は次のようにまとめることができる。

①　土器棺墓群と第一次土器集中分布地域の形成

当然被葬者たちが生活していた集落が、どこかにあったはずである。

②　濠の築造と第二次土器集中分布地域の形成

土器棺墓群の破壊がなされる中で、集落の西側を防御する機能をもって作られる。この集落は検出した竪穴住居群がその一部だろう。ただし橋があるため濠の向こう側にも集落と有機的な関係のある区域が存在していたと思われる。

防御域（濠・土塁）・居住域（竪穴住居群）・交通域（橋）を避ける状態ながら、濠の東側即ち内側で廃棄物処理がなされている。

③　第三次土器集中分布地域の形成

半ば埋まった濠の中まで広がっており、廃棄物処理である。その母体の集落は、南側にある（今回未報告）。

これらは、時間的には三期に分かれる。

第Ⅰ期	①	：	墓域	弥生後期前半～中葉
第Ⅱ期	②	：	居住域	弥生後期中葉～後半
第Ⅲ期	③	：	居住域	古墳前期

最も大きな問題は、第Ⅰ期と第Ⅱ期の間には精神的な断絶があるにもかかわらず、時間的に近いことである。これは、最後にもう一度検討したい。また第Ⅱ期とⅢ期の間は時間があき、そこに浅間山噴火が起きている。

5-3　自然科学調査結果の検討

今回行った結果をまとめると次のようになる。

5-3-1　遺物集中地域の動物骨(p.98)

遺物集中地域のKS1-14,15号遺構でかなり多くのシカ・イノシシ骨が検出された。またそれと重複す

る土器棺墓の可能性のあるKS1-49号遺構でも同様にシカ骨がまとまっている。

しかも興味深いことは、そこで見られたシカ・イノシシ骨のほとんど全てが焼骨だったことである。そしてシカ・イノシシともに受けた火熱は、一部の歯は300度以下の低温であったが、全体には鉱物化する程度までの高温であった。また幼獣も含まれていたことも述べられている。

それらの骨は、縄文後晩期の遺跡で出土した祭祀関連と推定されるものとの類似が指摘されている。なお、土器棺墓を主体部とする新保遺跡の方形周溝墓上で、シカ・イノシシの焼骨片約145片以上が見られた。これは焼成温度が700～800度とされている。また同程度の高温で焼かれたシカ・イノシシ骨は、新保田中村前遺跡の旧河道からも発見されている。

大きな問題は、これら焼骨は動物焼成儀礼の結果なのか、それとも食物残滓としての廃棄結果なのかという点である。肉片など消滅するほどの高温焼成を主としまた広く小片が散布している出土状態は、祭祀的行為と考えた方が良いとされる。この場合、上記の新保遺跡の方形周溝墓上での状況とかなり似てくることになる。

5-3-2　土層分析（p.100）

KS1-07号遺構（濠）の埋土下位には浅間山As-C軽石が、同上位には榛名二ツ岳Hr-FAテフラが堆積していたことが指摘された。またKS1-14,15号遺構（遺物集中地域）の1-13C25グリッド地点での土層にも同じものが見られた。

これらは、As-C軽石の下位から樽式土器、上位から赤井戸式土器と古式土師器が出ていることと矛盾はない。即ち同軽石の降下は、弥生後期後半と終末の間となる。

5-3-3　植物珪酸体分析（p.102）

イネ科栽培植物の場合、イネについてはKS1-07号遺構のHr-FAテフラ直下より、1,400個/gという低量が検出された。同じ層位でヒエ属型が700個/g見られている。

いづれも栽培されたとするなら、かなり低量である。また、時期的には古墳時代中期のものである。

一方、KS1-07号遺構が掘削された弥生後期中葉の植生については、「ヨシ属が生育する湿地的な環境であり、周辺ではススキ属やチガヤ属、ネザサ節などのタケ亜科も見られた」としている。またコナラ属などの樹木の存在も指摘されている。

つまり、湿地的環境であるものの、周辺での稲作を積極的に証明するものは見られない。

5-3-4　弥生時代溝における微遺体の検討（トイレ遺構分析 p.106）

上記と同じ地点で花粉・種実・寄生虫卵を探したが、検出できたものは極めて微量だった。

特に寄生虫卵は、KS1-07号遺構に廃棄物が投げ込まれていたために存在が想定されていた。「花粉や種実があまり検出されないことから、土壌生成作用などによって寄生虫卵が分解された可能性」が指摘されている。

5-3-5　炭化米同定（p.110）

KS1-07号遺構内でまとまって出土した穀物炭化物は、約200個体のイネであった。種類は、基本的に短粒種である。

なお、このイネに共伴した木材は、散孔材だった。

5-3-6　樹種同定（p.111）

弥生時代に関するものは、KS1-06号遺構（土坑）の樹皮、KS1-07号遺構（濠）柱穴内のクヌギ節、KS1-18号遺構（竪穴住居）のアカガシ亜属木柱、KS1-19号遺構（土坑）のクヌギ節・ケヤキ小片である。他に上記散孔材があった。いづれも新保遺跡などで発見された弥生後期の木器と同一である。

これらはあまり積極的な事実を物語るとは言い難い。ただ炭化米の存在は、KS1-07号遺構があまり水流がなかったことを物語っている。また炭化の理由が、シカ・イノシシ焼成と関係がある可能性も考えうる。

5－4　小八木志志貝戸地域の弥生時代

以上の調査成果の中で今後の検討をすべき課題は次の点である。

Ⅳ　まとめ

A　濠は大規模な環濠か

B　土器棺墓群は幼児胎児埋葬地域か

これらの問題は、今回の調査で完全には解明できなかった。だが、それらも含めてこの地域の弥生時代を理解する上で必要なことを、周辺地域の調査成果より考えてみたい。

これまで本遺跡の周辺では、大規模な土地改良事業に伴って1970年代末から80年代初頭にかけて高崎市教育委員会及び群馬町教育委員会により数多くの発掘調査がなされてきた。その中で弥生時代の遺構が発見されたものは、次の通りである。

正観寺遺跡群K区（1980年度調査）

- 弥生後期竪穴住居約30軒　形状の異なる２グループがあり重複例もある。少なくとも樽３期と樽４期が含まれる。

正観寺遺跡群F区（1979年度調査）

- 弥生後期竪穴住居群

正観寺遺跡群A区（1978年度調査）

- 弥生後期竪穴住居１軒　焼失　樽１期

正観寺遺跡群B区（1978年度調査）

- 弥生竪穴住居３軒　樽２期以降

正観寺遺跡群G区（1979年度調査）

- 弥生後期竪穴住居４軒

正観寺遺跡群Ⅰ区（1979年度調査）

- 弥生後期溝　逆台形断面　埋土中にAs-C層R-10区へ続く可能性　溝の北西側に集落が想定

正観寺遺跡群R-10区（1979年度調査）

- 弥生後期竪穴住居３軒　焼失１軒
- 弥生後期溝　逆台形断面　埋土中にAs-C層Ⅰ区へ続く　環濠と想定

小八木遺跡（1978年度調査）

- 弥生水路６条・溝２条　樽２期
- 弥生水田・畠
- 弥生竪穴住居１軒

諸口Ⅰ遺跡（1979年度調査）

- 弥生後期～古墳初頭竪穴住居14軒　焼失１軒

諸口Ⅱ・Ⅲ遺跡（1983・84年度調査）

- 弥生後期～古墳初頭竪穴住居11軒

遺憾ながら詳細な検出状況は不明だが、概観すれば主に北側の正観寺遺跡群及び諸口遺跡で複数の居住域が発見され、南側の小八木遺跡のみで生産域が確認されている。墓域は全く不明である。

これらを土地改良以前の都市計画図を参考にして低地と微高地に区分して推定域を検討してみたい（図141）。

ア　天王川旧流路沿い

陣馬火砕流による泥流丘を含む小さな微高地が島状に低地に展開している。明治初年の迅速測図によれば、現天王川右岸を除いて全て畠地であり、それほど顕著な低地ではないが、多くの水路が展開している。両岸の微高地の傾斜走向は似ている。また基本的な流路は、微高地の切れ目を通ってウに向かっている。

ここでは本遺跡の２カ所を含めて計５カ所の居住域が確認できる。

その中で弁財堤南西側の正観寺遺跡群K区は、本遺跡群南側の集落と同規模以上の大集落だが、時期的には樽３・４期まで続くものである。本遺跡北側集落における樽３期への集落移動と同様の傾向が感じられる。正観寺遺跡群B区とF区は、あまり大きな集落ではないが、F区はウへ抜ける流路の通過点に位置している。

本遺跡南側集落及び墓域は、この地域の集落では唯一低地部にかけて展開している。濠は方向性としてK区近くまで続く可能性もあるが、貯水機能から見ればそこまで囲うことは考えにくい。

なお現天王川右岸には、狭い微高地上にやや密度の濃い樽２期に主体をおき、古墳初頭まで続く集落諸口Ⅰと同Ⅱ・Ⅲ遺跡がある。両者を併せれば、規模はかなり大きい可能性も想定できる。

イ　正観寺川沿い

正観寺集落北東の湧水池西湖に端を発して南流する正観寺川低地は、南で井野川に至る大きな低地である。近世の用水によって水流はいくつか分かれているが、低地の形状ははっきりしている。両岸では

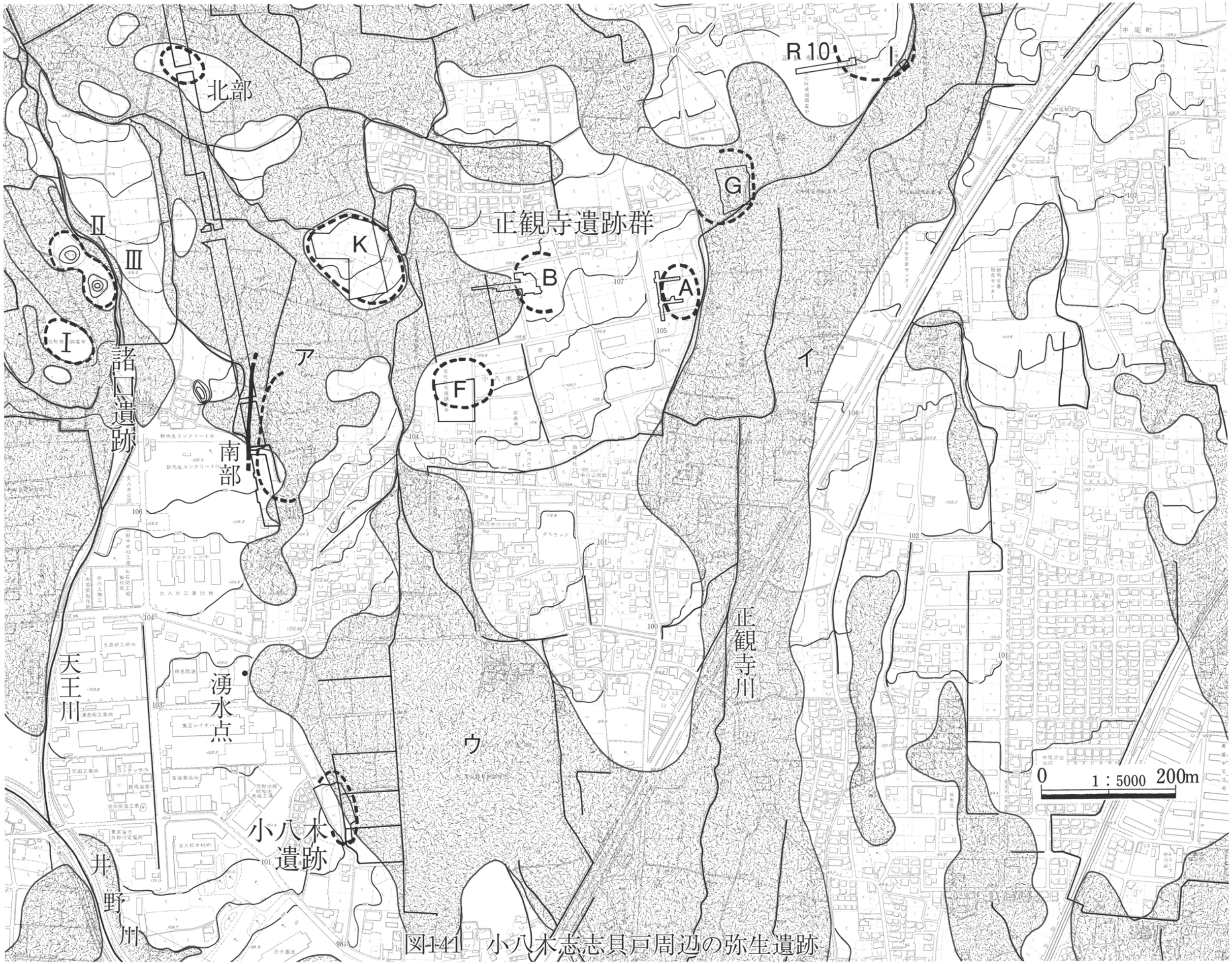


図141　小八木志志貝戸周辺の弥生遺跡

トーンは低地

等高線の走向がやや異なる。

左岸で、３カ所の集落が確認されている。そのうち、最南端の正観寺遺跡群Ａ区は、樽１期の集落と考えられ、周辺では最も古い。また北東側の同Ｉ区・Ｒ10区は直径100ｍほどの環濠（上幅２ｍ深さ1.6ｍ）集落だが、環濠外にも竪穴住居は展開している。両者の中間にもう一つの集落正観寺遺跡群Ｇ区がある。興味深いことにこの集落は、北西側から合流する低地上に位置している。

ウ　小八木南部低地沿い

現小八木主集落の南側に展開する低地で、南東側で正観寺川低地と合流する。水流は北の天王川旧流路から流れるものと西側の湧水点からのものが合わさっている。

ここでは湧水点の南東側の微高地沿いの小八木遺跡で、生産域が発見されている。その周辺居住域も想定できるが、不明である。

以上の分布から次の点が、指摘できる。

１　居住域は、広い微高地縁辺（樽１期）から低地部（樽２期）、そして小さな島状微高地（樽３・４期）という立地変化が想定できる。

２　墓域が唯一発見された低地部は、当時も他と同じような完全な低地であったかはわからない。しかし、居住のために排水の必要性がある場所であったことは間違いなく、そのため本遺跡の濠が築かれたと考えられる。

３　低地部や島状微高地に居住域を設定する発想は、広い微高地縁辺に立地することと生産・防衛などの条件面でかなり異なる。墓域を壊しての居住域の設定という大きな変化は、そこに対応しているだろう。ただし、それが「水田耕作への依拠増加」であるかは、証拠がない。

最後に冒頭の検討課題に戻れば、現状での答えは以下の通りである。

Ａ　濠は低地部居住のために必要とされた排水施設であり、巨大な環濠の一部の可能性がある。

Ｂ　土器棺墓群は、周辺で全く他に墓域が発見されていないことを見れば、幼児胎児埋葬に限定すべきではないだろう。

参考文献

高崎市教委.1979『小八木遺跡Ｉ』市報告８
高崎市教委.1980『正観寺遺跡群Ⅱ』市報告15
高崎市教委.1979『正観寺遺跡群Ｉ』市報告11
高崎市教委.1980『正観寺遺跡群Ｉ』市報告14
高崎市教委.1981『正観寺遺跡群Ⅲ』市報告21
高崎市教委.1982『正観寺遺跡群Ⅳ』市報告36
群馬町教委.1984『諸口古墳調査概報』町報告11
群馬町教委.1985『諸口遺跡Ⅲ』町報告13
群馬町教委.1988『西浦南遺跡』町報告22

V　資料編

1　遺構一覧表

番　号	位置	種　類	時期	本文	写真
KS0-13	13Q26	土器集中遺構	樽2	85	54
KS1-14,15	12T25	土器集中地域	樽2	70	45
KS1-19	13B24	土器集中遺構	樽不明	85	54
KS1-24	13A25	土器集中遺構	樽2	86	55
KS1-39	13J27	土器集中遺構	樽2	86	55
KS1-43	13H27	土器集中遺構	樽2	86	55
KS1-45	13K27	土器集中遺構	樽2	87	56
KS2-97	13R24	土器集中遺構	樽2	70	45
SN14	17B40	土器集中遺構	樽2	94	63
KS0-09	13O27	濠	樽2	52	34
KS1-07	12T26	濠	樽2	52	29
KS1-10	13L25	竪穴住居	樽2	13	6
KS1-18	13C25	竪穴住居	樽2	14	6
KS1-48	13G24	竪穴住居	樽2	16	7
KS2-22	13J21	竪穴住居	樽2	18	7
KS2-24	13J21	竪穴住居	樽2	18	7
KS2-57	12C23	竪穴住居	樽不明	20	8
KS2-59	12D21	竪穴住居	樽2	21	8
KS2-67	12F21	竪穴住居	樽2	22	9
KS2-70	13J21	竪穴住居	樽2	18	7
KS2-82	12K22	竪穴住居	樽2	24	10
KS2-86	12J23	竪穴住居	樽不明	25	10
KS2-99	12S23	竪穴住居	樽2	26	11
KS2-100	12Q23	竪穴住居	樽2	28	12
SN29	18H48	竪穴住居	樽3	91	61
KS2-93	12L24	竪穴住居？	不明	26	なし
KS2-107	12D19	竪穴住居？	樽不明	30	12
KS0-11	13R26	土器棺墓	樽3	31	14
KS0-12	14F31	土器棺墓	樽3	32	13
KS0-20	15G35	土器棺墓	樽3	33	14
KS0-28	15O37	土器棺墓	樽3	34	15
KS1-03	13E27	土器棺墓	樽2	36	16
KS1-05	13B26	土器棺墓	樽1	37	16
KS1-24	13A25	土器棺墓	樽1？	38	17
KS1-27	13J28	土器棺墓	樽2	39	17
KS1-28	13D26	土器棺墓	樽2	39	18
KS1-33	13F26	土器棺墓	樽2	41	19
KS1-34	13G25	土器棺墓	樽2	41	20
KS1-35	13H27	土器棺墓	樽2	42	21
KS1-36	13G25	土器棺墓	樽2	44	22
KS1-37	13I27	土器棺墓	樽2	45	23
KS1-38	13J27	土器棺墓	樽2	45	23
KS1-40	13H26	土器棺墓	樽2	46	24
KS1-41	13H26	土器棺墓	樽2	47	24
KS1-42	13J25	土器棺墓	樽2	47	25
KS1-52	13G25	土器棺墓	樽2	48	26
KS1-54	13I28	土器棺墓	樽2	49	27
KS2-94	12M24	土器棺墓	樽2	50	28
KS2-102	12Q23	土器棺墓	樽2	50	28
KS2-103	12Q24	土器棺墓	樽2	51	28
KS1-49	13E25	土器棺墓？	樽2	85	56
KS1-04	13D27	土坑	樽不明	88	57
KS1-06	13C27	土坑	樽2	88	57
KS1-16	13H28	土坑	不明	60	33
KS1-17	13G28	土坑	古墳前	60	33
KS1-20	13B27	土坑	不明	60	33
KS1-21	13B27	土坑	不明	60	33
KS1-22	13A26	土坑	不明	60	33
KS1-23	13B25	土坑	樽不明	88	57
KS1-25	13D25	土坑	樽不明	88	58
KS1-26	13F24	土坑	樽2	88	58
KS1-30	13B24	土坑	不明	88	58
KS1-55	13G28	土坑	不明	88	59
KS2-89	12K24	土坑	不明	89	59
SN27	16R42	土坑？	樽2	95	64
KS2-77	12H21	風倒木	樽2	30	13

2　遺物観察表

土器・土製品観察表

番　号	型　式	器　形	残　存	器高 cm	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	文様と整形の特徴 a口縁部b頸部c胴部	胎　土	焼成	色　調	備　考
KS0-9-1	樽	壺	頸～胴	24.6			37.3	b２止簾c５波振幅大波	赤褐粗細砂含	良	にぶい黄橙	
KS0-9-2	樽	壺	口縁	7.6	22.6		22.6	a１段折返波内ハケ内外アレ	粗細砂粒含む	軟	浅黄橙	
KS0-9-3	樽	壺	口～胴	35.2			27.8	b～c櫛描羽状文b２止簾c１沈線外ハケ内ナデ	赤褐色粒小礫粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS0-9-4	樽	甕	口～肩	14.7	17.1	17.6		a１波b２止簾c３波内外ミガキ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS0-9-5	樽	甕	口～肩	11.4	14.4		14.4	a１波b２止簾c３波内外ミガキ	細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS0-9-6	樽	甕	口～肩	15.0	17.4		19.8	b２止簾c２波外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	
KS0-9-7	樽	甕	口～肩	10.0	12.6		13.8	内外ミガキ	細粒子含む	良	灰褐	
KS0-9-8	樽	甕	口～胴	23.0	19.0		23.9	a１波b２止簾c２波内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS0-9-9	樽	甕	口～胴	18.0	17.3		21.9	b２止簾c３波外ミガキ	粗細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS0-9-10	樽	壺か甕	頸部片					b２止簾c櫛描連孤文	赤褐粗砂粒含	良	灰白	
KS0-9-11	樽	台付甕	胴～脚	11.2			16.0	内外ミガキ	赤褐細粒子含	良	にぶい橙	
KS0-9-12	樽	壺	口～胴	6.2	9.6		10.7	赤彩内ナデ	粗細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS0-9-13	樽	台付甕	口～体	11.7	13.4		15.4	a１波b～c３波外アレ内ミガキ下被熱	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS0-9-14	樽	高坏	口縁片	3.0	8.0		9.0	D類内外赤彩	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS0-9-15	樽	鉢	完形	3.9	7.9	5.0	7.9	内外ミガキ	細粒子含む	良	にぶい黄橙	
KS0-9-16	樽	小型甕	肩～底	6.8		4.9	8.3	c１波貼付文外ミガキ	細砂粒含む	軟	浅黄橙	
KS0-9-20	土製品	紡錘車	1/2	2.0			5.8	手捏整形外面ナデ	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS0-11-1	樽	蓋	肩～底	21.9		9.3	21.8	c２波内ハケ後ナデ	細砂粒含む	良	にぶい橙	土器棺
KS0-11-2	樽	壺	肩～底	24.9		7.6	23.1	c赤彩内ハケ外アレ	粗砂粒含む	良	にぶい橙	土器棺
KS0-12-1	樽	壺	口～底					a１折返歪b３波貼付＋沈線外ミガキ内ヘラナデ	粒子細かい石英粒含む	良	にぶい橙	土器棺
KS0-13-1	樽	小型壺	頸～底	16.6		5.1	12.6	外面赤彩胴部下半黒斑	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS0-13-2	樽	壺か甕	底	4.5		11.4		内外アレ	白粘土粒粗細砂粒含む	軟	浅黄橙	底部極厚
KS0-20-1	樽	壺	口～底	27.7	13.6	7.0	21.3	a１折返ac10波b２連	細赤褐色粒含	良	にぶい橙	
KS0-28-1(1)(2)	樽	壺	口縁片					a５段折返キザミ上粘土紐装飾内ミガキ	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	橙	
KS0-28-2	樽	有孔鉢	口～底	14.7	18.3	5.2		a２折返刻み内外ミガキ	細粒子含む	良	橙	
KS0-28-3	樽	壺	頸～底	71.0		22.0	57.2	b３止簾c６波外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	橙	
KS1-3-1(1)	樽	甕	口～胴上	12.5	17.0		19.8	a１波b２止簾c２波内外ミガキ内外コゲ付着	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-3-1(2)	樽	甕	胴～底	16.9		7.6	18.6					
KS1-3-2	樽	壺（蓋）	胴～底	21.0		13.1	37.4	外ミガキ内ナデ	細粒子含む	軟	灰白	
KS1-3-3	樽	壺（身）	胴～底	23.0		13.0	35.0		赤褐細砂粒含	良	橙	
KS1-5-1	樽	壺		39.8	14.4	10.4	22.5	b２止簾c３波内ハケ上指ナデ外アレ	赤褐色粒と細砂粒含む	軟	橙	
KS1-6-1	樽	壺	口～肩		17.8			外ナデ口縁内側ハケ胴内ナデ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-6-2	樽	壺	口縁片					内外ナデ	細細砂粒含む	良	橙	
KS1-6-3	弥生		底部				6.4	内ナデ外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS1-6-4	樽	壺	胴下位					1と同一				
KS1-6-5	樽	壺か甕	底部					外ハケ内ナデ	細細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-6-6			底部					内外ナデ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-1	樽	壺	口～肩	17.8	25.1		20.5	b２止簾c２波外ハケ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-2	樽	壺	口縁部	10.8	23.4			a１折返キザミb２止簾内赤彩	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-3	樽	壺		39.7		10.5	29.6	b２止簾c２波貼付文口縁内赤彩内ナデ外ミガキ	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-4	樽	壺（大）	頸～底	53.0		12.0	35.1	bc６波内ハケ外アレ	赤褐細砂粒含	良	橙	
KS1-7-5	土師器	甕	底	8.6		9.0		内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-7-6	樽	壺	頸～胴	15.9			20.0	b簾状文c２波	白色粘土粒赤褐色粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-7	樽	壺	口胴底	23.5	14.3		14.7	bc３波内ナデ外ハケ	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-7-8	樽	甕	口～底1/2	33.7	17.9	7.8	22.7	a１波貼付文b２止簾bc４波貼付文内外ミガキ	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-9	樽	甕	口～肩	20.7	23.2		25.0	a１波b２止簾c３波内外アレ	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-10	樽	甕	口縁	6.3	17.5			a１波b３止簾外ハケ	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-7-11	樽	甕	口～胴下	16.0	12.2		14.8	a１波bc２波外ハケ口縁内ハケ胴内ヘラナデ	粗細砂粒を含む	良	灰黄褐	
KS1-7-12	樽	甕	口～肩	16.6	22.0		21.7	a～b複数波b２止簾c１波内ミガキ	粗細砂粒を含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-13	樽	甕	口～頸1/2	12.5	16.8		22.0	a１波b２止簾c２波外ハケ内ミガキ	粗細砂粒を含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-14	樽	甕	口～胴	15.2	15.4		17.1	a１波bc２波外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-7-15	樽	甕	口～胴	12.8	17.4		15.6	a１波b２止簾bc４波内ミガキ外ハケ	細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-7-16	樽	甕	口～胴	19.5	19.7		20.7	a１波貼付文b～c３波貼付文内ナデ外ハケ	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-7-17	樽	甕	口～胴	16.0	14.6		16.2	内ハケ後ナデ外ハケ	粗細砂粒含む	良	にぶい褐	

番　号	型　式	器　形	残　存	器高 cm	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	文様と整形の特徴 a口縁部b頸部c胴部	胎　土	焼成	色　調	備　考
KS1-7-18	樽	甕	口～胴	19.0	14.0		17.2	b２止簾bc２波外ミガキ	細砂粒含む	良	にぶい黄褐	
KS1-7-19	樽	壺	口縁		30.0			b等止簾？内面赤彩	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-7-20	樽	甕		8.3	13.7		11.8	a１折返bT字文c２波内ハケ外ミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-7-21	樽	小型甕	胴1/2	12.6		5.2	11.1	b２止簾c１波内ミガキ外ハケ	細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-22	樽	小型壺	口胴1/2	9.0			11.0	外口縁内赤彩	細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-7-23	樽	甕	口縁片	5.0	13.2			b等止簾内ミガキ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-24	樽	甕	口縁片					ab３波b簾内ミガキ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-25	樽	甕	頸片					b２止簾c２波	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-7-26	樽	壺か甕	破片					一部赤彩附加条縄文？	細細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-27	樽	壺	頸片					線刻鋸歯文貼付文	赤褐細砂粒含	良	灰黄褐	
KS1-7-28	樽	壺	頸片					c４波線刻鋸歯貼付刺突	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-29	樽	甕	破片					内ナデ	粗細砂粒含む	良	灰黄褐	1-10-3と同
KS1-7-30	樽	壺か甕	頸片					bT字文c波	粗細砂粒含む	良	灰白	
KS1-7-31	樽	壺	頸片					内ナデ外帯状赤彩櫛描	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-7-32	樽	壺か甕	頸					内ナデ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-33	樽	甕	頸片					b波状文の下に２止簾	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-34	樽	壺	破片					一部赤彩附加条縄文？				26と同一？
KS1-7-35	樽	台付甕	台欠	9.2	11.2			a１波貼付文b等止簾c１波貼付文内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-7-36	樽	台付甕	台欠	9.3	15.0		15.3	a１波貼付b２止簾bc２波貼付内ミガキ外アレ	粗細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS1-7-37	樽	台付甕	台欠	6.3	9.4		9.4	a１波b２止簾c１波内外ミガキ	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-7-38	樽	台付甕	台	5.2		5.9	5.9	脚内面ナデ外ミガキ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-39	樽	高坏	台	7.5		7.8		外ミガキ脚内ハケ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-40	樽	台付甕	完形	19.1	12.8	9.0	13.5	a１波貼付文b２止簾c１波貼付文脚部に被熱	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-41	樽	鉢（大）	口～底	13.4	29.3	7.2		内ナデ外ミガキ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-42	弥生	鉢？	口縁	4.8	17.8			口縁指おさえ内ミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-7-43	樽	高坏		21.2	20.8	14.5		内外赤彩脚内ヘラナデ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-44	樽	高坏	坏～脚	15.4	24.7			C類内外赤彩	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS1-7-45	樽	高坏	脚部2/3	7.9		6.9	7.4	内外赤彩	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-46	樽	高坏		22.5		11.4	18.6	D類内外赤彩脚内ハケ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-7-47	樽	高坏		15.2	14.0	9.0		A類内外赤彩脚内ハケ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-48	樽	高坏	坏部1/2	7.5	19.0			B類口縁鋭利な刻み赤彩	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-49	樽	高坏	口縁欠	10.4	21.4			B類内外ミガキ赤彩	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS1-7-50	樽	高坏	脚	15.6		16.4		外面赤彩脚内ハケ目	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-51	樽	高坏	脚	9.0		10.5		内外面赤彩脚内ハケ	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-7-52	樽	高坏	脚	17.4		18.7		内外赤彩脚内ハケ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-53	樽	高坏	脚	10.1		10.8		内外面赤彩脚内ハケ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-54	樽	高坏	脚1/2	16.2		16.0		内外赤彩脚内ハケ	赤褐細砂粒含	良	橙	
KS1-7-55	土師器	鉢	口～底	4.7	14.3	4.4		内外アレ	白粘土赤褐細砂粒含	軟	淡橙	
KS1-7-56	樽	鉢	略完形	6.6	13.1	5.6		内赤彩外ハケナデ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-57	樽	有孔鉢	胴底	6.6		4.2	13.1	内外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-7-58	樽	有孔鉢	完形	5.7	12.0	4.4		外ナデ内ミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-59	樽	有孔鉢	破片	4.0		4.0	9.5	内外ナデ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-60	樽	有孔鉢	底片					底部穿孔４穴	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-61	樽	蓋	天口1/3	4.4	11.0	5.0		外ハケ目赤彩内ナデ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-62	樽	蓋	天口2/3	7.1	11.0	3.5	11.2	手捏整形内外ハケ後ナデ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-63	樽	小型壺	胴～底	5.5		3.8	7.0	内外ナデ	粗細砂粒含む	良	にぶい褐	
KS1-7-64	樽	小型壺		7.0		3.8	7.3	bc波内ナデ外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄褐	
KS1-7-65	樽	小型甕		7.0			9.0	b２止簾c１波内ミガキ	細砂粒含む	良	にぶい褐	
KS1-7-66	樽	小型壺		6.6		4.2	6.5	内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-7-67	樽	ミニ	頸～底	5.1		3.4	4.6	表面黒くヒビ割れる	粒非含有粘土	良	褐灰	
KS1-7-68	樽	ミニ		6.0	4.4	3.2	4.8	手捏整形内外ナデ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-69	樽	ミニ	完形	1.85	3.55	0.9		赤彩手捏整形	細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-70	樽	ミニ	脚	3.8		4.8		内外赤彩	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-71	赤井戸	甕	口～底 3/4	24.8	15.1	6.4	20.1	a４段輪積みac複節RL縄文	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-72	赤井戸	甕	口～底	15.6	12.1	6.0	13.2	a３段輪積外ハケ	赤褐細砂粒含	良	浅橙	
KS1-7-73	赤井戸	甕	口～底	19.9	12.7	6.0	16.3	a３段輪積外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい褐	
KS1-7-74	赤井戸	小型壺	口～胴	10.0	13.0		12.0	a１段輪積みb指おさえ内ミガキ外ナデ	粗細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-7-75	樽	甕	口～胴	12.6	12.8		14.7	a３段輪積み内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい褐	
KS1-7-76	赤井戸	小型甕	口～底	14.5	13.1	5.0	13.6	a２段輪積み内外ミガキ	粗粒子含む	良	にぶい橙	
KS1-7-77	土師器	S字甕	口～脚	26.8	15.5		26.3	口縁中段外反外斜ハケ肩横ハケ	粗砂粒多く含む	硬	灰黄褐	
KS1-7-78	土師器	S字甕	口～肩	7.0	13.2		17.9	口縁中段直立外斜ハケ	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-79	土師器	S字甕	台下欠	25.3	15.8		25.6	口縁中段外反外斜ハケ内ヘラ後ナデ頸内指オサエ	粗細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS1-7-80	土師器	S字甕	台欠	20.5	14.6		21.4	口縁中段外反外ケズリ後荒い斜ハケ内ナデ頸内指	粗細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-7-81	土師器	S字甕	台	6.7		10.0		外ハケ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-82	土師器	S字甕	台欠	23.0	16.6		24.1	口縁中段外反外斜ハケ肩横ハケ肩張り胴薄手	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-83	土師器	S字甕	口～肩	10.0	16.0		22.4	口縁中段外反胴外斜ハケ	粗細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS1-7-90	土師器	壺	頸～底	24.5		6.5	29.6	内外ナデ	粗細砂粒含む	良	橙	

番　号	型　式	器　形	残　存	器高 cm	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	文様と整形の特徴 a口縁部b頸部c胴部	胎　土	焼成	色　調	備　考
KS1-7-91	土師器	小型壺			9.6		12.0	外赤彩？内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	灰白	
KS1-7-92	土師器	壺	口胴1/2	18.5	12.0		19.8	a１折返内外ナデ	赤褐細砂粒含	良	橙	
KS1-7-93	樽	甕	胴～底	19.0		8.4	16.3	内下ハケ上ナデ外ヘラ	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-94	土師器	壺						内外ナデ頸ハケ残る	白粘土赤褐粒粗砂粒含	良	橙	
KS1-7-95	樽	小型壺	口胴1/2	6.9	10.0		10.8	器面アレ	粗細砂粒含む	良	にぶい褐	
KS1-7-96	土師器	台付甕	口～底	9.7	9.2		12.1	外ミガキ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-97	土師器	椀坏か	口～胴	9.0	13.8		15.0	内外ナデ口縁内側ミガキ	細細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-98	土師器	器台	口～脚		9.4			内外ミガキ脚部穿孔上段３穴下段２穴	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-99	土師器	高坏	脚	7.5			8.3	外ミガキ	細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-100	樽	高坏	脚	8.1		14.8		外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-7-101	土師器	高坏	脚	9.9		13.0		内外ナデ	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-7-102	樽	高坏	口脚2/3	15.2	21.3	13.0		弱いミガキ脚部３穴	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-7-103	土師器	高坏	略完形	11.6	11.3	16.7		坏内ミガキ外ケズリ後ナデ脚外ミガキ脚３穴	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-104	土師器	高坏	完形	12.3	19.1	14.0		内外ナデ弱いミガキ脚内側ハケ脚３穴	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-105	土師器	坩	口底2/3	7.3	14.0	3.3		内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-106	土師器	小型壺	口縁～底	7.0		3.0	8.7	内指おさえ外胴下半ヘラケズリ肩ミガキ	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-107	土師器	小型壺	口～底	7.5			8.2	底部ヘラケズリ	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-7-108	樽	鉢	口縁片	7.0	13.0		14.6	内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-7-109	赤井戸	小型甕	口～底	7.5	8.0	4.0	8.4	a１段輪積痕内外ミガキ	細細砂粒含む	良	灰白	
KS1-7-110	縄文		破片					沈線縄文	粗粒子含む	良	浅黄橙	
KS1-7-116	弥生	人面付	頸～底	27.3		10.4	16.6	外一部赤彩ナデ内ハケ	細粒子含む	良	浅黄橙	
KS1-7-117	弥生	人面付	耳					耳部分１穴穿孔手捏整形	赤褐細砂粒含	良	浅橙	
KS1-7-118	弥生	人面付	口片					上穿孔後指ナデ人面口の部分か？内ハケ外ナデ	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-7-119	弥生	人面付	口片					上穿孔後指ナデ人面の口の部分か？外赤彩内ハケ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-7-120	弥生	人面付	胴片					外一部赤彩				119と同一
KS1-7-121	弥生	人面付	胴片					外一部赤彩ナデ内ハケ	赤褐細砂粒含	良	橙	122と同一
KS1-7-122	弥生	人面付	胴片									119と同一
KS1-10-1	樽	甕		15.0	19.2		21.7	a１波貼付文b２段２止簾c２波貼付文内外ハケ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-10-2	樽	壺か甕	胴片					c波貼付文鋸歯文				
KS1-10-3	樽	甕	頸片					a１波篦描鋸歯b２止簾c２波ab線刻鋸歯	小礫粗細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-10-4	樽	高坏	口縁片					C類aキザミ				
KS1-10-5	樽	台付甕	台	3.1		8.0		外ミガキ内ナデ	白小細粒子含	良	にぶい黄橙	
KS1-14,15-1	樽	甕	頸～底	34.5		8.7	26.7	b２止簾c波内外ハケ	白粘土粒赤褐粒細砂粒含む	良	橙	
KS1-14,15-2	樽	壺	胴底	14.5		6.1	13.7	b等止簾c２波内外ナデ	赤褐白小粒含	軟	淡橙	
KS1-14,15-3	樽	壺	口～胴1/2	34.5	19.0		26.4	a１波bT字文c２波内ハケ外ナデ	赤褐色粒と細砂粒含む	良	淡橙	
KS1-14,15-4	樽	壺	口縁1/3	9.7	20.0			b２止簾口縁内側に線刻鋸歯文	白粘土粒赤褐粒細砂粒含む	軟	淡黄	
KS1-14,15-5	樽	壺	胴底1/2	39.2		12.4	29.6	b２止簾c３波	白粘土砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-14,15-6	樽	壺		34.0			30.6	b等止簾c２波内アレ外ミガキ	粗細砂粒含む		にぶい黄橙	
KS1-14,15-7	樽	壺	口縁胴	21.1	25.6		23.1	a１折返し貼付文b２止簾内外器面アレ	白色粘土粒赤褐色粒小礫含	軟	橙	
KS1-14,15-8	樽	壺		26.5	25.5		28.5	b２止簾c２波内外アレ	白粘土砂粒含	軟	橙	
KS1-14,15-9	樽	壺	口縁片					a１折返キザミb３止簾c２波	赤褐粒白粘土粒粗細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-14,15-10	樽	壺	口～頸	10.5	14.5			b等止簾c波外ハケ	赤褐粒砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-14,15-11	樽	壺	口～胴	25.5	18.3		24.2	b２止簾c２波内外ハケ	赤褐細砂粒含	良	淡橙	
KS1-14,15-12	樽	壺	頸～胴～底	21.2		7.1	12.9	b等止簾内外器面アレ	白粘土粒赤褐粒細砂粒含む	軟	橙	
KS1-14,15-13	樽	壺	口～胴	27.0	15.1	7.0	15.3	b等止簾内外ハケ	白粘土砂粒含	軟	淡橙	
KS1-14,15-14	樽	甕	口～底1/2	25.8	16.7	8.2	18.0	a１波b２止簾c３波内外ミガキ肩コゲ	粒子細細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-14,15-15	樽	甕		27.4	17.3	6.5	22.6	a１波貼付文b２止簾２段c２波貼付文	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-16	樽	壺	口胴底	34.0	19.2	7.0	23.0	a１波bc３波外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-14,15-17	樽	甕		23.5	13.9	6.3	18.6	a折返b２止簾a折返し下c６波	細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS1-14,15-18	樽	甕	口～胴	28.0	18.0	7.6	21.1	a１波貼付文b２止簾c３波貼付文内ナデ外ハケ	粗細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-14,15-19	樽	甕	1/4	23.6	19.4		20.6	a1波貼付b2止簾３段貼付刺突c３波外ハケ胴コゲ	赤褐色粒と粗細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS1-14,15-20	樽	甕	口胴底	22.2	18.2	6.6	17.5	a１波b等止b１波内ナデ外ハケ肩コゲ	赤褐色粒と粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-14,15-21	樽	甕		25.2	16.5	7.1	18.6	ac６波内外ミガキ	赤褐色粒と細砂粒含む	良	にぶい褐	
KS1-14,15-22	樽	甕	口～胴	20.6	16.8		19.2	a１波b１～２止簾c２波内外ミガキ肩コゲ	赤褐色粒と細砂粒含む	良	浅黄橙	

番　号	型　式	器　形	残　存	器高 cm	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	文様と整形の特徴 a口縁部b頸部c胴部	胎　土	焼成	色　調	備　考
KS1-14,15-23	樽	甕	口～胴	18.5	14.6		16.4	a１波ｂ２止簾ｃ２波内ミガキ外ハケ	細砂粒含む	良	褐灰	
KS1-14,15-24	樽	甕	1/4	18.5	18.0		18.0	a１波ｂ２止簾ｂｃ３波内外ハケ	赤褐色粒と粗細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS1-14,15-25	樽	甕	口胴	17.6	22.6		26.8	a１波ｂ２止簾ｃ３波内ミガキ外ハケ肩コゲ	赤褐色粒と細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-14,15-26	樽	甕	口胴	15.5	14.5		13.8	a１波ｂ２止簾ｃ２波内外ナデ	粗細砂粒含む	良	明褐灰色	
KS1-14,15-27	樽	甕		17.6	18.0		20.8	b等止簾ｂｃ４波内ミガキ外ハケ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-28	樽	甕	口縁片	9.0	19.6			ｂ２波内外ナデ	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-14,15-29	樽	甕	口縁片	8.7	18.2			a１波貼付文ｂ２止簾ｃ波内ハケミガキ外ハケ	細砂粒含む	良	にぶい褐	
KS1-14,15-30	樽	甕	1/3	21.9	18.1		21.3	a１波ｂｃ３波内ナデ外ハケ口～肩コゲ	赤褐色粒と粗細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-14,15-31	樽	壺	1/3	21.2			19.8	ｂ２止簾ｃ３波内外ハケ	粗砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-14,15-32	樽	甕		23.7			22.8	ｂ２止簾ｃ２波貼付刺突内外ミガキ肩コゲ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-33	樽	甕		20.2	15.5	6.7	16.8	a１波ｂ２止簾ｃ１波内ミガキ外ハケ	粗細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-14,15-34	樽	壺		17.0		9.0	19.1	b等止簾２止簾内外アレ肩コゲ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-35	樽	甕	口縁胴	14.1	18.2		16.1	a２波ｂ２止簾ｃ１波内ナデ外ミガキ	赤褐色粒と粗細砂粒含む	良	灰白	
KS1-14,15-36	樽	小型甕	口～胴	15.4	13.6		14.0	a１波ｂ２止簾ｃ１波ミガキ	赤褐色粒砂粒含む	良	にぶい褐	
KS1-14,15-37	樽	甕	口～胴	14.9	21.8		21.7	a１波ｂ２止簾ｃ１波	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	逆簾状文
KS1-14,15-38	樽	甕	口～胴	12.2	14.2		12.5	a１波ｂ２止簾ｃ２波内ミガキ外ナデ	赤褐色粒と細砂粒含む	良	橙	
KS1-14,15-39	樽	小型甕	2/3	12.4	11.2	5.2	12.4	a１波ｂｃ２波ミガキ	赤褐細砂粒含	良	灰褐	
KS1-14,15-40	樽	小型甕	略完形	10.5	9.2	5.2	9.2	a１波ｂｃ２波内ミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-41	樽	小型甕	口～胴	9.4	12.0		10.9	ｂ２止簾内ミガキ外ナデ	粗細砂粒含む	良	赤褐	
KS1-14,15-42	樽	甕		7.6	9.4		9.1	aｃ３波ｂ２止簾ミガキ	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-14,15-43	樽	甕	口～胴	10.5	12.6		14.0	ｂ２止簾２段外ハケ	粗細砂粒含む	良	淡橙	
KS1-14,15-44	樽	甕	頸～胴	9.0			11.0	ｂ２止簾ｃ１波内外赤彩	粗細砂粒含む	良	淡黄橙	
KS1-14,15-45	樽	小型甕	4/5	12.2		6.4	9.8	ｂ２止簾ｃ２波外ハケミガキ	赤褐色粒と粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-14,15-46	樽	壺	肩					ｂ羽状文ｃ波貼付矢羽根	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-47	樽	壺	肩					矢羽根赤彩				48と同一
KS1-14,15-48	樽	壺	肩片					ｃ羽状文線刻鋸歯貼付文矢羽根胴部赤彩	粘土粒赤褐粒粗細砂粒含む	良	にぶい橙	47と同一
KS1-14,15-49	樽	壺	肩片					羽状線刻鋸歯貼付矢羽根	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-14,15-50	樽	壺	肩片					ｃ羽状文線刻鋸歯文貼付文矢羽根	赤褐色小粒子粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-14,15-51	樽	壺	肩片					羽状文矢羽根	粘土細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS1-14,15-52	樽	壺	頸片					ｂＴ字文ｃ波	粗細砂粒含む	良	灰白	53と同一
KS1-14,15-53	樽	壺	頸片					Ｔ字文				52と同一
KS1-14,15-54	樽	壺	頸片					ｃ波タテヨコ線刻Ｔ字文	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-55	樽	壺	肩片					胴部破片内外ハケ矢羽根				
KS1-14,15-56	樽	壺か甕	胴片					外赤彩円形ハケ目内ナデ	赤褐粗細砂含	良	灰白	
KS1-14,15-57	樽	甕	頸～肩					ｂ２止簾ｃ１波大波状文	赤褐粗細砂含	良	淡橙	
KS1-14,15-58	樽	甕	胴片					ｃ波＋タテ線刻	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-14,15-59	樽	壺か甕	頸片									
KS1-14,15-60	樽	壺か甕	頸片									
KS1-14,15-61	樽	壺か甕	頸片									
KS1-14,15-62	樽	壺か甕	頸片					格子状線刻鋸歯文鋸歯文をつなぐ同心円状連孤文	白粘土粒赤褐粒細砂粒含む	良	浅黄橙	59～63同一
KS1-14,15-63	樽	壺か甕	頸片									
KS1-14,15-64	樽	壺か甕	胴片									65と同一
KS1-14,15-65	樽	壺か甕	胴片					格子状線刻鋸歯文鋸歯文をつなぐ同心円状連孤文	白粘土粒赤褐粒細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-14,15-66	弥生	壺か甕	頸片					横線連孤文単節ＲＬ縄文	赤褐粒細砂含	良	にぶい褐	天王山式？
KS1-14,15-67	天王山	壺か甕	頸片					横線連孤文単節ＲＬ縄文	赤褐粒細砂含	良	にぶい褐	70,66同一
KS1-14,15-68	天王山	壺か甕	頸片	2.9		2.6		横線＋連孤文	細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-14,15-69	天王山	壺か甕	頸片					横線＋連孤文				71と同一
KS1-14,15-70	天王山	壺か甕	頸片					横線＋連孤文	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-14,15-71	天王山	壺か甕	頸片					横線＋連孤文	細砂粒含む	良	浅黄橙	69と同一
KS1-14,15-72	樽	壺	肩					a鋸歯状線刻ｂ２止簾	小礫粗粒子含	良	黒褐	1-10-3同一
KS1-14,15-73	樽	壺	肩									72と同一
KS1-14,15-74	樽	壺	肩									72と同一
KS1-14,15-75	樽	壺	肩					a鋸歯状？線刻ｂ２止簾矢羽根・赤彩	粒子細	良	橙	
KS1-14,15-76	樽	壺か甕	胴片					櫛描格子状文	赤褐細砂粒含	良	灰褐	
KS1-14,15-77	樽	壺か甕	胴片						細細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS1-14,15-78	樽	台付甕	1/2	13.2	12.6	7.4	12.4	a１波貼付ｂｃ３波貼付	赤褐細砂粒含	良	灰黄褐	被熱有
KS1-14,15-79	樽	台付甕	坏	13.6	14.1		14.6	a１波ｂ等止簾ｃ１波内ミガキ被熱	赤褐色粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-80	樽	台付甕	坏～台	13.0	14.6		14.6	a１波貼付ｂ２止簾ｃ１波貼付内ミガキ外ハケ	粗細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-14,15-81	樽	台付甕	胴～台	17.2		10.4	15.7	ｂ等止簾内ミガキ被熱	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	

番　号	型　式	器　形	残　存	器高 cm	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	文様と整形の特徴 a口縁部b頸部c胴部	胎　土	焼成	色　調	備　考
KS1-14,15-82	樽	台付甕	坏～台	12.0	10.8		11.4	a１波b等止簾c１波内ミガキコゲ付着被熱有り	粗細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-14,15-83	樽	台付甕	胴	11.0	10.7		11.2	a１波b等止簾c１波	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄褐	
KS1-14,15-84	樽	台付甕	胴2/3	11.2	9.2		9.3	a１波貼付文b等止簾c１波貼付文内ミガキ	赤褐色粗細砂粒含む	良	灰褐	
KS1-14,15-85	樽	台付甕	胴	5.5	8.0		8.2	a１波b２止簾c１波内外ナデ	赤褐細砂粒含	良	灰褐	
KS1-14,15-86	樽	高坏	口縁1/2	12.8	14.4	8.6		内ハケ後ナデ外ミガキ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	重量感有り
KS1-14,15-87	樽	高坏	坏	8.0	11.3		12.8	D類内外赤彩	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS1-14,15-88	樽	高坏	完形	18.4	18.8	11.1		内外ナデ脚部ヘラケズリ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-14,15-89	樽	高坏	口～底	19.8	23.8	14.3	23.8	内外赤彩脚内ハケ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-14,15-90	樽	高坏	口脚1/2	12.7	13.6	8.0		内外赤彩	砂粗細砂粒含	良	橙	
KS1-14,15-91	樽	高坏	坏	5.6	13.2			B類外面ハケ内赤彩	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS1-14,15-92	樽	高坏	坏	6.2	15.2			a１折返c類内外赤彩	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-14,15-93	樽	高坏	坏	8.3	25.3			C類内外赤彩	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS1-14,15-94	樽	高坏	坏	4.0	12.6			B類内外赤彩	細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-95	樽	高坏	脚	12.2		14.4		外赤彩	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-14,15-96	樽	台付甕	台	8.9		10.1		被熱	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-14,15-97	樽	台付甕	台	7.4		8.5			粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-98	樽	高坏	脚	8.8		9.6		A類外赤彩	細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-99	樽	ミニ	脚	1.7		2.9		手捏整形	赤褐細砂粒含	良	にぶい褐	
KS1-14,15-100	樽	ミニ	脚	2.5		3.7			赤褐細砂粒含	良	橙	
KS1-14,15-101	樽	ミニ	脚	2.9		2.6			粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-102	樽	壺？	口縁	4.3	13.0			内外赤彩	細砂粒含む	良	観察不可能	
KS1-14,15-103	樽	片口						外内注口赤彩	赤褐細砂粒含	良	橙	
KS1-14,15-104	樽	鉢	3/4	6.2	11.8	4.8	12.2	内外赤彩	粗細砂粒含む	良	明黄褐	
KS1-14,15-105	樽	有孔鉢	底	5.0		3.8	9.7	内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-14,15-106	樽	有孔鉢	底	4.8		3.8	7.6	内ハケ外赤彩	赤褐細砂粒含	良	橙	
KS1-14,15-107	樽	片口	略完形	6.0	5.7	4.8	10.0	内ミガキ外アレ	赤褐細砂粒含	良	橙	
KS1-14,15-108	樽	片口		6.2	5.5		9.5	内外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	橙	
KS1-14,15-109	樽	蓋	2/3	3.5	2.2	9.1			粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-14,15-110	土製品	勾玉	1/2	3.8	1.7	1.9		手捏整形外面ナデ	赤褐細砂粒含	良	淡橙	
KS1-14,15-111	土製品	勾玉	完形	5.0	2.0			粘土塊を曲げた後削り串工具で一方穿孔	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-14,15-112	土製品	円盤		4.45	4.8	0.7	20.4g	外周磨り加工	細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-14,15-113	土製品	円盤		2.0	2.0	0.9	4.8g	外周磨り加工	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-14,15-114	土製品	円盤		3.0	2.5	0.5	4.9g	外周磨り加工	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-14,15-115	土製品	円盤		3.1	3.4	0.7	11.5g	表面波状文外周研磨	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-14,15-116	土製品	円盤		3.6	3.1	0.45	7.2g	外周磨り加工表ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-14,15-117	樽	小型甕	口縁欠	7.4		4.6	9.4	b２止簾内外ナデ	白小細砂粒含	良	灰白	
KS1-14,15-118	樽	小型壺	2/3	5.2		2.8	7.3	内指外ミガキケズリ	粗細砂粒礫含	良	浅黄橙	
KS1-14,15-119	二軒屋	甕	口縁片	8.9	15.4		11.4	口縁と肩に縄文ＲＬ単節	粗粒含む	良	褐灰	
KS1-14,15-120	縄文	鉢	口縁片					押圧隆帯単節ＬＲ縄文				
KS1-14,15-121	縄文	甕	口縁片					単節ＬＲ	長石細砂粒含	良	にぶい黄褐	
KS1-14,15-122	樽	甕						cコンパス文？胴部単節ＬＲ縄文内ナデ	長石粒細砂粒含む	良	灰黄褐	搬入品？
KS1-17-1	土師器	小型甕		11.3	11.4	4.6	11.4	内ナデ外ハケナデ	白粘土赤褐含	良	浅橙	
KS1-18-1	樽	甕	頸～肩	10.4			21.0	b２止簾c３波貼付刺突内外ミガキ	赤褐色粒細砂粒含む	良	にぶい褐色	
KS1-18-2	樽	壺か甕	頸片					B２止簾C波内ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS1-18-3	樽	壺	頸片					b等止簾	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-18-4	樽	高坏	口頸片					頸部２止簾内外赤彩	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	台付甕か？
KS1-18-5	樽	壺	胴片					C波線刻鋸歯貼付外ハケ	細砂粒小礫含	良	にぶい黄橙	
KS1-18-6	樽	高坏	口縁片					B類無彩器面アレ	白小粗砂粒含	良	淡橙	
KS1-18-7	樽	高坏	口縁片					赤彩	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-24-1	樽	小型台付甕		7.9	11.2		9.9	a１波bc３波外ミガキコゲ内ミガキ	赤褐色粒細砂粒含む	良	にぶい褐	
KS1-24-2	樽	壺か甕				9.0		外ハケ内ナデ底ケズリ	赤褐細粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-24-3	樽	壺	口～胴	38.0	21.3		28.5	aナデ内外ナデ	赤褐細粒含む	良	にぶい橙	
KS1-24-上層1	樽	高坏	脚	11.0		20.1		内面ハケ赤彩	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS1-24-上層2	樽	高坏	脚	6.9		5.5	5.0	外赤彩内外アレ四角錐状	粗細砂粒含む	軟	浅黄橙	
KS1-24-上層3	樽	小型甕	頸～底			3.7	5.6	b１波外ミガキ内ナデ	細粒子含む	良	にぶい黄橙	
KS1-24-上層4	弥生	手捏	完形	2.0	3.3	2.6		手捏整形内外ナデ	細粒子含む	良	明褐灰	
KS1-24-上層5	土師器	高坏	脚	7.4			9.2	外ミガキ	赤褐色粒含む	酸	橙	
KS1-26-1	樽	壺	口縁片	11.4	24.0		24.8	a１折返波＋指押さえb２止簾外ハケ内アレ	赤褐粒白粘土粒粗細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-26-2	樽	鉢	完形	12.0	21.9	9.0		外ナデ内ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS1-27-1	樽	甕	口～底	34.0	18.6	7.0	21.9	a１波b２止簾c３波内外ミガキ	粗粒子含む	良	にぶい橙	コゲあまりない被熱痕
KS1-28-1	樽	甕	胴底1/2	21.5		10.5	35.0	内ハケ外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	土器棺(蓋)
KS1-28-2	樽	壺	頸～底	59.6		11.3	45.8	b２段２止簾内ハケ内外器面荒れ	白色粘土粒細砂粒含む	軟	橙	土器棺(身)
KS1-28-3	樽	甕	口～胴	21.4	23.3		35.0	２と同一個体				土器棺(枕)
KS1-33-1	樽	壺（蓋）	胴～底	15.6			21.6	内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	土器棺(蓋)
KS1-33-2	樽	壺	頸～底	43.3		10.0	37.0	b２段２止簾c３波線刻鋸歯文貼付文＋沈線	白色粘土粒小礫細砂粒含む	良	橙	土器棺(身) 歪多肩ヒビ
KS1-34-1	樽	壺	胴～底	22.0		8.5	23.7	c波貼付文内ハケ外ハケ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	土器棺(蓋) 外コゲ付着
KS1-34-2	樽	壺	頸～底	36.5		12.0	32.9	b等簾c３波内ハケ	粗細砂粒含む	良	橙	土器棺(身)

番　号	型　式	器　形	残　存	器高 cm	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	文様と整形の特徴 a口縁部b頸部c胴部	胎　土	焼成	色　調	備　考
KS1-35-1	樽	壺	頸～胴	26.0			32.8	c４波刺突充填鋸歯文外ミガキ内アレ	白粘土粒赤褐粒細砂粒含む	軟	橙	土器棺(蓋？)
KS1-35-2	樽	壺	頸～底	50.45		11.3	36.7	bＴ字文c２波内ハケ外粗いミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	土器棺(身)
KS1-36-1	樽	壺	胴	36.8			38.5	内ハケ外ナデ	粗細砂粒含む	良	橙	土器棺(蓋)肩部割れ
KS1-36-2	樽	壺	頸～胴	37.7			34.7	c波内ハケ外ミガキ	細砂粒含む	良	にぶい橙	土器棺(身)
KS1-36-3	樽	壺	胴～底	10.7		8.6	17.3	内ナデ外ミガキ器壁厚	細砂粒含む	良	浅黄橙	土器棺(底)
KS1-37-1	樽	甕	口～底	29.8	17.4	6.7	22.6	a１波b２止簾c２波内外ミガキ内コゲ	細砂粒赤褐色粒含む	良	橙	土器棺黒斑
KS1-38-1	樽	甕	胴～底	22.9		9.0	22.8	c２波内ミガキ外ハケ肩コゲ	赤褐色粒細砂粒含む	良	橙	土器棺(蓋)
KS1-38-2	樽	壺	頸底1/2	49.2		9.0	35.7	b２止簾c２波内外アレ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	土器棺
KS1-39-3	樽	甕	頸～肩	9.5			18.2	b２止簾c３波内外ナデ	白粘土小礫含	良	浅黄橙	
KS1-39-1	樽	壺	頸胴1/2	12.0			13.8	b２止簾c１波外ハケ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-39-2	樽	短頸壺	口～胴	11.5	11.8		10.0	a１波bc２波内外ハケ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-39-4	樽	台付甕	脚欠	15.4	13.4		15.1	a１波貼付文b３止簾c１波貼付文脚部被熱	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-39-6	樽	高坏	胴片					内外赤彩	細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-39-7	樽	高坏	脚	8.0		10.3		外赤彩脚の内面ナデ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-39-8	樽	高坏	脚					外赤彩	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	三角透かし
KS1-40-1	樽	甕（蓋）	頸～底			5.4	16.5	b２止簾c２波胴部コゲ底被熱	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	煮沸具として使用
KS1-40-2	樽	壺（身）	口～胴部	28.3	22.0		22.0	a１波b２止簾c２波頸～胴部にコゲ使用時被熱	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	にぶい褐	
KS1-41-1	樽	壺（蓋）						外ミガキ内ナデ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-41-2	樽	甕	口～底	38.0	22.5	9.5	26.6	a１波貼付b２止簾c２波貼付文内外ミガキ被熱	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	明赤褐	胎土赤味強い
KS1-42-1	樽	甕	完形	23.6	15.2	7.5	17.4	a１波貼付b２止簾bc５波貼付内外コゲ被熱	細砂粒含む	良	にぶい褐	
KS1-43-1	樽	小台甕		11.7	8.2	7.7	7.9	b２止簾ミガキ脚被熱	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-45-1	樽	壺	胴片					内ハケ外ミガキ	白粘土赤褐含	良	にぶい橙	
KS1-45-2	樽	台付甕	口胴片					内ミガキ外ナデ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-45-3	樽	小型甕	底			3.6		内ハケ外ナデ	細粒子含む	良	灰白	
KS1-48-1	樽	壺	口縁					内ミガキ外ハケ	細砂粒極少含	良	褐灰	
KS1-48-2	樽	壺か甕	頸片					内ミガキ	赤褐砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-48-3	樽	壺か甕	胴片					内ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS1-48-4	樽	高坏	口片					内外赤彩	赤褐細砂粒含	良	にぶい褐	
KS1-48-5	樽	高坏	脚					外面赤彩	細砂粒含む	良	にぶい橙	三角透かし
KS1-49-1	樽	壺		30.0			33.2	b２段２止簾c３波外ミガキ内アレ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-49-2	樽	壺		21.2			31.6	b３止簾c３波内ハケ外ミガキ	細砂粒含む	軟	浅黄橙	
KS1-49-3	樽	壺		17.0		12.5	41.5	内器面アレ外ミガキ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-49-4	樽	甕			19.0		24.1	a１波貼付b２止簾c３波貼付外ハケ内ミガキ	粗細砂粒含む	軟	にぶい褐	
KS1-49-5	樽	壺		11.7			20.4	外ハケ内ナデ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-49-6	樽	甕	口縁片	7.2	17.4			a２波b２止簾外ミガキケズリ荒い内ミガキ	粗細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS1-52-1	樽	壺（蓋）	胴	10.5			20.9	内外ミガキ	黒細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS1-52-2	樽	壺（身）	頸～底	48.1		12.9	36.4	b２止簾c３波	白粘土粒含む	緩	にぶい橙	
KS1-54-1	樽	甕（蓋）	胴～底	19.3		8.6	22.9	内外ミガキ外被熱コゲ	粗細砂粒含む	良	橙	底もみ痕
KS1-54-2	樽	壺（身）	頸～底	41.2		12.6	37.6	外ミガキ片側アレ内アレ	小礫石英粒含	良	橙	底もみ痕
KS1-54-3	樽	甕（枕）	口～底	32.9	18.3	7.4	23.2	a１折返１波b２止簾c３波貼付内アレ外コゲ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS2-22-1	樽	壺か甕	底	4.8		11.9		外ハケ内ナデ	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS2-22-2	樽	壺か甕	底	3.0		8.4		外ハケ	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS2-24-1	樽	甕	口縁片					a～b４波b２？止簾	細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS2-24-2	樽	甕	頸部片					b２止簾c波内ミガキ	細砂粒含む	良	褐	
KS2-24-3	樽	台付甕	口縁～頸	7.3	16.2		16.6	a１波b２止簾bc２波貼付文内外ミガキ	赤褐色粒細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS2-24-4	顔料	赤色		2.9	2.25	2.45	0.9g					実測図なし
KS2-59-1	樽	壺	口縁～胴	37.2	24.5		41.6	b３止簾２段c３波内上部ナデ下部ハケ外ハケ	白色粘土粒粗細砂粒含む	良	橙	
KS2-59-2	樽	台付甕	口縁片					ac４波ab貼付文b２止簾内ミガキ	粗細砂粒含む	良	黒褐	
KS2-59-3	樽	壺	肩片					内ナデ外ハケ	白粘土赤褐含	良	にぶい黄橙	
KS2-67-1	樽	壺	胴部片	12.5			32.4	内ハケ外ミガキ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS2-67-2	樽	甕	口～頸	11.5	17.2		18.4	ac７波b２止簾	白細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS2-67-3	樽	甕	頸片					Ｔ字文内ナデ	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS2-67-4	樽	台付甕	口～体	7.0	12.8		14.0	a１波b２止簾c１波内外ミガキ	赤褐色粒細粒子含む	良	にぶい黄橙	
KS2-67-5	樽	高坏	脚上	5.7			7.2	脚内ナデ外赤彩	赤褐細砂粒含	良	橙	
KS2-67-6	樽	高坏	坏片	4.8	9.0			内赤彩	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS2-67-7	樽	高坏	坏片	4.7	14.1			内外赤彩	粒子細	良		
KS2-67-8	樽	台付甕	口～体	7.3	12.4		12.8	a１波b２波貼付ミガキ	細砂粒子含む			
KS2-67-9	樽	高坏	坏底脚	4.3			4.6	内外赤彩	粒子細	良	にぶい黄橙	
KS2-67-10	土師器	小型壺		8.5	10.8		11.7	内ナデ外ケズリ口縁ナデ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS2-67-11	樽	台付甕	脚	5.4		6.2		不整形内外ナデ	粒子細	良	橙	
KS2-67-12	土師器	坏		6.2	13.8		14.0	内ナデ外ケズリ	粗粒子含む	良	橙	

番　号	型　式	器　形	残　存	器高 cm	口径 cm	底径 cm	最大径 cm	文様と整形の特徴 a口縁部b頸部c胴部	胎　土	焼成	色　調	備　考
KS2-70-1	樽	甕	胴底1/2	14.5		7.2	15.8	c波内外ミガキ	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS2-70-2	樽	甕？	胴片					内外鉄分吸着	細砂粒含む	良	灰黄褐	
KS2-77-1	樽	甕	口～胴	11.5	11.8		12.2	a１波b２止簾c１波施文アレ	赤褐細砂粒含	良	橙	
KS2-77-2	樽	ミニ	坏	4.5	4.6		4.6	外ミガキ	細粒子含む	良	にぶい黄橙	
KS2-82-1	樽	甕	肩片					c２波内ミガキ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS2-82-2	樽	高坏	坏	6.2	19.4			内外赤彩	細粒子含む	良	にぶい橙	
KS2-86-1	樽	有孔鉢	口～底	11.3	20.6	6.3	11.3	内ハケ外ミガキ	細砂粒小礫含	良	橙	
KS2-94-1	樽	甕	胴片					外ハケ内ナデ	赤褐細砂粒含	良	にぶい橙	
KS2-99-1	樽	甕	口縁片					ａｂ２波外ハケ後外コゲ	赤褐砂粒含む	良	灰黄褐	
KS2-99-2	樽	高坏	坏片	5.0	23.0			内外赤彩B類	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	
KS2-99-3	樽	壺	肩片					ｂ２止簾ｃ２波内外ハケ	白粘土赤褐含	良	淡橙	
KS2-100-1	樽	甕	頸～胴	24.5			25.0	ｂ２止簾２波ｃ３波内ナデ外ミガキ肩コゲ	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
KS2-100-2	樽	甕	口～胴中位	20.3	18.2		23.1	ｂ２止簾ｃ３波内ナデ外ハケ口縁肩コゲ	粘土粒赤褐色粒細砂粒含む	良	灰褐	
KS2-100-3	樽	小台甕	完形	13.5	8.4	6.0	9.0	ｂＴ字ｃ１波ミガキアレ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS2-100-4	樽	ミニ						手捏孔部内外一部に赤彩	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS2-102-1	樽	壺	胴～底	27.0		13.0	41.3	内器面アレ外ハケ	赤褐細砂粒含	軟	にぶい橙	
KS2-103-1	樽	甕	略完形	16.0	13.0	5.8	12.3	a貼付ｂ２止簾ミガキ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS2-103-2	樽	甕	胴～底	8.8		7.15	16.8	内外ミガキ	赤褐細粒子含	良	明赤褐	
KS1-遺構外-3	樽	壺						ｃ斜線格子文２段	粗細砂粒含む	良	浅黄橙	
KS1-遺構外-4	樽	壺か甕	胴部片					ｃ波ｄ櫛描鋸歯文内ナデ	赤褐細砂粒含	良	浅黄橙	
KS1-遺構外-5	樽	甕	頸部片					内外ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄橙	長野産か？
KS1-遺構外-6	樽	台付甕		9.1	6.2	5.2	6.8	ａ１波貼付ｂｃ２波貼付	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-遺構外-7	樽	小型壺	胴～底	6.4		4.3	8.5	ｃ１波内ミガキ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-遺構外-8	樽	小高坏	脚			4.6		外赤彩脚内ナデ	細粒子含む	良	にぶい黄橙	
KS1-遺構外-9	樽	蓋		5.9		2.5		内外ミガキ	白粘土赤褐粒	良	灰白	
KS1-遺構外-10	樽	蓋		4.9		3.3	13.1	外ミガキ内ナデ	粗細砂粒含む	良	橙	
KS1-遺構外-11	土製品	紡錘車	2/3	厚1.5				全面ナデ	粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
KS1-遺構外-12	土製品	紡錘車	1/2	4.3	0.8					良	にぶい黄橙	
KS1-上層埋甕-外1	樽	壺（大）	口～胴	38.5	19.6		40.8	ａ１折返キザミｂ２止簾ｃ４波内外ナデ	細粒子含む	軟	浅黄橙	遺構外
KS1-上層埋甕-外2	樽	壺（大）	口～胴	50.1	26.6		48.3	ａ１折返キザミｂＴ字文ｃ３波内外器面アレ	粗細砂粒含む	良	橙	遺構外
SN14-1	樽	甕	口底1/2	22.3	14.2	9.4	16.3	a折返２段キザミｂ３止簾ｃ２波内外ミガキ	粗粒少細砂粒小礫含む	良	橙	キザミ縄目
SN14-2	樽	甕		21.2	15.2	5.5	14.3	ａ１段折返キザミｂ２止簾ｃ２波内外ミガキ	赤褐色粒粗細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
SN14-3	樽	台付甕		11.7	9.5	4.9	9.5	ａｃ２波ｂ２止簾ミガキ	赤褐細砂粒含	良	にぶい黄褐	
SN14-4	樽	鉢		6.8	13.8	4.8		全面赤彩	細砂粒含む	良	にぶい橙	
SN14-5	樽	鉢		5.4	11.5	4.0		内外ミガキ	細粒子含む	良	にぶい黄橙	
SN14-6	樽	鉢		5.5	9.8	4.0		内外ミガキ	細粒子含む	良	橙	
SN27-1(1～3)	樽	壺		8.2	21.1			内外ミガキ頸Ｔ字文アレ	粗細砂粒含む	軟	灰白	
SN29-1	樽	壺		15.9		7.5	15.3	ｃ２波内ナデ外ミガキ	白色粒粒子細	良	橙	
SN29-2	樽	甕		12.5			14.1	内外ミガキ	粒子細白粒含	良	橙	鉢状器形
SN29-3	樽	壺		15.0	19.5		19.5	ａ１段折返キザミｂ３止簾ｃ４波内ミガキ	細粒子赤褐色粒	良	にぶい橙	
SN29-4	樽	小型甕	口～肩	5.5	11.4		10.4	ａｃ４波内ミガキ	細砂粒	良	明赤褐	
SN29-5	樽	壺	口～頸	7.6	12.4			ｂ２止簾ｃ１波内ミガキ	粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
SN29-6	樽	小型甕		14.7	12.2	5.0	11.7	ａ１段折返ａｃ４波ｂ２簾内外ミガキ	細砂粒	良	にぶい橙	
SN29-7	樽	壺か鉢	口縁片					ａ１折返内外荒ミガキ	赤褐細砂粒含	良	橙	
SN29-8	樽	壺甕片	口縁片					a折返ｂ波内ミガキ	細細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
SN29-9	樽	壺甕片	口縁片					a折返波ｂ波内ミガキ	細砂粒含む	良	にぶい橙	
SN29-10	樽	台付甕		23.0	18.9	10.6		a沈線ａｃ３波ｂ４止簾貼付	白色小粒子石英粒細粒子含	硬	にぶい褐	
SN29-11	樽	台付甕		7.0	9.5		8.9	ａｃ３波ｂ２止簾ミガキ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	
SN29-12	樽	高坏	脚	5.5		13.2		外赤彩内ナデ	粗細砂粒含む	良	観察不可能	
SI遺構外-1	樽	甕	口～肩	13.5	18.0			ａ１折返１波ｂ２止簾ｂｃ７波内ミガキ	粒子細赤褐色粒含む	良	にぶい橙	
SI遺構外-2	樽	壺	口縁片					内外ナデ	粗細砂粒含む	良	橙	
SI遺構外-3	樽	壺	口縁片					ａ１折返ａｂ波内ナデ	粗細砂粒含む	良	褐	
SI遺構外-4	樽	片口							粗細砂粒含む	良	にぶい橙	
SI遺構外-5	樽	高坏	坏片					Ｃ類内外赤彩	細細砂粒含む	良	灰白	
SI遺構外-6	樽	台付甕		6.7	11.2		10.9	ａ１波ｂ２止簾	粒子細	良	橙	
SI遺構外-7	樽	短頸壺	頸～底	6.4			7.1	内頸部迄外赤彩	赤褐多砂粒含	良	橙	
SI遺構外-8	樽	鉢	口底1/3	6.8	14.7	6.0		赤彩	粒子細	良		
SI遺構外-9	樽	鉢	口底1/3	6.5	13.5	4.4		赤彩	粒子細	良		

石器・石製品類観察表

番　号	種　類	長 cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石　材	特徴・その他
KS0-9-17	磨製石斧	9.6	4.1	2.6	184.4	変輝緑岩	刃部欠損。断面は楕円、刃部方向徐々に扁平。全面研磨される。基部に叩き痕。
KS0-9-18	剥片石器	6.2	6.0	1.9	77.9	頁岩	片面に自然面を残す剥片の側縁を調整し刃部にする。1側縁欠ける。
KS0-9-19	剥片石器	7.2	9.7	2.5	177.0	黒色頁岩	片面に自然面残す。横長剥片の1側縁に細い剥離を加えて刃部とする。表面風化進む。
KS1-7-111	石鏃	2.7	1.6	0.4	0.9	硬質頁岩	無茎、基部抉入有り。側辺に細かい調整が入り、ノコギリ状をなす。
KS1-7-112	石鏃	2.3	1.7	0.6	1.3	頁岩	無茎、基部に抉入有り。
KS1-7-113	磨石	12.3	6.1	3.8	416.8	ひん岩	棒状川原石。片面と1側縁が研磨される。1側辺は被熱する。
KS1-7-114	剥片石器	5.4	7.2	1.6	54.0	珪質頁岩	片面に自然面を持つ剥片石器、刃部は一部のみ調整。
KS1-7-115	砥石	15.1	5.7	3.9	330.9	ひん岩	三角柱状、一端は欠。3面とも研磨される。先端部叩き痕。
KS1-10-6	砥石	8.4	1.9	1.4	45.3	緑色片岩	棒状、2側辺研磨され平坦面作る。
KS1-14,15-123	石鏃	3.0	1.9	0.6	1.4	黒曜石	ヒコーキ型石鏃。有茎、かえし付。側辺に貫入有り。
KS1-14,15-124	石鏃	2.8	2.0	0.5	1.7	チャート	有茎、茎部破損。
KS1-14,15-125	石鏃	2.9	1.9	0.4	1.3	チャート	無茎、基部に抉入有り。
KS1-14,15-126	石鏃	2.0	1.7	0.3	0.8	黒曜石	無茎、先端部欠損。
KS1-14,15-127	石鏃	2.4	2.0	0.4	1.3	黒色頁岩	無茎、基部に抉入有り。風化激しい。
KS1-14,15-128	石鏃	1.5	1.5	0.4	0.5	黒曜石	小型、先端部短く抉入深い。無茎、基部に抉入有り。
KS1-14,15-129	石剣	5.9	3.6	0.5	18.4	頁岩	茎～刃部中位。茎部片面には未貫通孔2穴。刃部は両刃で鋭利である。
KS1-14,15-130	剥片石器	4.2	6.2	1.4	30.4	珪質頁岩	三角形の剥片。底辺の両面を2次加工し刃部とする。
KS1-14,15-131	剥片石器	6.8	5.6	2.7	119.2	頁岩	楕円形をなす剥片で、一部に自然面を残す。2側縁に調整を加える。
KS1-14,15-132	磨石	13.6	6.6	4.7	592.5	黒色片岩	棒状の磨石。片端で石質が変わり平坦になり、この面がよく研磨され、光沢を持つ。
KS1-14,15-133	砥石	12.7	5.0	3.5	297.3	デイサイト	全面被熱しヒビ割れる。断面形は長三角形、三側辺が研磨される。1端に叩き痕。他端は欠。
KS1-14,15-134	磨石	6.4	2.7	1.8	55.4	流紋岩	表面なめらかな棒状礫。正面と側面三方に磨痕有り。正面に筋状擦痕。
KS1-14,15-135	砥石	7.8	3.1	2.1	79.7	雲母石英片岩	棒状川原石、1側縁が研磨される。1端部欠損。断面楕円形。
KS1-14,15-136	磨石	8.9	2.7	1.4	60.5	黒色片岩	扁平棒状。
KS1-14,15-137	砥石	8.4	3.5	2.7	94.5	粗粒輝石安山岩	棒状川原石、断面三角形、一側面が研磨される。
KS1-14,15-138	磨石	8.9	4.4	1.8	107.3	砂岩	楕円形、扁平の川原石の両面を研磨する。断面形は一側辺が薄くなる。
KS1-14,15-139	磨石	8.7	4.3	1.1	83.4	緑色片岩	扁平長楕円形。全面研磨。
KS1-14,15-140	凹石	6.8	5.7	3.6	141.1	粗粒輝石安山岩	角礫の一部で、表裏に平坦面有り。凹み3穴。
KS1-14,15-141	砥石	3.0	2.7	2.4	7.7	軽石	小型三角柱状。全面に磨痕有り。1面に3本の溝状磨痕。

番　号	種　類	長 cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石　材	特徴・その他
KS1-14,15-142	磨石	7.0	4.9	1.9	72.7	凝灰質砂岩	一方細長く、他方三角形のブーツ型。全面研磨されるが、足甲部と足首部がよく使われている。表面に溝状擦痕１本有り。全面研磨。
KS1-14,15-143	砥石	6.4	5.8	5.3	84.6	軽石	凹凸のある軽石。２面が研磨に使用されている。
KS1-14,15-144	ガラス玉	0.7	0.7	0.5	0.04		コバルトブルー。
KS1-18-8	凹石	10.9	11.8	5.2	1114.1	ひん岩	やや扁平な川原石。一部欠。片面平坦、両面研磨され中央に凹み有り。
KS1-18-9	こもあみ石	5.8	6.1	2.1	95.1	砂岩	扁平楕円形の円礫。一部欠損。両端が窪み、擦痕有り。
KS1-39-5	砥石	6.2	4.6	0.9	47.5	緑色片岩	扁平長楕円形。両面よく研磨され筋状擦痕有り。
KS1-48-6	砥石	9.1	5.6	4.8	93.0	軽石	半円形の円礫、側面の一方が磨れる。正面には６条の溝状磨痕有り。
KS2-67-13	磨製石鏃	3.6	2.9	0.2	1.9	緑色片岩	三角形基部に抉入有り。側縁に沿ってやや陵を持つ。中央に穿孔。
KS2-82-3	太型蛤刃磨製石斧	11.8	5.4	3.7	429.9	変輝緑岩	基部は平坦、側辺に陵を持つ。全辺が研磨されている。断面楕円形。
KS2-99-4	磨石	11.4	4.1	1.1	80.7	雲母石英変岩	扁平棒状。全面摩滅している。
KS2-100-5	砥石	6.9	4.4	2.0	62.5	粗粒輝石安山岩	扁平の円礫の両面、両側縁を磨く。片面に１本筋状の溝が入る。
KS2-100-6	砥石	10.0	8.2	4.0	88.2	軽石	軽石の円礫の２側面が研磨され、大きく凹む。ランダムな方向に鋭利な溝が入る。
KS1-遺構外-11	打製石斧	13.9	5.9	2.0	154.0	黒色頁岩	縦長剝片の側面部を調整。刃部一部欠損か。表面風化進む。
KS1-遺構外-14	石鏃	2.4	1.7	0.5	1.0	チャート	茎なし。右下端欠損。
KS2-遺構外-15	磨製石鏃	3.4	1.5	0.3	1.9	緑色片岩	細身の五角形、基部に抉入有り。側縁に沿ってやや陵を持つ。基部近くの片面に未貫通の穿孔有り。
SN29-13	石核	5.5	8.9	6.5	308.6	黒色頁岩	三角錘状の石核。上面に自然面を残す。表面は風化進む。上面は全周に剝離痕有り。
SN29-14	磨石	9.4	8.1	8.1	847.2	粗粒輝石安山岩	川原石円礫。やや膨らむ方の一端部がよく磨かれている。
SN29-15	磨石	9.4	7.9	5.1	587.3	粗粒輝石安山岩	楕円形、僅かに扁平な川原石。表裏面に磨痕、下部側面に敲き痕。

SUMMARY

1. Outline of the Sites

We did an archaeological excavation at Koyagi-shishikaido sites, Takasaki, Gunma, from December 1st 1996 until now, as an administrative research because of the construction for prefectural road's by-pass. On this excavation, had be found enormous artifacts that consist of pottery, stone-ware, stone tools and metal works in several kinds monuments of various ages, from Johmon age to pre-Modern age. In this book, we reported only an analysis result of Yayoi age from three sites, Koyagi-shishikaido, Syohkanji-nishihara and Sugaya-Ishizuka.

2. Number of Main Monuments and Artifacts

In this sites, we found many number of monuments as following ;

tombs of pottery coffin	(23 or 24)
moat	(1)
hole type dwellings	(14 or 16)
pottery's concentrational area	(8)

And as a most sepecial artifact fragments of a human mask pottery were found in the moat.

Large number of those monuments belong to Middle stage of Late period (also 1st/2nd century AD), but there were only 1 dwelling and a few tombs of Last stage at northern part and one or two tombs of First stage in southern part.

3. Characteristic Results

A. tombs of pottery coffin

Most type tombs were used combination of potteries as large pot without upper part and small jar's lower part. Although not found human's bone or fragments of accessories in pot, we hadn't doubt those function as first or seconnd burial tomb. And human mask pottery, similar with Arima site's pottery, was thinking as one of important materials for special burial ceremony.

B. moat and dwellings

A big moat, length more 120m, wide 3m and deep more 1.5m, was found at southern part. Because this monument, located with direction of north-south, had no traces of warter stream in permanent scale, we concluded that its function was not for irrigation system but drain and defence of the settelment consist of hole type dewllings in eastern part.

C. pottery's concentrational area

On main part of tombs area found numerous number of potteries with small fragments of burned bone of deers and wild boars. Those artifacts were fell into the moat, but no there at eastern its upside about 5m wide, where had located bank. We thought that this monument was a result of several times human's activities as burial ceremonies or garbage dump.

D. the change of social life

Because those monuments were excavated in over-lap conditions, we can concluded those changing of situation in this sites as following ;

1 stage : formation of the necropolis at low grand with burial ceremony area (from First to Middle stage of Late period on Yayoi age)

2 stage : construction of the settelment surrounded by big moat after destruction of the necropolis (from Middle to Last stage of Late period on Yayoi age)

3 stage : formation of the new settlement (Early period on Kofun age)

(*Sakai T.*)

写　真　図　版

PL. 1　遺跡全景

遺跡群北側（小八木志志貝戸０区以北　南東から）　遠景は榛名山

KS1区全景　南より

PL. 3　KS1区

KS1区全景　北西より

KS1区土器棺墓群　北より

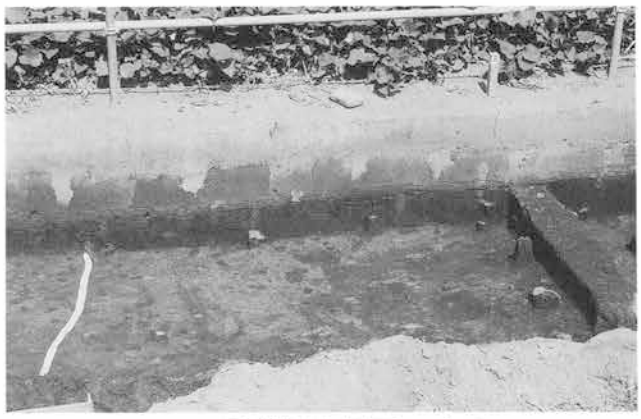
KS2区全景　北西より　遠景は高崎市街地

PL. 5　KS 2 区

KS 2 区全景　南より

KS 2 区住居群　北東より

KS1-10号遺構全景　南西より

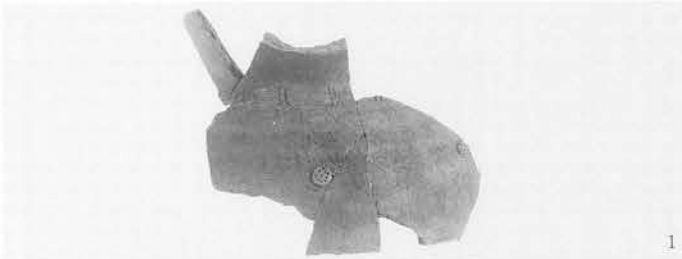


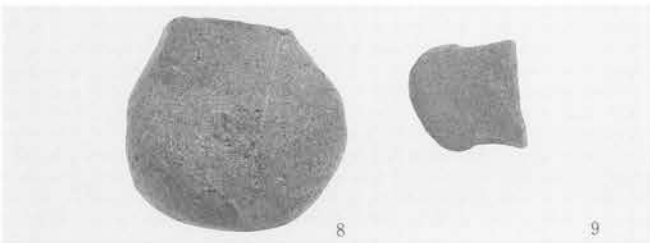
KS1-10号遺構土層断面　西より

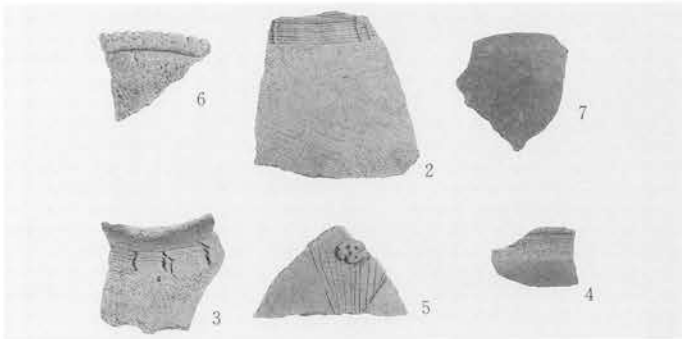
KS1-18号遺構遺物出土状態　西より

KS1-18号遺構全景　南より

KS1-18号遺構炉　西より





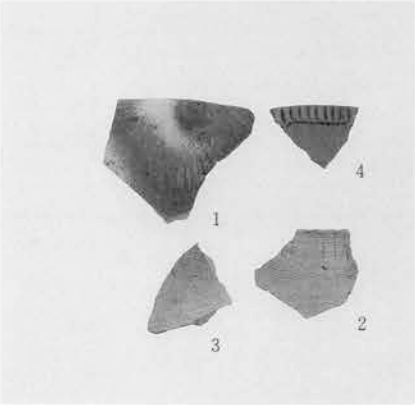


PL. 7　KS1-48号、KS2-22,24,70号遺構

KS1-48号遺構全景　南より

KS1-48号遺構掘り方　南西より

KS1-48号遺構炉　南西より



KS2-22,24,70号遺構全景　南より

KS2-24号遺構東拡張部分　南東より

KS2-22号遺構掘り方　北より

KS2-24号遺構東拡張部分　南より

KS2-22号遺構出土遺物

KS2-24号遺構出土遺物

KS2-70号遺構出土遺物

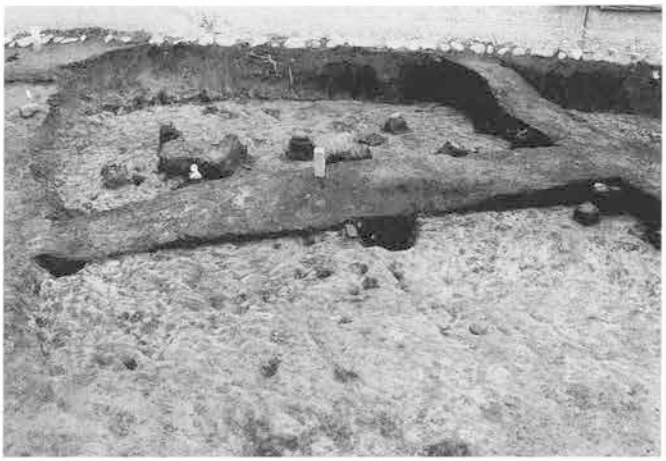
KS2-57号遺構全景　西より

KS2-57号遺構遺物出土状態　南東より

KS2-59号遺構遺物出土状態　北より

KS2-59号遺構掘り方全景　北より

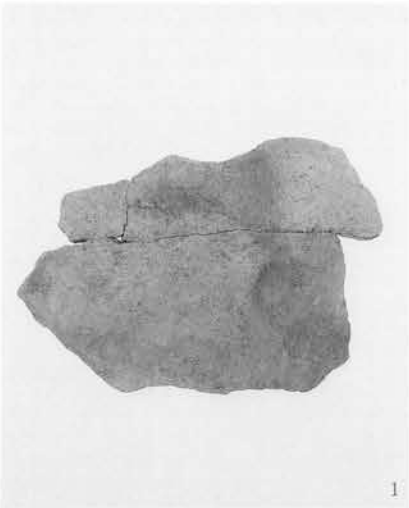
PL. 9　KS2-67号遺構



KS2-67号遺構土層断面　北西より

KS2-67号遺構炉　西より

KS2-67号遺構全景　南より



1

3

4

8

11

9

7

2

5

6

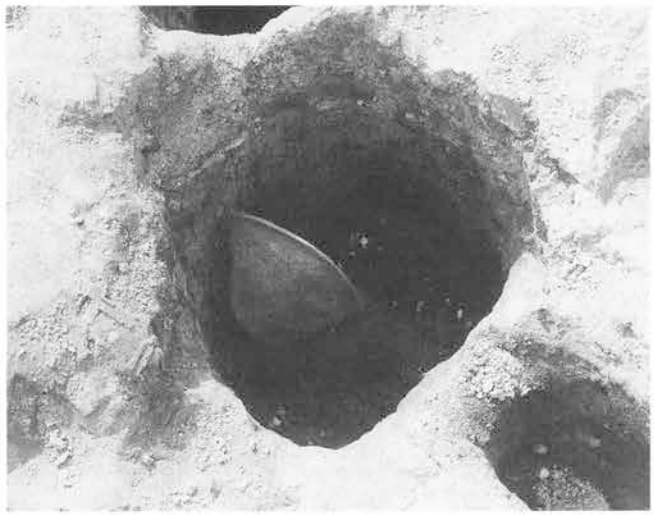
10

12

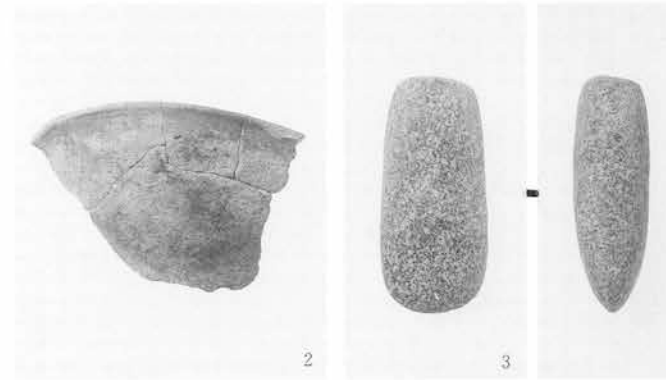
13

KS2-82号遺構全景　北より

KS2-82号遺構ピット
内遺物出土状況
南より



KS2-82号遺構ピット内遺物出土状況　東より

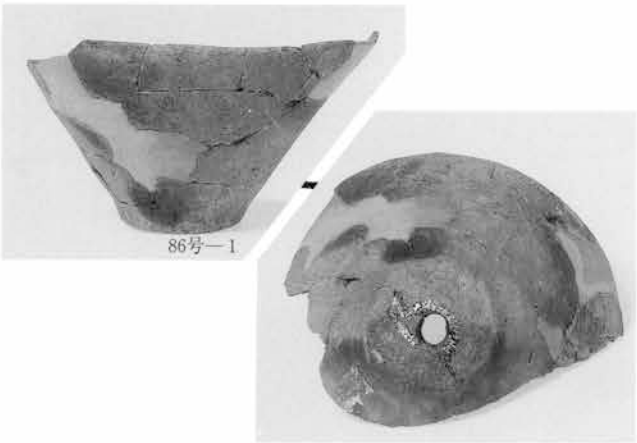


KS2-86号遺構全景　北より

PL. 11　KS2-86号、99号遺構

KS2-86号遺構全景　北西より

KS2-86号遺構遺物出土状況　北東より

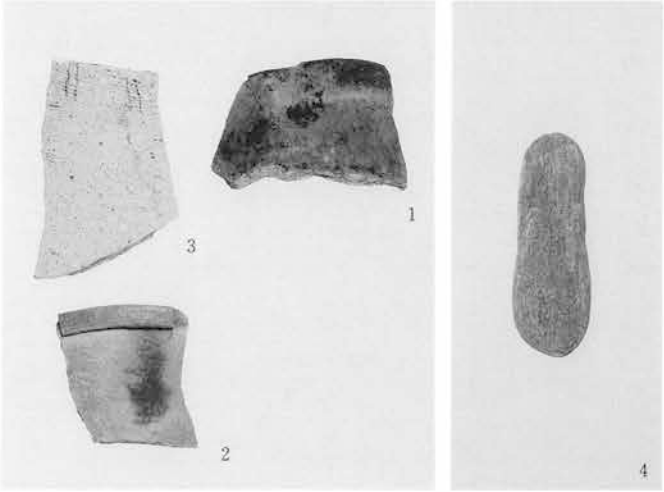


KS2-99号遺構全景　東より

KS2-99号遺構土層断面　南東より

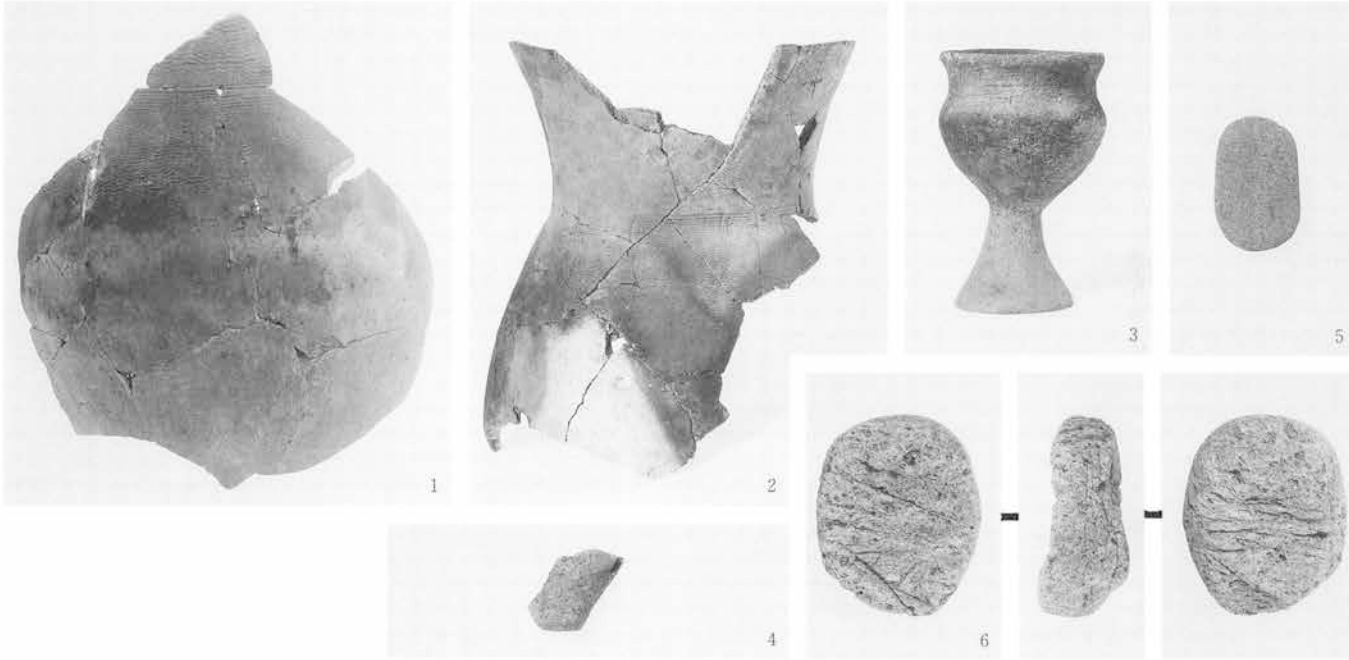
KS2-99号遺構掘り方全景　東より

KS2-99号遺構遺物出土状態　東より



KS2-100号遺構全景　北東より

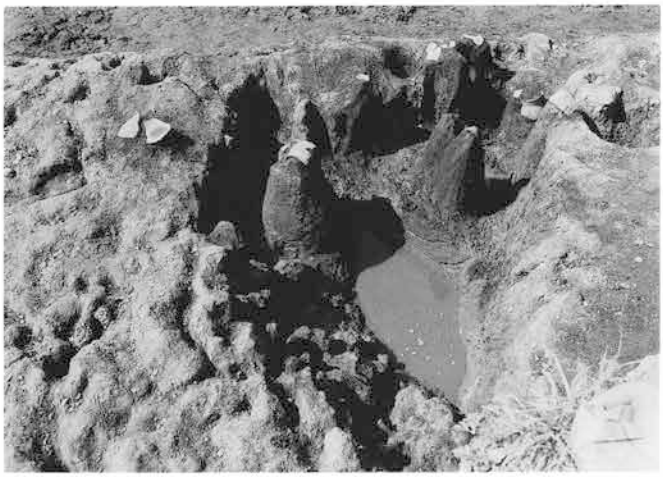
KS2-100,102号遺構　北東より



KS2-107号遺構全景　南より

KS2-107号遺構遺物出土状態　南西より

PL. 13 KS2-77号遺構、KS0-12号遺構



KS2-77号遺構全景　南より

1

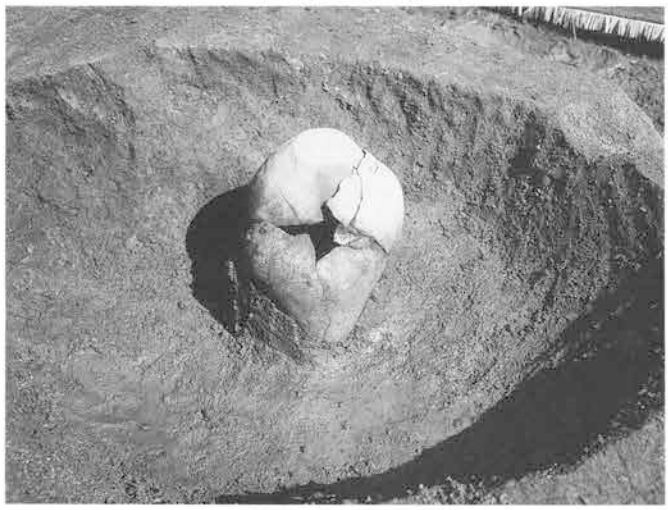
2

KS0-12号遺構遺物出土状態　南より

KS0-12号遺構遺物出土状態　東より

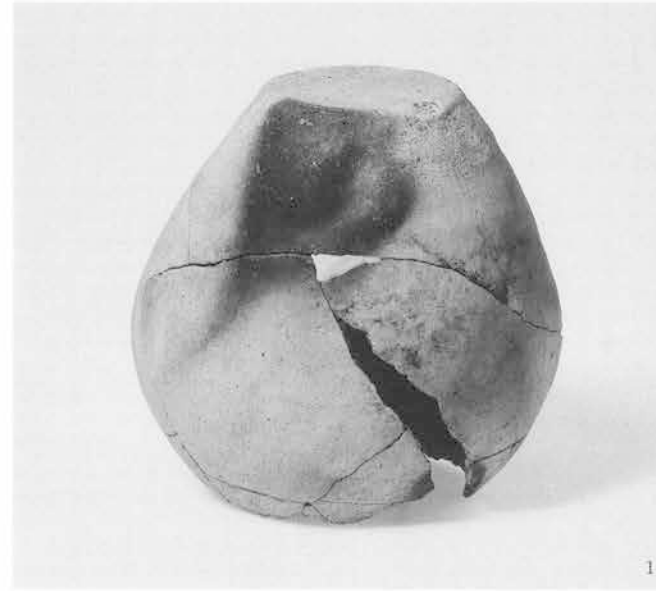
1

KS0-11,13号遺構遠景　北より



KS0-11号遺構全景　南西より

KS0-20号遺構全景　北西より

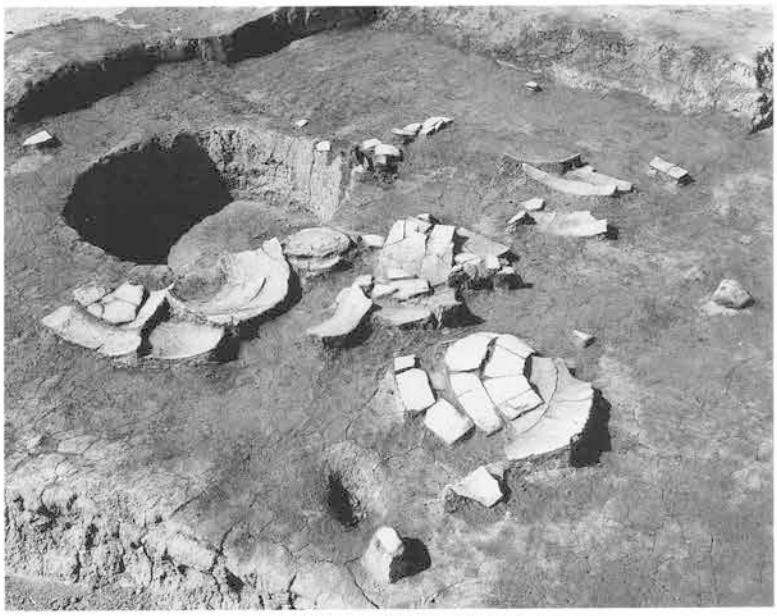


1

2

1

PL. 15 KS0-28号遺構

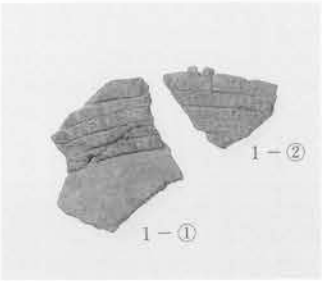


KS0-28号遺構全景　南東より

KS0-28号遺構全景　北東より

3

2



KS1-03号遺構全景、土層断面　南より

2

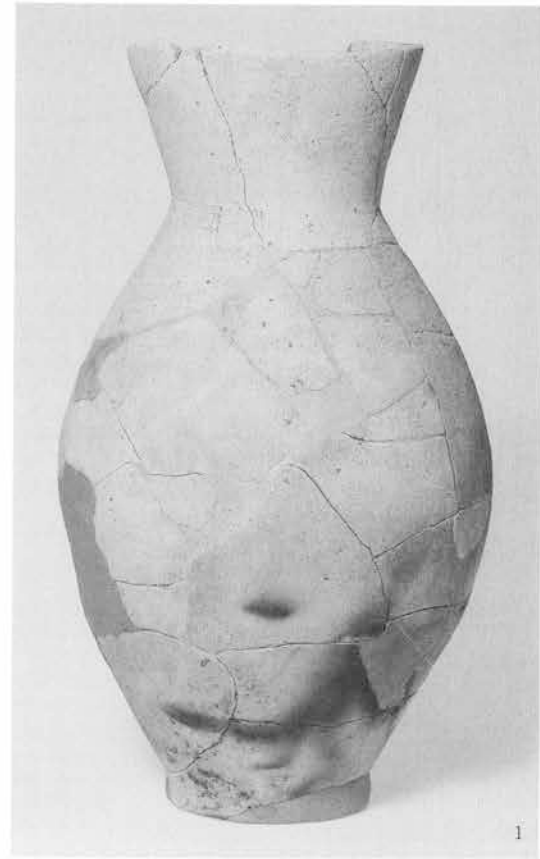
KS1-03号遺構土器棺１出土状態　東より

3

1－①

1－②

KS1-03号遺構出土遺物

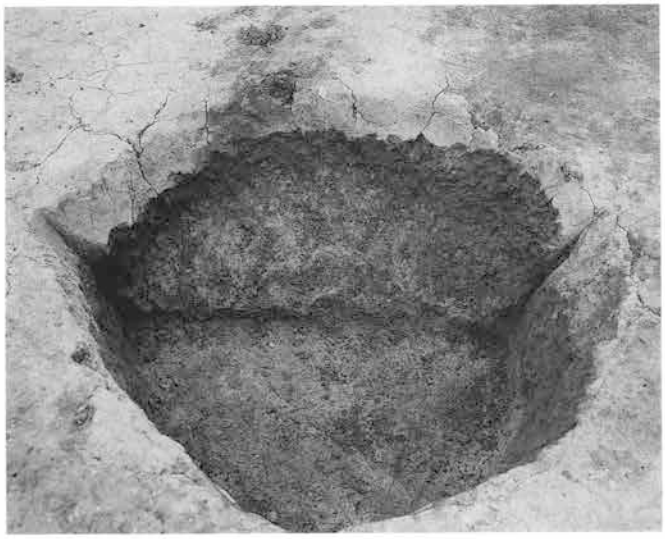


1

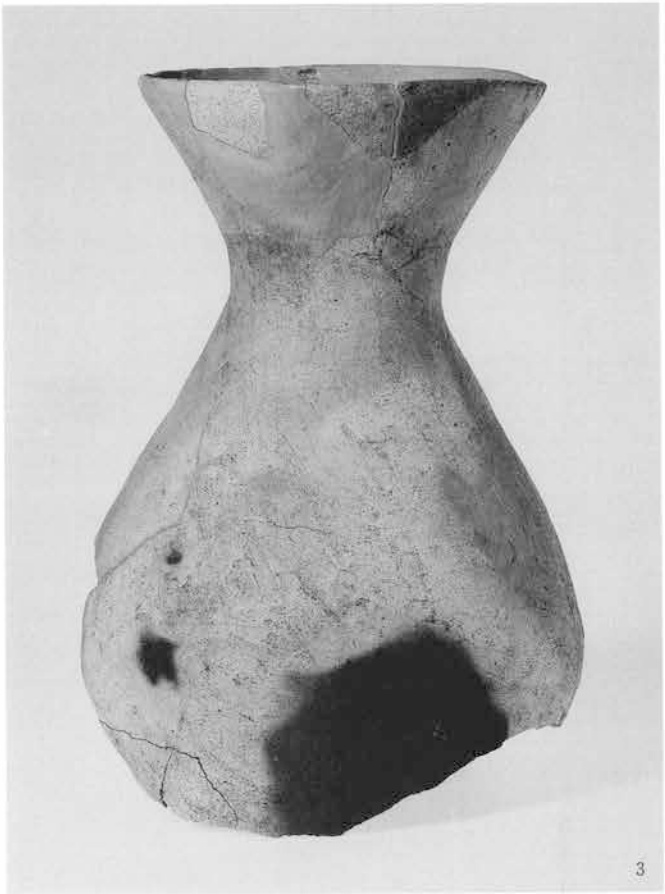
KS1-05号遺構全景　北西より

PL. 17　KS1-24号、27号遺構

KS1-24号遺構遺全景　西より



KS1-24号遺構掘り方　南より



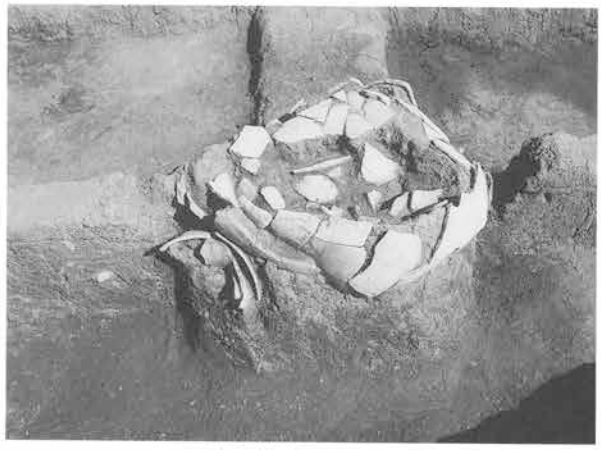
3

2

1

KS1-27号遺構遺物出土状態　南より

1



KS1-28号遺構検出状況　西より

KS1-28号遺構検出状況　北より

1

KS1-28号遺構棺内土除去　東より

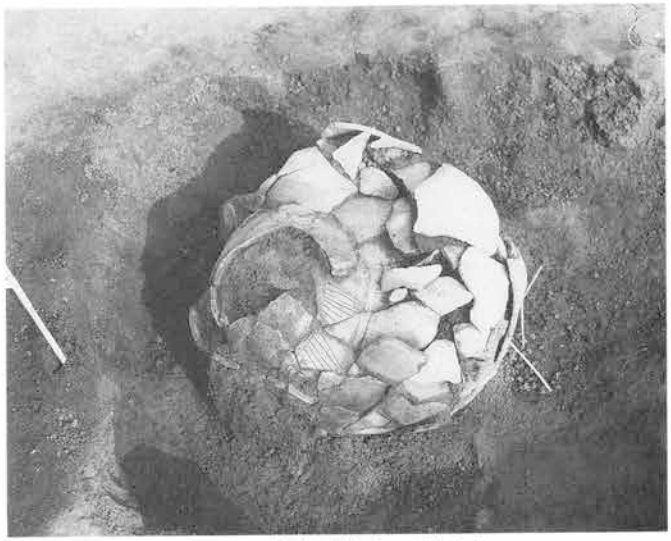
2

3

KS1-28号遺構出土遺物組み合わせ

PL. 19 KS1-33号遺構

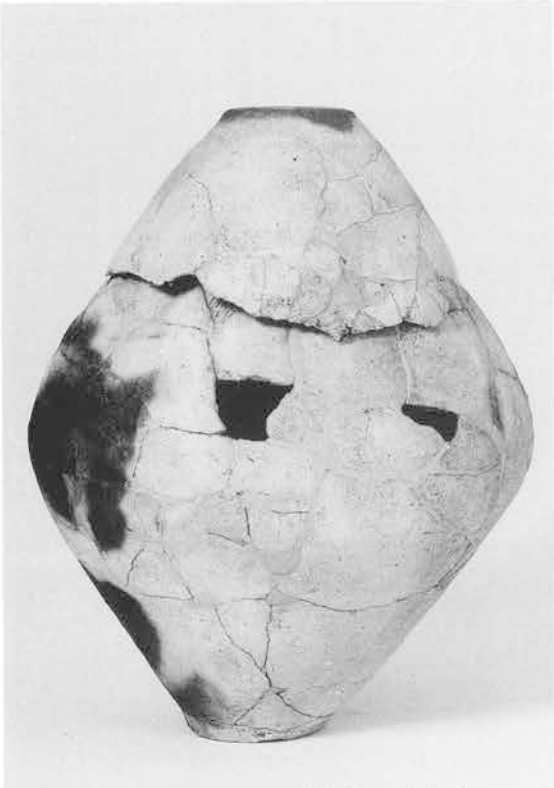
KS1-33号遺構検出状況　南西より



KS1-33号遺構棺身　西より

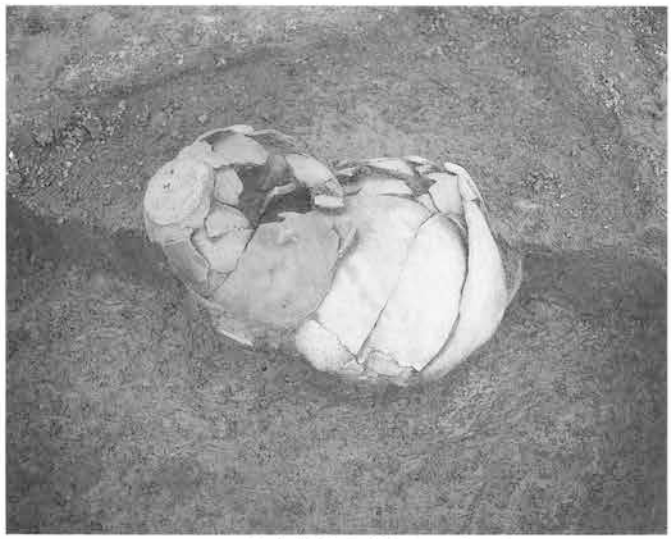
KS1-33号遺構棺内土除去　西より

1



2

KS1-33号遺構出土遺物組み合わせ



KS1-34号遺構検出状況　西より

KS1-34号遺構棺身　東より

KS1-34号遺構棺内土除去　東より

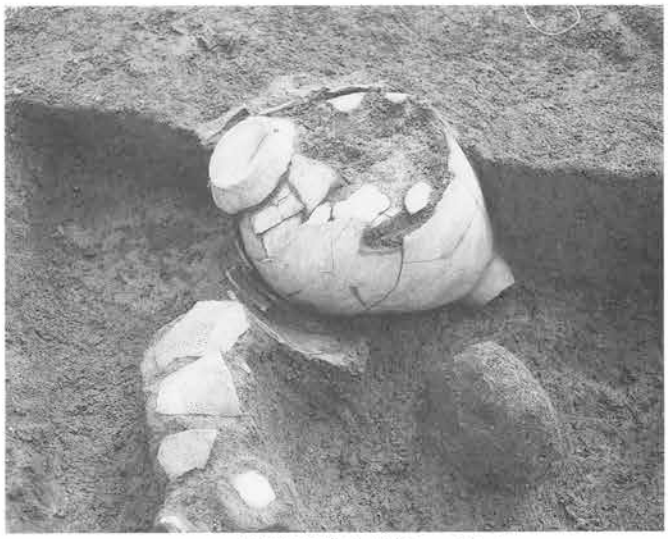
1

KS1-34号遺構出土遺物組み合わせ

2

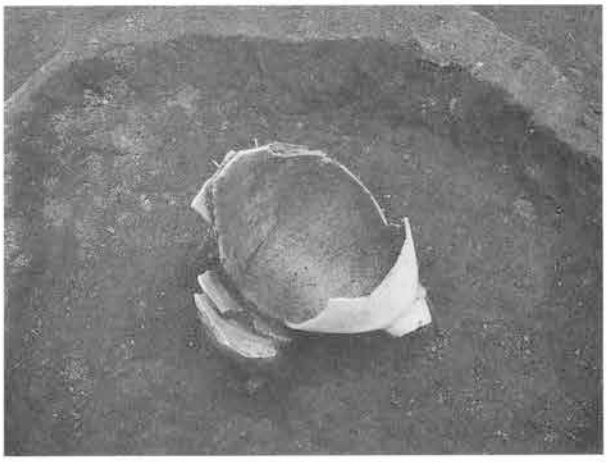
PL. 21　KS1-35号遺構

KS1-35号遺構遠景　北西より



KS1-35号遺構検出状況　東より

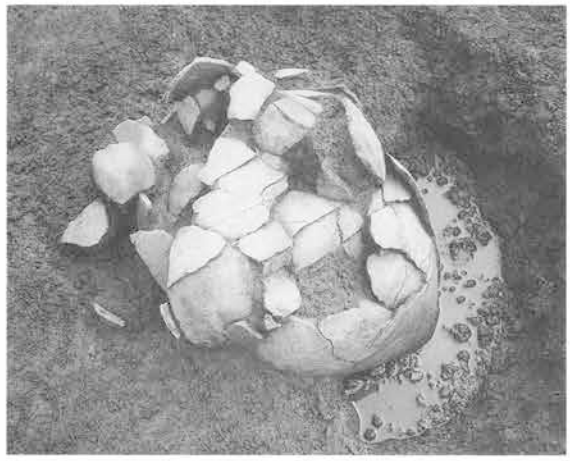
1



KS1-35号遺構棺内土除去　東より

KS1-35号遺構出土遺物組み合わせ

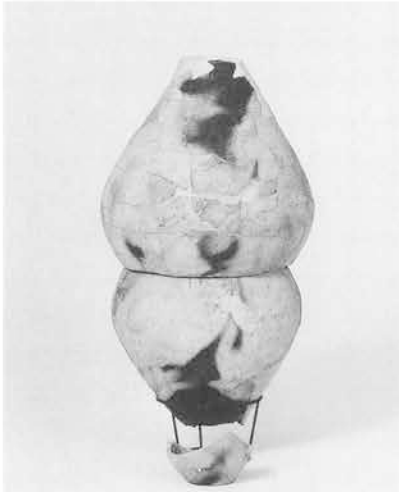
2



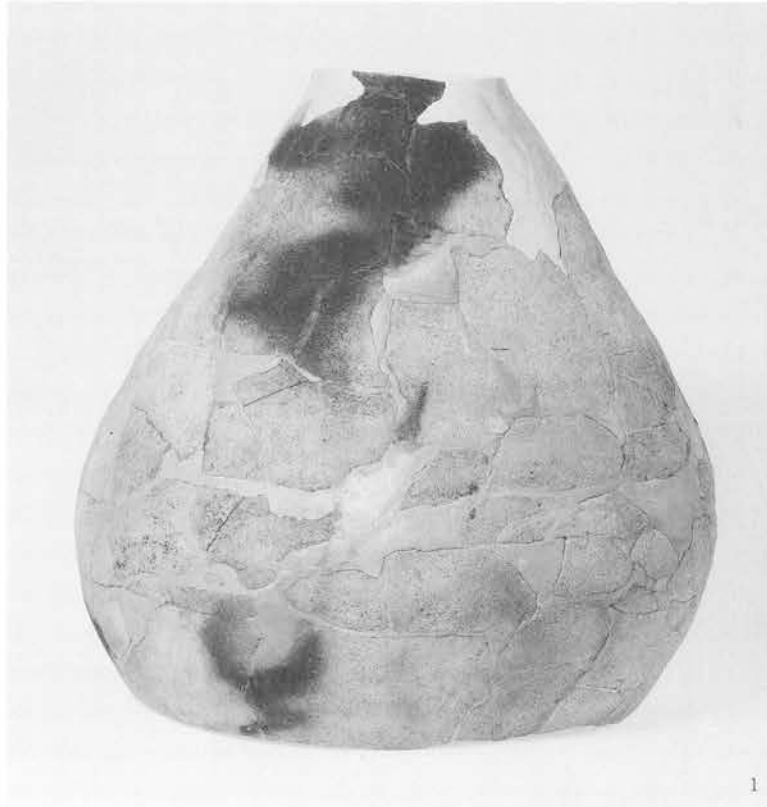
KS1-36号遺構検出状況　北より

KS1-36号遺構棺身　北東より

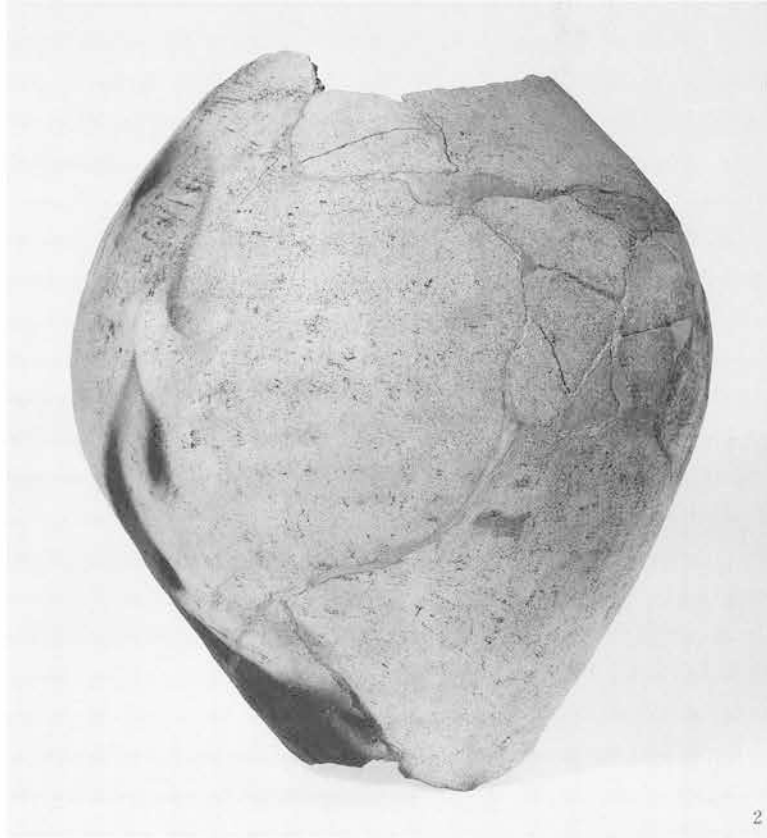
KS1-36号遺構棺内土除去　東より



KS1-36号遺構出土遺物組み合わせ



1



2

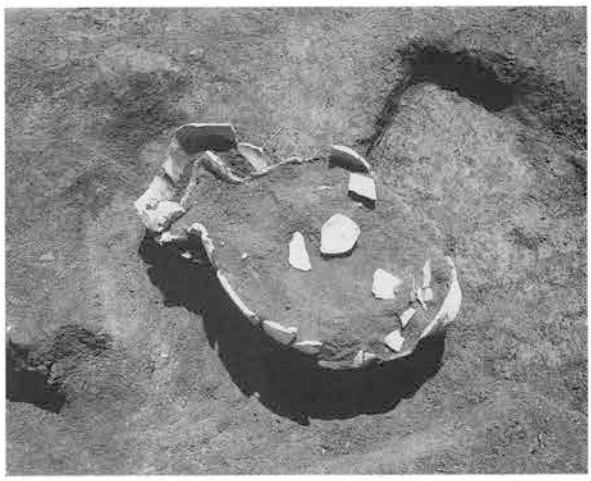
3

KS1-37号遺構検出状況　西より

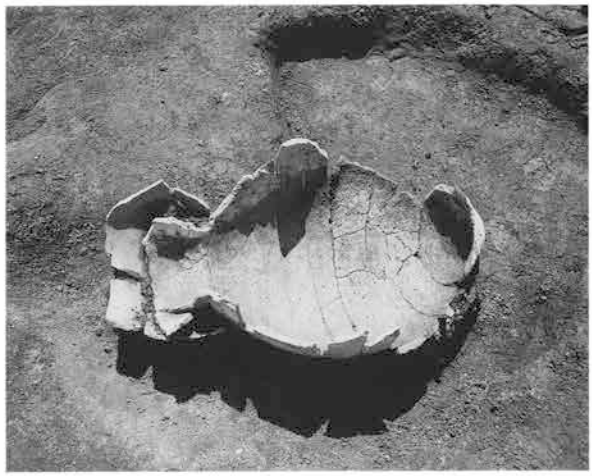
1

1

2



KS1-38号遺構検出状況　北より



KS1-38号遺構棺内土除去　北より

KS1-38号遺構出土遺物組み合わせ

1

2

KS1-40,41号遺構検出状況　西より

KS1-40号遺構検出状況　南より

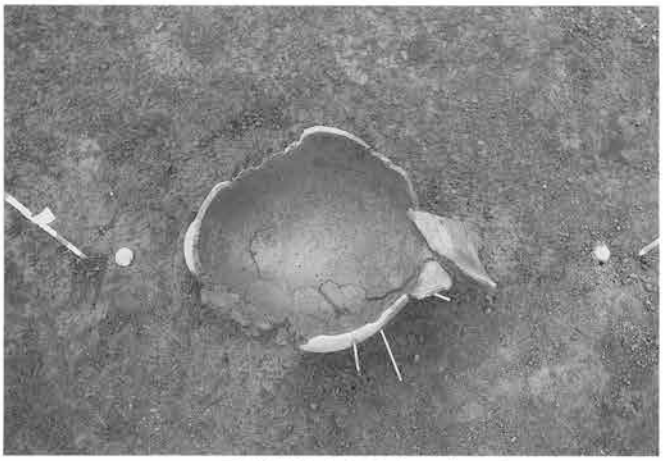
KS1-40号遺構棺内土除去　北より

KS1-40号遺構出土遺物組み合わせ

PL. 25 KS1-41号、42号遺構

KS1-41号遺構遠景　西より

KS1-41号遺構検出状況　北より

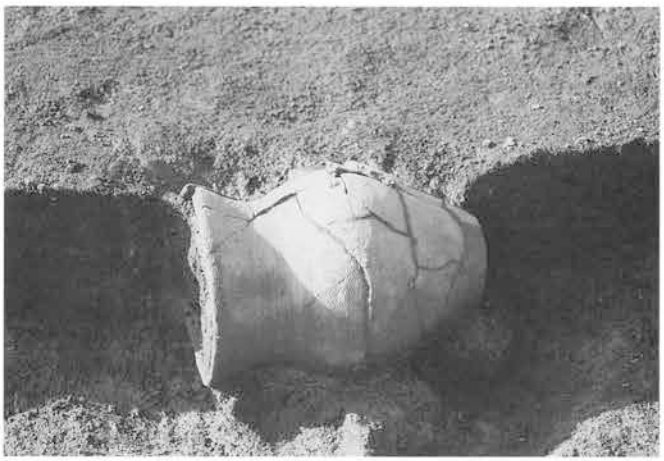


KS1-41号遺構棺内土除去　北より

1

2

KS1-42号遺構検出状況　南より

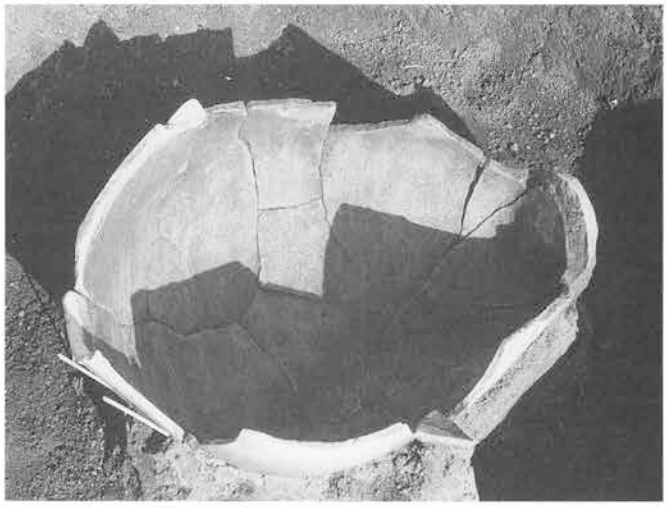


KS1-42号遺構検出状況　南より

1

KS1-52号遺構検出状況　西より

KS1-52号遺構検出状況　北より



KS1-52号遺構棺内土除去　西より

1

KS1-52号遺構出土遺物組み合わせ

2

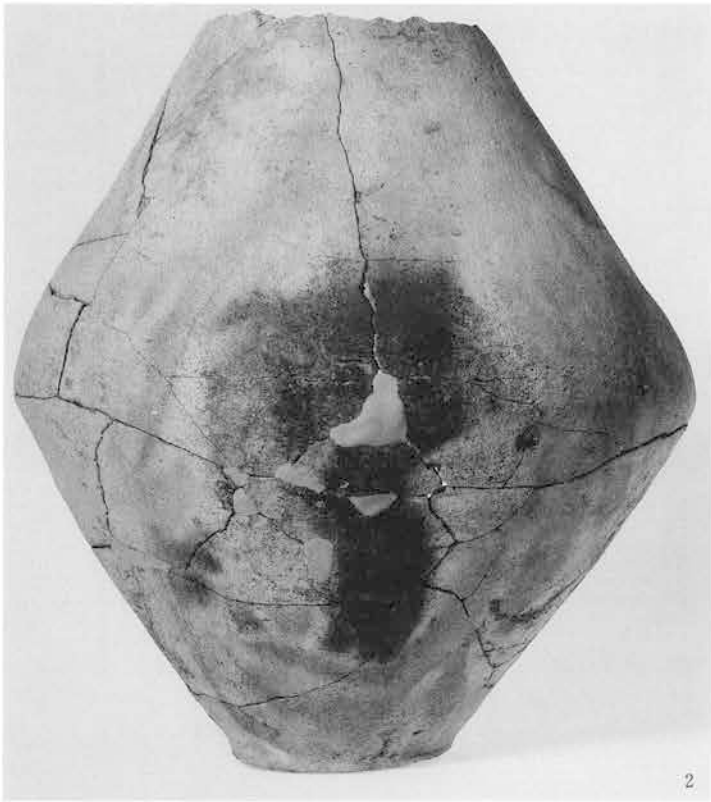
KS1-54号遺構土層断面　東より

KS1-54号遺構棺身と枕　北より

KS1-54号遺構検出状況　東より

1

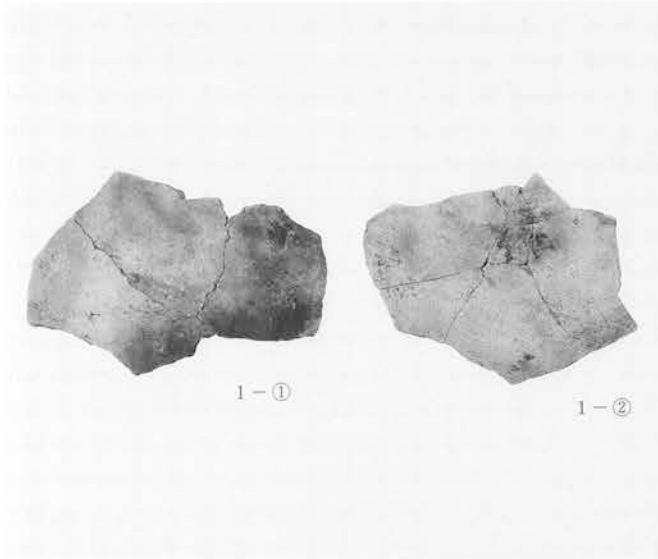
3



2

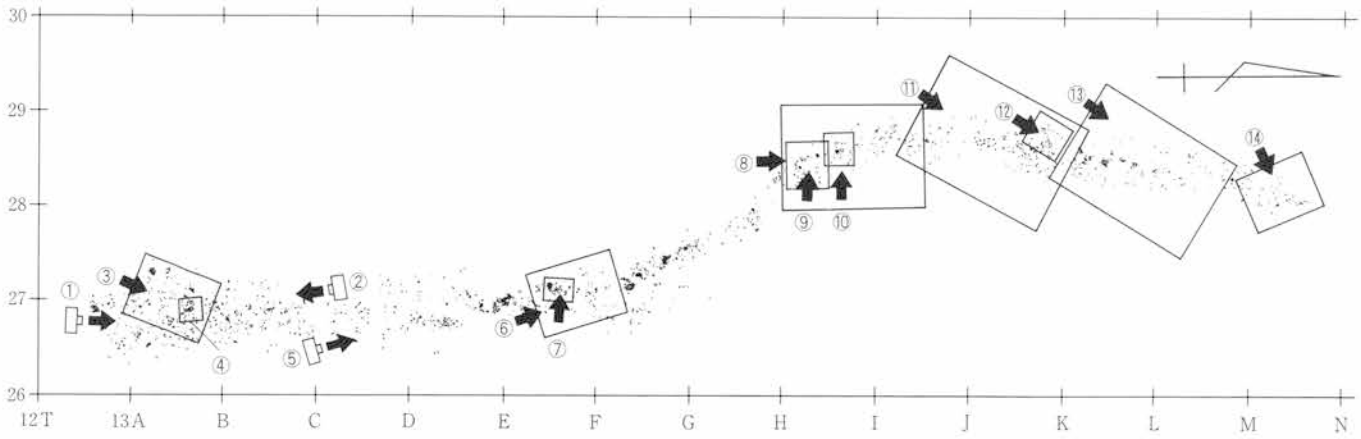
KS1-54号遺構出土遺物組み合わせ

KS2-94号遺構検出状況　東より



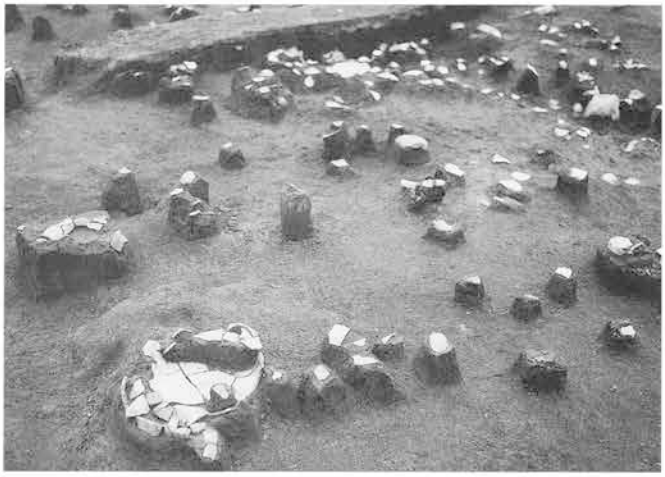
KS2-102号遺構検出状況　西より

KS2-103号遺構検出状況　北西より

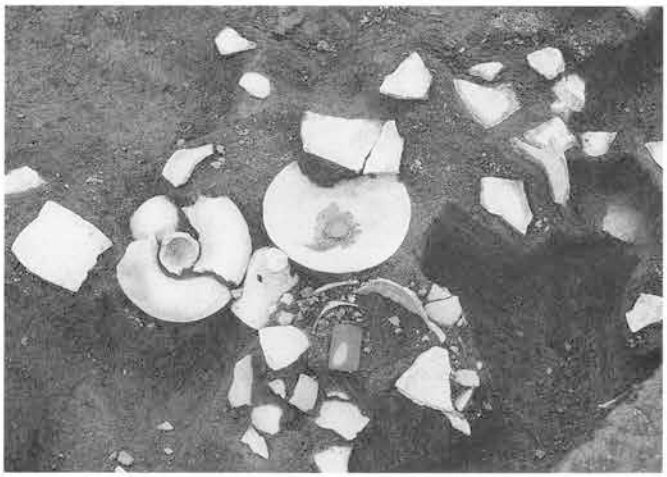


①KS1-07号遺構上層遺物出土状態　南より

②KS1-07号遺構上層遺物出土状態　北より



③KS1-07号遺構上層遺物出土状態　南西より

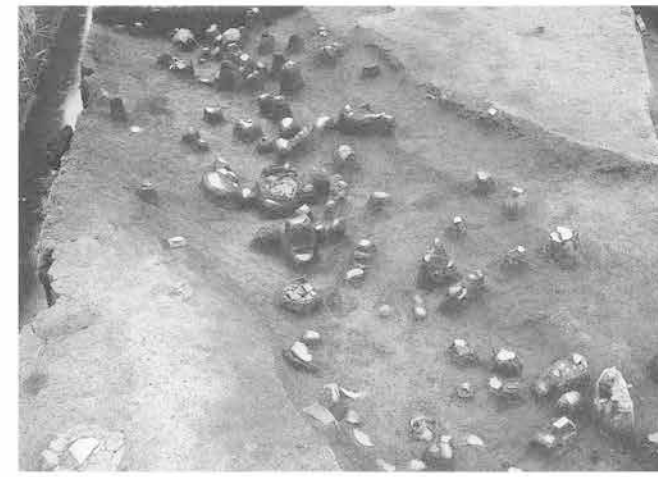


④KS1-07号遺構上層遺物出土状態　北東より

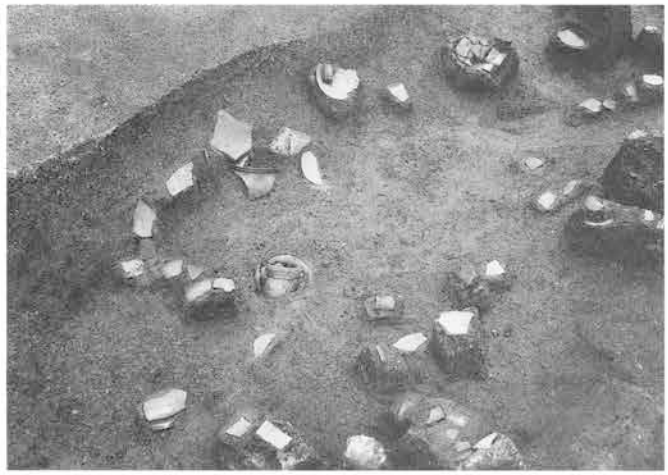
⑤KS1-07号遺構上層遺物出土状態　南東より

⑥KS1-07号遺構上層遺物出土状態　南東より

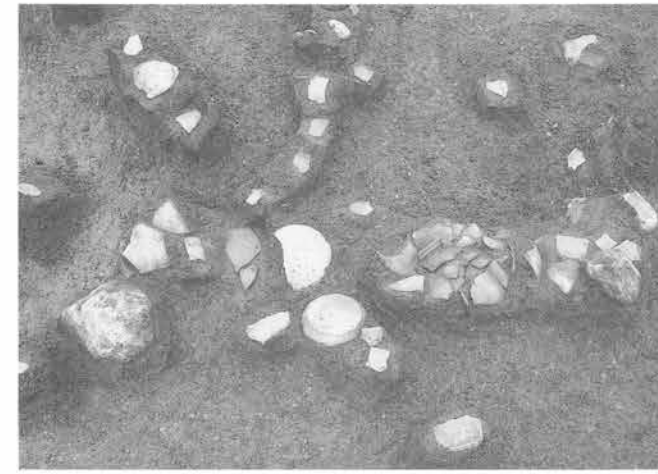
⑦KS1-07号遺構上層遺物出土状態　東より



⑧KS1-07号遺構上層遺物出土状態　南より



⑨KS1-07号遺構上層遺物出土状態　東より



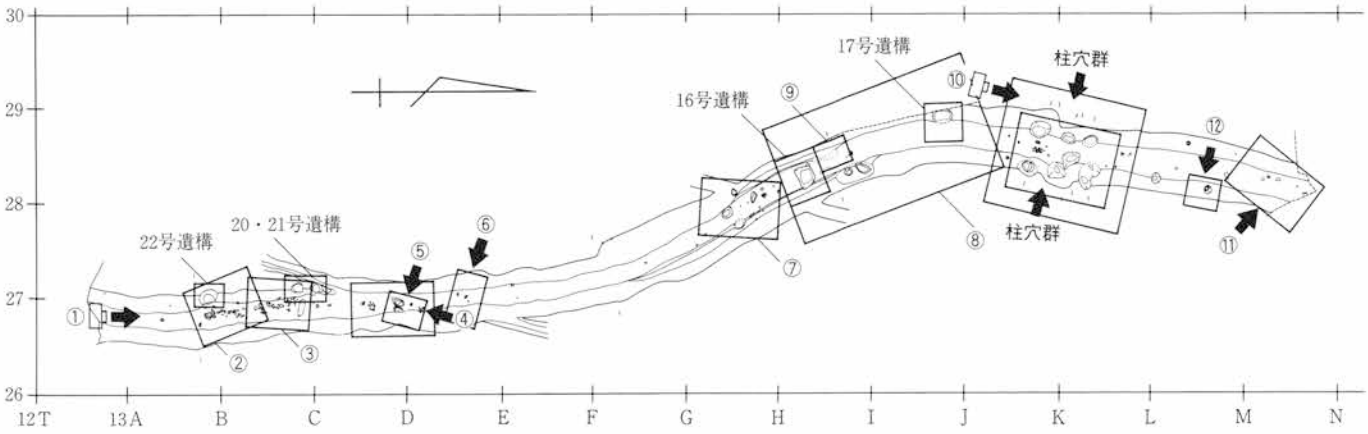
⑩KS1-07号遺構上層遺物出土状態　東より

⑪KS1-07号遺構上層遺物出土状態　南西より

⑫KS1-07号遺構上層遺物出土状態　南西より

⑬KS1-07号遺構上層遺物出土状態　南西より

⑭KS1-07号遺構上層遺物出土状態　西より



①KS1-07号遺構下層遺物出土状態　南より

②KS1-07号遺構下層遺物出土状態　南東より

③KS1-07号遺構下層遺物出土状態　東より

KS1-07号遺構B－B′土層断面　北より

KS1-07号遺構C－C′土層断面　南より

④KS1-07号遺構下層遺物出土状態　北より

⑤KS1-07号遺構下層遺物出土状態　北西より

⑥KS1-07号遺構下層遺物出土状態　北西より

⑦KS1-07号遺構下層遺物出土状態　東より

⑧KS1-07号遺構下層遺物出土状態　南東より

⑨KS1-07号遺構下層炭化物出土状態　南西より

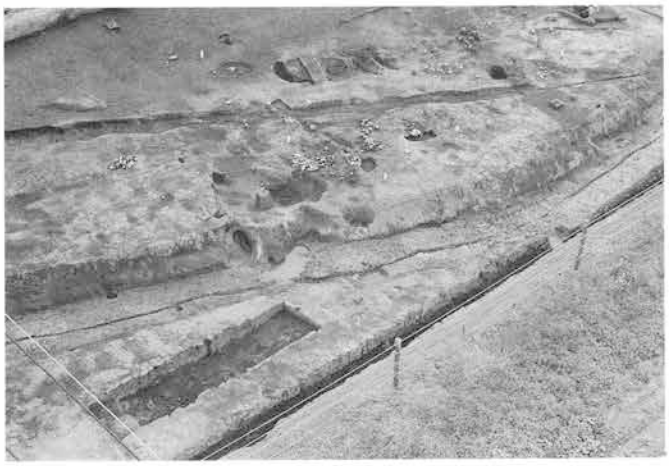
⑩KS1-07号遺構下層遺物出土状態　南より

⑪KS1-07号遺構下層遺物出土状態　南東より

PL. 33 KS1-07号下層、16号、17号、20号、21号、22号遺構

⑫KS1-07号遺構下層遺物出土状態　西より

KS1-07号遺構下層掘り方　北東より



KS1-07号遺構柱穴群　北西より

KS1-07号遺構柱穴群　南西より

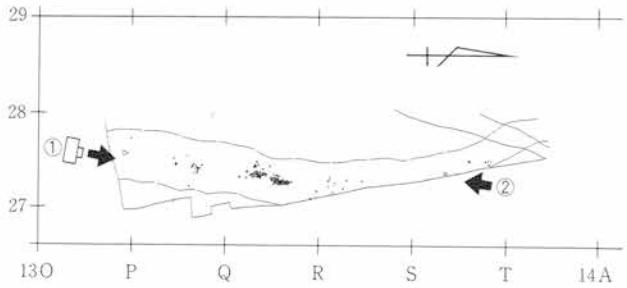
KS1-16号遺構全景　南より

KS1-17号遺構遺物出土状態　東より

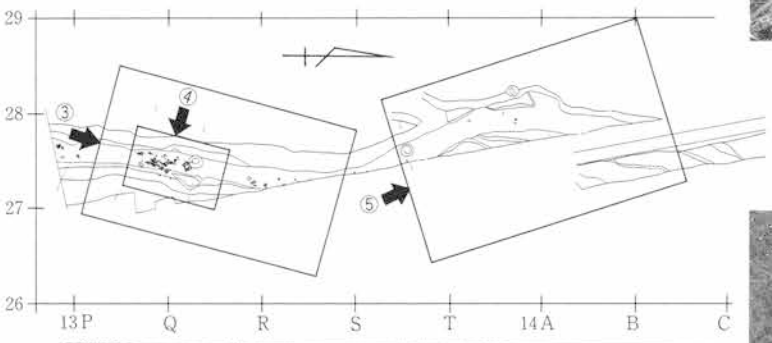
17号—1

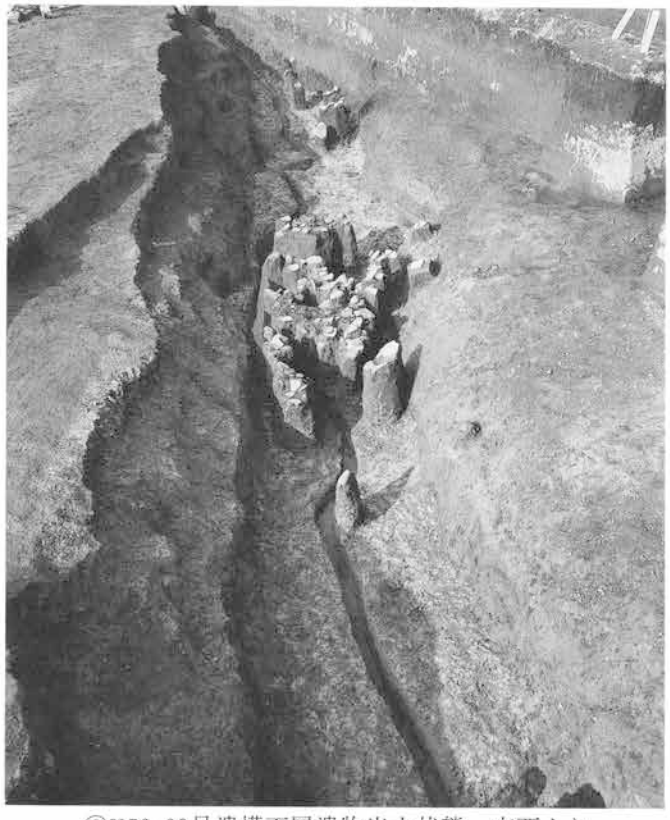
KS1-20号（右）21号（左）遺構全景　東より

KS1-22号遺構全景　東より



KS0-09号遺構遠景　南西より





③KS0-09号遺構下層遺物出土状態　南西より

①KS0-09号遺構上層遺物出土状態　南西より

②KS0-09号遺構上層遺物出土状態　北より

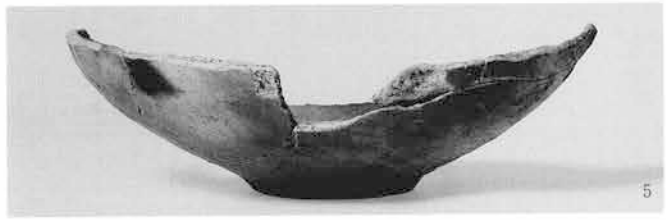
④KS0-09号遺構下層遺物出土状態　北西より

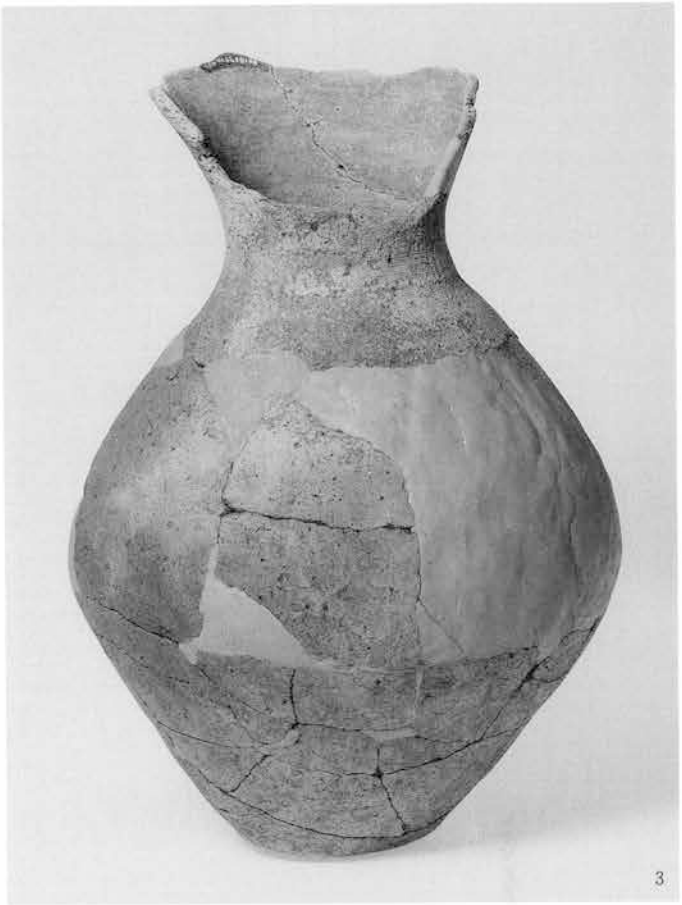
⑤KS0-09号遺構下層　南東より

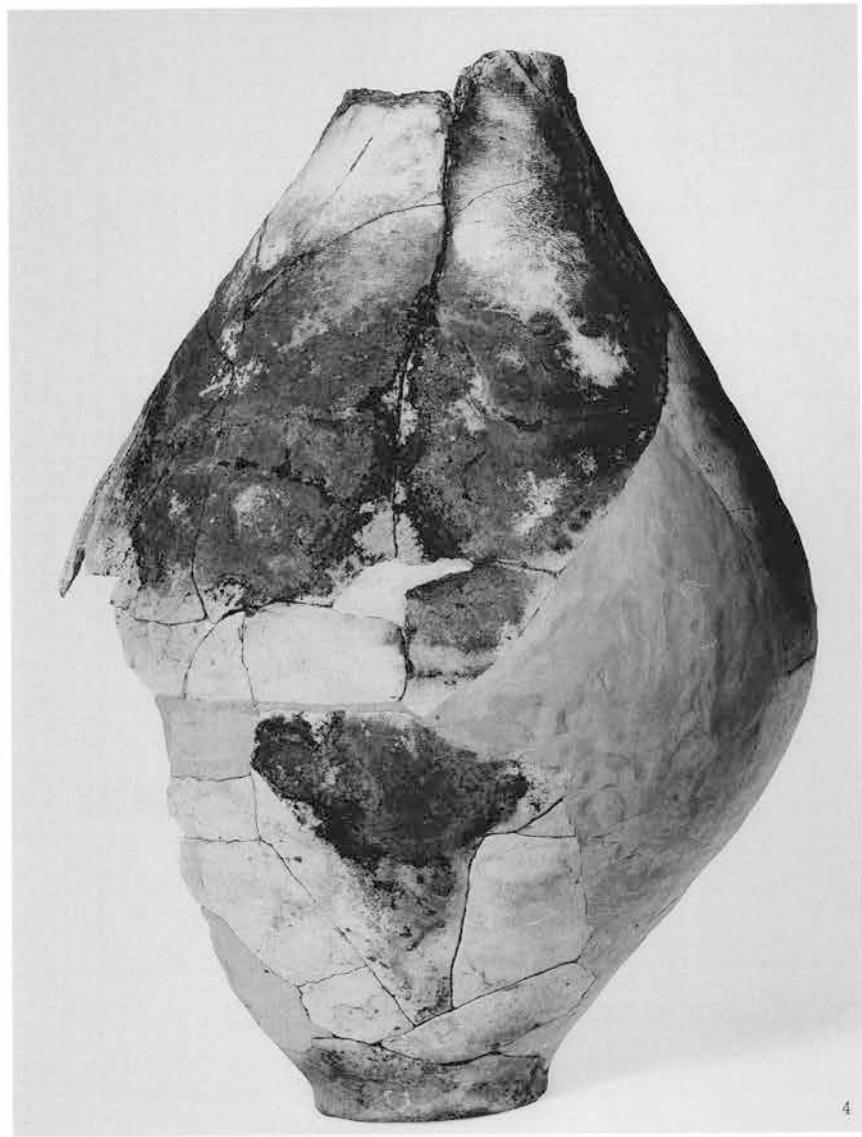
PL. 35 KS1-07号遺構出土遺物（1）

1（下層）

2


5


3


4

7（下層）

6（下層）

8

9

10(下層)

11(下層)

12

13(下層)

14(下層)

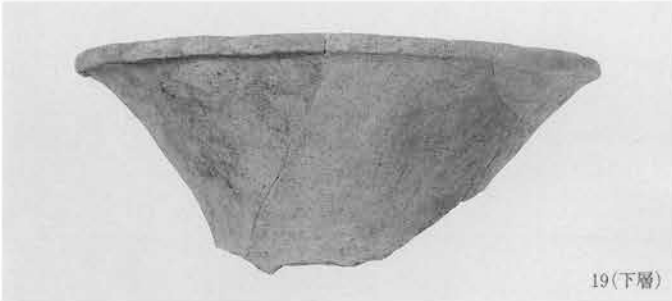
15(下層)

16

17

18(下層)

PL. 37 KS1-07号遺構出土遺物（3）


19(下層)

20

21(下層)

22(下層)

23

24

25

27

28

29(下層)

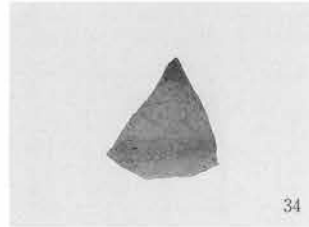
26

30

31

32

33


34

35(下層)

36(下層)

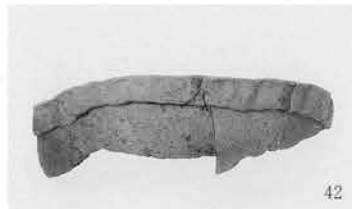
37(下層)

38(下層)

40(下層)

41

39


42

46

43

47

48（下層）

44（下層）

54

52（下層）

49（下層）

50

45（下層）

51（下層）

53

55

56（下層）

57

58（下層）

59

60

63（下層）

61（下層）

62（下層）

65（下層）

66（下層）

64（下層）

67

70（下層）

68（下層）

69（下層）

PL. 39 KS1-07号遺構出土遺物（5）

71

72

73

74

75

76

77

79

78

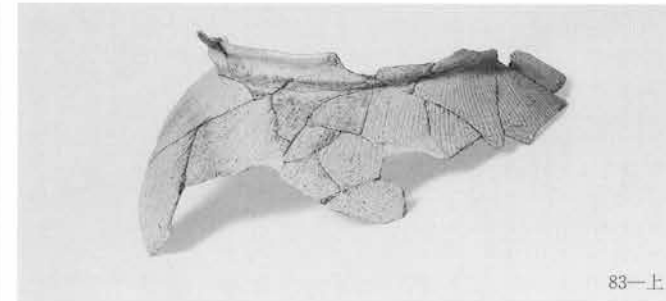
80

82

81

85（下層）

84


83—上

83—下

86

88

91

89

87

90

PL. 41　KS1-07号遺構出土遺物（7）

92

93（下層）

94

95

96（下層）

97

98

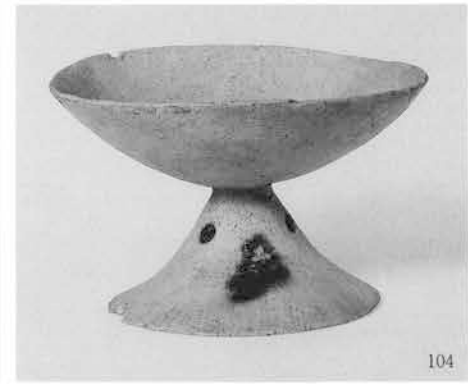
99

100

101

102

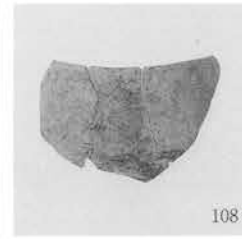
103


104

105

106

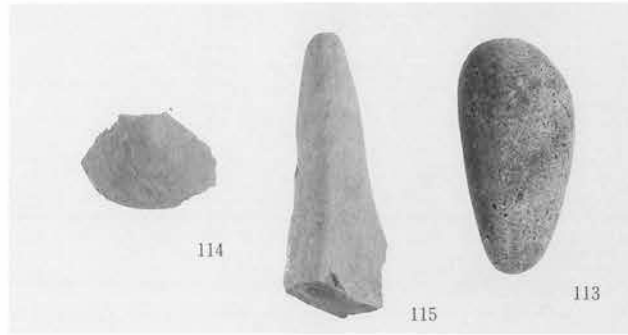
107


108

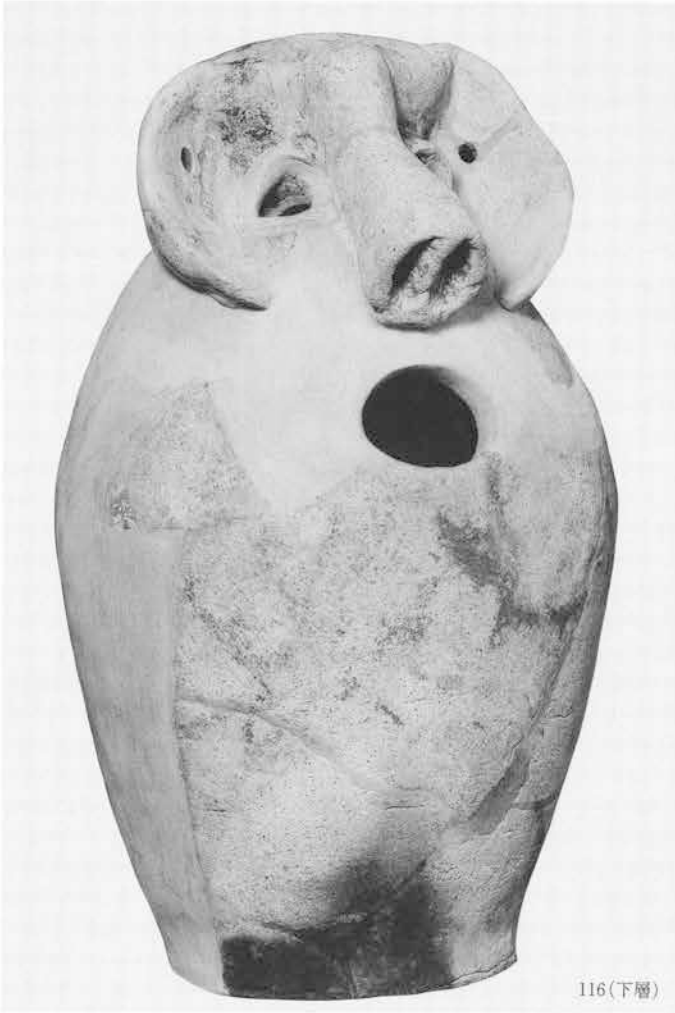
109

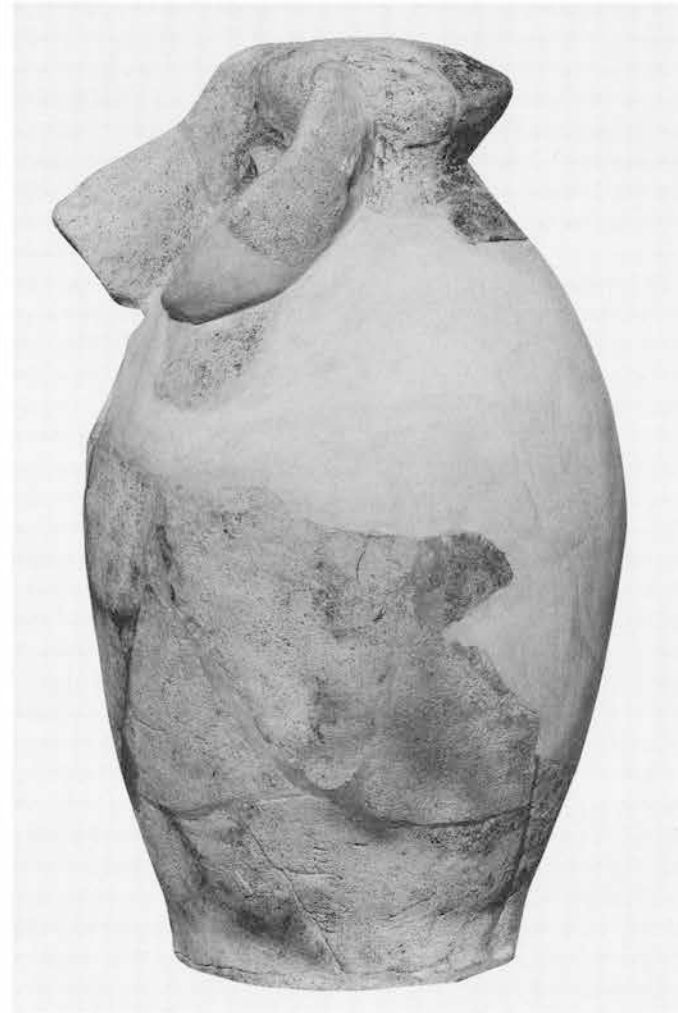
111

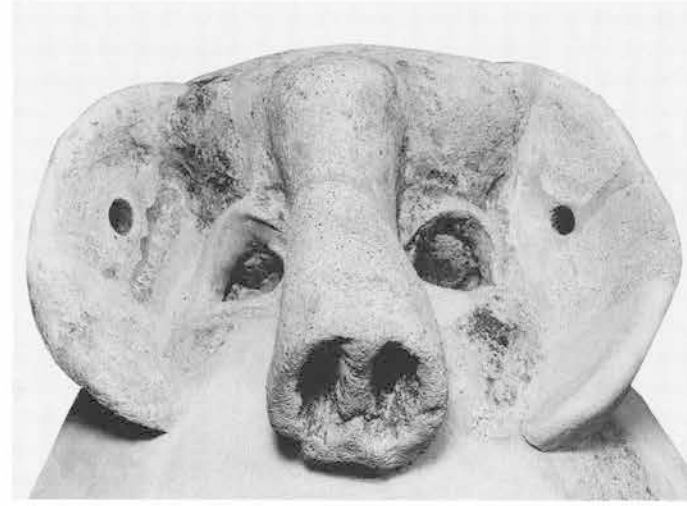
112

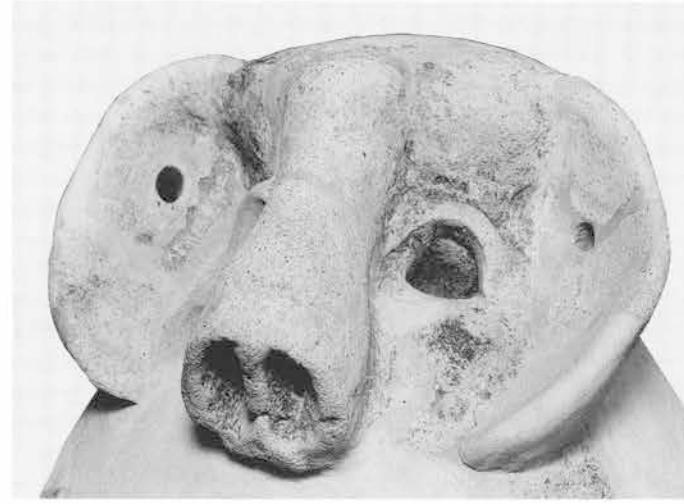

114
115
113

110


116(下層)

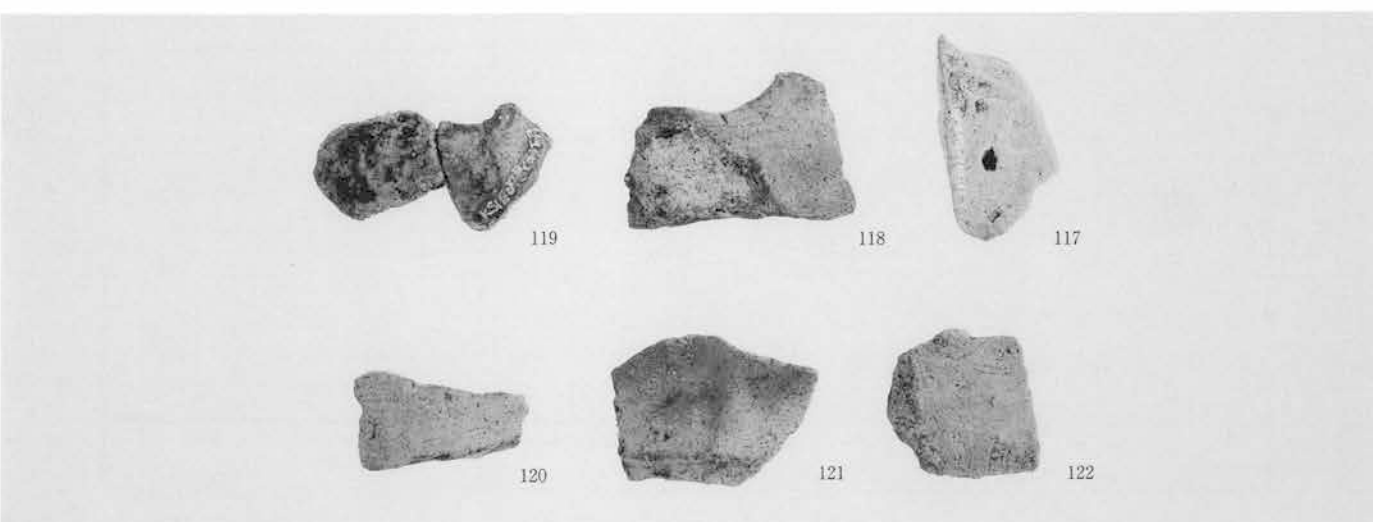






116（頭部内面）

116（胴部内面）



1

2

4

5

3

9

6

7

13

8

10

11

16

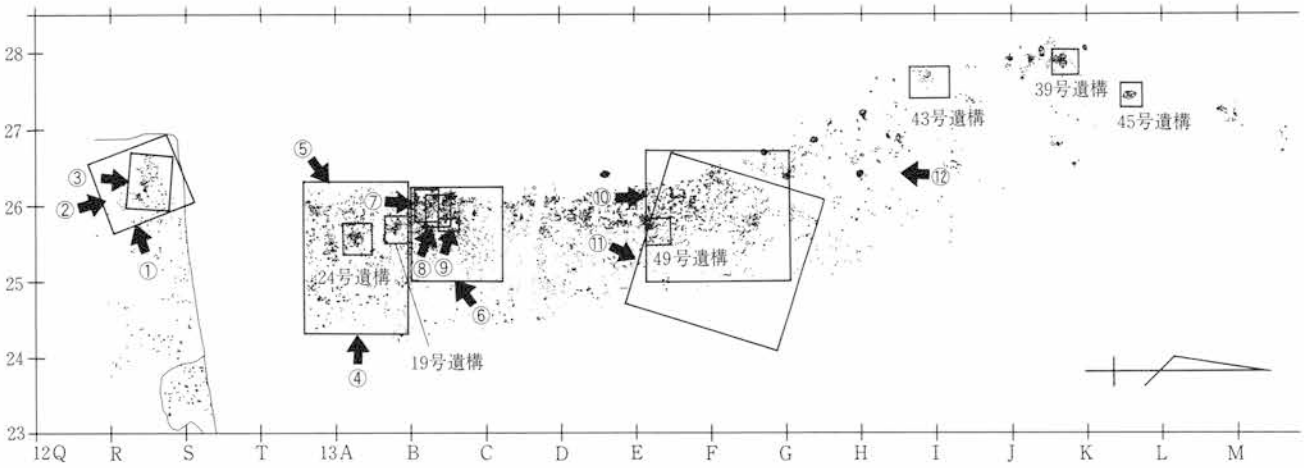
15

14
12

20

17
19
18

PL. 45 KS1-14,15号、2-97号遺構



①KS2-97号遺構全景　東北より

②KS2-97号遺構遺物出土状態　南東より

③KS2-97号遺構遺物出土状態　南より

⑫KS1-14,15遺構遺物出土状態　北より

④KS1-14,15号遺構遺物出土状態　東より

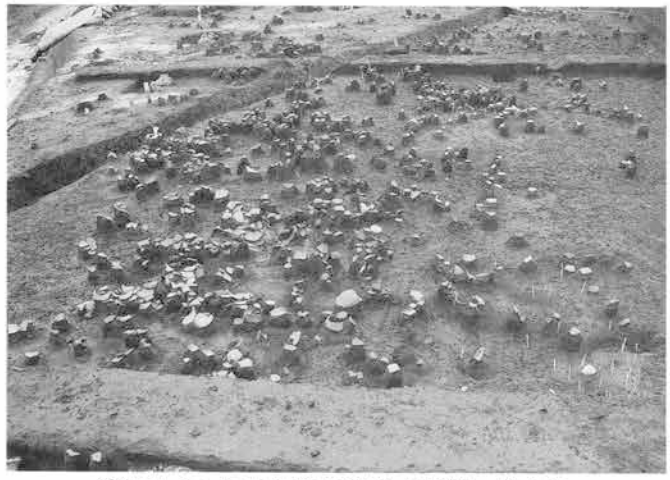
⑤KS1-14,15号遺構遺物出土状態　南西より

⑥KS1-14,15号遺構遺物出土状態　北東より

⑦KS1-14,15号遺構遺物出土状態　南より

⑧KS1-14,15号遺構遺物出土状態　南東より

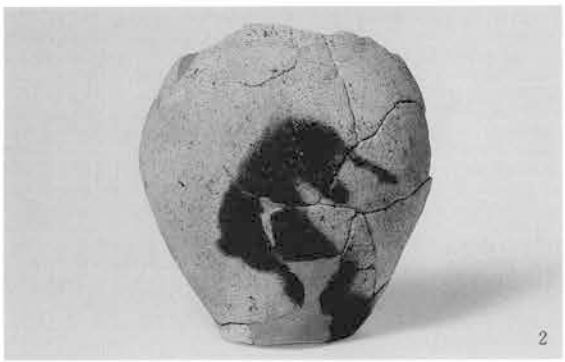
⑨KS1-14,15号遺構遺物出土状態　南東より

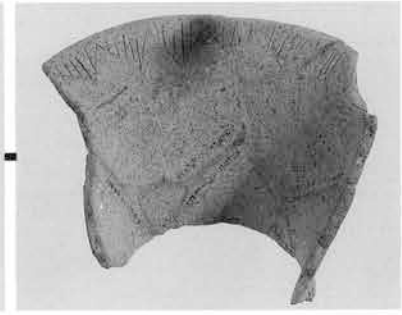


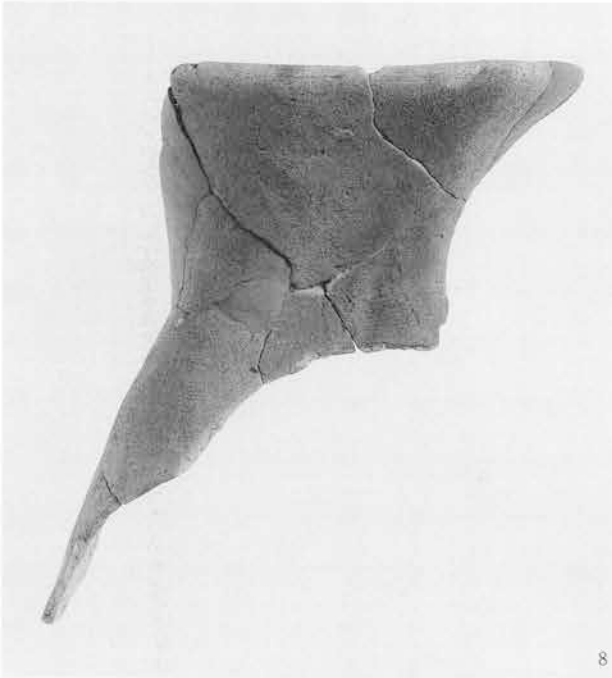
⑩KS1-14,15号遺構遺物出土状態　南より

⑪KS1-14,15号遺構遺物出土状態　南西より

PL. 47 KS1-14,15号遺構出土遺物（1）





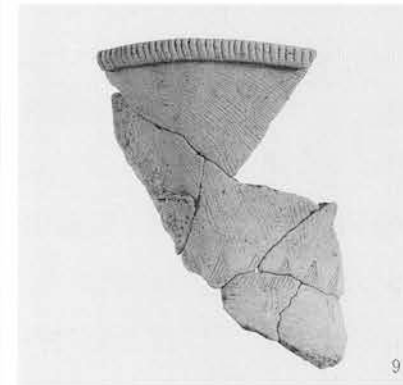

8

11

7

12

10


9

13

15

14

PL. 49 KS1-14,15号遺構出土遺物（3）

16

17

19

18

20

21

23

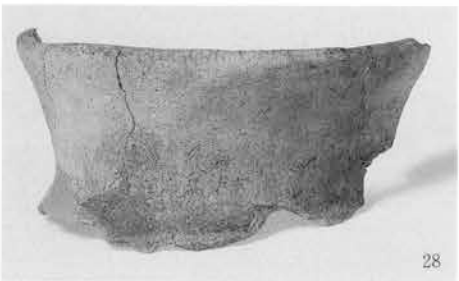
22

24

25

26

27


28

29

30

31

32

34

33

35

36

37

PL. 51　KS1-14,15号遺構出土遺物（5）

38

39

40

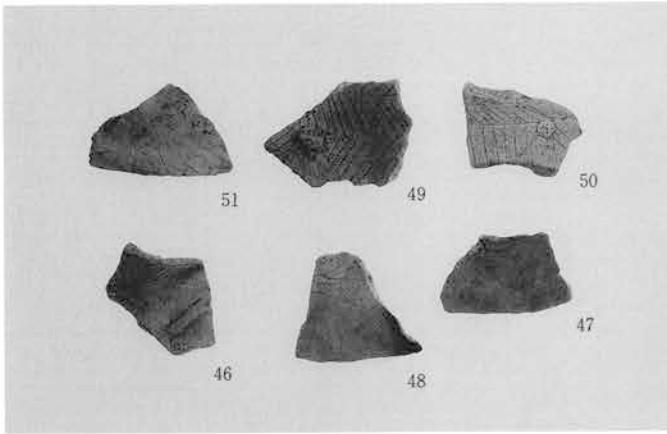
41

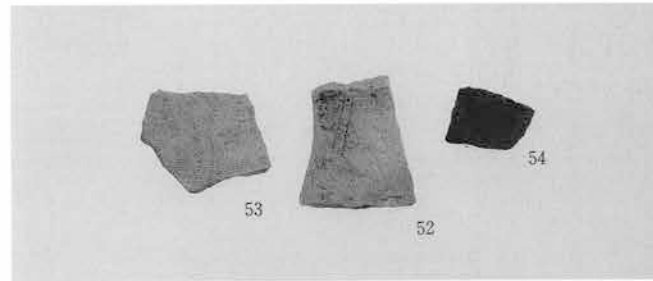
42

43

44

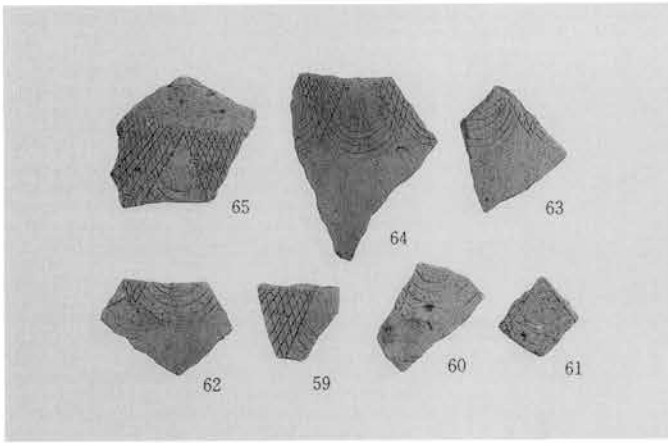
45





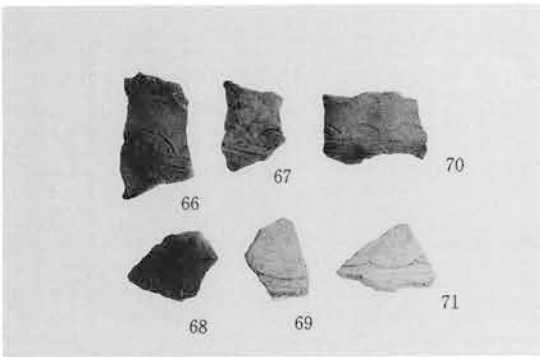
55

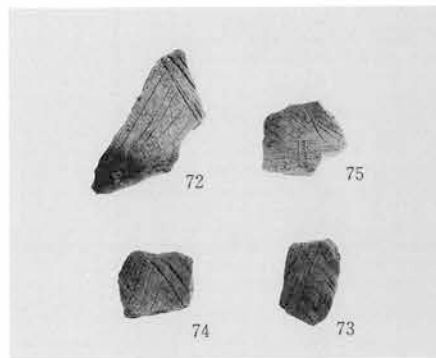
58



56

57





77

76

78

79

80

81

82

83

84

85

86

88

89

87

91

94

93

90

92

97

102

95

96

98

104

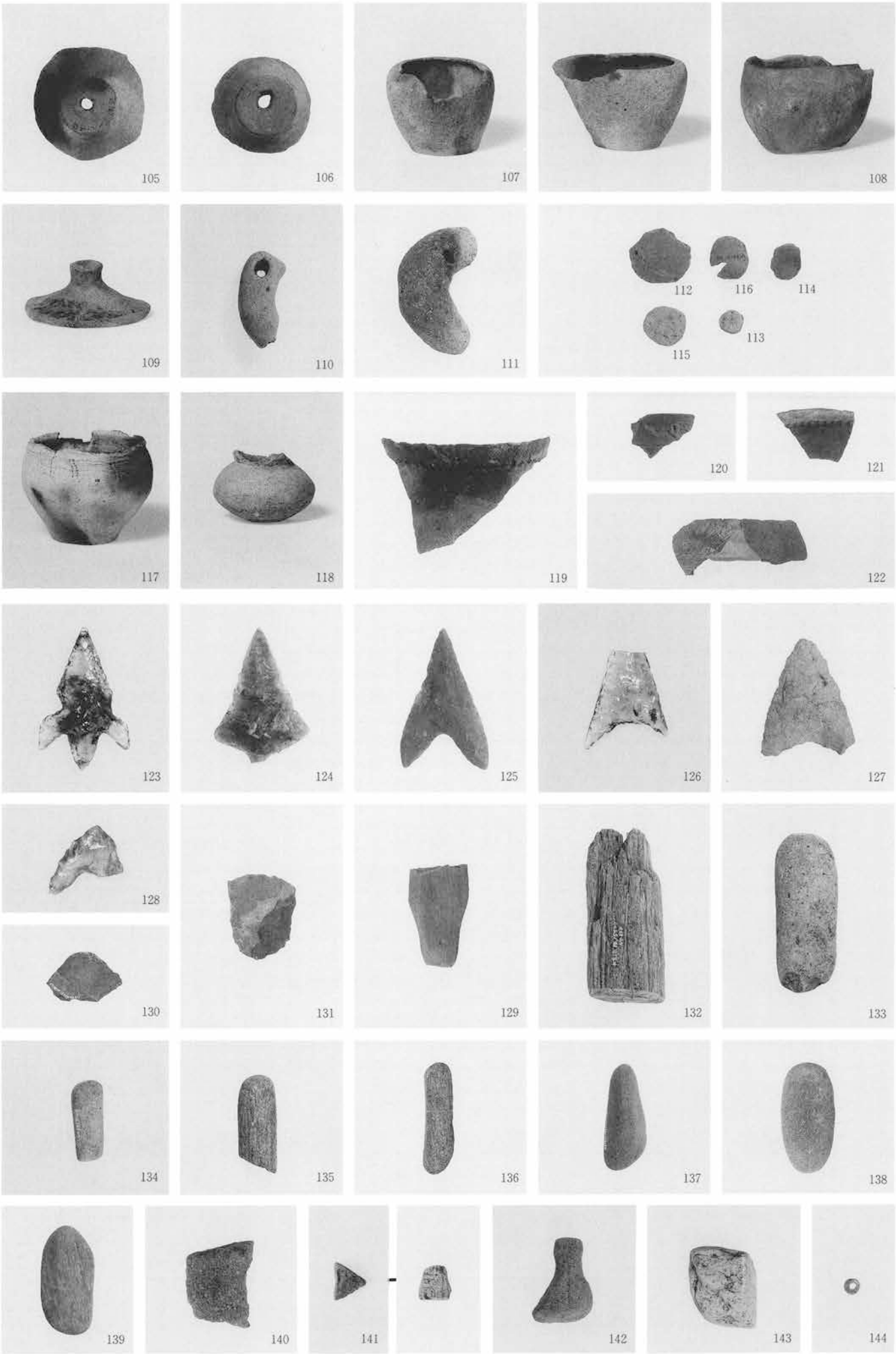
103

99

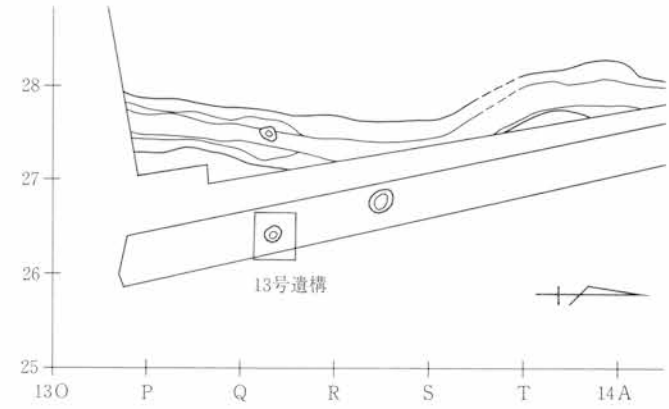
100

101

PL. 53 KS1-14,15号遺構出土遺物（7）



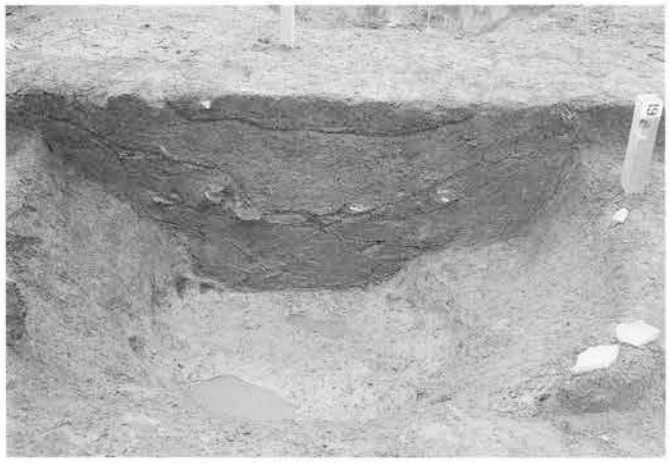
KS0-13号遺構検出状況　南西より



KS0-13号遺構遺物出土状態　南西より

KS1-19号遺構遺物出土状態　南より

KS1-19号遺構遺物出土状態　南より



KS1-19号遺構土層断面　南より

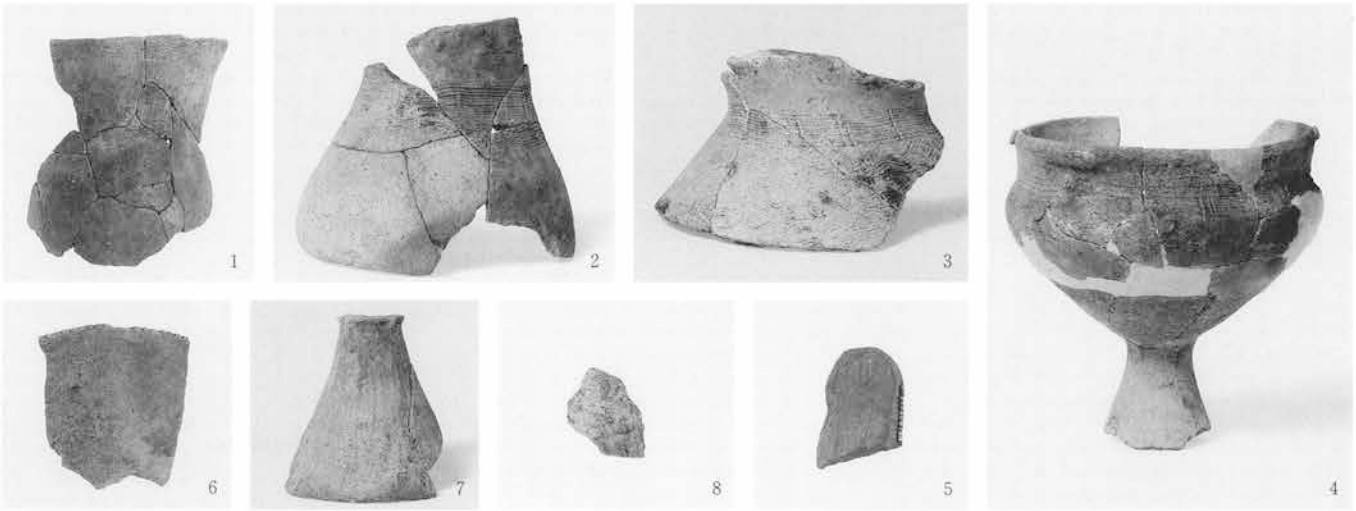
KS1-19号遺構掘り方　西より

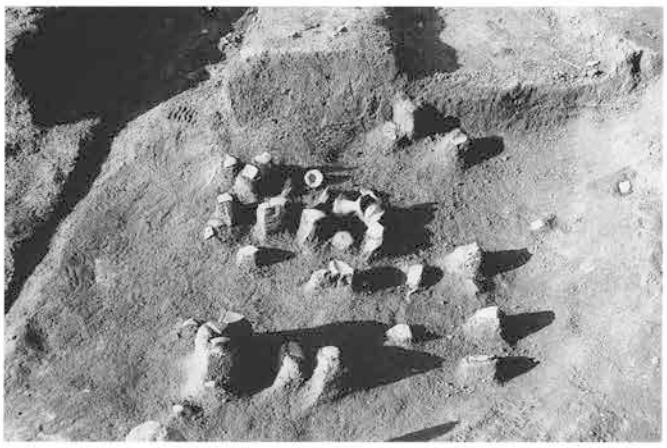
PL. 55 KS1-24号、39号、43号遺構

KS1-24号遺構上層遺物出土状態　北東より

KS1-39号遺構遺物出土状態　北東より

KS1-39号遺構土層断面　南より



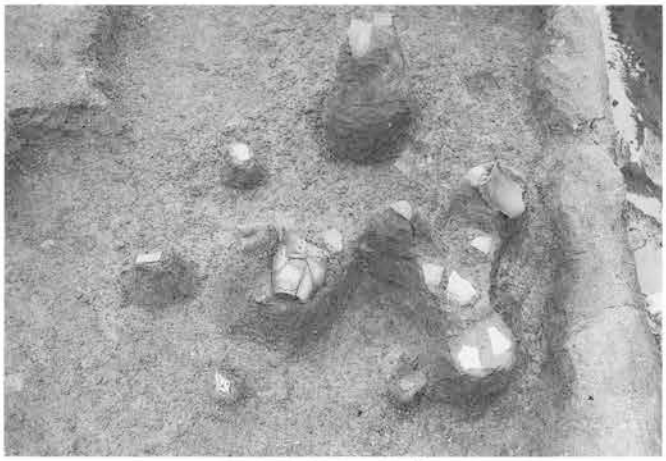


KS1-43号遺構遺物出土状態　南より

KS1-45号遺構出土遺物

KS1-49号遺構検出状況　南より

KS1-49号遺構遺物出土状態　東より

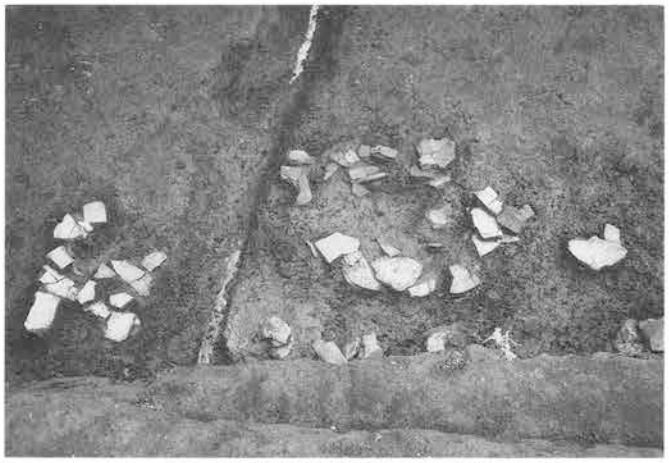


KS1-04号遺構遺物出土状態　北より

KS1-04号遺構掘り方　東より

KS1-06号遺構遺物出土状態　東より

KS1-06号遺構土層断面　東より



KS1-06号遺構西拡張部分遺物出土状態　西より

KS1-23号遺構全景　西より

06号－1

06号－2

06号－4

06号－6

06号－5

06号－3

KS1-25号遺構灰検出状況　北より

KS1-25号遺構掘り方　北西より

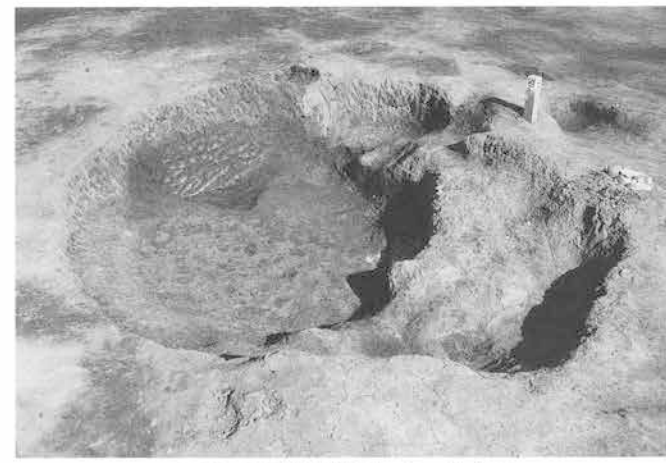
KS1-26号遺構遺物出土状態　西より

26号－1

26号－2

KS1-29号遺構全景　西より

KS1-30号遺構土層断面　南より



KS1-30号遺構掘り方　北より

PL. 59 KS1-50号、55号、2-89号遺構

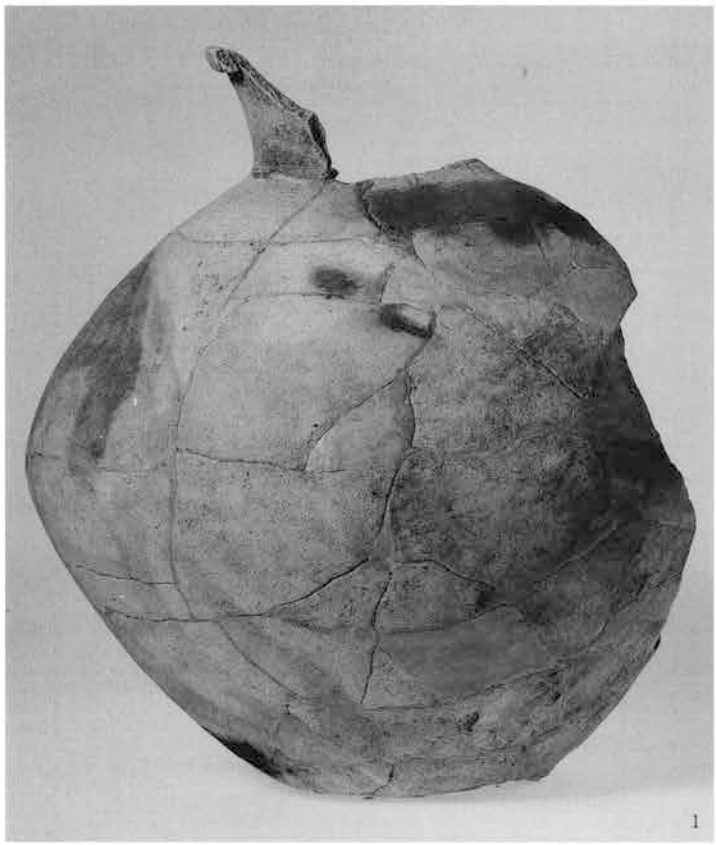
KS1-50号遺構全景

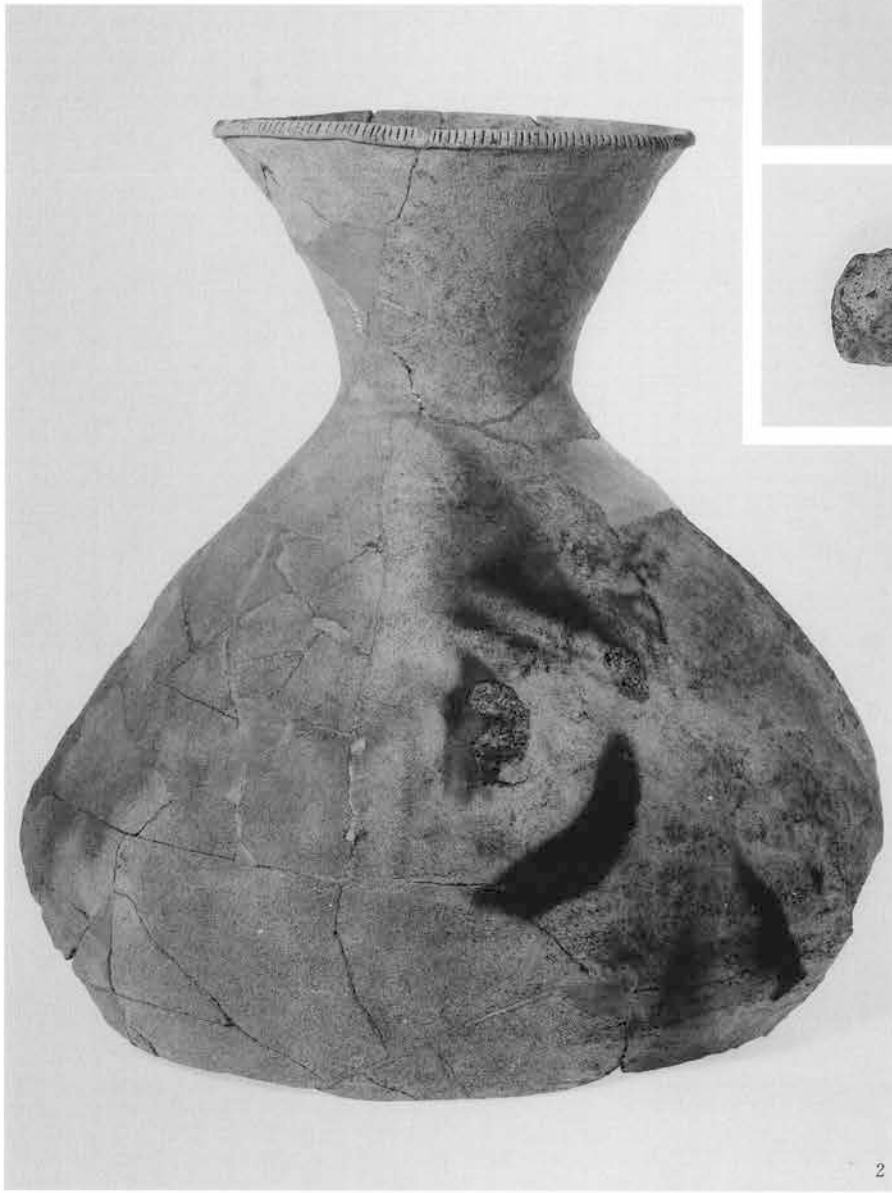
KS1-55号遺構土層断面　南より

KS1-55号遺構掘り方　南より

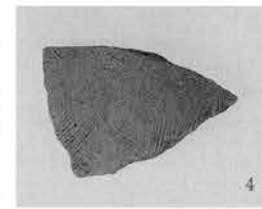
KS2-89号遺構土層断面 南より

KS2-89号遺構掘り方　南より


1

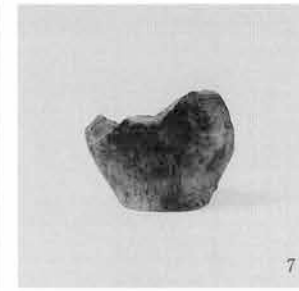

2

3


4

5

6


7

8

9

10

11

12

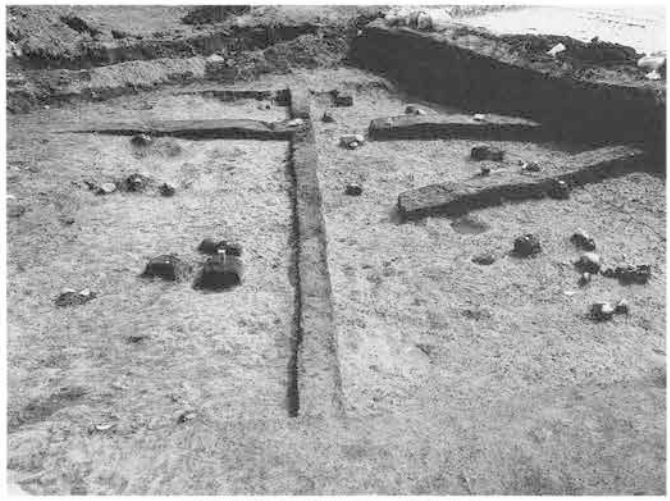
13

14

15

正観寺西原遺跡調査区全景　西より（SN29号遺構は左端の畠地で検出）

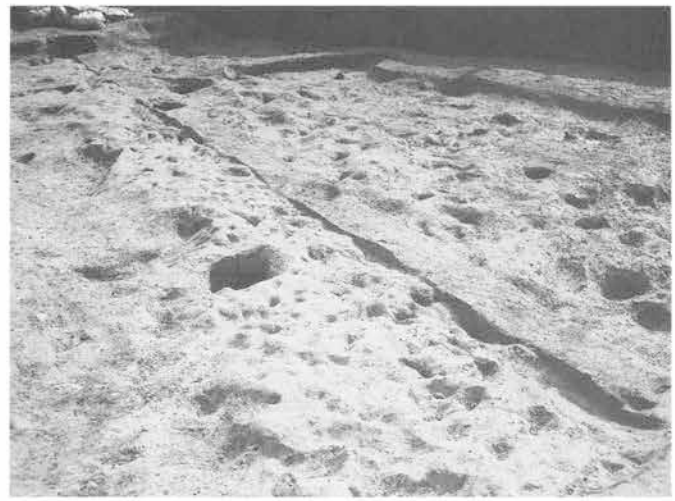
SN29号遺構遺物出土状態全景　南西より



SN29号遺構全景　北東より

SN29号遺構遺物出土状態　南西より

SN29号遺構遺物出土状態　南西より



SN29号遺構掘り方　北東より

1

2

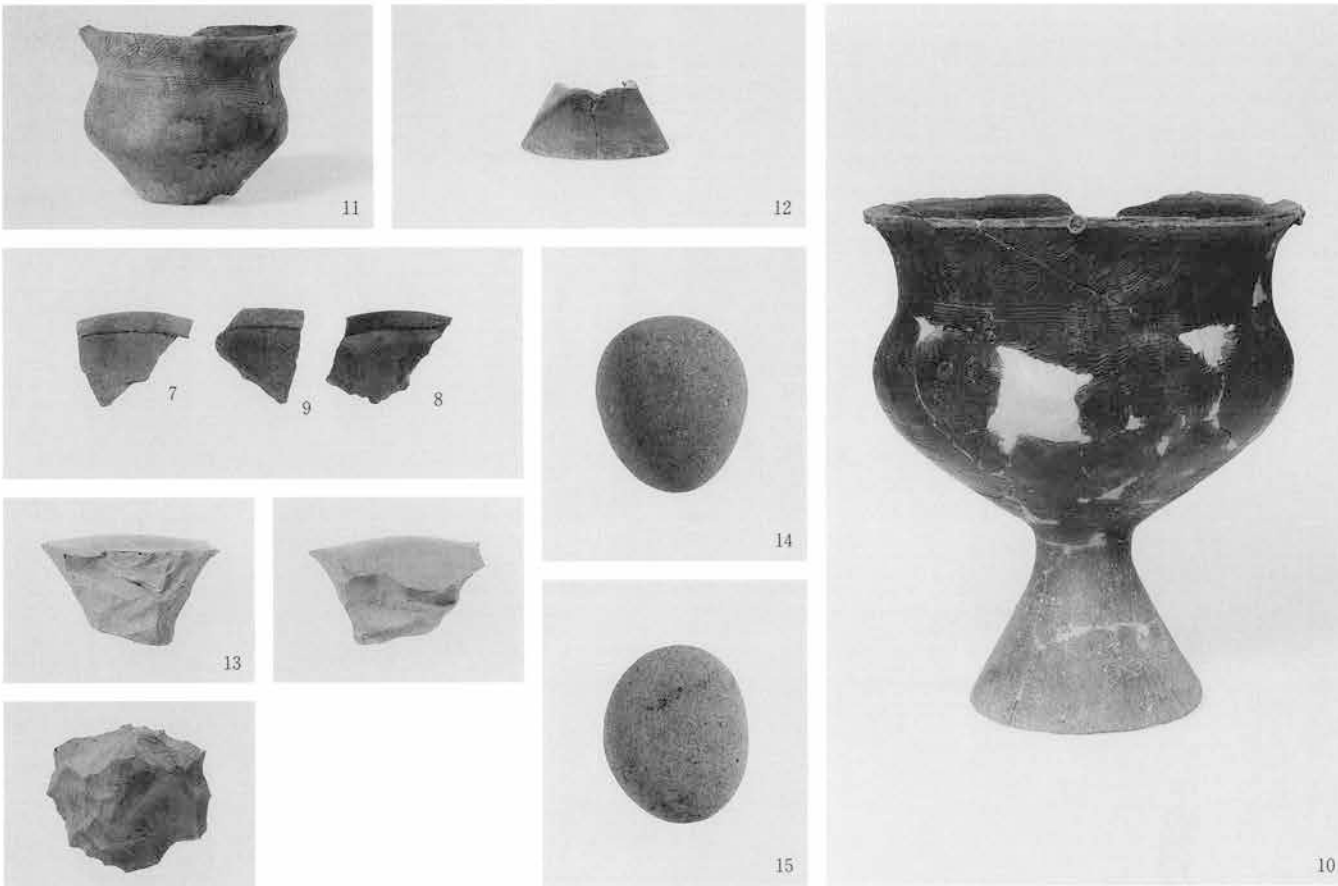
5

3

1、3組み合せ

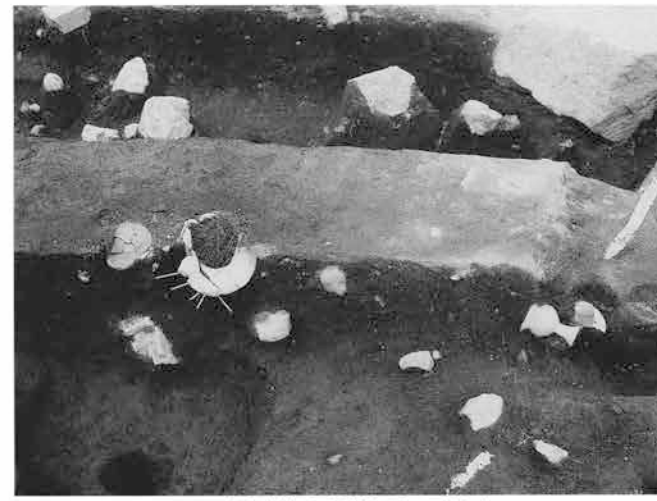
6

4



SN29号遺構出土遺物

SN14号遺構遠景　北より



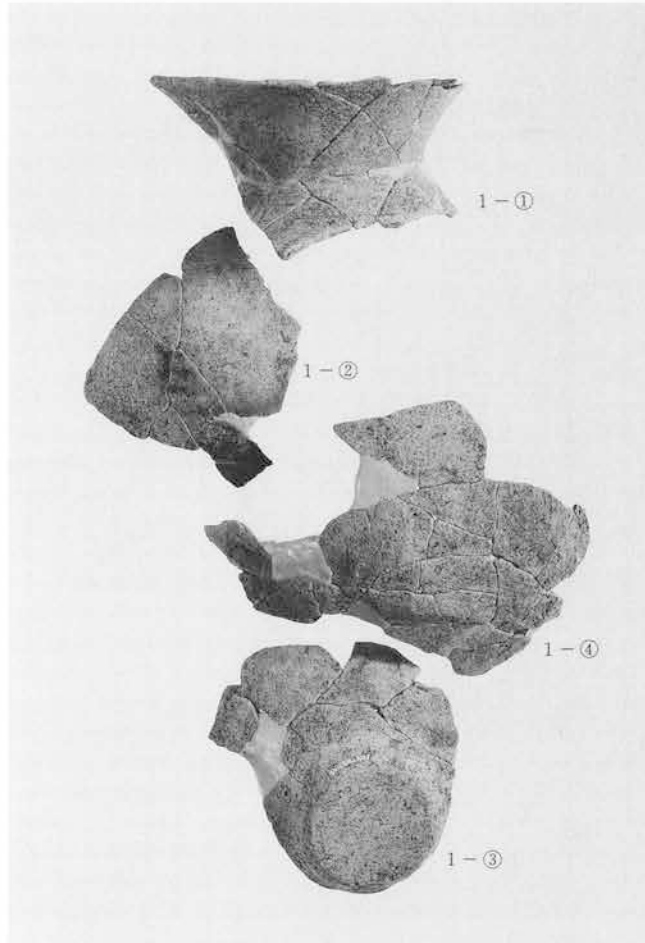
SN14号遺構土層断面　西より

SN14号遺構近接　南より

SN14号遺構近接　北より

SN14号遺構出土遺物

SN27号遺構全景　南より

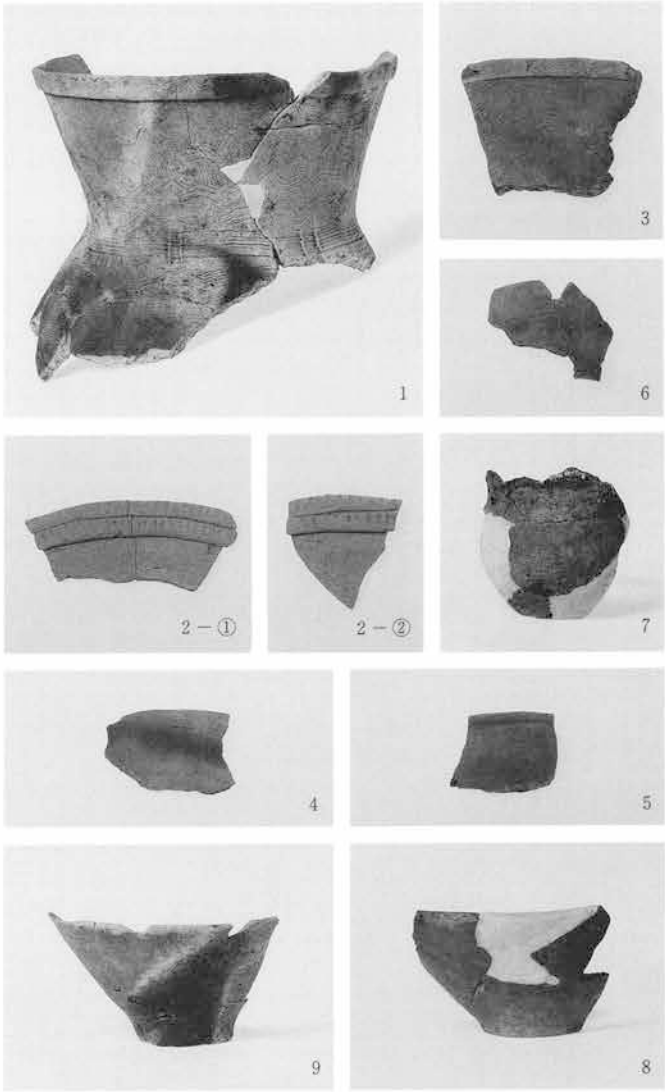


菅谷石塚遺跡調査区全景　南より（道路手前畠地で後にSN29号遺構を検出）

As-C混土層下面弥生土器散布域遠景　南より

SI 1 号集石

SI 2 号集石



SI 出土遺物

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第256集

小八木志志貝戸遺跡群 1

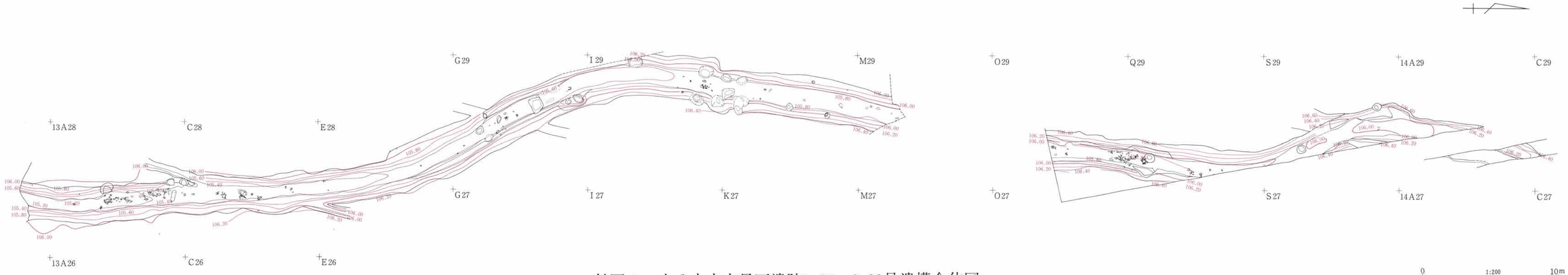
小八木志志貝戸遺跡・正観寺西原遺跡・菅谷石塚遺跡

主要地方道高崎渋川線改築（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２集

1999年８月25日　印刷
1999年８月31日　発行

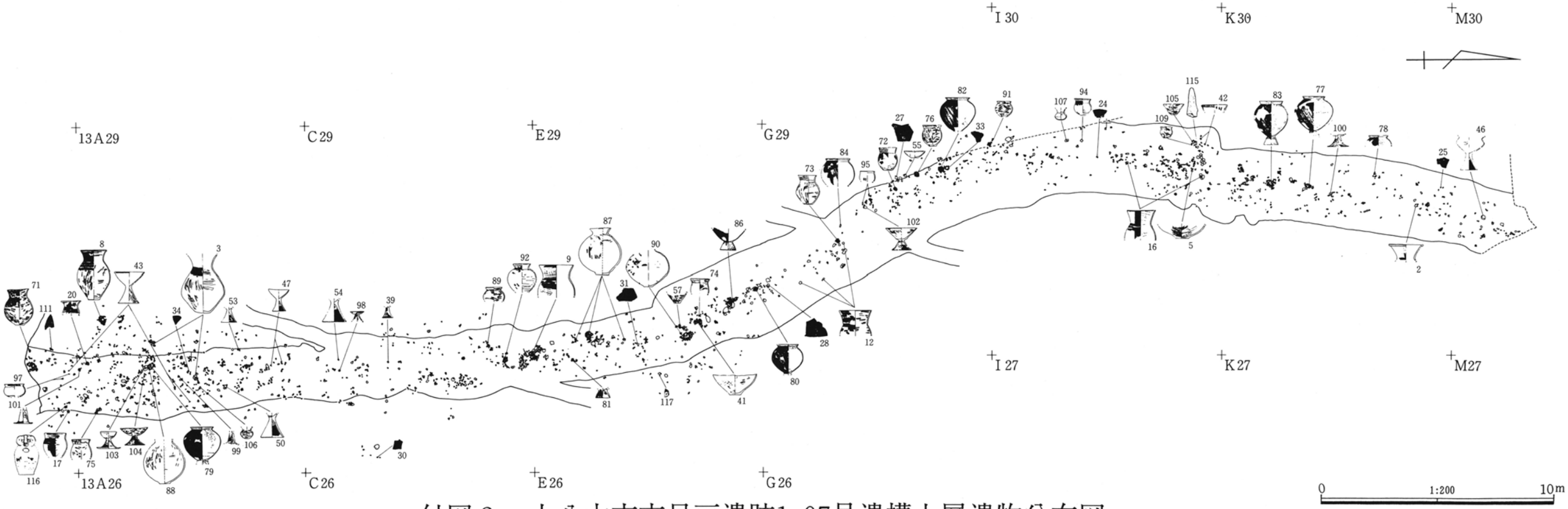
発行／編集　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784－２
電話 0279－52－2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所



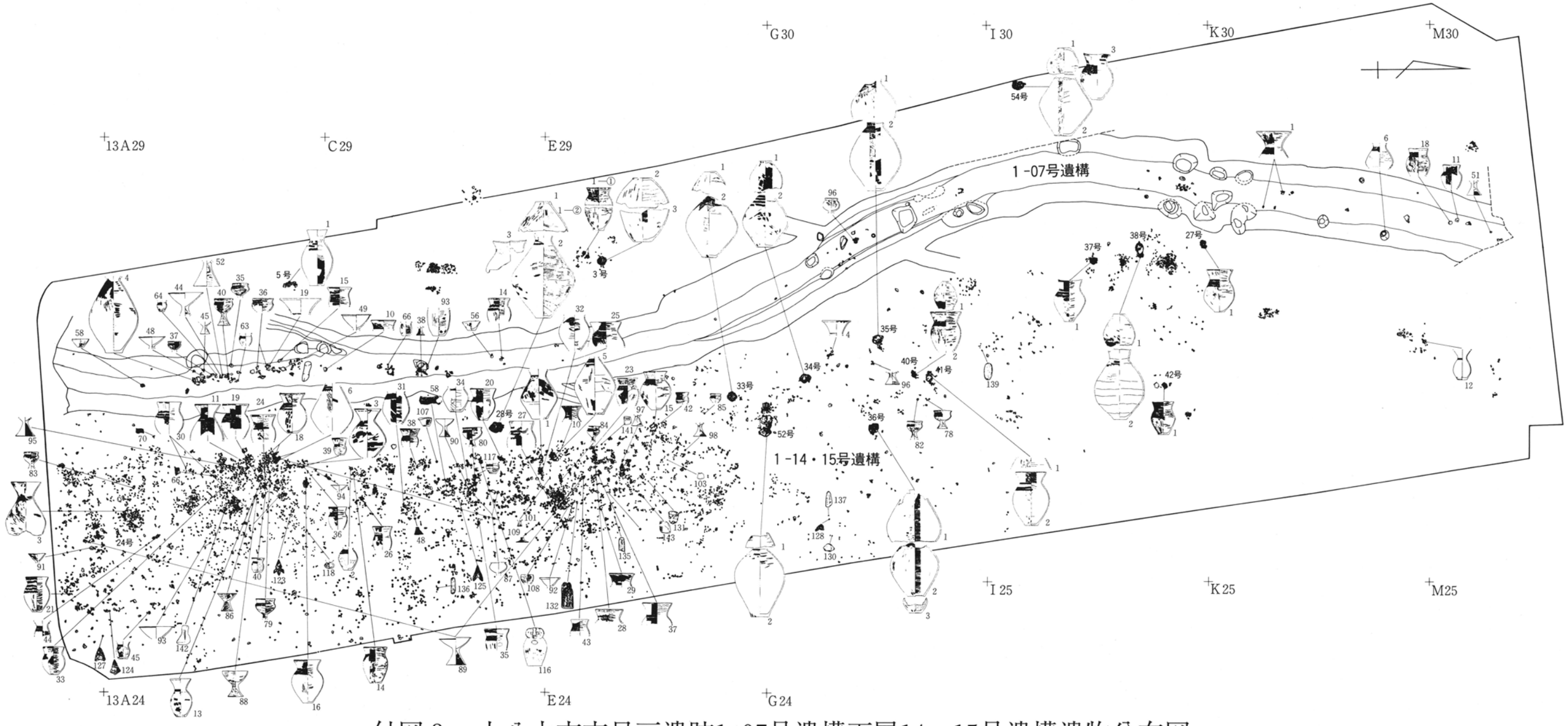
付図１　小八木志志貝戸遺跡1-07・0-09号遺構全体図

小八木志志貝戸遺跡群１



小八木志志貝戸遺跡群１

付図２　小八木志志貝戸遺跡1-07号遺構上層遺物分布図



小八木志志貝戸遺跡群1

付図3　小八木志志貝戸遺跡1-07号遺構下層14・15号遺構遺物分布図